

日本語用論学会
■
第25回
大会発表論文集

第18号

Proceedings of the 25th
Conference of the Pragmatics Society
of Japan

2022年11月26日(土)・27日(日)

■
於 京都大学 吉田キャンパス・オンライン開催

PSJ

The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会
2022

日本語用論学会
(The Pragmatics Society of Japan)
略称: PSJ

日本語用論学会役員

(執行部)

会長 : 滝浦 真人
副会長 : 山岡 政紀, 堀江 薫, 小山 哲春
事務局委員会・事務局長 : 秦 かおり
事務局顧問 : 北野 浩章
会計担当 : 長友 俊一郎
会計補佐 : 竹田 らら

(編集部)

編集委員会・委員長 : 堀江 薫
副委員長 : 松井 智子, 吉田 悅子
委員 : 井出 里咲子, 後藤 リサ, 澤田 治, 澤田 淳, 椎名 美智,
柴崎 礼士郎, 首藤 佐智子, 西田 光一, 深田 智, 難波 彩子,
増田 将伸, 笠貫 葉子, 早野 薫

(大会部)

大会企画委員会・委員長 : 岡本 雅史
副委員長 : 小松原 哲太
委員 : 堀内 ふみ野, 城 綾実, ツォイ・エカテリーナ
大会発表委員会・委員長 : 西田 光一
副委員長 : 竹田 らら
委員 : 五十嵐 海理, 池 沙弥
大会発表賞小委員会・委員長 : 竹田 らら
大会総務委員会・委員長 : 八木橋 宏勇
副委員長 : 甲田 直美, 村田 和代 (発表論文集担当)
委員 : 大塚 生子, 中馬 隼人, 松浦 光, 大志民 彩加

(事業部)

委員長 : 尾谷 昌則
副委員長 : 井出 里咲子
委員 : 山口 征孝, 武黒 麻紀子, 木場 安莉沙, 畑 和樹, ヴォーゲ・ヨーラン

(広報部)

委員長 : 秦 かおり
副委員長 : 八木橋 宏勇
委員 : 野村 佑子, 横森 大輔, 名塩 征史, 木本 幸憲, Malik, Luke
(2023年6月11日現在)

学会連絡先

日本語用論学会 事務局 (The Pragmatics Society of Japan)

〒560-0043

豊中市待兼山町1-8

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻 秦かおり 研究室内

E-mail: secretary@pragmatics.gr.jp

学会ホームページ : <http://pragmatics.gr.jp/>

目 次

シンポジウム「人とAIとメディアを繋ぐ語用論の新展開」

* 対話システムが与える語用論研究の新たな視点	東中竜一郎	1
* 日常会話コーパスがもたらす語用論研究の可能性	小磯 花絵	6
* モバイル時代の語用論—「打ちことば」は何を変えたか	三宅 和子	12

研究発表（日本語発表）

* 日本語の間接的不満談話の開始部における前置きとしての「評価」と「正当化」アサド マリーナ バハー	18
* 日本手話の対比構文「A否定B」の談話構造有光 奈美・高嶋由布子・數見 陽子・矢野羽衣子	26
* 感謝のやりとりに現れるアップシフト 一フッティングと同調シフトを中心に—市原明日香	34
* 口語英語に見られる <i>for sure</i> の分析 一位置と機能に着目して—岩井恵利奈	42
* イン／ポライトネスの参与枠組みと多面的フェイスワーク大塚 生子	50
* 第一・第二言語話者間のメタ語用論的意識に関する考察 — <i>I think</i> の解釈に着目して—木津 弥佳・行木 瑛子	58
* はいはい面白い面白い：アイロニー専用表現に見る慣習化された間接性木下蒼一朗	66
* 言語使用の三層モデルからみる「マジ卽」と「ぴえん」の語用論的機能工藤 俊	74
* 誇張に用いられるメタファーの考察角出 凱紀	82
* 聞き手のcommitmentから見た規約的含意表現asを含む節の意味解釈徳永 和博	90
* 会話中の非難から解き明かす友人同士の親しさ —能力に関する優劣が話題となるやりとりに着目して—西阪 亮	98
* (第25回大会 大会発表賞受賞論文) 他者の巻き込みによる組織としての報告の実践： 学校協議会報告の事例にみられる参与役割の複雑性畠 和樹	106
* 「逆に言えば」の使用に関わる論理関係および談話構造：「裏を返せば」との比較水田 洋子	114
* SNSにおける新奇表現「どうぞする」にみる「どうぞ」のメトニミー的意味拡張三瀬 風乃	122
* 現代英語におけるspeak of the devilの語用論的拡張について山内 升	130
* ハッシュタグの順序：場所を表すタグを中心に山崎 由佳	138

研究発表（日本語発表）

- * 比喩の観点からみた「告白行為」動詞の通言語的考察 山中 信彦 146
- * 「私、○○な人だから」 一會話における自己呈示— 山本 綾 154
- * 中国語“給”的語用論的機能 楊 世沢 162
- * 能楽の稽古場面における指導行動のマルチモーダル会話分析：
指導者はどのように身体動作の訂正を行うのか 李 頌雅 170

研究発表（英語発表）

* Changes in Linguistic Landscape of Japan: Life ‘with Corona’	IKE Saya	178
* Interpretability of pragmatic gaps in Armenian and Japanese Noun Modifying Clause Constructions	Luiza KLOYAN, HORIE Kaoru	186
* <i>It</i> versus <i>That</i> as the Subject of English Set Phrases	NAKAMURA Akira	194
* The Use of Overt First-Person Singular Pronouns in Opinion-Negotiation Sequence in Japanese Conversation	OZAWA Miyabi	202
* Colloquialization and genre variation: the case of the <i>let's</i> construction	SHIBUYA Yoshikata	210
* Corpus Analysis of Japanese and Hungarian Negative Emotive Words from a Discourse Interactional Perspective	Martina Katalin SZABÓ, OTANI Naoki	218
* Historical Pragmatics using State-Space Model	YAMADA Akitaka	226

付録

- * 『大会論文集』(Proceedings) 執筆規定 234

Table of Contents

Symposium Sessions: New Developments in Pragmatics Connecting Humans, AI, and Media

- * **HIGASHINAKA Ryuichiro:** New Perspectives on Pragmatics Research Provided by Dialogue Systems 1
- * **KOISO Hanae:** Possibilities for pragmatics research offered
by the Corpus of Everyday Japanese Conversation 6
- * **MIYAKE Kazuko:** Pragmatics in the Age of Mobility: What has changed with digital communication? 12

Lecture Sessions: Presentation in Japanese

* ASAD Marina Bahaa: 'Evaluation' and 'Justification' as Prefaces in the Initiation of Japanese Indirect Complaints	18
* ARIMITSU Nami, TAKASHIMA Yufuko, KAZUMI Akiko, YANO Uiko: Discourse Structures of a Contrastive Construction of Japanese Sign Language, "A NEG B (Not A, B)" ..	26
* ICHIHARA Asuka: Upshifts are observed in interactions of gratitude —Mainly regarding footing and synchronized upshifts	34
* IWAI Erina: An Analysis of <i>For Sure</i> in Colloquial American English: Focusing on Position and Function	42
* OTSUKA Seiko: Participation Framework of Im/politeness and Multifaceted Facework	50
* KIZU Mika, GYOGI Eiko: A study on meta-pragmatic awareness between L1 and L2 speakers: focusing on the interpretation of 'I think'	58
* KINOSHITA Soichiro: Hai-hai omoshiroi omoshiroi: Conventionalized Indirectness in Gramatical Irony	66
* KUDO Shun: The Pragmatic Function of Japanese Teen Slang Words Maji-Manji and Pien from the Viewpoint of the Three-Tier Model of Language Use	74
* SUMIDE Yoshiki: On a metaphoric hyperbole	82
* TOKUNAGA Kazuhiro: A Sociopragmatic Analysis of Parenthetical As-clauses from the Perspective of Commitment-based Theory	90
* NISHISAKA Ryo: The intimacy between friends shown by accusations in the conversations: Focusing on interactions about the superiority or inferiority regarding on ability	98
* HATA Kazuki: Reporter's practice to accomplish the organisational (not individual) report with the practitioner's engagement: The case of School Management Council meeting (The Best Paper Award at the 25th Annual Meeting of PSJ)	106
* MIZUTA Yoko: Logical relations and discourse structure involved in the use of Japanese "gyaku-ni ieba" ('reversely speaking'): In comparison with "ura-o kaeseba" ('putting it the other way round')	114
* MISE Nagino: Metonymic Expansion of the Meaning of "dōzo" in the Novel Expression "dōzo-suru" on SNS	122
* YAMAUCHI Noboru: Pragmatic Expansions of "Speak of the Devil" in Present-Day English	130
* YAMAZAKI Yuka: The Order of Hashtags: with a Focus on Hashtags Indicating Location	138

Lecture Sessions: Presentation in English

* YAMANAKA Nobuhiko: A Cross-linguistic Study of Speech Act Verbs of Confiding from the Viewpoint of Figurative Language	146
* YAMAMOTO Aya: The Japanese X Na/Suru Hito Construction as a Vehicle of Self-Presentation in Talk	154
* YANG Shize: Pragmatic functions of gěi in Chinese	162
* LEE Song-ya: Multimodal conversation analysis of Japanese Noh practice instruction: Instructor's corrections of bodily movements	170

Lecture Sessions: Presentation in English

* IKE Saya: Changes in Linguistic Landscape of Japan: Life ‘with Corona’	178
* Luiza KLOYAN, HORIE Kaoru: Interpretability of pragmatic gaps in Armenian and Japanese Noun Modifying Clause Constructions	186
* NAKAMURA Akira: <i>It</i> versus <i>That</i> as the Subject of English Set Phrases	194
* OZAWA Miyabi: The Use of Overt First-Person Singular Pronouns in Opinion-Negotiation Sequence in Japanese Conversation	202
* SHIBUYA Yoshikata: Colloquialization and genre variation: the case of the <i>let's</i> construction	210
* Martina Katalin SZABÓ, OTANI Naoki: Corpus Analysis of Japanese and Hungarian Negative Emotive Words from a Discourse Interactional Perspective	218
* YAMADA Akitaka: Historical Pragmatics using State-Space Model	226

Appendix

- * Instructions for Authors of *the Proceedings of the 25th Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan (PSJ)* and the Style Sheet of Japanese and English Papers 234

シンポジウム

Symposium Sessions

対話システムが与える語用論研究の新たな視点

東中竜一郎

名古屋大学大学院情報学研究科

higashinaka@i.nagoya-u.ac.jp

<Abstract> Dialogue systems, such as voice assistants on smartphones and communication robots, are becoming more and more prevalent in our daily lives. Consequently, it is increasingly crucial for these systems to communicate in a way that aligns with the user and the context of the dialogue. This paper will begin by describing the basics of dialogue systems. It will then detail recent advancements in generating utterances that are tailored to the user and dialogue situation, drawing on examples from the live dialogue system live competition and dialogue robot competition. Finally, the paper will explore the ways in which pragmatic research can be applied to enhance dialogue systems and the potential for pragmatic research to be implemented in these systems.

【キーワード】 対話システム、対話状況、対話システムライブコンペティション、対話ロボットコンペティション、大規模言語モデル

1 はじめに

対話システムとは人間と対話をするコンピュータを指す。Siri や Alexa などスマートフォンやスマートスピーカーとして実装されたり、Pepper のようにコミュニケーションロボットとして実装されたりする。近年では、大規模言語モデルを用いた対話システムが多く作られており、その性能が高まるとともに実社会においても広く利用され始めている。

対話システムは大きくタスク指向型と非タスク指向型に分かれる。前者は所定のタスクを遂行することを目的としており、後者はタスクの遂行を主な目的としない。Siri や Alexa は基本的にはタスク指向型の対話システムである。チャットボットと呼ばれる雑談を主に行う対話システムは非タスク指向型である。これ以外の分類として、身体を持つかどうかや入力としてテキスト、音声、ジェスチャなどを受け付けるかどうかによっても分類される [7]。

対話システムの意義はさまざまある。まず、相手に合わせたやり取りが可能ということである。対話では、やり取りにより相手の知識や理解の度合いが分かってくる。この特性により、ユーザに合わせた効率的な情報伝達ができる。また、アイズフリー・ハンズフリーと呼ばれる、画面を見なくても、また、操作を手で行わなくても利用できるという特性もある。運転や料理などの途中で音声を介し、他の作業と並行して利用できる。また、対話という直感的なインターフェースを用いて機器操作ができるることは大きな利点である。人工知能が高度化するにつれて、その機能を使いこなすには熟練が必要になってくる。対話による機器操作はデジタルデバイドの解消や多くのユーザに高度な技術の恩恵を与える。また、認知科学・人間科学への貢献という意義もある。対話システムを構築することは、人間の構成論的な研究であると言える。対話システムを構築することにより、人間に關する知見を得ることができる。

対話システムは、社会の中で広く使われるようになっておきており、その影響から語用論研究との接点が多くなってきている。筆者が主催者として関わった、後述する対話システムライブコンペティションや対話ロボットコンペティションでは、語用論に関わる知見が幅広く活用されている。本稿では、対話システムライブコンペティションや対話ロボットコンペティションにおける事例を参照しながら、ユーザや対話状況に即した発話の実現に向けた最近の取り組みについて述べる。そして、語用論研究の知見がどのように対話システムに活用されるかについて展望し、対



図 1: 画面上に表示されたマルチモーダル対話システム (CGErica)

システム名前: 清水シズカ(女), 年齢: 20 歳, 職業: 大学 2 年生
ユーザ名前: 湯川ユウキ(男/女), 年齢: 20 歳, 職業: 大学 2 年生
話者の関係: 同じ大学のゼミの友人同士
場所・時間: 大学のカフェ当日の授業終了後
状況・話題: シズカ (システム) はユウキ (ユーザ) から借りていた本を紛失し, 返却ができなくなった。事情を説明し謝罪をする。

シズカ (システム) と友人のユウキ (ユーザ) は同じ大学のゼミの友人同士である。シズカはユウキに本を借りていた。それはかなり高価な専門書で、ユウキが 2 週間もの間、辛いアルバイトをしてやっと買ったものだと知っていたが、自分も興味のある内容だったので無理を言って借りた本だ。ある日電車の網棚にカバンを忘れてしまったが、そのカバンには借りていた本が入っていた。鉄道会社には問い合わせたし、警察にも連絡したが、カバンはまだ見つかっていない。もちろん弁償しようと考えているが、まずはユウキにきちんと謝らないといけない。こちらの誠意を示すために、メールや電話ではなく直接会って謝ろうと思う。そこでシズカはメールで「ちょっと話があるんだけど」とユウキを大学内のカフェに呼び出すことにした。先にカフェで待っていると、入口からユウキが店に入って来るのが見えた。途端に思い出されるのは本を買うために毎日アルバイトをしていたユウキの、ヘトヘトに疲れ切った姿だ。はたしてユウキは許してくれるだろうか。

図 2: 第 5 回対話システムライブコンペティションにおけるシチュエーション

話システムを用いた語用論研究の可能性について述べる。

2 対話システムライブコンペティション

対話システムライブコンペティションとは、聴衆の前で対話システムをライブで動作させて評価し、対話システムの問題点をコミュニティで共有することが目的のコンペティションである [8]。二つの部門からなり、任意の話題で会話をするオープントラックと所定の状況で人間らしく会話をするシチュエーショントラックがある。シチュエーショントラックでは、状況に合わせてどのように発話をを行うべきかに焦点が当たられており、語用論研究との関係が深い。

第 5 回対話システムライブコンペティション [8] では、ユーザと表情やジェスチャを交えて話すマルチモーダル対話システムが開発の対象であった。話者は画面上に表示される CG キャラクタ (図 1) と対話をを行う。

シチュエーショントラックでは、謝罪のシチュエーションを扱った。具体的には図 2 に示されるシチュエーションを用いた。システム側が借りていた本をなくしてしまい、それについてユーザに謝罪するというものである。このシチュエーションは、言語教育におけるオーラルプロフィシャンシーインタビュー [9] を参考に作成した。本コンペティションにおいて対話システムの評価はどのくらい人間らしく状況にあった対話ができたかで評価されるため、人間の謝罪の方法を参考にする必要がある。本コンペティションでは、主催者側が基準となるベースラインシステムを

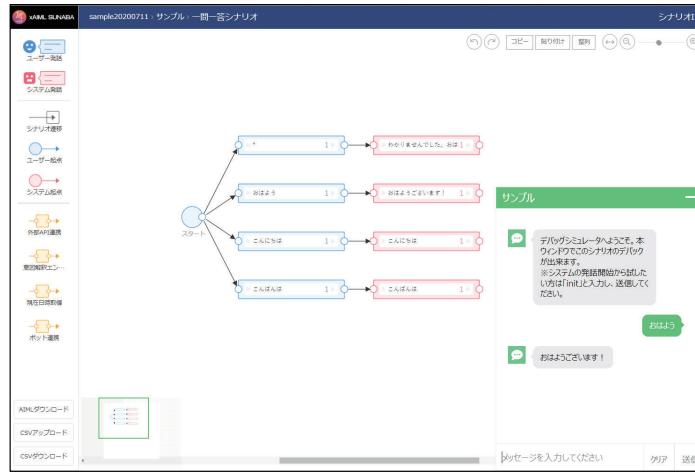


図 3: SUNABA の GUI のスクリーンショット

用意した。語用論的方策 [6] を用いたものであり、具体的には、謝罪にあたり話題の前触れ、事情説明、責任の承認、謝罪、申し訳なさの表明、なだめ、人間関係への言及、埋め合わせ、感謝、約束のシーケンスを行うものであった。

本トラックには 11 チームが参加したが、優勝したシステムは大規模言語モデルに基づく対話システムであった [5]。大規模言語モデルとは膨大なテキストデータを基に次単語を予測するモデルであり、文脈を与えて次単語を順次予測することで、文脈に即した発話を生成する。二位のシステムは、談話研究や語用論の知見を活かしたシステムであり、前述の語用論的方策を用いると同時にマルチモーダル分析の知見を取り入れていた [4]。

対話システムの実装には一般にプログラミングなどの知識が必要となるが、第 5 回対話システムライブコンペティションでは、SUNABA (<https://boteditor.sunaba.ntt.com/>) と呼ばれる GUI (グラフィカルユーザインターフェース) のツールを用いてマルチモーダル対話システムを実現できる環境を主催者側で整えた。図 3 に SUNABA の GUI を用いた対話システム構築の様子を示す。これにより、多くの談話研究・語用論研究に関わる研究者の参加を実現でき、またこれらの分野の知見が対話システムに有効であることが確認できた。

3 対話ロボットコンペティション

対話ロボットコンペティション [1] とは、人型ロボットの対話能力を競うコンペティションである。人と自然に対話しながら人々の活動を支援するロボットの実現を目指して、ロボットの対話技術を、コンペティションを通して分野全体で向上していくことを目的としている。

人型ロボットは、様々なセンサを用いてユーザの音声だけでなく表情やしぐさなどを認識できたり、体を用いてジェスチャや表情など様々な表現ができたりする。音声対話システムよりも複雑である反面、多くの情報や多くの表現手段を用いることで、従来の対話システムとは異なる方法で人間との意思疎通を実現できる可能性がある。対話ロボットコンペティションは過去 2 回実施しており、直近の対話ロボットコンペティション 2022 では、ロボットに関する国際会議である The 2022 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS 2022) の公式コンペティションとして実施した。

本コンペティションに用いた対話ロボットは人間に酷似したアンドロイドである。タスクは旅行代理店における接客（観光地のおすすめ）である。接客ではホスピタリティが求められ、その

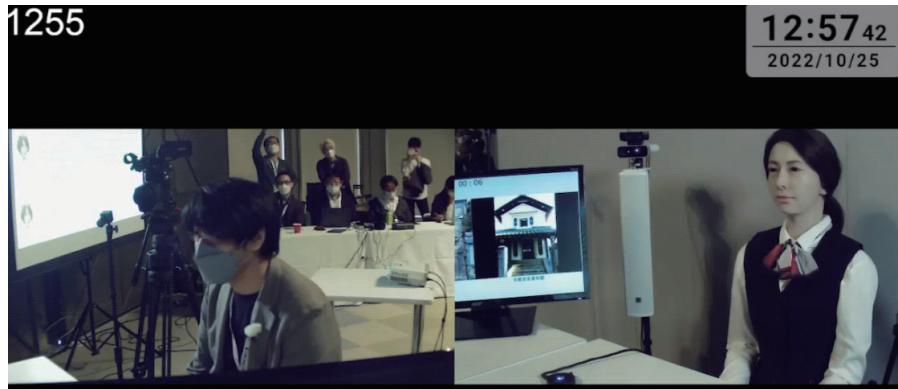


図 4: 対話ロボットコンペティション 2022 における対話模様. 左側が筆者, 右側が対話ロボット.

ために状況やユーザに応じた発話や表情, ジェスチャを実現する必要がある.

コンペティションの参加者は, 対話ロボットを操作するソフトウェアを開発する. 主催者側で必要なソフトウェアを準備することで, 参加者はユーザの発話に対してシステム発話と表情・ジェスチャを生成する対話制御部のみを開発すればよいようにした. 図 4 にロボットとの対話模様を示す.

優勝したシステムは, 対話システムライブコンペティションと同様, 大規模言語モデルを用いたシステムであった [3]. 大規模言語モデルを用いることで, ユーザのさまざまな発話を柔軟に回答できる点が特に評価された. なお, 大規模言語モデルを用いたシステムでは, 発話生成を行う方法としてプロンプティングを用いる. これは, 適切な次発話を生成するための文脈を記述する方法である. この記述は対話シナリオの作成に類似した作業であり, SUNABA と並んで簡易に対話システムを実現する方法として有望である. その他のシステムは, ユーザの性格を推定することでユーザに応じて挙動を変えたりする [2] など, 直接的に語用論研究の知見が活用されているわけではないものの, ユーザや状況に応じた発話を行うための多くの取り組みが見られた.

4 対話システムと語用論研究

本稿でも述べたように, 語用論研究は対話システムに取り入れられており, 実社会における対話システムにおいてさらなる活用が望まれる. また, 対話システムを用いた語用論研究も今後活発になると想定される. たとえば, 理論の検証ツールとして対話システムは有用である. 具体的には, 実験条件をさまざまえて人間と対話させ所定の理論の効果を実証することができる. さらに, 実際に対話システムを構築すると, システムが行うすべての挙動を扱う必要があるため, 対話システムは人間が当たり前と思っている対話現象に気づかせてくれる. 加えて, 対話システムならではの発話の用法の発見につながる可能性がある. システムだからこそその言い回しや情報伝達ができるかもしれない.

現状, 対話システム構築のコストが低くなっている. SUNABA のような GUI を用いてもよいし, 大規模言語モデルとプロンプティングを用いてもよい. 対話システムライブコンペティションや対話ロボットコンペティションでは, なるべく参加者が開発しやすいようにソフトウェアを準備している. 詳しくは各コンペティションのホームページ (<https://sites.google.com/view/dslc5>, <https://sites.google.com/view/drc2022-jp>) を参照されたい. 語用論研究の知見が対話システムに用いられることに加え, 対話システムを用いた語用論研究の進展が期待される.

謝辞

第5回対話システムライブコンペティションおよび対話ロボットコンペティション2022は、新学術領域研究「人間機械共生社会を目指した対話知能システム学」(19H05692)の支援を受けた。また、第5回対話システムライブコンペティションの予選については、ムーンショット目標1「2050年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現」(JPMJMS2011)の一環として実施した。

参考文献

- [1] Takashi Minato, Ryuichiro Higashinaka, Kurima Sakai, Tomo Funayama, Hiromitsu Nishizaki, and Takayuki Nagai. Overview of dialogue robot competition 2022. *arXiv preprint arXiv:2210.12863*, 2022.
- [2] Tamotsu Miyama and Shogo Okada. Personality-adapted multimodal dialogue system. *arXiv preprint arXiv:2210.09761*, 2022.
- [3] Takato Yamazaki, Katsumasa Yoshikawa, Toshiki Kawamoto, Masaya Ohagi, Tomoya Mizumoto, Shuta Ichimura, Yusuke Kida, and Toshinori Sato. Tourist guidance robot based on hyperclova. *arXiv preprint arXiv:2210.10400*, 2022.
- [4] 白井宏美. 謝罪場面に適した人らしいマルチモーダル対話システムの実現に向けて. 人工知能学会研究会資料 言語・音声理解と対話処理研究会（第13回対話システムシンポジウム）, Vol. 96, pp. 130–135, 2022.
- [5] 吉川克正, 川本稔己, 山崎天, 水本智也, 小林滉河, 大萩雅也, 佐藤敏紀. シチュエーションに合わせたシナリオ誘導とHyperCLOVAを利用した応答生成によるハイブリッド対話システム. 人工知能学会研究会資料 言語・音声理解と対話処理研究会（第13回対話システムシンポジウム）, Vol. 96, pp. 124–129, 2022.
- [6] ポイクマン聰子, 宇佐美洋. 友人間での謝罪時に用いられる語用論的方策—日本語母語話者と中国語母語話者の比較—. 語用論研究, No. 7, pp. 31–44, 2005.
- [7] 東中竜一郎. 対話システムの作り方 (実践・自然言語処理シリーズ). 近代科学社, 2023.
- [8] 東中竜一郎, 高橋哲朗, 堀内颯太, 稲葉通将, 佐藤志貴, 船越孝太郎, 小室允人, 西川寛之, 宇佐美まゆみ, 港隆史, 境くりま, 船山智. 対話システムライブコンペティション5. 人工知能学会研究会資料 言語・音声理解と対話処理研究会（第13回対話システムシンポジウム）, Vol. 96, pp. 93–100, 2022.
- [9] 嶋田和子, 酒井祥子, 西部由佳. ロールプレイ玉手箱. ひつじ書房, 2010.

日常会話コーパスがもたらす語用論研究の可能性

小磯 花絵

国立国語研究所

<Abstract>

The main features of the Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC, include: i) a focus on conversations that occurred naturally in activities of daily life; ii) a balanced collection of everyday conversations that capture their diversity; and iii) the publication of audio and video data for a better understanding of the mechanism of real-life social behavior. The publication of a large-scale corpus of everyday conversations that includes video data is a new approach. In this paper, we first present an overview of the corpus, and then consider the potential of the CEJC for pragmatics research.

【キーワード】 日常会話、話し言葉コーパス、コーパスの利用可能性

1 はじめに

『日本語日常会話コーパス』(The Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC)は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」において2016年度より構築を進め、2022年3月に一般公開した、日常会話200時間を対象とするコーパスである(小磯ほか2023)。

これまで公開されてきた日本語の会話コーパスは、大学生などの若者同士の会話や二者間会話、電話会話といったように、対象とする話者や場面などに偏りが見られた。また実際の日常場面の会話ではなく、収録のために集まって雑談してもらうといったように、作られた場面の会話も少なくない。しかし、日常会話は社会生活の基盤であり、日常の話し言葉の特徴や仕組み、日常生活を円滑にするための会話コミュニケーションの有様を解明するためにも、日常会話を広く収集したコーパスは不可欠である。そこでCEJCを構築するにあたり、(1)日常生活で生じるリアルな会話を対象とすること、(2)多様な場面における多様な話者による会話をできるだけバランスよく集めること、(3)音声だけでなく映像まで含めて収録・公開し会話行動を総体的に解明するための研究環境を提供することを目標とした。特に、日常会話を200時間の規模で映像まで含めて公開するというのは、世界的に見ても新しい取り組みと言える。本稿では、CEJCの設計や構成などについて説明した上で、CEJCの持つ語用論研究の可能性について考えたい。

2 CEJC の設計・構成

2.1 収録方法

多様な場面における多様な話者による会話をできるだけバランスよく集めるために、200時間のうち185時間について、個人密着法と呼ばれる方法で会話を収録した。個人密着法では、40名の調査協力者（男女×20代・30代・40代・50代・60代以上×各4名）に約3ヶ月間、収録機材等を貸し出し、できるだけ多様な場面・多様な話者との会話を協力者自身に収録してもらった。この中から、データのバランスや倫理的問題なども考慮した上で、協力者あたり4~6時間の会話をコーパスに格納するデータとして選定している。

このように協力者にはできるだけ多様な場面・話者との会話を収録するよう依頼したが、協力者を成人に限ったことや収録許可の取得の難しさなどから、未成年者の会話や仕事場面の会話が不足する傾向が見られた（Koiso et al. 2018）。そこでその不足を補うために、仕事中の会議会合を約10時間、中高生の雑談・打合せ等を約5時間、計15時間を追加で収集した。これを特定場面法と呼んでいる。

図1に、個人密着法で収録された会話の映像データの例を示す。原則として、会話の場の横に設置したカメラ2台で話者や会話の状況を俯瞰的に記録するとともに（図1の右・上下）、360度撮影可能なカメラ1台を会話の場の中央に配置し会話者を中心に撮影している（図1左）。収録の状況等によって、3台未満のカメラでの収録、あるいは別のカメラでの収録や、電話会話などカメラなしの収録もある。



図1: 映像データの例：夫婦で料理をしている場面（論文掲載用に話者の顔にボカシ処理をしている）

2.2 コーパスの構成

図2にCEJCの全体の構成を示す。映像・音声データ、転記テキスト、短単位情報、長単位情報（自動付与）はCEJC全体に対して提供される。また個人密着法で収録した会話から全体の1割に相当する20時間を作成した「コア」データセットとして選別し、人手修正・人手付与した4種類のアノテーション（長単位情報、係り受け情報（浅原・若狭2022）、談話行為情報（Iseki et al. 2022）、韻律情報（小磯・菊池・山田2020））を提供する。

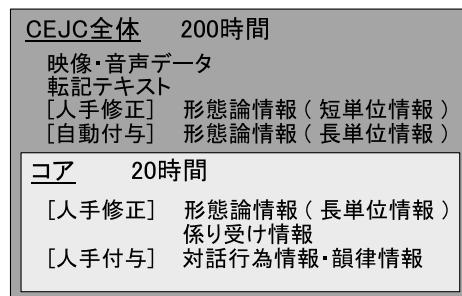


図2: CEJCの構成

2.3 コーパスの規模・分布

規模は、会話数577、延べ話者数1675名、異なり話者数862名、約240万語（短単位）である。図3に性別・年代ごとの延べ話者数の分布を示す。成人の協力者に収録を依頼したため、多少の違いは見られるものの20代から60代までの成人についてはいずれの世代の男女とも100人以上の話者が含まれており、概ねバランスよく収録できている。一方、未成年者、特に10歳未満の話者はかなり少ない。

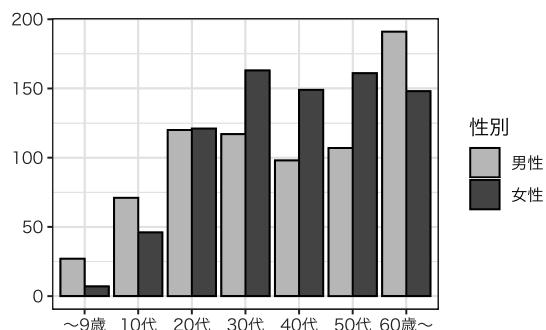


図3: 年齢・性別ごとの延べ話者数の分布

3 CEJCの持つ語用論研究の可能性

1節でも述べたように、従来共有化されてきた日本語の会話コーパスは、大学生などの若者同士の会話や二者間会話、電話会話といったように、話者や場面などに偏りが見られる。収録しやすい場面・話者であったということも一つの要因であると推察されるが、実際の日常場面における言語使用を想定して語用論研究を進めるためには、より多様な場面・話者を含むコーパスの共有化は不可欠と言えよう。

CEJCに含まれる話者の年齢・性別の分布については図3に示した通り、20~60代はバランス良く収録されているが、それ以外の側面はどうだろうか。CEJCを構築する

にあたり、そもそも我々が普段どのような種類の会話をどの程度行っているかを調査し（小磯ほか2016）、その結果を一つの指標としながらCEJCの収録を進めた。そこで、CEJCと会話行動調査との結果を比較しながら、CEJCにどのような種類の会話が含まれているかを概観したい。会話形式、話者数、会話の行われた場所、会話中の活動について、会話の件数と会話時間の観点から比較した結果を図4に示す。

まず会話形式について、雑談だけでなく用談相談や会議会合なども一定数含まれていることが分かる。会話の件数で見ると行動調査よりCEJCでは雑談が多く用談相談が少ない傾向が見られるが、会話時間でみると行動調査とほぼ同比率となっている。また会話の話者数についても、2人会話だけでなく、5人以上の会話も含め多様な人数の会話が含まれていることが分かる。

一方、場所と活動については、行動調査とCEJCとでバランスが少し異なる。自宅・職場での家事雑事・仕事中の会話が若干少なく、飲食店などの商業公共施設や友人宅・実家などの室内での私的活動（友人との付き合いやレジャー活動、課外活動等）中の会話が多い傾向が見られる。このように行動調査と比べて若干の差はあるものの、自宅での家事雑事や職場や学校での活動、徒歩や電車での移動中の会話など、多様な会話が含まれている。

このような多様な場面・多様な話者との会話について、CEJC全体をまとめて分析することも可能だが、個人密着法で収録した範囲については、一人の協力者を中心に、場面や相手によって言語行動をどのように調整しているかを分析することも可能となる（例えば小磯（2000）など）。

一方で、CEJCに見られる偏りにも注意を払う必要がある。CEJCは、日常生活の会話をランダムにサンプリングして収録しているわけではなく、調査協力者が収録しやすい場面や場所、また収録に応じてもらえるような関係性の相手が対象となりやすい。よって、例えば同じ会議会合であっても、改まり度の高い会議会合はあまり含まれておらず、必然的に親しい同僚や取引先との会議会合が多くなる。こうした偏りに注意して分析・考察をする必要がある。

CEJCは、言語学だけでなく、教育学や認知科学、情報工学など、幅広い分野の研究者に利用されており、同じコーパスを活用した研究のつながりも出てきている。こうした接点が語用論研究を含む研究の進展に貢献することを願う。

会話形式

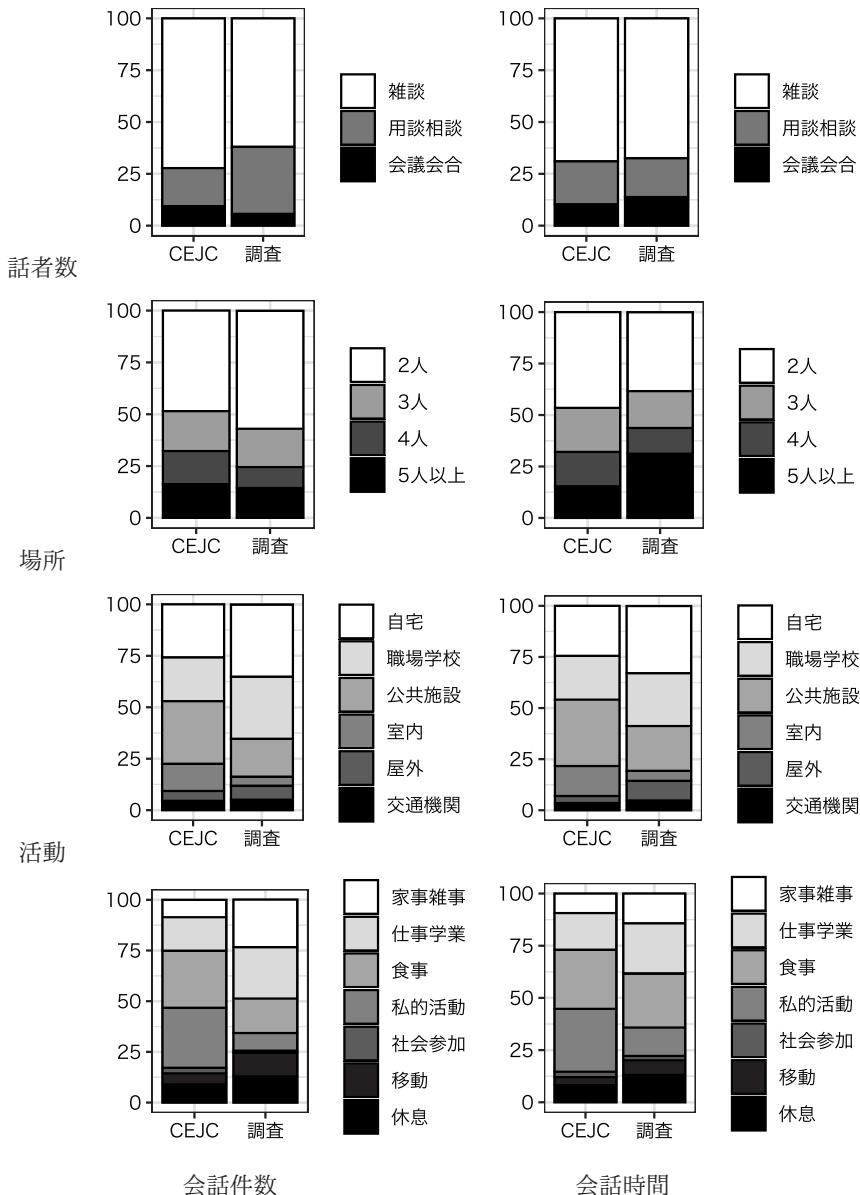


図 4: 会話形式・話者数・場所・活動に関する CEJC と行動調査の比較

謝辞

本研究は国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」および後継プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」の成果である。コーパスの収録にご協力・ご参加くださった皆さんに感謝します。

参考文献

- 浅原正幸・若狭絢. 2022. 「『日本語日常会話コーパス』に対する係り受け情報アノテーション」、『言語処理学会第28回年次大会予稿集』1699–1703.
- Iseki, Y. K. Kadota, and Y. Den. 2019. “Characteristics of everyday conversation derived from the analysis of dialog act annotation”, *Proceedings of the 22nd Oriental COCOSDA*, 1–6.
- Koiso, H., Y. Den, Y. Iseki, W. Kashino, Y. Kawabata, K. Nishikawa, Y. Tanaka, and Y. Usuda. 2018. “Construction of the Corpus of Everyday Japanese Conversation: An interim report,” *Proceedings of the 11th edition of Language Resources and Evaluation Conference*, 4259–4264.
- 小磯花絵・土屋智行・渡部涼子・横森大輔・相澤正夫・伝康晴. 2016. 「均衡会話コーパス設計のための一日の会話行動に関する基礎調査」、『国立国語研究所論集』10、85–106.
- 小磯花絵. 2020. 「日常会話コーパスを活用した丁寧さ・対人モダリティの生起要因とその実態の解明」、田窪行則・野田尚史（編）『データに基づく日本語のモダリティ研究』、3–20、東京：くろしお出版
- 小磯花絵・菊池英明・山田高明. 2020. 「『日本語日常会話コーパス』への韻律ラベリング–ラベリングの設計と日常会話の韻律の特徴」、『人工知能学会研究会資料』SIG-SLUD-B90, 34–39.
- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香. 2023. 「『日本語日常会話コーパス』設計と特徴」、『国立国語研究所論集』24、153–168.

「モバイル時代の語用論—「打ちことば」は何を変えたか」

三宅和子

東洋大学名誉教授

miyake@toyo.jp

<Abstract>

This paper begins by reviewing the last 30 years of linguistic research on mobile media, emphasising the scarcity of pragmatic research in this area. When studying mobile media, it is critical to pay close attention to the differences between media and modes. This paper examines and compares 'uchi-kotoba' (mediated language) to 'hanashi-kotoba' (spoken language) and 'kaki-kotoba' (written language), and argues that descriptions and analyses need to consider the differences between media and modes but also account for the impact of various devices and communicative situations. It then introduces an example of a pragmatic study of interaction on LINE, demonstrating some LINE-specific interactional features and emphasising the importance of studying new media in order to comprehend today's reality.

【キーワード】モバイル・メディア、CMC、語用論研究、「打ちことば」、依頼

1. 本稿のねらい（何をするのか、本稿の目的）

近年、インターネットを介した、特にモバイル・メディアを使用したコミュニケーションが日常の一部となっている。本稿はまず、過去30年ほどのモバイル・メディアの言語研究を概観し、この領域における語用論からの貢献がいまだ少ないことを指摘する。メールやSNSなどのコンピュータを介したコミュニケーション(CMC)が「打ちことば」と総括される傾向があるが、多様で振幅の大きいCMCの実態を把握するには誤解を生む表現ではないだろうか。本稿は、「打ちことば」を「話しことば」と「書きことば」と比較しながら批判的に検証し、モバイル・メディアの特質を見定めた上で、様々な機器や場面の異なりを反映したコミュニケーションを客観的に記述、分析する必要性を主張する。そして、現在利用が最も多いLINEでのやりとりを対象にした語用論的研究の例を紹介し、メディア、モード、機器や場面の異なりを考慮したインタラクションの多層的解明をめざす重要性を指摘する。

2. モバイル時代の語用論研究

日本のモバイル・メディアは、1990年代後半から急速に日常生活の中に浸透し始め、日々の生活に欠かせないものとなった。その利用者数は、2010年時点ですでにパソコン利用者数を越えている(総務省2019)。現代人の言語活動の実態を知る上でモバイル・メディアの研究は欠かせなくなっているといえよう。しかし、携帯メールの時代から現在のスマートフォン全盛時代に至るまで、情報系の研究は多いものの、言語研究が盛んとはいえない状況が続いている。従来の研究

の枠組みでは対処しきれない現象の解明方法を考える必要があるものの、その実態解明は、「コンテクストを考慮に入れて言語使用について研究する分野・方法論」(加藤・澤田編 (2020:1) とされる語用論においても重要な課題であり、今後の研究の増大と深化が期待される。

これまでの研究の流れを簡単に振り返っておこう。2000年初頭の携帯メールの研究は、言語行動や言語表現・表記の特徴に注目が集まった。日本語学 (2000, 2001) は早い時期に2年続けて特集を組んでおり、その諸論文が当時の状況を物語っている。若者を中心に利用が急増したため、送受信の相手や用件と内容の関連づけをみる社会言語学、社会心理学的な研究が多かった。絵文字や顔文字の利用のしかたと人間関係や社会心理にも焦点があてられ (荒川・鈴木 2004、三宅 2005b など)、認知言語との関連 (久保田 2012 など) や対照言語研究 (新井 2013 など) にも広がっていった。2010年前後から、携帯電話に代わってスマートフォンが利用され始め、LINE をはじめとする様々な SNS の利用が顕著になっていく中で、談話展開や発話行為に注目した研究が少しずつ増えていく。例えば、アクドーアン・大浜 (2008)、阿部 (2014)、宮崎 (2015)、三宅 (2019) などの依頼研究、KHAMTHONGTHIP (2017) などの謝罪研究、渡邊 (2015) の勧誘と依頼、中井他 (2018) の勧誘と断りの研究などである。言語資源や談話標識からアプローチした落合 (2022)、倉田 (2022) も現れ、拡大を見せているが、本格的な研究はこれからだ。

3. 「打ちことば」の正体—「話しことば」、「書きことば」との比較を通して

「打ちことば」¹は、文化審議会国語分科会によると、「電子メールやSNSなどのテキストのやりとり」において「話し言葉の要素を多く含む新しい書き言葉」(2018:4-5) であるという。また、「携帯メールやSNSなどを用いた私的場面における頻繁で短い言葉のやり取り」において、「書き言葉であっても、くだけた話し言葉的文体が用いられる」(2018:26) とし、例として表情や声の調子などの情報の欠落を補うための絵文字・顔文字の使用、「お k (OK)」「う p (up・アップ)」のような「誤変換を起源とするネット俗語的な表記」をあげている。だが、携帯電話とパソコンの「メール」は明らかなスタイルの差があり、絵文字や顔文字は必ずしも「言語外の情報の欠落を補うため」には使われていない (三宅 2005a)。携帯メールやSNSでは「頻繁で短いことばのやりとり」や「誤変換を起源とするネット俗語的な表記」がいつも見られるわけでもない。

そもそも、「書き言葉」「話し言葉」「書き言葉的文体」「話し言葉的文体」とは何をさすのか。「話し言葉」というと、おしゃべりから講義や国会討論も含むが、「話し言葉的」となると、おしゃべりのようなくだけた会話が想定されがちである。一方、「書き言葉」は走り書きから研究論文まで含まれうるが、「書き言葉的」となると、論文や新聞記事をさすことがほとんどだ。これでは十分な定義にはりえず、それをふまえた「打ち言葉」の正体はますます曖昧になってしまう。

これまで、「書き言葉」、「話し言葉」という用語は、日常の会話から研究論文上においてまで曖昧なまま広く使い続けられてきた。「打ち言葉」も同様に便利な表現ではあるが、多様なデジタル機器とプラットフォームを通して現実空間とサイバー空間が融合するようなコミュニケーションが展開する現在、これまで以上に対象を明確にすことばが求められる。「打ち言葉」は、「書き言葉」、「話し言葉」と同様、より厳格な整理が必要な時期に来ている²。とはいっても、簡潔に説明したり比較したりすることが必要な場合もある。カッコをつけるなどして示し、文章内で具体的な

対象範囲を説明するなどの工夫が必要であろう。ここでは暫定的に、物理的に音声で表現されたものを「音声言語」、文字で表現されたものを「文字言語」と提案をし、「硬さ」vs.「軟らかさ」で質の違いを説明することを打開策としたい。そして「打ちことば」を「ネットを介した言語」の1つとすれば、「硬い」メールのかしこまった文章も「軟らかい」SNSの文章も含むことができる。これなら画像や動画、LINEのスタンプなど、多様な視覚言語を含む場合も対応できそうだ。

Herring (2007) は、欧米で CMCへの興味が広がった折、言語学者の間で同様の議論が巻き起こったことをあげ、多様なジャンルとモードをもつ CMCを総称しようとすること自体が無謀だと述べている。また CMD (Computer-Mediated Discourse) の分析には、ジャンルとモード以外に考慮する側面があるとし、それらを含んで A Faceted Classification Schemeを提唱している。

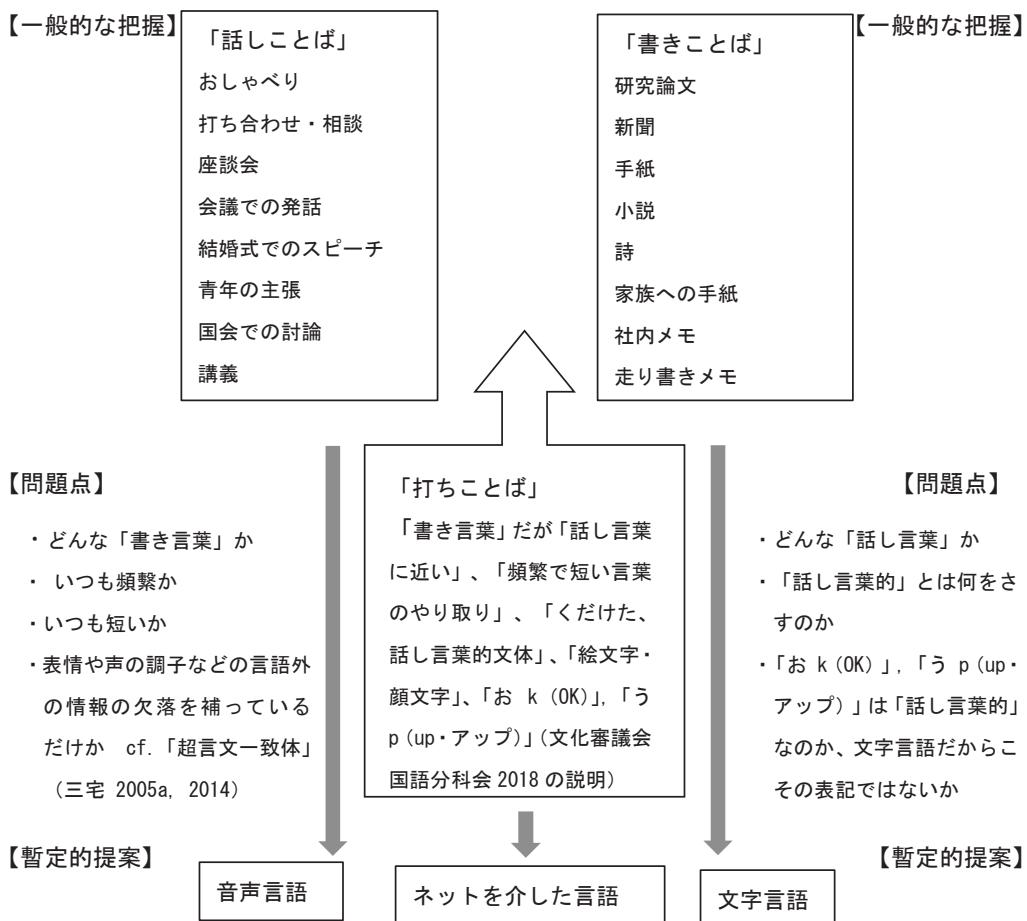


図1. 「打ちことば」「話しことば」「書きことば」の一般的な把握の問題点と新たな提案

4. LINEの語用論研究例

ここでは LINEにおける依頼の研究から、対面とは大きな異なりを見せる例を 2つ紹介する(詳

細は三宅 2019a、2019b)。1 例目は依頼のパターンである。日本語は「共話」という概念に象徴されるように、相手と共同で会話を構築していくといわれる(水谷 1985)。また、「依頼」などのFTAが高い発話行為を行う際はさらに、ためらいや言い淀み、相手の反応をひとまず待つなどの配慮行動をとることが指摘されている(日高 2012 など)。ところがこの調査の結果はまったく異なっていた。依頼のパターンは大きく「一気依頼型」、「分割一気依頼型」、「混合依頼型」、「やりとり依頼型」の4種に分かれたが、相手が反応する前に一気に依頼する2つの型が全体の66.5%にのぼった。「一気依頼型」は図2のように、1つの吹き出しで一気に依頼を行うタイプ、「分割一気依頼型」も、いくつかの吹き出しに分かれるものの相手が反応する前に依頼してしまうタイプである。「混合依頼型」も実は「一気依頼型」に近いタイプで、対面のコミュニケーションに最も近い「やりとり依頼型」(あいづちなどの相手の反応を見ながら依頼を遂行する)は9.5%だった。この理由をフォローアップ・インタビューで聞くと、相手がいつのタイミングで見るかわからないLINEでは、こまめに区切ると話の途中で相手が反応してやりとりに時間がかかり煩雑になる、無駄な憶測や心配を抱かせてしまう、それを避けるために一気に依頼内容を伝えたほうがいいという答えが多かった。ここではオンラインならではのポライトネスの意識が働いている。

表2. 吹き出しを利用した依頼のパターン

依頼のパターン	件数	%
一気依頼型	52	26.0
分割一気依頼型	81	40.5
混合依頼型	48	24.0
やりとり依頼型	19	9.5
合計	200	100.0

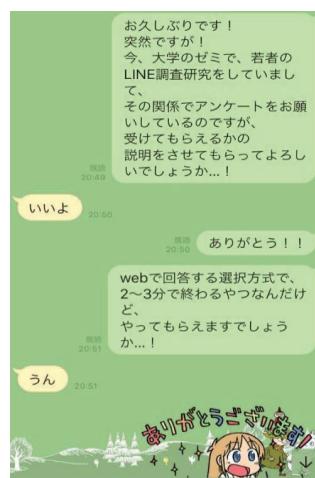


図2. 一気依頼型



図3. やりとり依頼型

2例目はスイッチバック現象と名づけた現象である。LINEのコミュニケーションにはタイムラグが生じるため、相手の応答が来る前に自分が発言したり、説明を続けている途中や話を次に進めてしまった後に相手の反応や質問が入ったりするという、対面のやりとりでは起こりえない談話の展開が観察される。その場合、図4に示すように、タイムラグで起こるやりとりの齟齬を修復したり前後と関連づけたりして談話のスムーズな進行を心がける必要がある。多様な資源を



図4. スイッチバック現象

用いてどの発話への反応かが分かるように工夫している。これも対面では見られない、LINEのような非対面で即時性の強いメディアで起こりやすい現象である。

ここにあげた例のように、メディアによる制約や時空間を越えるコミュニケーションでは、LINEに限らず、対面では起こり得ないような現象やインタラクションが繰り広げられ、常態化していく。

「モバイル・メディア時代の語用論」の研究が求められるゆえんである。

5. おわりに

モバイル・メディアの利用は今後も増大し、グローバルに展開すると考えられる。国外では専門誌 *Journal of Computer-Mediated Communication*(1995-)、*Discourse, Context & Media*(2012-) のほか、社会とことばの関りを考える *Journal of Sociolinguistics* など主要な研究誌が特集を組み、この方面の研究に積極的な取り組みが行われている。コロナ禍を経てからはさらに、CMC の有用性と問題点も一般にも実感される中、多様な言語実践の記述と分析が急務であろう。そのためには、分野の枠を超えた相互交流・参照の促進、豊富な材料や視点をもつ若手研究者と集積された知識や分析方法をもつ熟練研究者との協働が求められるのではないだろうか。

注

1. 本稿は「打ちことば」と表記するが、文献引用の場合は原文に忠実に「打ち言葉」とする。
2. ここでは簡潔性を優先して3つを取り上げ、手話などを含めていないが、コミュニケーションはこの3分類で片付けられるものではないことはいうまでもない。

参考文献

- 阿部響子. 2014. 「留学生の日本語による依頼メールの文章産出過程—文章産出過程に影響を与える要素の分析—」『接触場面における言語使用と言語態度』11: 41-56.
- アクドーアン, プナル・大浜るい子. 2008. 「日本人学生とトルコ人学生の依頼行動の分析—相手配慮の視点から—」『世界の日本語教育』18: 57-72.
- 新井保裕. 2013. 「携帯メール言語特有表記に現れる表現的機能の日韓対照研究—大学生の謝罪場面を対象に—」朝鮮語研究会(編)『朝鮮語研究』5: 163-186.
- 荒川歩・鈴木直人. 2004. 「謝罪文に付与された顔文字が受け手の感情に与える効果」『対人社会心理学研究』4: 135-140.
- 文化審議会国語分科会. 2018. 「分かり合うための言語コミュニケーション(報告)」

https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/09/a1401904_03.pdf

Herring, S.C. 2007. "A Faceted Classification Scheme for Computer-Mediated Discourse." , Language@Internet, 4. <http://www.languageatinternet.org/articles/2007/761/>

日高水穂. 2012. 「「察し合い」の談話展開に見られる日本語の配慮言語行動」三宅和子・野田尚史・生越植樹編『「配慮」はどのように示されるか』91-112. 東京：ひつじ書房.

加藤重広・澤田淳編. 2020. 『はじめての語用論—基礎から応用まで—』東京：研究社.

KHAMTHONGTHIP, TAWAT. 2017. 「日本語の謝罪メールのやりとりの構造分析：約束キャンセルのメールを例として」学位論文, 大阪大学.

久保田ひろい. 2012. 「絵文字は何を伝えるか：携帯メールにおける絵文字のパラ言語的機能とテクストの構造化」『認知言語学論考』10: 143-192.

倉田芳弥. 2022. 「日韓母語場面の LINE チャットの会話におけるあいづちの特徴—協和と対話の観点から—」『拓殖大学語学研究』147: 25-53.

水谷信子. 1985. 『日英比較話しことばの文法』くろしお出版

三宅和子. 2005a. 「携帯メールの話しことばと書きことば—電子メディア時代のヴィジュアル・コミュニケーション」『メディアとことば』第2巻 234-261. 東京：ひつじ書房.

三宅和子. 2005b. 「携帯電話と若者の対人関係」『講座社会言語科学 3 メディア』136-155. 東京：ひつじ書房.

三宅和子. 2014. 「電子メディアの文字・表記—「超言文一致体」の現在と未来ー」『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』pp.198-183(pp.(1)-(16)) 東京：彩流社.

三宅和子. 2019a. 「LINE における「依頼」の談話的特徴を記述・分析する(1)－メディア特性とモバイル・ライフの反映を探るー」『文学論藻』93: 31-49.

三宅和子. 2019b. 「モバイル・メディアにおける配慮—LINE の依頼談話の特徴ー」山岡政紀編『日本語配慮表現の原理と諸相』163-180. 東京：くろしお出版

宮崎由美. 2015. 「LINE を用いた依頼場面における送受信者の言語行動—表現の担う機能と構造に着目して」西尾純二他編『言語メディアと日本語生活の研究』5-20. 大阪：大阪府立大学.

中井好男・船橋瑞貴・副田恵理子・向井裕樹. 2018. 「LINE での日本語母語話 者からの誘いを非母語話者 はどう断っているか：「再誘い」を誘発する要因 とその背景にある意識」『国立国語研究所論集』14: 169-192.

日本語学. 2000. 『日本語学』19 (12) 東京：明治書院.

日本語学. 2001. 『日本語学』20 (10) 東京：明治書院.

落合哉人. 2022. 「コレ・ソレ・アレの使用実態から捉える対面会話の話しことばと携帯メール・LINE の「打ちことば」」『日本語と日本文学』 68: 27-45.

総務省. 2019. 「令和元年版情報白書」[\(2022.11.03\)](https://www.soumu.go.jp/main_content/000831290.pdf) https://www.soumu.go.jp/main_content/000831290.pdf

渡邊知佳. 2015. 「携帯メールメッセージの談話分析 — 勧誘と依頼の表現による検討 —」『上越教育大学国語研究』29: 33-23.

口頭発表

Lecture Sessions

日本語の間接的不満談話の開始部における前置きとしての「評価」と「正当化」

Marina B. ASAD

立命館大学大学院文学研究科

<Abstract>

This study focuses on "Indirect Complaint" interactions in Japanese everyday conversations and examines how Japanese indirect complaints are initiated and what the complainer aims to convey. The results indicate that the complaints are preceded by an evaluation of the target, followed by justifications, and not just by expressing emotions. This combination serves as a prelude to the narrative of the complaint [“story prefaces” (Sacks, 1989)], capturing the listener's attention and promoting conversation participation. This result suggests that the complainer seeks to establish a shared evaluation with their interlocutor about the target of the complaint during the escalation of the discourse.

【キーワード】：間接的不満表明、日本語日常会話、評価、正当化、共通基盤化

1. はじめに

不満表明の行為は、不満のターゲットと対話相手が一致するか否かによって「直接的不満表明 (direct complaint)」と「間接的不満表明 (indirect complaint)」の二種類に大別される。後者のように、不満発話者がその場にいない第三者に対する不満の感情を対話相手に表出する際は、対話相手に同調してもらい、自分の感情を理解して共感してもらうことを求める (釜田, 2017)。しかし、不満を表明する参与者にとっては、対話相手に同調してもらうためにどのようにしてその不満の語りを導入するのかが大きな課題となる。なぜかというと、間接的不満表明の場合は、不満発話者が自身の内面を対話相手に顕在化することで、不満の対話相手の反応に対して脆弱になり、耳を傾けられ理解されるという期待が裏切られることで傷つきかねないからである。また、間接的不満表明を行うことによって、不満発話者自身に対する負の評価（「不平家」「愚痴っぽい人」など）が喚起する可能性もある(Edwards, 2005)。それに、間接的不満表明の対話相手は、不満発話者の個人的ないし親密な側面に関わる活動に関与することを望まないかもしれない。そのため、間接的不満表明において対話相手に参加してもら

えるかどうかは不満発話者にとって挑戦的な課題となる。「参加してもらえるかどうか」というのは、対話相手に聞き続けてもらって同調してもらえるかどうかということである。そこで、本研究では、主に日本語日常会話における「間接的不満表明」に着目し、雑談の中でその場にいない第三者に対する不満を語り始めようとする者は、どのように不満の語りを開始するのか、又その開始の仕方によって対話相手に対して何を志向するのかを明らかにすることを目的とする。

2. 「間接的不満表明」に関する先行研究

2.1. 「間接的不満表明」の定義と構成される要素

これまでの先行研究では、「不満表明」は、不満のターゲットが直接の対話相手である「直接的不満表明」と、その場にいない第三者に対する不満を、不満のターゲットではない、または不満を解消する責任がない対話相手に向ける「間接的不満表明」の2種類に分類されている。この時、「直接的不満表明」を、対話相手によって引き起こされた好ましくない状況に対する反応である（李, 2006）と同時に、相手に謝罪、責任承認または改善などを期待する言語行為として捉える。それに対し、「間接的不満表明」を、望ましくない事態について嘆くことで、相手に同調してもらい、自分の状況や気持ちを理解し共感してもらうことを求める行為（釜田, 2017）として捉える。そして、「不満表明」を構成する要素には、不満を言う側である「不満発話者（complainant）」と、不満を聞く側の「不満の対話相手（complaint recipient）」と、不満の理由となる望ましくない状況の「不満事態（complainable matter）」と、その不満事態を引き起こした責任のある側の「不満のターゲット（complaint target）」という4つの要素が存在する。こうした不満表明の要素を踏まえた上で、本研究における「間接的不満表明」を「不満発話者が対話相手に表明する、あるターゲット又はある不満事態に対する自身の否定的スタンス・否定的評価の言語行為である」と定義する。間接的不満表明の対話相手に対する目的を達成するための一つの方法は、話し手自身が不満のターゲットに対して否定的なスタンスを持つていることを示すと Edwards (2005)において述べられている。また、それは不満談話の導入段階で定期的に行われると指摘されている。

2.2. 「間接的不満表明」に関する先行研究

これまでの「間接的不満表明」の相互行為を扱った研究では、「間接的不満表明」の語りが、“Troubles-talk” (Jefferson, 1988; Roulston, 2000) と “Complaint Narratives” (Drew & Holt, 1988) という二つの用語に分かれて使用されてきた。両者の違いは、

“Troubles-talk”は、不満発話者が自身の悩み事について語る時に使用されるが、“Complaint Narratives”は、不利な立場を訴えること(釜田, 2017)であると同時に、特定の対象に対する不満感情の表出(Drew & Holt, 1988)でもあり、道徳的な意味合いを持つ語り(Edwards, 2005)もあるということである。本研究における「間接的不満表明」は“Complaint Narratives”に相当する。以下には、「間接的不満表明」に関する先行研究の主な知見を紹介したうえで、本研究を行う意義について解説する。

Drew & Walker (2009) 及び Traverso (2009) では、「間接的不満表明」の相互行為はいかに動的で、協調的な性質を持っているかが強調された。具体的に言うと、最初は不満発話者が不満を暗示するが、対話相手が共感的な反応を示すと、不満を明示的に述べることが見られた。また、Drew & Walker (2009) では不満の対話相手は、不満発話者自身がそこまで第三者について言おうとしない不満を、しばしば必要以上に明確に表明することが観察された。そして、Traverso (2009) では、「間接的不満表明」は、必ずしも円滑に行わると限らず、しばしば愚痴内容の事実認定が否定される可能性も存在し、この時、対話相手に交渉したり、または話題変更が行われたりすることもあると主張された。そのため、「間接的不満表明」の相互行為は無秩序な行為だと述べている。また、Ruusuvuori et al. (2019)において、業績評価面接の制度的場面に着目して間接的不満談話の開始部を分析した結果、不満表明の実施の可能性は、上司のタスクによるものであることが明らかとなった。その結果からは、不満談話への対話相手の参加は、会話参与者的社会的な役割、および参加される社会的な活動における役割によって大きく影響されることが考えられる。ほかに、Ruusuvuori & Lindfors (2009)では、医療場面において行われる先行医師に対する患者の不満表明は、診察時の問題提示や、受診の正当性などという主要な制度的タスクを遂行する手段として用いられることが明らかとなった。

以上のように、従来研究において様々なコンテクストで行われる「間接的不満表明」に関する知見が見られたが、本研究における「間接的不満表明」のコンテクストは、雑談のやり取りにおける物語の形を取ったものとなる。物語とは、串田他(2017)によれば、人が経験したことや見聞きした出来事が、時系列に語られるものと定義される。ただし、出来事の語られる順序は出来事が発生した時間に沿った順番でなく、順番が前後になる場合もあるとも串田他(2017)は指摘しているが、愚痴をこぼしたり、不評を述べたりといった場面で物語の順番が前後する場合ではどのような要素が優先的に発話されるのか、またこうした非時系列的な組織化が何を志向するのかは依然と

して明らかではないため、本研究では、その点を明らかにすることを目的とする。

3. 分析手法

分析データとして、日本語母語話者の日常会話データが収録されている『日本語日常会話コーパス』(小磯他, 2022)から間接的不満談話5例を抽出し、不満談話の開始部の分析を行った。コーパス中の「間接的不満表明」の会話データの情報を以下の表1に示す。

表1：『日本語日常会話コーパス』における「間接的不満表明」の会話データの情報

(1) K001-011 園長先生に対する不満	(00:17:46-00:21:27)
(2) C002-016 営業職の人への不満	(00:17:32-00:18:33)
(3) C002-016 息子の別れた彼女への不満	(00:41:09-00:43:27)
(4) K003-006 先生への不満	(00:16:29-00:18:52)
(5) C002-013a 福祉施設にいる母を訪問し父の訪問を勧誘	(00:03:23-00:07:36)

不満談話の開始部において行われる会話参与者間のやりとりを分析するにあたって、会話参与者双方がどのような発話タイプを使用するのかを分類し、その発話によって会話参与者が対話相手に対して何を志向するのかを分析した。その結果、不満発話者（以下の事例における会話参与者A）は、基本的に3段階で不満談話を導入することが明らかとなった。その3段階は、①まず対話相手と共同注意を獲得するために不満のターゲットを指摘した直後に、②その不満のターゲットに対する否定的「評価」を示してから、③その評価を「正当化」する要因を表示する、ということである。その結果に関しては、次章において詳細に解説する。

ここでいう「評価」というのは、不満を表明する者が自身にとって望ましくないと判断した事態に関して自身の見解を述べることを指している。また、本研究における「正当化」は、ある言動を行う際に、その言動が正しいと証明する理由や根拠を示しつつその言動を合理的に説明することを指す。Pomerantz (1986)によると、不満談話における正当化の具体的な実践として、不満の出来事やその結果を有害なものとして描写することが挙げられる。このような不満状況の描写自体が、しばしば極端な言語形式で行われ、不満表明の正当性を示すものとされている。また、この手法が有効であるとされる点に関しては、(1)対話相手の非同調的な反応の可能性から守ること、(2)不満事態の原因を解明すること、(3)不満表明そのものを正当化すること(*ibid.*:227)、と

いう3点が挙げられる。本研究では、以上の不満表明における「評価」と「正当化」に関する見解に従って議論を進める。

4. 分析結果:「間接的不満表明」の開始部の構造

事例(1)は、親戚関係にある二人の女性の間接的不満談話である。会話参与者Aは、対話相手Bに、その場にいない元職場の園長に対する不満の語りを開始する。この事例の会話参与者Aの経験語りにおいて、不満談話がどのように開始されるのかを分析した結果、以下のような開始の特徴が見られた。

(1) K001-011園長先生に対する不満 (00:17:46-00:21:27)

1	A	なんかさ:(0.163)この前さ:(1.167)民営化なったところ行ったの
2	B	((うん))
3	A	その話[しましたっけ?
4	B	[民営化なったとこってどうゆうこと?
5		う[うん
6	A	[えっと○○(Aが担当したことがある園)の
7	B	あー。[○○に行ったんだ。
8	A	[そう [行ったの:。
9	B	「へー
10	A	→ す[ごいもうだめだ:と思って: hhhhhh 7, 9行: 【不満のターゲットへの共同注意の確立】 10行: 【評価】
11	B	[うん]
12	A	→ でもさ:やっぱり園長先生がさ:(1.125)なんか(0.446)ウェルカムじゃなくてさ ((うん))
13	B	
14		
15	A	→ 全[然 (1.6) 12, 15行: 【正当化】
16	B	[元あれなの= あっ、じゃなくともう全然
17	A	うん(0.60) 元(0.310) そう
18	B	わ
19	A	公立の(1.056)[園長先生だったんだけど:
20	B	[なのに? うん
21	A	=なんかね:(0.203)そう(0.874)ちょっと[なんか。
22	B	[なのにウエルカムじゃないんだ=
23	A	=そう: 24 B へー 18, 20, 22行: 【不満のターゲットに対するAの評価の「正当化」の理解提示】

不満発話者Aは、不満のターゲットに対する不満を語り始める際は、その不満のターゲットに対する対話相手の注目を獲得する戦略として、まずその不満のターゲットである人物の勤務先を行ったことを導入する[1]。それについて対話相手と共有注意が得られた[7, 9]直後に、その不満のターゲットに対する自分の否定的な「評価」[10]を示す。しかし、「評価」の発話の反応として、対話相手が頷いたり、相槌を打ったりするのみにとどまるため、対話相手に不満の語りに関与してもらえるかどうかはまだ確認できない。そのため、不満発話者が前の発話で示した否定的な「評価」を正当化する発話を連続して表出する[12, 15]。というのは、Aは、元職場への訪問が、「すごいもうだめだと思って」[10]という評価を示した後、その評価の背景にある園長のウェ

ルカムじやない行動がその評価の原因であるという知識を B と共有し自身の不満を正当化するからである。ここでは、「正当化」の発話をを行うことによって、対話相手の十分な理解を得ることができ、対話相手に「わ」[18]といった驚きを示す反応を返された。続いて、不満発話者 A は、19 行目で不満のターゲットに関して「公立の園長先生だった」という情報も追加し、自身の不満を正当化することに対し、B に「なのに？」[20]と、この時も驚きの反応が示された。こうしたことにより、対話相手 B が不満のターゲットに対する A の「評価」とその評価の「正当化」を十分に理解し、A と共通した評価を持ちかねないこと、次に展開する間接的不満談話への参加を希望することを期待させる。

以上の事例(1)の分析結果から、間接的不満表明の語り手が使用する、間接的不満のターゲットに対する「評価」とそれに続く「正当化」という発話連鎖は、不満の物語を予示する働きを持つ「物語の前置き (story preface)」(Sacks, 1989)として使用されると考えられる。このような間接的不満談話の開始部の発話連鎖は、事例(4)と(5)においても共通して見られた。ただし、本研究では、日本語の現実の日常会話において参与者の双方が互いに予定していなかった不満行為が行われた場合のデータを分析対象としているので、それぞれのデータの独特な状況により、独特的な開始方法が観察された。従って、不満談話の開始部においては、不満のターゲットに対する「評価」だけが示され、「正当化」が遅れた場合〔事例(2), (3)の場合〕、何が起こるのかも分析を行った。

次の事例(3)の会話参与者は、姉妹同士であり、二人とも不満のターゲットである A の息子の恋人のことを共有している。会話参与者 A は、1 行目で息子が恋人と別れたことを対話相手 B に報告した後、4 行目で「良かった」と述べ、別れたという悲しいはずの話に対して肯定的な評価を示すことで、息子の元恋人に対する不満を暗示するが、その直後にその評価を正当化しないため、対話相手 B はそうした A の意外な評価に対して対立した評価を示し[8]、13 行目で自身の対立した評価を正当化する。それに対し、不満発話者 A は 11 行目で自身の当初からの評価を強調し、15 行目でようやく自身の評価を正当化することが見られた。こうした 8-16 行目の発話連鎖は、A の息子が恋人と別れた話に対する「評価」をめぐる交渉の発話連鎖である。不満発話者 A は、15 行目で不満のターゲットに対する自身の否定的評価の正当化を行うと、17 行目で B に頷きで理解を示され、A も頷きで反応し、互いに頷き合った瞬間で共通の理解が達成されたことが分かる。

またその後、対話相手 B は 18-23 行目まで不満発話者と共通した評価を示すエピソードを自ら提示し、A と提携している合図を見せ、27 行目で共通の理解を見せる

(3) C002-016 息子の別れた彼女への不満 (00:41:09-00:43:27)

1 A でもあの:(2.665)お料理作りに行ってた(0.776)あの子と別れたから
 2 B うん
 3 あっ、↑そう↑なの?:あら
 4 A → <よかったです>hhhh[hhh] 4行:【評価】
 5 B [hhh]
 6 A 念じてたわけじゃないんだけどね:=念じ 念じたくなるぐらいのあれだったけど
 7 B う::ん うん うん うん うん
 8 あ、[そう:] =残念だったね:だけど
 9 A [よかったです] え? 8-15行:評価の交渉発話連鎖
 10 B Hhhh
 11 A いや、残念じゃない全然残念じゃないよ
 12 B うん
 13 B ん、そうなの?なんか仲よかったですみたいだからさ。
 14 Aええ いやいや
 15 A → 仲よかったです[けど、いやいや:搾取 搾取されているって ゆうの 15行:【正当化】
 16 B [うん
 17 (0.3) ((同時に互いに領き合う)) 17行:【不満のターゲットに対するAの評価の「正当化」の理解提示】
 18 B だってさ:(0.607)(h)なんだっけ(0.165)ジャガリコしか食べないって〔聞いた時点
 19 でき(0.219)なんじゃ:と(h)思った〕
 20 A [そそうそそうそそうそ=駄目だと思ったでしょ]
 21 B うーん
 22 ¥ 思ってさ:¥(0.892)あーまー○○ちゃん優しすぎるな:とか思ってたんだけど(h)
 23 さ:hhhhhhhhhh 18, 19, 22, 23行: Bの共感のエピソード
 24 A (hhhhhh) 。でも*
 25 (0.375)
 26 A そ=そゆう感じで搾取され続けてたらしい
 27 B ふーん

「ふーん」の相づちを打つことも見られた。この事例で見られた評価を巡る交渉の発話連鎖[8-16]の現象は Traverso (2009)においても見られ、“Negotiations for the initiation of (complaint) activity” (p.2398) として捉えられている。

以上の事例から、不満談話の開始部では、「評価」だけが示され、「正当化」が遅れた場合、会話参与者間で「評価」をめぐる交渉が生じることが明らかとなった。そのため、間接的不満談話を導入する際には、「評価」と「正当化」という2つの要素を併用することが望ましいことが分かる。

5. まとめと考察

本研究では、主に日本語の日常会話における「間接的不満表明」に着目し、不満談話がどのように開始され、対話相手に何を志向するのかを分析した。分析の結果、日本語の間接不満談話は、Wyrwas (2002) で示されたように、単なる不満発話者の感情表明で開始されるのではなく、不満のターゲットに対する「評価」で始まり、「正当化」の発話が連続して行われることがわかった。こうした不満談話の開始の仕方によって

は、対話相手に驚きや理解の反応が示され、次に展開する不満談話へ参加が確認できる。そのため、間接的不満のターゲットに対する「評価」と「正当化」という発話連鎖は、不満の物語を予示する「前置き」として機能することが分かる。また、対話相手と正当な情報を共有する先に、不満談話の開始部に「評価」が表明されることから、不満発話者が不満談話を進める中で対話相手と共に評価を得ることを目指していると考えられる。

しかし、本研究は、あくまでも不満談話の開始部に焦点を当て分析したものであり、その後の不満談話の展開について、会話参与者によってどのようなパターンが使用され、どのように共通基盤化 (Clark, 1996) が達成されるのかは依然十分に観察できていない。そこで、今後の課題として、日常会話データの数を拡大し、不満談話の中心部と終結部の発話連鎖を分析し、会話参与者間での共通基盤化が不満談話の構成にどのように影響するかを考察することが挙げられる。

参照文献

- Clark, H. H. 1996. *Using Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Drew, P. & Holt, E. 1988. "Complainable matters: The use of idiomatic expressions in making complaints." *Social Problems* 35, 398-417.
- Drew, P. & Walker, T. 2009. "Going too far: complaining, escalating and disaffiliation." *Journal of Pragmatics* 41, 2400-2414.
- Edwards, D. 2005. "Moaning, whining and laughing: The subjective side of complaints." *Discourse Studies* 7(1), 5-29.
- Jefferson, G. 1988. "On the sequential organization of troubles-talk in ordinary conversation." *Social problems* 35(4), 418-441.
- 釜田友里江 (2017). 『日本語会話における共感の仕組み—自慢・悩み・不満・愚痴・自己卑下の諸相—』名古屋大学大学院国際言語文化研究科、博士学位論文、平成 29 年 2 月。
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香. 2022. 「『日本語日常会話コーパス』の設計と特徴」『言語処理学会 第 28 回年次大会発表論文集』、2008-2012.
- 串田秀也・平本毅・林誠. 2017. 『会話分析入門』 効草書房.
- Pomerantz, A. 1986. "Extreme case formulations: A way of legitimizing claims." *Human Studies* 9, 219-229.
- 李善姫. 2006. 「日韓の不満表明に関する一考察—日本人学生と韓国人学生を比較して—」『社会言語科学』8(2), 53-64.
- Roulston, K. J. 2000. "The management of 'safe' and 'unsafe' complaint sequences in research interviews." *Text & Talk* 20(3), 307-346.
- Ruusuvuori, J. & Asmuß, B. & Henttonen, P. & Ravaja, N. 2019. "Complaining About Others at Work." *Research on Language and Social Interaction* 52, 41-62.
- Ruusuvuori, J. & Lindfors, P. 2009. "Complaining about Previous Treatment in Health Care settings." *Journal of pragmatics* 41, 2415-2434.
- Sacks, H. 1989. "An Analysis of the Course of a Joke's Telling in Conversation." In R. Bauman & J. Sherzer (Eds.), *Explorations in the Ethnography of Speaking*, 337-353. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traverso, V. 2009. "The Dilemmas of Third-party Complaints in Conversation between Friends." *Journal of Pragmatics* 41(12), 2385-2399.
- Wyrwas, K. 2002. "Skarga Jako Gatunek Mowy" [Complaint as a Genre of Speech]: *Wydawnictwo Uniwersytetu Śląskiego*, Katowice 2002.

日本手話の対比構文「A否定B」の談話構造

有光奈美（東洋大学）

高嶋由布子（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）

數見陽子（NPO 法人手話教師センター）

矢野羽衣子（関西学院大学手話言語研究センター）

<Abstract> This study classifies the usages of the contrastive construction “A NEG B (which means ‘Not A, (but) B’ in English.)” These constructions are characteristic of Japanese Sign Language (JSL). Moreover, it points out that element A, which tends to be omitted in Japanese, is referred to with this construction in JSL without being ignored. In Japan, NHK (Nippon Hoso Kyokai, Japan Broadcasting Corporation) broadcasts the program *Sign Language News 845*, where deaf, native JSL signers translate Japanese manuscripts. The study compared these news videos of JSL with the Japanese speech simultaneously read. The results show the use of three negative markers: words translated as “different,” “not,” and one of the non-manuals (NM): “head shake.” This construction has discourse conditions that convey information that, in contrast to everyone’s shared assumption, it is B, not A. The results indicate the way discourses are created between Japanese and JSL differs.

【キーワード】：日本手話・対比・否定・談話構造・スクリプト・非手指要素

1. はじめに

本研究では、日本語と異なる構造を持つ日本手話 (cf. 木村・市田 1995, 2000) 特有の対比構文「A 否定 B」の用法を分類し、日本語では省略されている要素を日本手話では省略せずにこの構文で言及することを指摘する。

本研究では、NHK 手話ニュース 845 で放映された、日本手話を母語とするろう者が日本語ニュースを日本手話に翻訳したものと、同時に読まれていた音声日本語を比較し、「A 否定 B」構文を整理した。

対比構文「A否定B」で用いられる否定のマーカーは「違う」、「しない（掌を左右に振る）」、NM（non-manuals、非手指要素）の「首振り」の3つがあった。前者2つの手指否定語にはNMの首振りが共起または先行するものだった。

2. 先行研究

2.1. 否定のマーカー

本研究の重要な背景として、日本手話は独立した言語であり、日本語の語順で手指単語を並べたものではない、ということを知っておく必要がある。日本手話は、目で見る言語であり、日本語から独立した文法がある。手話言語には、非手指要素（以下NM: Non-manuals）が存在し、命題の構造を示すのに重要な役割を果たす。NMには、頭を動かす（横、縦）、目を見開く、顎を引く、肩をすぼめる等、いろいろな顔・頭の動きがある。

以下に、非手指要素を用いて表す基本となる例文を挙げる。

(1) a. 平叙文

有・光（頷き）

有光です

b. Yes/No 疑問文

有・光（目開き）

有・光さんですか？

c. WH 疑問文

有・光（目開き、首振り）

有光さんは{どこ／何をしている人／どんな人}ですか？

上記の(1a)、(1b)、(1c)において、それぞれ手指単語は同じだが、頷き、目開き、首振りというNMのみが異なっている。音声言語の超分節的要素(suprasegmental feature)としてのイントネーションに近いものに見えるが、平叙文と疑問文だけではなく、極性疑問文とWH疑問文に分けられる点で情報量が多い要素である。手指のみで表そうとすれば、「何」や「どこ」などの手指単語が必要だが、NMだけで表せる。このことは、日本語と異なる言語であり、日本語に一対一対応で手指単語を当てはめるコミュニケーション手段でないことの証左である。

本研究では否定に着目するため、非手指要素の中でも首振りが重要になるが、日本手話の場合、否定の手指単語と、首振りが共起する。手話言語のタイプロジーとして否定表現に手指単語と非手指要素が義務的に共起する言語と、非手指要素のみで否定

ができる言語がある (Zeshan 2006: 43)。Morgan (2006) の記述によれば、日本手話は基本的に手指要素が必要な言語である。

日本手話の否定表現に関しては、市田 (2005: 89-90) は「日本手話には、掌を回転させるようにひらひらさせる<ない>と、掌を左右に振る<しない>、そして<違う>という3つの代表的な否定語が存在する」としている。また、Matsuoka (2016:10-13) は、否定表現とモダリティとの関係に着目して論じている。

手話における否定のマーカーにも、手指表現と NM があり、代表的な否定表現の NM として、以下の表で整理する。

表 1 日本手話の否定語とそれに伴う非手指要素

手指要素 (ラベル)	違う	不要	いやいや	ない
頭の動き	首振り	首振り	首振り	首振り
マウス ジェスチャー	い 横に開く	ぶ (PUH) 閉じて 唇を突き出す	軽く開く	え (TH) 舌を少し出す

否定の非手指要素には、首振りと眉寄せがよく見られ、本研究では首振りに着目する。本研究で扱う A 否定 B 構文で、否定の部分が首振りのみになる例として (2) (3) がある。

(2) やる (首振り) 不要 mg(puh)

(それを) するかというと、必要ありません。

(3) コーヒー (首振り／顎あげ) 紅茶

(これは) コーヒーでなく、紅茶です。

また、以下の分析を通して、否定の大きな意味は NM で、細かくは手指で表現していることがわかった。詳細は後ろのセクションで説明する。

2.2. 文法化と対比構文「A否定B」

日本手話の文法化の例に「A良いB」「AわかるB」構文がある。「良い」、「わかる」という字義通りの意味は消え「そうするのが普通なのに、しなかった」という意味になる。市田（2005:93-95）の例を参考に、共同研究者のネイティブ・サイナーとの作例を以下に示す。

(4) [たばこ PT 3_r 視線^r 黙る^{nod} よい 1言う_r]眉寄せ



(日本語訳) あの人、タバコ吸っているの？（迷惑だな）

黙っているのが普通だが、私は言った。

対比構文「A否定B」は、これらの構文と類似の表現であり、「一般にはAだと想定されているが、そうではなく、B」という意味を持つ。

3. 対比構文「A否定B」の意味論と語用論

3.1. 構文論的4分類

対比構文「A否定B」について、林（2021）は付加部(B)を分析し、否定形の分布を「否定される（価値基準の有無） vs. 否定されない（時系列）、語彙置換、断念、期待外れ、予測の結果、回避、打開」というキーワードで整理している。それを踏まえ、本研究は構文論的観点から以下の4つの分類を提示する。

a. 名詞レベル：想定される<もの>の方が一般的

これはネイティブ・サイナーの直観によると最も簡単で典型的な例とのことである。この構文の簡単で典型的な例文は、手話ニュースで端的なものが見つからなかったので、共同研究者のネイティブ・サイナーと作例したのが以下である。



(日本語訳) 私、右利きではなく、左利きなんです。(作例)

日本語では「(右利きではなく)」の部分は表現されなくても違和感がないし、むしろ表現されたら冗長に感じるはずだ。しかし、日本手話では「A否定B」のAの部分を表現した方が自然である。ここで重要なのは、上記の例文(5)はマイノリティである左利きについて言う時、右と対比することは自然だが、右と左を入れ替えると容認されない点である。つまり、対比構文「A否定B」は、聞き手が想定する一般的に多数派の属性Aを否定し、少数派の属性Bを明確化する。否定されるものは一般的にみなが共有しているものでなければならず、対義語であれば入れ替えられるわけではない。

つまり、対比構文「A否定B」は、聞き手が想定する一般的に多数派の属性Aを否定し、少数派の属性Bを明確化しているのである。なお、類例として、以下の表を挙げることができる。

表2 想定される多数派のAと、少数派のBの例

A	B
右利き	左利き
朝食に白米	朝食にカレー
白米	玄米
スマホ	ガラケー
JR	私鉄

たとえば「JR vs.私鉄」の対比は、東京などの都市部か、地方か、によっても話者の感じ方が異なってくることから、全ての対比が必ずしも固定されている絶対的なものではなく、話者が思っている常識を基準にした対比を表すもので、人や話者コミュ

ニティの共有された信念に左右されるものであると言える。

なお、このバリエーションに「Aだけ違うB」(AだけでなくBも)がある。「宇宙飛行士に文系の人でも応募できる」ことを表すのに、「理系人々【だけ違う】^{首振り}文系」のように、日本語ではBというだけで済むところ、¬Aも明示的に付加する。この場合でも、Aは話者やその所属するコミュニティが信じている当然のこと（宇宙飛行士は基本的には理系の人が応募するものだ）、Bはそれ以外である。この例では、¬AとBが等しくなる。

b. 動詞レベル1：想定される流れと異なる（スクリプトの流れ）

(3) (田中はもらった謝礼金を申告せず約)

五千二百万円^{top} PT3 税₁ 払う₃^{首振り} 隠す PT3

(20220329の51)

(元の日本語)(略) 五千二百万円を脱税した (ので捕まり、裁判になった)

一般に謝礼金をもらえば「納税する」義務のスクリプトがある。この共通認識を裏切って「脱税した」(隠した)という、規範的スクリプトからの逸脱を表すのに「A否定B」構文を使っている。ここでの否定表現は首振りのみである。「税を払う」と「隠す」は厳密には¬A=Bではない。Bには「忘れる」などの可能性がある。

日本語では「脱税」という一語に「払うべき税を払わない」という意味が入っているが、日本手話では、これを「税を払うべきなのに隠した」と説明的な表現になる。

c. 動詞レベル2：規定の流れと異なる（慣習の変化）

(4) (プラスチックストローを減らすため、企業には)

提供^{++頭上→下} [PT3左 無料 しない]^{首振り} きっちり 払う 変更する (略)

(元の日本語) 提供の有料化などが求められます

(20220401の22)

この例も(3)と同様に、日本語では「有料化」という1語の熟語(-化という変化を表す接尾辞がついた2形態素)で表されるものが、日本手話では、「従来は無料だったところから有料に変更」と説明的になっている。この「A否定B」構文は、変化を表すのに慣習的に用いられるようである。¬A=BでBへの変化を表す例であり、A

はみなが現在まで共有していたルールである。

d. 副詞レベル：副詞として用いられる対比構文「A否定B」

意味的に副詞で、慣用句的でもある。例えば「初めて」は「今までになかった」と同義で、日本手話では「今まで ない^{首振り} 初めて」と自然にイディオム的に合わせて使われる。これも $\neg A = B$ である。同じ内容の繰り返しになっているが、この3語を合わせて表現することは多い。

3.2 語用論レベルの談話効果

本構文を使う語用論的な動機付けは何だろうか。(d) の副詞レベルでは、慣用化していく分析するのが難しい。「A否定B」のBのみをいうのではなく、相手が想定するAと対比をすることが、日本手話のルールとして慣習化している。次に、同義語反復を行い強調するのに使える。例えば、日本語の「万全を」を訳すと「漏れる ない^{首振り} 十分・満たす しっかり」(漏れがないよう、満足いくよう、しっかり)で(20220406の14)3回同義語を反復しており、強調の効果がある。また、(b)や(c)で日本語では省略されている共通知識(前提)を言語化する傾向にあり、文脈を明示化し、カテゴリーを明確化する談話効果があるといえる。

4.まとめ

「A否定B」構文は、みなが想定するAと異なるBであるという有標の情報を伝える談話条件で使用される。この構文の例から、日本語と日本手話で談話の作り方が異なることがわかる。日本語では、1語で表される、当然やるべきことをやらなかつたこと(脱税、ずる休みなど)、変化(○○化)が、日本手話では、この構文で表されることが多く、当然の状態、以前の状態を明示化して否定する。

手話言語で否定表現は、非手指要素(首振り)のみで文全体の否定ができる言語と、手指要素が必要な言語に分けられるという Zeshan(2006)のタイポロジーによると、日本手話は、手指要素が文全体の否定には必要だという分析がされている(Morgan 2006)。文否定については更なる検討が必要だが、本研究によって、この対比構文「A否定B」の否定要素は、手指が伴うこともあるし、非手指要素(首振り)のみでも使えるため、こうした接続用法では、否定の非手指要素が手指要素を伴わず使えることが明らかとなった。

参考文献

- 林 亜紀子 (2021) 「ろう通訳における対比構文の選択—付加部の分析による考察—」、
国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科第 31 期生卒業発表会
資料、2021 年 12 月 19 日。
- 市田泰弘 (2005) 「文法化—日本手話の文法（7）助動詞、否定語、構文レベルの文
法化」、『月刊言語』2005 年 11 月号、大修館書店。
- 木村晴美・市田泰弘 (2000) 「ろう文化宣言—言語的少数者としてのろう者」、『ろ
う文化』、現代思想編集部 (編)、pp.8-22、東京、青土社. (『現代思想』1995
年 3 月号の再録)
- 松岡和美 (2015) 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』、東京、くろしお出版。
- Matsuoka, Kazumi, Uiko Yano, Hitomi Akahori, Norie Oka (2016), Notes on Modals
and Negation in Japanese Sign Language, *Studies in Languages Sciences: Journal of the Japanese Society for Language Sciences*, 15, 1-20. Kaitakusha,
Tokyo, Japan.
- Morgan, M. W. (2006). Interrogatives and Negatives in Japanese Sign Language.
In U. Zeshan (Ed.), *Interrogative and Negative Constructions in Sign
Languages* (pp. 91-127). Nijmegen: Ishara Press.
- Zeshan, Ulrike (2006). Negative and Interrogative Constructions in Sign
Languages: A Case Study in Sign Language Typology. In U. Zeshan (Ed.),
Interrogative and Negative Constructions in Sign Languages (pp. 28-68).
Nijmegen: Ishara Press.

感謝のやりとりに現れるアップシフト
—フッティングと同調シフトを中心に—

市原明日香
目白大学

<Abstract> The purpose of this research is to reveal the upshift in utterances of "gratitude" in Japanese language and to clarify its function. Upshifting in this study refers to the use of polite style (-desu/-masu) and benefactive verbs (-teitadaku, etc.) in conversations based on casual style among friends. As a result, upshifts are observed in 52% of utterances of gratitude. Beneficiaries carry out gratitude by changing footing (Goffman 1981) from friend to benefactor through upshifting. However, because upshifting removes the display of an equal relation as friends, a synchronized upshift is sometimes performed by the benefactor.

【キーワード】アップシフト、スピーチスタイルシフト、同調シフト、感謝表現

1. 研究背景、問題となる現象

語用論研究にみるスピーチスタイルシフトの事例では、普段はインフォーマルなスタイルで話している親しい関係の友人や家族が突然フォーマルなスタイルを使用した場合、over-polite で有標の形式となり懶懶無礼さや怒りや皮肉を伝えるとされている (Locher 2004 : 89-90 など)。しかし、日本語の場合はフォーマルなスタイルへの切り替えは必ずしもそのような意味を伝えるのではなく、同一の話し手と聞き手による同一会話内において切り替えられる現象はめずらしいことではない。そのような例に「感謝」の発話行為がある。「感謝」はポジティブ・ポライトネスの発話であり、相手と距離を置くことを意図しないにもかかわらず、日本語での親しい関係の感謝談話にフォーマルなスタイルである丁寧体（デス・マス）が使用されることがある。本発表は日本語の「感謝」の発話におけるアップシフトについて指摘し、そのはたらきを明らかにすることを目的とする。本研究では普通体基調の友人関係の会話において文末の丁寧体（デス・マス）や、目上に対する授受表現（ティタダク・テクダサル等）を「丁寧体」と呼び、本発表のアップシフトとは、普通体から丁寧体に一時的に切り替えられることとする。

2. 先行研究

2.1 アップシフトの機能

日本語のスピーチスタイルシフトの研究では丁寧体基調の会話から普通体へのシフト、すなわちダウンシフトを分析したものが多数を占めており、アップシフトについては数は少ない。アップシフトの機能について、談話分析によって量的に明らかにされてきたのは、(1) 話題の移行などの「談話上の機能」、(2) 心的距離を置くことの「対人調整機能」である（生田・井出 1983, 三牧 2002, 宇佐美 1995 など）。会話のやりとりの分析からは、(3) 指導的立場などの一時的なアイデンティティを指標する機能(Cook 2008a& 2008b)、(4) 物語の枠組みを提示し本筋を際立たせること(西阪 2007)、(5) 相手の丁寧体への同調、丁寧度の低さの補償(嶋原 2014)、(6) 会話相手から適切な反応を丁寧に引き出す(千々岩 2016) といった機能が指摘されてきた。これらは初対面会話のデータをもとにしているため普通体基調の会話ではないことや、会話の内容や負担の大小は統制されていないこと、特定の発話行為に焦点を当てたものではないことから、親しい関係に見られる感謝のアップシフトについては応用できない。

2.2 特定の発話行為におけるアップシフト

特定の発話行為におけるアップシフトを分析した研究の数は限られているが、「冗談」「皮肉」「指示(Directives)」「不満」がある。Beuckmann& Mori(2018)は、「依頼」「勧誘」「謝罪」という特定の発話行為におけるアップシフトについて量的に明らかにし、これらの特定の発話行為は負担が重いためにスピーチレベルも高くなるとした。この結果から、恩恵の与え手にとって負担の重い、重大な「感謝」にも親しい関係でアップシフトが起こると考えられるが、これまでに分析されていない。

2.3 同調シフト

同調シフトについてこれまで明らかになっている点は「質問一答え」「自己開示一反応」などの隣接ペアで同調シフトが起こりやすいこと（申 2007）であるが、同調シフトの機能や、「感謝-感謝受け」の同調シフトについては明らかになっていない。

以上のことから本研究ではリサーチクエスチョンとして次の二点に焦点を当てる。
RQ1：友人同士の親しい関係において感謝のやりとりにアップシフトがみられるか
RQ2：友人同士の親しい関係の感謝のアップシフトにはどのような対人調整機能があるか

3. データおよび分析方法

3.1 手順

2016年5月から12月にかけて東京の大学に所属する日本語母語話者の学生50人、25組のロールプレイ会話を録音録画し文字化してデータとした。人間関係を統制するために調査協力者を募集するに際し、実際に友人関係のペアであること、同性どうしだることを条件とした。また、ロールプレイとはいえ可能な限り自然な会話をするよう工夫をした。感謝表現の調査であることはふせ、相手のロールカードは見ず、ロールカードに記載されている内容以外については自由に設定してよしとし、会話終了のタイミングも調査者は統制せずとした。

分析の手順は、文字化したデータからアップシフトが行われたターンを抽出し、何組にアップシフトが出現したかを数えた。次に、アップシフトが見られるターンごとに、前後の文脈から感謝の発話かどうか確定し、何についての感謝かを精査した。

3.2 ロールプレイの内容

25組のペアに1シーンずつロールカードを渡してロールプレイを行ってもらい、合計3シーンの会話を収録した。シーン1とシーン3は市原(2020)と同様のもので、シーン2は本発表の分析に追加した。

(1) シーン1では、ロールAには「昨日Bの先輩と会って会社の話を聞くことができたこと」及び「長期休みの予定を話す」こと、ロールBには「長期休みの予定を話す」ことを指示した。シーン1ではAから人の紹介を受けたことに対する感謝のことばが予想される。(2) シーン2では、ロールAには「大きな箱に入った値段が高いお菓子をあげる」こと、ロールBには「おみやげをもらうこと、用事があり、その場を開けずに立ち去ることを指示した。シーン2ではBからお土産物に対する感謝の言葉があることが予想される。(3) シーン3では、ロールAには「教室でBと偶然会い、新学期の授業の内容を話す」こと、ロールBには「おみやげをおいしく食べたこと」「講義要項を見せてもらうこと」を指示した。シーン3では、Bからもらった先日のお土産物に対する感謝や講義要項を見せてもらうことへの感謝の言葉が予想される。

4. 結果

4.1 友人同士の親しい関係において感謝のやりとりにアップシフトがみられるか

表1は、「会話開始から終了までのスピーチレベルシフトの型と組数」である。組ごとに会話の開始から終了までのシフトについて敬体を「+」、普通体を「0」で示す。

表1 会話開始から終了までのスピーチスタイルシフトの型と組数

* 0: 普通体、+ : 敬体 ⇒ : シフトの順序 ⇄ ゆれ

シフトの型*	出現組数	出現率(%)
アップシフトあり 0 ⇒ + ⇒ 0	13	52%
普通体のまま − ⇒ −	8	32%
丁寧体のまま + ⇒ +	2	8%
丁寧体ベースでゆれ + ⇄	2	8%
ダウンシフト + ⇒ −	0	0%
合計	25	100%

3シーンの会話において 25組中 13組にアップシフトがみられた ($0 \Rightarrow + \Rightarrow 0$)。ここで言うアップシフトとは、普通体基調の会話において丁寧体を 1ターンから 3ターンのみ使用した後に普通体に戻って会話を終える型のことであり、52%と過半数を超えた。25組のうち 8組は丁寧体使用が一切なく普通体のままであった(表中の記号の普通体 $- \Rightarrow -$)。2組は丁寧体使用のままであった ($+ \Rightarrow +$)。他に、丁寧体と普通体が混合し、アップシフトとは言えない「ゆれ」(\Leftrightarrow) が 2組あった。丁寧体から普通体へシフトして会話を終了させるダウンシフト型 ($0 \Rightarrow +$) はみられなかった。なお、「あざーっす」「いい人っすね」はネオ敬語とも言われるが敬語として分類するには見解が分かれることから除外した。

次に、アップシフトが生起した発話内容を調査した。表 2 にアップシフトが生起したターンの発話行為を示す。

表 2 アップシフトが生起したターンの発話行為

感謝	物の手渡し	感謝受け	はげまし	全ターン数
13	8	2	1	24
54%	33%	8%	4%	100%

表 1 の 13組のうち、アップシフトのあるターンは合計で 24ターンあった(表 2)。前後の文脈からシフトがみられた発話行為の種類を分類すると、感謝は 13ターンあった。感謝以外の発話行為には「食べてください」などと物の手渡しを示す発話が 8ターン、相手の感謝を受けて「よかったです」など「感謝受け」の同調シフトが 2ターン、「がんばりましょう」の「はげまし」が各 1ターンで、感謝以外の合計は 11ターンであった。

なお、「感謝ストラテジー」とは、「ありがとう」等の定型表現だけでなく、市原(2020)で感謝ストラテジーとして分類されている「利益内容の明示」「ほめ」「感謝の気持ちの表明」等の感謝を示していることが明白に見てとれる発話を指す。

さらに、感謝の発話におけるアップシフトの 13ターンが、何について感謝している

のか、感謝の対象別に分類した（表3）。

表3 感謝の対象別にみるアップシフト数

感謝の対象	感謝の発話ターン数	アップシフト生起数
人を紹介してもらう	58	8
おみやげ物をもらう	117	5
講義要項を見せてもらう	9	0
はげましの言葉	2	0
計画に対するほめ言葉	1	0
隣の席にすわらせてもらう	1	0
合計	188	13

アップシフトが現れた感謝対象はそのすべてが「人を紹介してもらう」と「おみやげ物をもらう」ことであった。「講義要項を見せてもらう」ことへの感謝は9ターンあったがアップシフトはみられなかった。他に、「はげましの言葉」への感謝と「計画に対するほめ言葉」への感謝、「隣の席に座らせてもらう」ことへの感謝の発話があったが、いずれもアップシフトはみられず、このことから、その場の行動で物を見せてもらうような比較的軽い恩恵に関してはアップシフトがみられず、人の紹介などの以前に受けた恩恵や複数のターンにわたって感謝が行われるような恩恵の度合いの重い対象についてアップシフトがみられると考えられる。

複数のターンにわたって感謝が行われ、そこにアップシフトが含まれる典型的なパターンとして会話例1を挙げる。JN46は12行目で「ありがとう」と言った後で、14行目で「ありがとうございます」とアップシフトし、16行目で「ありがとう」、18行目で「みんなで食べるわ家族で」と普通体にもどる。

[会話例1]

- 11 JN45：で、あそだそだ、とりあえず、あのまあお菓子で、まあ、ぶっちゃけ東京でも買えるんだけど、あの、萩の月っていうの持ってきたから
 12 JN46：あ、ありがとう 【感謝】
 13 JN45：一応ほらほらお世話になってるんで
 14 JN46：あ、ほんとに？ありがとうございます【います】 【感謝】<お辞儀>
 15 JN45：
 16 JN46：ありがとう 【感謝】
 17 JN45：いやいやいや
 18 JN46：みんなで食べるわ、家族で 【利益内容の明示】
 19 JN45：あーよろしく、うんうん
 20 JN46：めっちゃしゃべりたいんだけどさ：、履修登録で変更したいのがあって：

同調シフトの例は会話例2である。5行目でJN23が「うん ほんとありがとう」と普通体で感謝し、JN29も「だいじよぶだいじよぶ よかったよかった」と普通体で応

じるが、7行目でJN23が「ほんとにお話し聞けんのありがたいから（うん） ほんと
にうれしい ほんと ありがとうございました」と感謝表明がアップシフトされると、
JN29も「だいじょぶです」とアップシフトで応じる。直後の9行目では東京のくだけ
た口語の文末表現「さ」や「じゃん」からも分かるように普通体でカジュアルなスタ
イルに戻される。

[会話例2]

- | | |
|---------|--|
| 01 JN23 | おはよ： |
| 02 JN29 | おはよ：, ひさしぶり |
| 03 JN23 | ひさしぶり なんか <u>さ</u> ：, このまえちょうど <u>さ</u> 佐藤さんから連絡い
た
だいてさ 今度一回その就活の相談で会うことになったから <u>さ</u> ： |
| 04 JN29 | よかった： |
| 05 JN23 | うん ほんと <u>ありがとう</u> 【感謝】 |
| 06 JN29 | だいじょぶだいじょぶ よかったよかった |
| 07 JN23 | ほんとにお話し聞けんのありがたいから（うん） ほんとにうれしい
ほんと <u>ありがとうございました</u> 【利益内容+気持ち+感謝】 |
| 08 JN29 | だいじょぶ <u>です</u> |
| 09 JN23 | 今度もうテストで <u>さ</u> , それ終わったら夏休み <u>じゃん</u> |
| 10 JN29 | ほんと嬉しいな夏休み |
| 11 JN23 | なにする：？ |

以上のように、アップシフトが出現する会話では、普通体で開始された会話の流れ
で最初の感謝の発話は普通体で行われるが、2度、3度と感謝表明のターンが続くうち
にアップシフトし、感謝の談話が終了する発話やその直前で普通体に戻されて会話を
終了する展開が典型的にみられた。

4.2 友人同士の親しい関係の感謝のアップシフトにはどのような対人調整機能があるか

感謝のやりとりにみられるアップシフトの機能について考察するために、まず感謝
という発話行為について振り返る。Ohashi(2013)は Goffman (1967) のフェイスワー
クを援用し、「感謝一否定（ありがとうーいえいえ）」という発話連鎖から感謝はシ
ーソーのように相互に恩恵の重さを調整し、貸し借りの不均衡を軽減する発話行為である
とする。言い換えれば恩恵の受け手が感謝のことばによって借りを埋め合わせ、バ
ランスをとる発話行為である（図1）。本研究の結果から示唆されたことは、日本語に
おいては丁寧体へのアップシフトも重い借りを返す方略として有効なのではないかと
いうことである。

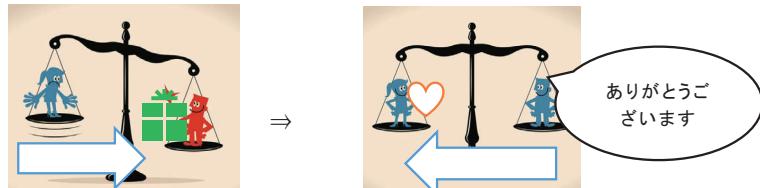


図1 貸し借りの不均衡を軽減する感謝

その一方で、恩恵を与える側、つまり感謝される側が貸しのある上の立場に立つことにもなり、感謝する側からの丁寧体へのアップシフトによって友人同士の同等関係も同時にバランスを失うことになる。この同等関係のバランスの調整のために同調シフトが機能していると考えられる（図2）。すなわち、感謝される側が同調シフトを行うことによって同等関係が呈示され、感謝談話が終了する直前または直後に普通体に戻すことによって、親しい友人であることが再び明示され強調される。

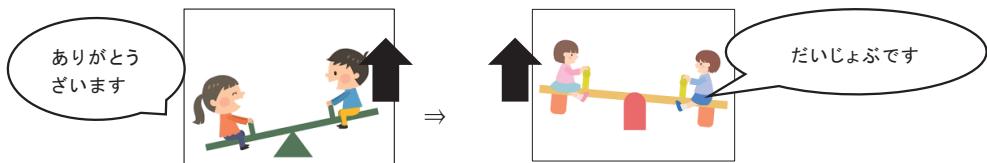


図2 友人同士の同等関係を調整する同調シフト

もう一度、会話例2を見ると、3行目から始まった感謝のやり取りは7行目のアップシフトによって友人同士の同等関係のバランスを失うが、相手の同調のアップシフト（8行目）によって同等関係が調整され保たれると言える。感謝のやりとりが終了すると新たな話題では「テストでさ」「夏休みじゃん」とカジュアルなスタイルで親しさが示される。

このような感謝のやりとりにおけるアップシフトは Goffman (1981) が述べたフッティングの変化として捉えることができると考える。フッティングとは他者に投映される自己のあり方で、他者が自己にあてはめる認知枠組みをフッティングの変化によって操作することを他者への自己呈示という。フッティングの変化の特徴として「コードの変化を伴う」(Goffman 1981: 151) ことがあり、本研究のアップシフトも日常的な友人関係ではなく感謝する者・感謝される者としてのフッティングを示すものであると考えられる。同等関係のフッティングから目上に対するような丁寧なフッティングに変化する自己呈示は、会話例1ではお辞儀（14行目）の姿勢がみられたことからも明白である。

5. 結論

ロールプレイによる限られたデータではあるが、友人同士の感謝場面の会話においてアップシフトの出現率は54%と過半数を超える、特殊な事例ではないことが明らかになった。特に複数のターンにわたって感謝を行うような比較的重い恩恵に対してアップシフトがみられたことから、アップシフトによって感謝の大きさを示し、感謝の発話行為を遂行することができると考えられる。また、アップシフトによってコードを変え、フッティングの変化、すなわち、感謝する/される者として自己呈示することができる。感謝される側が同調シフトを行うことや、会話終了までに普通体に戻すことで、友人同士の同等関係と親密さを改めて明示しあうことが可能である。このようにアップシフトは感謝という発話行為の遂行と併せて感謝談話における対人関係の調整に有効に機能していることが推察される。

参照文献

- Beuckmann, F. and Mori, K. 2018. "Analysis of Speech Level in Japanese: Power and Rank of Imposition on Request, Invitation, and Apology between Close Participants" *The Japanese Journal of Language Society*, 21(1), 255-238.
- 千々岩宏晃.2016.「スピーチスタイルアップシフトの会話分析を用いた研究：日本語の雑談における反応要求の技法」『日本語・日本文化研究』26,115-126.
- Cook, H. M. 2008a. *Socializing Identities through Speech Style: Learners of Japanese as a Foreign Language*.: Multilingual Matters.
- Cook, H. M. 2008b. Style Shifts in Japanese Academic Consultation. In J. Kimberly & T. Ono (eds.), *Style Shifting in Japanese*. 9-38. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Goffman, E. 1981. *Forms of Talk*. : University of Pennsylvania Press
- 市原明日香.2020.「後日再会した場面での再感謝の機能—談話展開と感謝ストラテジーの日中対照分析から—」日本語用論学会第22回大会発表論文集(15) 1-8
- 生田少子・井出祥子.1983.「社会言語学における談話研究」『月刊言語』, 12(12), 77-84.: 大修館書店
- Locher, M.A.2004. *Power and Politeness in Action: Disagreements in Oral Communication*,89-90. Walter de Gruyter.
- 三牧陽子.2002.「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における『社会的規範』と『個人のストラテジー』を中心にして」『社会言語科学』, 5 (1), 56-74.
- 西阪仰.2007.「行為連鎖の中の敬体と常体」『明治学院大学大学院社会学研究科紀要』31, 55-78.
- Ohashi, Jun. (2013). *Thanking and Politeness in Japanese Balancing Acts in Interaction*, London: Palgrave Macmillan.
- 嶋原耕一.2014.「母語場面及び接触場面の同等初対面会話におけるアップシフトについて」『社会言語科学』(16) 2. 66-74
- 申媛善.2007.「相互行為からみたスピーチスタイルシフト—聞き手による『同調』に着目して—」『筑波応用言語学研究』14, 59-72.
- 高宮優美.2017.「普通体を基調とした自然談話に現れる丁寧体について—不満を表明する際のアップシフトに着目して—」『ことば』38, 63-82.
- 宇佐美まゆみ.1995.「談話レベルから見た敬語使用: スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』662.昭和女子大学近代文化研究所: 27-42.

口語英語に見られる *for sure* の分析 —位置と機能に着目して—*

岩井 恵利奈

信州大学・慶應義塾大学大学院

erinaiwai72823@gmail.com

<Abstract> This study aims to explore the discourse-functional difference between peripheral pragmatic markers (initial and final positions of an utterance), with a focus on *for sure* in present-day American English. While the marker *for sure* plays the semantic role of epistemic modality, it serves to “reinforce what has already been mentioned” in the right periphery and “signals topic continuity and anticipates upcoming related information” in the left periphery. Moreover, in combination with *but*, *for sure* has constructional meanings, such as acknowledgement, concession, face-saving, and anticipation of the main line of communication. The findings reconsider usages of linguistic items on peripheries.

【キーワード】：語用論標識・周辺部・認識的モダリティ・談話機能・*for sure*

1. はじめに

発話内の位置に応じた副詞の機能の違いは、興味深い語用論の研究課題である。本稿では、認識的モダリティを表す英語の *for sure* に着目し、その位置による機能の違いを明らかにする。現代英語において、*for sure* には (1a) のように節（命題）の一部を修飾する下接詞用法がある。(1b, c) では、*for sure* はそれぞれ発話頭と発話末で語用論標識 (cf. Brinton 2017) として使用されており、話者の命題に対する態度（確信）を表している。(1d) の *for sure* は、「もちろん」を意味する単独用法の応答詞である。

- (1) a. I didn't know if I would *for sure* make it out. (COCA: SPOK 2019)
b. *For sure*, there has been support for building these temporary shelters... (COCA: SPOK 2018)
c. But eventually, yeah, they will, *for sure*. (COCA: SPOK 2013)
d. Velshi: Do you think you got a good mentor?
Gardenhour: *For sure*. (COCA: SPOK 2005)

本稿では、発話頭と発話末（周辺部）で用いられる語用論標識 *for sure* を分析対象とする。本稿の目的は、*for sure* が認識性を表すと同時に、生起位置によって異なる談話機能を担うことを示すことである。さらに、*but* と共に構文的使用にも着目する。最後に、分析結果を踏まえ、周辺部の言語形式の使用について再検討する。

2. 背景

周辺部 (periphery) は、しばしば発話のはじめと終わりの位置を指すが、その定義は分野や研究者によって一様ではない。発話を含む「談話ユニット」の最初あるいは最後の位置としてより広義に捉えられることもある (cf. Lewis 2021: 353; トラウゴット 2017: 86)。周辺部では、話し手が命題に対する態度、談話構成、聞き手に対する配慮を示すなど、様々な「語用論的調節」がなされる (澤田・小野寺・東泉 2017; cf. Ohori 1998: 194)。(2) の発話では、概念的核 (命題、発話の中心的メッセージ) の左周辺部 (left periphery; LP) に *well* と *you know*、右周辺部 (right periphery; RP) に *right* という 3 つの語用論標識が用いられている。

- (2) *Well, you know, there's a civil war in the party, right?* (COCA: SPOK 2016)
 LP | 概念的核 | RP

Beeching and Detges (2014) は、左と右の周辺部に現れる言語形式の主要な機能を仮説として提示した (表 1)。

表 1 左と右の周辺部の言語形式の使用についての仮説 (Beeching and Detges 2014: 11, Table 1.4)

LP	RP
Dialogual	Dialogic
Turn-taking/attention-getting	Turn-yielding/end-making
Link to previous discourse	Anticipation of forthcoming discourse
Response-making	Response-inviting
Focalising, topicalising, framing	Modalising
Subjective	Intersubjective

この仮説は、各位置における機能が非相称的 (asymmetrical) であることを示すものである。しかし、周辺部研究の進展に伴い、この仮説は単なる傾向であると考えられるようになっている (仮説を支持しない実証研究として、例えば Traugott (2014))。

For sure は、語用論標識として周辺部で用いられる。関連表現である *surely* については、周辺部で「確認を求める」機能が明らかにされている一方で (e.g., Aijmer 2002; Biber and Finegan 1988; Greenbaum 1969; Traugott 2014)、*for sure* の実証的研究はほとんどない。それは、非文法的な語の組み合わせが定型化して 1 つの標識となった口語表現である。^{注1}認識性を表すことから (少なくとも) 話し手指向的で主観的な表現であるが (cf. Biber et al. 1999: 854; Quirk et al. 1985: 620)、その談話機能 (テクスト的・相互作用的機能) の詳細は明らかにされていない。本稿では、現代英語コーパスを使用して *for sure* の談話機能を明らかにし (4 節)、その結果と表 1 の仮説を踏まえ、周辺部における言語使用について再検討する (5 節)。

3. データ

データは、*The Corpus of Contemporary American English 1990–2019* (COCA; Davies 2008–) から収集した。COCA は 1990 年から 2019 年までの現代アメリカ英語資料（約 10 億語）を収録する大規模コーパスである。その規模やカバーする年代に加え、*for sure* がアメリカ英語でよく見られる理由から COCA をデータソースとして選定した。

収録ジャンルの中でも「SPOKEN」に限定し、english-corpora.org のインタフェースを用いて事例を抽出した。具体的な分析対象シーケンスは以下である（最終アクセス：2022/08/24）。

- (A) : FOR SURE, # FOR SURE, , FOR SURE, . FOR SURE, , FOR SURE.
(B) BUT FOR SURE, AND FOR SURE, NOW FOR SURE, ALMOST FOR SURE, SO FOR SURE,

抽出後、対象外の事例（周辺部における語用論標識用法以外の事例）を手作業で除外した。なお、(B) のシーケンスは *for sure* が他の標識とカンマを挟まずに共起するシーケンスの中で事例数が上位のものであるが、これらも対象に含めることにした。合計で 313 例を収集した。^{注2}

4. 周辺部における *fore sure* の談話機能

本節では、周辺部における *for sure* の談話機能を分析する。4.1 節では右周辺部の *for sure* を、4.2 節では左周辺部の *for sure* を観察する。その後、4.3 節では両周辺部の *for sure* が *but* と共に起する場合について見ていく。

4.1 右周辺部 (RP) *for sure*—強化

右周辺部の *for sure*（以下 RP *for sure*）の主要な談話機能として、先行発話を「強化」(reinforce) する働きが見られた。例えば (3) (4) である。

- (3) 01 Jenna: And they're changing their life but also their kids and their communities.
02 Hoda: Yes.
03 Al: Such a ripple effect.
04 Jenna: It is, *for sure*. (COCA: SPOK 2018)
- (4) 01 Jackson: I liked the way Lady Diana would make her kids wait in line, you know,
02 at amusement parks and things. Like everybody, I thought that was so beautiful.
03 She was good, you know.
04 Rabbi: You felt an immediate connection with her?
05 Jackson: Yeah. I loved her very much. Yeah, she was my type.
06 She was my type, *for sure*. (COCA: SPOK 2009)

(3) では、「彼らは自分の人生だけではなく、子供たちや社会も変えているのです」という Jenna

の発言（01 行目）に対し、AI が *Such a ripple effect*（波及効果ですね）と返す。04 行目の Jenna の *It is, for sure* は *It is [such a ripple effect], for sure* の括弧部分が省略された発話であり、*for sure* は AI の発言内容を強化している。（4）では、Jackson がダイアナ妃に対する好意的な発言をしたのに対し（01-03 行目）、Rabbi が「ダイアナ妃にすぐに親近感を覚えましたか？」と尋ねている。Jackson の返答では、*she was my type* が繰り返されており、*for sure* は 2 回目に付隨し内容を強化している。

（5）では、王室が専用ツイッターアカウントを持つことについて話されている。

- (5) 01 Guilfoyle: Well, it's official, the royals have their own Twitter account.
02 Perino: Oh!
03 Guilfoyle: I knew you'd be excited about that. Now you won't be able to
04 put your smart phones down, *for sure*. (COCA: SPOK 2015)

Perino が *Oh!* と興奮を表すと、Guilfoyle は Perino が興奮するとわかっていたと述べ、「これでスマートフォンが手放せなくなるでしょう」と推測する。ここでは、*you +助動詞* という統語形式が繰り返されている点も注目に値する。*For sure* は 2 つ目の発話に付隨し、Perino の興奮状態についての Guilfoyle の確信を強めている。（6）は話題終盤のやり取りである。

- (6) 01 Lisa: So instead of being kind of under the surface, we're just actually dealing with it.
02 Dylan: Right. And you're open with it.
03 Steve: Yeah.
04 Dylan: Well, thanks so much for sharing your story. It's an important one, *for sure*.
(COCA: SPOK 2019)

Dylan（04 行目）は Lisa に話の礼を述べ、その話を重要だと評価する。*For sure* は評価発話に付隨し、Dylan の感謝を強め、話題の終結をマークしている。*It's an important one* では直前の発話の *your story* が代名詞化されており、この特徴も強化機能に貢献している。

このように、RP*for sure* には先行発話を強化する働きがある。それが付隨するメッセージは比較的情報量が少なく、省略や繰り返し、代名詞化などの特徴が観察された。

4.2 左周辺部（LP）*for sure*——話題継続を示す・関連情報の導入

一方、左周辺部の *for sure*（以下 LP*for sure*）には、「話題継続（topic continuity）を示し、関連情報を導入する」働きが見られた。例えば（7）である。

- (7) 01 Vinita: He really was the predecessor to Instagram and all of the other things
02 that we're seeing now.
03 James: *For sure*, I mean, Warhol elevated photography to a fine art back in the sixties,
04 the seventies, and the eighties, way before we think of it in the context

05 that we know today as fine art. (COCA: SPOK 2013)

Vinita が、ウォーホル（01 行目 *He* は 03 行目 *Warhol* のこと）はインスタグラムや今日目にするもの全ての前身となった人だったと述べる。それに対し James は、「確かに (*for sure*)、ウォーホルは 60 年代、70 年代、80 年代に写真をファインアートに昇華させ、それは今日私たちがファインアートとして知るコンテクストで写真を考えるずっと前のことだった」と詳細な情報を加えている。この *for sure* には、「確かに（それについては）」と話題継続を示し、後から関連する新情報が述べられていくことを知らせる機能がある。(8) も同様の例である。

- (8) 01 Scally: I think that there's a human story here, where the city is also, perhaps,
 02 trying to affect attitudes and to help people see these individuals
 03 experiencing homelessness less as a nuisance and more as a neighbor.
 04 Siegler: *For sure*, there has been support for building these temporary shelters at public
 05 meetings, too, even in some of LA's more tony neighborhoods. (COCA: SPOK 2018)

「市は、市民のホームレスの人々への見方を変えるようとしている」という旨の Scally の発言に対し、Siegler が「確かに (*for sure*)、ロサンゼルスの高級住宅街でさえも、こうした一時的なシェルターの建設を支持していますね」と同一話題への関連情報を導入している。

このように、LP *for sure* は関連情報を加え談話の進展を促す。RP *for sure* の場合と比べ、より長く情報量の多いメッセージに付随する傾向がある。

4.3 *But* と共に起する *for sure* の構文と結びついた意味機能

4.3.3 RP *for sure + but*—理解呈示、フェイス救済

次に、*but* と共に起する *for sure* の機能を分析する。まず、RP *for sure + but* における *for sure* には、「理解呈示」(acknowledgement) と「フェイス救済」(Brown and Levinson 1987) の機能が見られた。例えば (9) である。

- (9) 01 Ferguson: ... But the president has to be a little bit more blunt about this and explain exactly
 02 what his goal is, because it seems pretty generic at this point and minimal at best.
 03 Acosta: Marc, you buy that?
 04 Marc: Well, that it's vague, *for sure*. But I don't think that the vagueness means that the
 05 president can't do much. it might mean that... ((talk continues)) (COCA: SPOK 2015)

大統領は一般的で最小限の説明しかしていないという Ferguson の指摘について、Acosta が Marc に「どう思いますか？」と尋ねている。Marc は初め *Well, that it's vague, for sure* と Ferguson の発言に理解呈示をするが、主論点は *but* 以降の逆説的主張である。^{注3} その主張を述べることで侵害され

る可能性のある Ferguson のフェイス救済のために *that it's vague, for sure* が前置きされている。Fischer (2010) は「ターン冒頭の語用論標識+*but* 節」の構造における語用論標識にはフェイス侵害を緩和する意味があると指摘するが、この*for sure* にも同様の役割があるといえる。

4.3.4 LP*for sure...but*—譲歩・理解呈示、メインラインの予測

続いて、LP*for sure* の *but* との共起例を見る。(10) では、漫然運転の原因となる運転中のテキスティング（携帯電話などでメッセージをすること）を撲滅するために運転中の全電子機器の使用を禁止するという Deborah の提言について話されている。

- (10) 01 Hari: If the purpose is to decrease the amount of distracted driving,
02 couldn't the case be made that, when I change music stations on my car radio,
03 when I eat, when I talk to another passenger, I'm equally as distracted?
04 Deborah: Well, *for sure*, there are a lot of distractions that are facing today's drivers.
05 But one of the things that we know is that all distractions are not equal.
06 It's the distractions that... ((talk continues)) (COCA: SPOK 2011)

漫然運転を減らすことが目的なら、ラジオ局を変える時、食事をする時、同乗者と話す時も同様に漫然としていることにならないかという Hari の主張に、Deborah は「まあ、確かに、(*for sure*)、現代のドライバーは様々なことに気を取られていますね」と理解呈示する。しかし *but* 以降で、すべての注意散漫が同じではないと反論していく。*For sure* は発話およびターンの冒頭に置かれることで、譲歩（「確かに…だが」）を表し、後から反論が続くことを予測している。

(11) は、病院での待ち時間についての会話である。

- (11) 01 Dylan: number one when you go to the doctor's office the most frustrating thing
02 as a patient is the long wait. How do you kind of get through that?
03 Thomas: Sure. So *for sure*, you want to make sure you show up on time. And if it's a first
04 appointment, you're getting there twenty minutes early to fill all of your paperwork.
05 But I like to recommend is that people ask the check-in person, is the doctor
06 running behind? That way you don't have a false expectation about how long
07 you're going to be there. (COCA: SPOK 2017)

腹立たしい病院での長い待ち時間にどう対処するかと Dylan が質問する。Thomas はすぐには返答せず、*Sure. So for sure,...*（その通り。本当にその通りで…）と理解呈示（および共感）をする。その後、*but* (05 行目) 以降で、本題である質問への返答を行なっていく。*For sure...but* は、本題（質問への返答、コミュニケーションのメインライン）を遅らせ聞き手の注意を引くとともに、その本題を予測し、それに至るまでの発言権（floor）の保持を可能にしている。

4.4まとめ

分析結果は(12)のようにまとめられる。しかし、構文と結びついた意味機能については、どの意味機能がより強く現れているかという程度問題の側面もあるように思われる(例えば、面子保持(framework)はRP・LPで共通する特徴かもしれない)。^{注4}

(12) LP for sure + 概念的核 + RP for sure

話題継続を示す・
関連情報の導入

強化

(構文と結びついた意味機能)

LP for sure...but

譲歩・理解呈示、
メインラインの予測

RP for sure + but

理解呈示、フェイス救済

5. 考察

最後に、分析結果と2節で提示した周辺部についての仮説(表1)を踏まえ、周辺部における言語使用について再検討してみたい。特に、RP表現の機能とされる dialogic(2者の視点的)と anticipation of forthcoming discourse(後続の談話を予測する)の2機能に着目する。これらの機能はLP for sureにも観察された。LP for sure...butにおいてfor sureは譲歩の意味、すなわち対照的な異なる視点(2者の視点的意味)を示した。さらに、コミュニケーションのメインライン(逆説的主論点や質問への返答)を予測する機能があった。この結果は、表1の仮説がやはり傾向にとどまる事を示唆するものであるが、興味深い点は、for sureのこの2機能がbutとの構文において観察された点である。この事実は、単純に発話の前後としての周辺部のみを機械的に考察するだけでは語用論標識の談話機能を捉えきれないことを示唆している。より広域的視点から、構造およびトーク(talk in interaction)の中で対象となる標識の機能や使用パターンを見極める必要がある。^{注5}

6. おわりに

本稿では、for sureの周辺部(発話頭と発話末)における談話機能の違いを明らかにした。For sureは認識的モダリティを表すと同時に、発話末では先出発話を「強化」し、発話頭では「話題継続を示し、関連情報を導入する」談話機能があることを示した。さらに、butと共に起るfor sureの構文と結びついた意味機能(理解呈示、譲歩、フェイス救済、メインラインの予測)についても考察した。最後に、分析結果を踏まえ、周辺部の言語形式の使用について再検討し、発話の前後の位置のみならず、構造(他表現との共起関係など)も視野に入れ語用論標識の機能を分析する必要性を論じた。

* 本稿の執筆に至るまでに貴重なコメントと建設的なご指摘を下さった3名の査読者の先生方と田中廣明先生、深田智先生、山内昇先生に厚く御礼申し上げます。また、貴重な研究資料をご共有頂きました柴崎礼士郎先生に心より感謝申し上げます。そして研究を進める過程でご指導を頂きました大堀壽夫先生に厚く御礼申し上げます。

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2123 の支援を受けたものです。

注

- 1 だが、例えば *for damned sure* のような内部修飾の例も見られる。こうした事例については今後検討したい。事例をご紹介頂きました山内昇先生に感謝申し上げます。
- 2 発表時のスライドでは合計で 579 例を収集したと提示したが、この中には (1d) に挙げたような応答詞の事例が含まれてしまっていた。ここにお詫び申し上げる。
- 3 逆説的主張がなされいくことは、ターン冒頭の *well* にも現れている。*well* は非選好応答(dispreferred response) (cf. Schegloff 2007: Chapter 5) を予示する。
- 4 一方で、やはり LP または RP で使用することにはそれ相応の理由があるようにも思われる。この点については深田智先生に大変貴重なコメントを頂いた。感謝申し上げます。
- 5 *For sure + but / for sure...but* と同様の情報連鎖が他表現・他言語でも観察されている。例えば、英語の *no doubt + but* (Simon-Vandenbergen 2007: 16)、ドイツ語の *zwar...aber* ('true...but') (Günthner 2016)、日本語の「確かに…しかし（でも, etc.）」（柴崎 2021）などである。こうした先行研究との関連については今後検討したい。

参考文献

- Aijmer, K. 2002. "Modal Adverbs of Certainty and Uncertainty in English-Swedish Perspective." In Hasselgard, H., S. Johansson, B. Behrens and C. Fabricius-Hansen (eds.) *Information Structure in a Cross-Linguistic Perspective*. Amsterdam: Rodopi, 97–112.
- Beeching, K. and U. Detges (eds.). 2014. *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*. Leiden/Boston: Brill.
- Biber, D. and E. Finegan. 1988. "Adverbial Stance Types in English." *Discourse Processes* 11, 1–34.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Brinton, L. J. 2017. *The Evolution of Pragmatic Markers in English: Pathways of Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Davies, M. 2008–. *The Corpus of Contemporary American English* (COCA). Retrieved August 24, 2022, from <https://www.english-corpora.org/coca/>
- Fischer, K. 2010. "Beyond the Sentence: Constructions, Frames, and Spoken Interaction." *Constructions and Frames* 2(2), 185–207.
- Greenbaum, S. 1969. *Studies in English Adverbial Usage*. London: Arnold.
- Günthner, S. 2016. "Concessive Patterns in Interaction: Uses of Zwar...Aber ('True...But')-Constructions in Everyday Spoken German." *Language Sciences* 58, 144–162.
- Lewis, D. M. 2021. "Pragmatic Markers at the Periphery and Discourse Prominence: The Case of English *Of Course*." In Olmen, D. Van and J. Šinkūnienė (eds.) *Pragmatic Markers and Peripheries*, 351–381. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Ohori, T. 1998. "Close to the Edge: A Commentary on Horie's Paper." In Ohori, T. (ed.) *Studies in Japanese Grammaticalization: Cognitive and Discourse Perspectives*, 193–197. Tokyo: Kuroso Publishers.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 澤田淳・小野寺典子・東泉裕子. 2017. 「周辺部研究の基礎知識」、小野寺典子 (編)『発話のはじめと終わりー語用論的調節のなされる場所』、3–51、東京：ひつじ書房。
- Schegloff, Emanuel A. 2007. *Sequence Organization in Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 柴崎礼士郎. 2021. 「『たしかに』の談話機能と定型性について」 Paper presented at *Online International Symposium "Formulaicity in Interactional Discourse,"* March 2021.
- Simon-Vandenbergen, Anne-Marie. 2007. "No Doubt and Related Expressions." In Hannay, M. and G. J. Steen (eds.) *Structural-Functional Studies in English Grammar*, 9–34. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, E. C. 2014. "On the Function of the Epistemic Adverbs *Surely* and *No Doubt*." In Beeching, K. and U. Detges (eds.) *Discourse Functions at the Left and Right Periphery: Crosslinguistic Investigations of Language Use and Language Change*, 72–91. Leiden: Brill.
- トラウゴット、エリザベス・クロス／柴崎礼士郎 (訳). 2017. 「『節周辺』と同領域に生起する語用論標識の構文的考察」、小野寺典子 (編)『発話のはじめと終わりー語用論的調節のなされる場所』、75–97、東京：ひつじ書房。

イン／ポライトネスの参与枠組みと多面的フェイスワーク

大塚 生子

大阪工業大学

〈Abstract〉 While traditional im/politeness research has focused on one-on-one and face-to-face interactions, our daily life often involves multiparty interactions. Based on “Mounting” discourse in LINE group, this study analyzes the evaluation of complex facework and associated im/politeness in multiparty interactions. It points out that the evaluation of im/politeness can differ depending on the direction of utterance and of face interest, and proposes a reconsideration of the participation framework in the new interactional situations such as SNS.

【キーワード】：イン／ポライトネス・参与の枠組み・フェイスワーク・多人数会話

1. はじめに

本研究では、多人数相互行為においてイン／ポライトネスを考える際に必要となる参与の枠組みと多面的フェイスワークについて考察を行う。

まず相互行為における参与状況について、Goffman(1981)の参与の枠組みでは大きく、相互行為への参与を承認された者(ratified)と承認されていない者(unratified)に分けられる。参与を承認された者には話し手(speaker)と発話を向けられた者(addressee)、傍参与者(side participants)が含まれ、承認されていない者として傍観者(bystanders)と盗み聞きをする者(eaves-droppers)がいる（図1）。

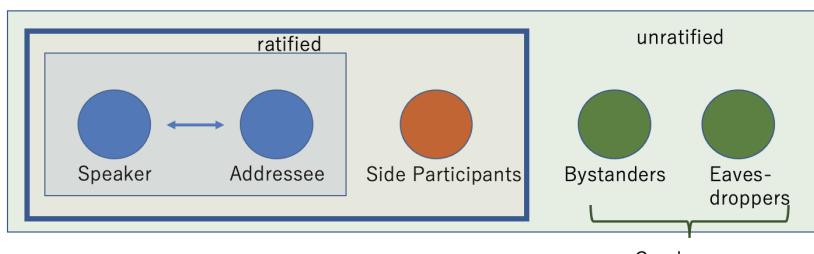


図1 Goffman(1981)の参与の枠組み

会話分析ではこれまで、多人数会話における話し手と聞き手（受け手）の参与の仕

組みの解明などが行われてきた。多人数相互行為では1対1の会話とは異なり、話し手が誰に対して発話を向けているのか、それに対して誰がどのように返答し、参与役割を交代していくかを判断する必要がある。たとえば高梨(2008)では、次のように次話者決定のための言語的手段が整理されている。

① 言語的手段

明示的手段：呼びかけなど

暗黙的手段：人称代名詞、丁寧体・非丁寧体の区別、談話標識、固有名詞などの特定の語句の使用

② 共有知識依存 共有エピソードへの言及、知識要求、知識伝達

③ 会話連鎖依存 隣接ペアの第二部分、同一の受け手への連続質問

また、視線などの非言語情報も含めたマルチモーダルな分析も盛んに行われている。

2. イン／ポライトネスと参与の枠組み

従来のイン／ポライトネス研究のモデルは、話し手・聞き手二者間のやりとりに焦点があった(Leech, 1983; Brown and Levinson, 1987等)。しかし、第三者の存在を考慮に入れることの必要性はこれらのポライトネス理論においても言及されている。Brown and Levinson(1987:12)は、「我々は他の要因、特に第三者の存在の影響を軽視しており、それは我々が考えていたよりもはるかに深い影響をことばの相互行為に与えることが分かっている」と述べ、Leech(1983: 132)は「第三者が傍観者として存在するかどうかは重要な要素であり、第三者が話し手の影響圏に属するか聞き手の影響圏に属するかどうか最も重要な要素である」と指摘した上で、ポライトネス研究における二元的なコミュニケーションモデルの限界を指摘している。しかし両者とも、複数人会話についての具体的な議論にまでは踏み込んでいない。

2000年代以降興隆してきたEelen(2001)等を嚆矢とする談話的アプローチでは、実際の人々の評価としての「一次的ポライトネス」と、学術上の概念としての「二次的ポライトネス」を区別し、一次的ポライトネスを対象に研究を進めるべきだと考えられている。そうであるならば、多人数相互行為を含む実社会の多様な相互行為状況におけるイン／ポライトネスも積極的に扱っていくべきだろう。「盗み聞き者」を含む第三者の存在は、話し手／聞き手（受け手）の発話内容や相互行為の方法にも影響を与える。Culpeper(2011: 234)はエンターテイメントとしてのインポライトネスを分析

する中で、「(インポライトな発話は) ターゲットになる受け手(addressee)と同じく、それを耳にする聞き手(over-hearers)に向けてデザインされる」と、相互行為状況におけるインポライトネスの複雑な参与の枠組みを指摘している。しかし、その重要性にもかかわらず、実際の相互行為を対象としてイン／ポライトネスと多人数相互行為における参与の枠組みについて検討した研究は現時点ではほとんど存在しない(Xia and Lan, 2019)。

本研究では、多人数相互行為におけるイン／ポライトネスにまつわる以下の点から考察する。

1. 誰に対する発話において（発話の向けられる方向）
2. 誰のフェイスを（フェイス関心：配慮／攻撃の方向）
3. 誰に対して〈ロスしないよう／ロスするよう〉に〈守る／攻撃する〉のか、あるいは無頓着なのか
4. その結果、誰のフェイスが誰に対してどの程度〈失われる／高められる〉のか（イン／ポライトネスの程度）

3. 談話例分析

分析する談話は、「マウンティング」が行われている男性グループの LINE でのやりとりである。マウンティングとは、自分の優位性を示そうと自慢したり、相手をけなしたりする相互行為上のふるまいを指す。大塚(2023)ではこれをイン／ポライトネスの観点から分析し、自己フェイスを他者より高く位置付けているように見えないよう、言語表現上いわゆる「ポライトネス・ストラテジー」同様 FTA 度合いを下げる工夫が施されているものと説明している。すなわち、言語形式上 FTA を軽減した「ポライト」な態度を示しながら、会話の含意によって明言を避け、話し手の自己フェイスを高める効果を持つものと捉えることができるだろう。このような表意と含意のメッセージの異なる二重のストラテジーを用いることによって、話し手は実行した FTA の責を正面から受けずに済むことになる。

談話例は、大学（時代）のサークル活動のメンバーが参加するグループ LINE でのやりとりからの抜粋である。このグループには、現役学部1年生から最年長は32歳社会人の計89名が参加しており、通常サークル活動のイベント等を現役生がOBに告知する目的で使用されている。多くのメンバーが現在エンジニア、または将来エンジニアとして働く。

【談話例】A：32歳コンサルタント／B：32歳エンジニア／C：27歳教員

番	発	内容	時刻
1	現役生	お疲れ様です。 2回の（名前）です。 アンケートにお答え頂いたOBの方々貴重なご意見ありがとうございます。 まだご回答いただけていないOBの方々もしよろしければ数分で終わるアンケートとなっておりますので何卒よろしくお願ひします。	16:18
2	A	スタンプ	16:29
3	B	スタンプ	18:07
4	B	これから中国に3ヶ月行くことになったOBです。対戦よろしくお願ひ致します！！	18:08
5	C	スタンプ	18:10
6	C	回答しました	18:10
7	C	AさんBさんお久しぶりです！	18:10
8	A	お久しぶりです！！	18:36
9	A	まだ（大手会計事務所名）をクビにならず生きているOBです	18:37
10	A	at C (地方都市)で元気にやってますか？	18:37
11	C	細々と生きてます	18:38
12	A	スタンプ（ナイス）	18:41
13	C	今年Twitterはじめたので皆さんどしどしフォローしてください笑	18:43
14	C	(アカウント)	18:44
15	B	やきうツイットしかしどらんがな	18:45
16	C	25年ぶり春季大会決勝だったので笑 広報はSNS運用部になり土日は部活の公式戦写真撮影で今年度休日は2日です。 皆さん教職つくなお気をつけて	18:47
17	B	そゆことね、めでてえな！	18:51
18	A	コンサルがひく社畜っぴり。 現役生へ、エンジニアは比較的まともな生活を送れるはずだよ()	18:55
19	C	給料に何の影響もないSNSを投稿しろって言われてもモチベが上がらないです…	18:59
20	B	エンジニアもこの時期にチャイナヘドナドナなので…()	21:13
21	A	それはよその会社のやつもいってましたがんばれ	21:16

談話例は、現役生がOB全体にアンケートを依頼するところから始まる。それに対し、最年長であるAとBがスタンプで応答する。Bは続けて、4Bで現役生チームへの対戦の依頼とそれに先立った自己紹介を行う。コロナ禍でのやりとりであったため、そんな時期に海外へ出張という自虐的な内容になっているといえる。

続いて A、B の後輩である C がスタンプを送り、7C では直接の顔見知りである二人に対して挨拶を送る。A はそれに「お久しぶりです！！」と返事し、続けて「まだ [大手会計事務所名] をクビにならず生きている OB です」と勤務先名を出して自己紹介を行っている。C は A と知り合いなので、この発話は自分のことを知らない後輩たちに向けられたものだと考えられるが、「まだ」というのはある程度の期間働いていることを相手が知っていることを論理的に含意しており、純粋な自己紹介とは構造が異なる。また、「クビにならず」という表現は、「クビになる可能性がある」という自己に関する否定的な可能性を含意しているが、勤務先名を出していることからその会社がいかにすこいかということに焦点が置かれたものと推測される。つまり、発話は現役生に向けたものであるが実質的な自己紹介ではなく、フェイス関心についても、言語表現上の論理的含意は「クビになるかも」という謙遜として他者フェイスを相対的に高く位置付けるものではあるが、会話の含意として「クビになることがあるくらい精銳の集まる会社である」という自慢となっており、自己フェイスが高められていることになる。

次に考えたいのは、16C 以降の部分である。C は教員で、勤務校のクラブが好成績をおさめたため自分も業務で忙殺されている状況を愚痴っぽく述べ、最後に先輩風を吹かせて現役生へ向けて「皆さん」と呼びかけて、「教職つくならお気をつけて」とアドバイスを行う。17B はそれに対して「そゆことね、めでてえな！」と冗談めかしてお祝いを述べる。一方の A は C のクラブの成績には言及せず、忙しくて休みが取れないといふ部分を取り上げ、「コンサルがひく社畜っぷり。」と返信を行う。一人称を「コンサル」という職業名にし、「コンサルがひく社畜っぷり」と述べることは、C の忙しさを認めつつ、コンサルである自分は当然忙しいということが含意されているといえる。「社畜」は一般に否定的な表現だが、A は仕事が忙しいことに価値を置いていると推察されるため、実際には忙しい C と自分のフェイスを高める機能を持つ。さらに、「現役生へ、エンジニアは比較的まともな生活を送れるはずだよ()」と、現役生へ向けた発話において、エンジニアとコンサル（教員）との対比を行い、エンジニア = 「まともな生活」と描写する。コンサルは「社畜」であり、エンジニアは「まともな生活」であるなら、言語形式上相手フェイスを高く、自己フェイスを低く位置付けることになる。しかし、ここでは相反する価値基準のすり替えが行われているといえるだろう。すなわち、私生活を犠牲にしてでも仕事に心血を注ぐことをよしとする価値観と、私生活も充実させ、ワークライフバランスのとれた働き方をすべきだという価値観である。ここでは上述のように、A は忙しいことに価値をおいているにもかか

わらず、あたかも後者に価値があるかのうような言い方をしているものと捉えることができる。つまり、表面上 B およびエンジニアのフェイスを高く位置付けながらその実、対比的に「忙しい自分」をアピールし、自己フェイスを高めるのが真意であると参与者らは推論するのだ。

それに対して、20B はエンジニアである自分もコロナ禍で中国に出張する、つまり「まともな生活とはいえない」と述べ、18A で貶められた自己フェイスの補償をおこなっている。一人称が「エンジニア」となっているため、自分のみならず「まともな生活」と A に描写されたエンジニア全体のフェイス補償になっているものと考えられる。ただし、この対立的意見は「チャイナ」や「ドナドナ」、「()」という笑いを意味する記号等を用いて冗談めかした書き方になっており、このように自嘲的にふるまうことでの対立をトーンダウンするストラテジーとなっている。

しかし 21A は B の自己フェイス補償を許さない。21A では「それはよその会社のやつもいってましたがんばれ」と述べ、(論点がずれてはいるものの)「エンジニアで大変なのは B だけではない」と、一部エンジニアのフェイス保持を行いながらも B 個人のフェイス補償を相殺する。また、句読点が一切入っておらず、突き放すような、投げやり・無感情な印象を受ける書き方になっている。

これ以降、約 3 ヶ月後に現役生が別件で再び OB へのイベント告知を行うまで、この LINE グループでのやりとりはおこなわれていない。

9A、18A で用いられているストラテジーは、いずれも、言語表現から論理的に推論できる内容と、会話の含意によって推論できる内容にずれのある、「二重のストラテジー」であるということができる。つまり、相手のフェイスに配慮しているように見えて、その実自己フェイスの高揚が行われており、フェイス関心にズレがある。さらに、発話は現役生に向けられているが、それによってフェイスを侵害されるのは傍参与者の B や、傍観者であるその他のエンジニアである。

4. 多人数相互行為におけるイン／ポライトネス

以上の分析をふまえ、今後多人数相互行為におけるイン／ポライトネスを扱う際に考慮すべきだと思われる 3 つの点を検討する。

① 多人数相互行為における指示性の脆弱化と新しい評価基準

前述した高梨(2008)の分類では、言語的、共有知識的、会話連鎖的な観点からさまざまな次話者決定のための手段がまとめられている。しかし、本研究における「現役生」は、A、B、C それぞれからメッセージを宛てられているにもかかわらず、誰一人、

一回としてそれに対する返信を行なっていない。これは話し手が複数名に対して発話を宛てても、その指示性が弱まるため、返答の義務の強さが弱まるからだと考えられる。返答を行わないことは通常インポライトと見なされるが、LINEのようなSNSでの新しい相互行為環境では、対面とは異なる「評価基準」が形成されつつある可能性もある。すなわち、対面相互行為においてイン／ポライトと評価されるものが、オンラインという新しい文脈でも同じとは限らないのである。

② 多人数相互行為における参与役割と社会規範

参与者は、原理的には指示されれば話者となり、発話の義務が発生するはずだが、談話例では実際にはそうはなっていない。複数名が受け手になる際には、高梨(2008)で指摘されているような言語的手段を手がかりとするだけでなく、社会規範も考える必要があるだろう。すなわち、受け手が複数いる場合の受け手間の権力差である。談話例のやりとりが最年長のA、Bと、グループ内では比較的年長のCによって行われていることは、果たして偶然だろうか。このLINEの参加メンバーは実社会における先輩・後輩という人間関係を基盤に形成されており、一般的に社会では年長者には発話の権利があると考えられている。それが有効であるならば、「現役生」はたとえ受け手として指示されても先輩の手前、返答しづらいとう側面があるのかもしれない。複数の傍参与者(side participants)の参与の実際的な役割についてはこのように、より多様な社会的な視点をもって考えていく必要がある。

③ 多人数相互行為におけるパフォーマンス

Goffman(1959)は、相互行為における「自己呈示(self-presentation)」の側面を指摘した。我々はまるで舞台の上の役者のように、相互行為において「望ましい自己」を呈示しようとする。Haugh(2013: 48)はフェイスの「呈示」の側面に重点を置き、フェイスワークを「(非)言語行動によって自分や他者の評価を表明する行動」と説明している。

Goffmanはパフォーマンスを、パフォーマンス性の高さを基準に「意識的に演じるもの」と「無意識的な(身体化／習慣化された)」ものに分類した。パフォーマンスは当然、相互行為の相手に対しても「演じ」られるものであるが、談話例のように、89名もの参加者の中で2人ないし3人が相互行為を行う場合、本人たちだけでやりとりする場合と比較すると他の参加者から相互行為を観察されているという意識が強くなるのではないだろうか。実際A、B、Cとも「無言の観察者」の存在を意識していることは、現役生へ向けた発話をおこなっていることから明らかである。しかし、相手によって、どのような自己像を見せたいかは異なるはずである。多人数相互行為において

異なる関係性を持つ者（先輩、後輩、同僚、など）が評価者として混在している場合、どのような自己像をどのような方法で呈示すべきかの判断は非常に困難になるだろう。特定の自己呈示が、ある人には適切と受け取られても、別の人にはポライトやインポライトなどと有標的に受け取られ、また異なる評価がおこなわれる可能性もある。

5. おわりに

実際の社会における相互行為は、従来のポライトネス研究で暗黙の前提とされてきた1対1の対面だけではなく、多人数や昨今はSNS上で行われることも多い。それらの多様な相互行為状況においてイン／ポライトネスを考える際には、発話の方向やフェイス関心の方向など、傍参与者や傍観者(bystanders)の存在を含めた参与の枠組みや複雑なフェイスワークを明らかにする必要がある。

【参考文献】

- Brown, Penelope. and Levinson, Stephen, C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, H. Harbert. (1996) *Using Languages*. Cambridge University Press.
- Culpeper, Jonathan. (2011) *Impoliteness: using language to cause offence*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eelen, Geno. (2001) *A Critique of Politeness Theories*. London: Routledge.
- Goffman, Erving. (1959) *The Presentation of Self in Everyday Life*. New York: Doubleday Anchor Books.
- (1967) *Interaction Ritual: Essays on Face Behavior*. New York: Pantheon Books.
- (1981) *Forms of Talk*. Pennsylvania: University of Pennsylvania Press.
- Leech, Geoffrey. (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- O'Keeffe, Anne. (2006) *Investigating Media Discourse*. Routledge, London.
- 大塚生子 (2023) (印刷中)「マウンティングをイン／ポライトネスから考える」『イン／ポライトネス研究の新たな地平』(仮) 東京：三元社.
- 高梨克也 (2008) 「会話構造理解のための分析単位：参与構造」『人工知能学会誌』23(4). 538-544.
- Xia, Dengshan and Lan, Chun. (2019) (Im)politeness at a Chinese Dinner Table: A Discursive Approach to (Im)politeness in Multi-party Communication. *Journal of Politeness Research*, 15(2), 223-256.

第一・第二言語話者間のメタ語用論的意識に関する考察

—*I think* の解釈に着目して—

木津弥佳（ノートルダム清心女子大学）

行木瑛子（沖縄大学）

<Abstract>

This paper examines the differences in interpretation of *I think* between L1 and L2 speakers. In this study, an interviewer (L1 speaker) and interviewees (L2 speakers) respectively coded all instances of *I think* that the L2 speakers used in four 15-20 minute interviews, using Zhang's (2014) functional categorization of *I think*. The results show significant discrepancies in the interpretations of *I think* between these speakers (43 out of 87 instances (49.4%)), among which seven cases (8%) may potentially cause misleading communication (e.g., the intended meaning of “mitigation” by the L2 speaker was taken to mean “emphasis” by the L1 speaker). The findings suggest the importance of developing metapragmatic awareness among both speakers (McConachy 2018).

【キーワード】メタ語用論的意識・*I think*・上級英語学習者・留学・認識的スタンス

1. はじめに

認識的スタンス標識 (epistemic stance markers) は、話し手の立場・態度を表明するための重要なツールとされている。第二言語学習者の認識的スタンス標識の使用頻度や習得過程については既に多くの研究がなされているが (Bardovi-Harlig & Salsbury 2004; Fordyce 2009, 2014; Kizu, Gyogi & Dougherty 2022 他) 、管見の限り、会話中に学習者が意図した認識的スタンス標識の意味と聞き手の解釈という、メタ語用論的意識に着目した研究はほとんどない。例えば、代表的な認識的スタンス標識である *I think* は母語話者・学習者共に使用頻度が高く (Kärkkäinen 2003) 、法助動詞など他の認識的スタンス標識と比べ、初級段階から学習者が容易に使用できるようになると言われている (Bardovi-Harlig & Salsbury 2004)。しかし *I think* は、意見の強調に使用されるのみならず、和らげにも使用されるといった相反するような機能もある (Zhang 2014)。

そこで本研究では、留学前後の2年間にわたる日本語母語の英語学習者と英語母語話者との会話を題材に、両者の解釈に齟齬が生じる可能性があることを仮定して、(i) 学習者の留学経験を通じて *I think* の意図がより正確に母語話者に伝わるようになるか、(ii) 学習者と母語話者の *I think* の解釈にはなぜ齟齬が生じるか、という2点を考察する¹。

2. 調査方法

本研究で分析するのは、英語母語話者1名による上級レベル学習者4名への個別インタビューにおいて、学習者が使用した *I think* である。学習者はいずれも20代の女性で、英語を媒介語とする日本の大学で学び、在学中に英語圏の大学に約1年留学した。母語話者は、日本での英語教授歴が15年以上の男性教員である。なお、データ収集開始当時、学習者全員がその教員を認識していたものの、直接話したことはほぼなかった。

研究対象は、(1)母語話者による学習者への半構造的インタビュー（各15分程度）、(2) インタビュー形式での振り返り調査で得られた学習者自身の *I think* の解釈をコード化したデータ、(3) 上記母語話者が学習者の *I think* の解釈をコード化したデータである。

(1)のインタビューは、インタビュアーである母語話者が各学習者と1対1で行い、留学前、留学中、留学直後、留学から6か月後の4回にわたって実施した。会話では、お勧めの場所、影響を与えた人、最近見た映画や読んだ本という3つのトピックについて、各5分程度自由に会話をなった。

表1 Zhang (2014)の *I think* の機能別分類²

機能	主な内容
不確実 (Tentative)	不確かさ、大まかな値、権威のなさを表す
緩和 (Mitigating)	主張や権威を抑える、無愛想な言い方を避け、聞き手の面目を保つ、和らげ表現
強調 (Emphatic)	主張の度合いを強める
談話標識 (Discursive)	コミュニケーションの間を埋めるための場つなぎのようなもの
評価判断 (Evaluative)	事柄に対する話し手の判断・評価を表す（無標の機能）

(2)の振り返りインタビューでは、学習者が会話中の自身の *I think* の出現箇所を日本語母語話者の筆者と共に聞き直し、表1のZhang (2014)の提唱した機能別分類に基づいて自身の *I think* の使用の意図をコード化した。また、その根拠についても説明した。(3)では、インタビュアーである母語話者が録音・書き起こしデータをもとに、すべての学習者の *I think* を表1に従って機能別にコード化し、その根拠についても適宜記述した。

なお、Zhang (2014)は、表1の5つの機能が必ず単独で存在するわけではなく、共起しうるものだと述べている。また、発話のトーン等の音韻的重要性についても言及している。

る。このため、学習者・母語話者がコード化する際、必ず音声を聞き、必要に応じて2つ以上の機能をあげることも可とした。

データ分析については、まず、(1)のインタビューは、すべて書き起こした上で、学習者が使用した *I think* を抽出した³。その後、(2)で得られた学習者による *I think* のコード化データと、(3)の母語話者による *I think* の結果を照らし合わせて集計し、解釈の齟齬の有無について量的・質的に分析した。なお、学習者と母語話者が2つ以上の機能を挙げた場合は、そのいずれかが齟齬がない場合は齟齬がなかったとみなした。例えば、学習者が「不確実」と「談話標識」を機能にあげ、母語話者が「不確実」のみを挙げていた場合、不確実の解釈を共有して齟齬がないと考えた。

3. 分析の結果

3.1 解釈の齟齬率

本項では、解釈の齟齬率についての分析結果を報告したうえで、本稿の課題の一つである(i) 学習者の留学経験を通じて *I think* の意図がより正確に母語話者に伝わるようになるのかについて検討する。

表2 第二言語学習者・母語話者間の *I think* の解釈が異なる割合 (%)

学習者 (匿名) 時期	アカリ	エミ	カナコ	ユリ	合計
留学前	100 (1/1)	0 (0/2)	100 (4/4)	33.3 (2/6)	53.8 (7/13)
留学中	33.3 (1/3)	50 (1/2)	37.5 (3/8)	66.7 (8/12)	52 (13/25)
留学直後	0 (0/2)	50 (3/6)	44.4 (4/9)	33.3 (3/9)	38.5 (10/26)
留学 6か月後	57.1 (4/7)	62.5 (5/8)	20 (1/5)	66.7 (2/3)	52.2 (12/23)
合計 (話者別)	46.2 (6/13)	50 (9/18)	46.2 (12/26)	50 (15/30)	48.3 (42/87)

注：カッコ内の数字は、解釈の齟齬数/*I think* 出現数

表2は、学習者の発話に現れた *I think* の解釈が、学習者本人と聞き手（インタビュア）である母語話者の間で異なっていた場合の割合を示したものである。下記の表のとおり、*I think* の出現総数87例のうち、話し手・聞き手で解釈が違ったのは42例(48.3%)であった。齟齬率の話者別合計は45%～50%で、大きな個人差はなかった。また、時期別でみても、学習者は留学を通して英語の接触量が増え、全体的な英語力も向上したと考えられるにもかかわらず、齟齬率は留学半年後でも段階別合計で50%以上と高かった。

留学直後の段階別合計は38.5%と、他の段階よりも齟齬率がやや低くなっているが、質

的に分析したところ、それは留学による効果というより、会話の内容による違いであることがわかった。例えば、ユリの留学中の会話では、「影響を受けた人は誰ですか」という質問に対し、留学先の教員を挙げ、そこから米国のマイノリティについての話が展開された。その中では自身の考えを述べる状況が続き、*I think* が複数使用されていた。しかし、留学直後の会話では、「旅行の思い出」や「これまで見た映画」について話す状況での *I think* が多く、ユリは自身の経験の記憶を辿るために *I think* を使用することが多く、意見を表明する状況での *I think* は会話の内容的に数が限られていた。

つまり、留学中の *I think* は「評価判断」が多く、留学直後は「談話標識」など「評価判断」以外の *I think* が多く使われていた。「評価判断」の *I think* は統語的に文頭に置かれ、意味機能として *I think* の可能な解釈の中では最も基本となるものである。下記 3.2 でも詳述するが、この場合は解釈の幅が広がる可能性が高いと考えられ、このことから、ユリの留学中と留学直後の齟齬率の差というのは、単に会話の内容が影響しているだけで、留学したこと自体が関わってはいないと考えられる。

分析の結果、(i) 学習者の留学経験を通じて *I think* の意図がより正確に母語話者に伝わるようになるのかという点については、齟齬率は留学半年後も高いままであった。また、齟齬率には、留学経験よりも、会話の内容が影響を与えていることがわかった。

3.2 解釈の分布

本項では、解釈の分布と実際の会話の例を考察したうえで、本稿のもう一つの課題である(ii) 学習者と母語話者の *I think* の解釈にはなぜ齟齬が生じるのかについて考察する。

表 3 解釈の分布

学習者 \ インタビュアー	不確実	緩和	強調	談話標識	評価判断
不確実	30	3	5	3	1
緩和	1	0	1	0	0
強調	0	1	4	0	0
談話標識	6	2	3	9	0
評価判断	2	2	10	3	1

表 3 は、解釈の分布をまとめたものである。縦列がインタビュアーの Zhang (2014) に基づく機能別分類で、横行が学習者の機能別分類である。薄い灰色部分は、インタビュアーと学習者の解釈が一致している部分である。表 3 のとおり、「不確実」はお互いの解釈に差がないケースが 30 例で最も多く、また、「談話標識」も齟齬がないケースが 9 例

と比較的多かったことがわかる。

Zhang (2014)は、*I think* の基本的な意味機能は「評価判断」であり、その機能が拡張されて「強調・談話標識・不確実・緩和」といったその他の意味機能が生じていると考えている。また、拡張していく中で、「強調」と「不確実・緩和」の機能の間にはある種の距離があることを示している。解釈の分布をみると（濃い灰色部分）、学習者が「不確実」とコード化したのに、母語話者が「強調」と解釈したもののが5例、学習者が「緩和」の意図で使ったものが、インタビュアーには「強調」ととらえられたのが1例、その逆も1例あった。これらの例は、話者の意図が全く違う意味に受け取られているという点で、重大な齟齬と考えられる。

次に、齟齬のなかった2例と、重大な齟齬のあった2例を検証する。抜粋1と2は、齟齬がなかった典型的な例である。抜粋1は、ユリが留学中にシアトルへ行くのが好きであると話していたことを受けての会話だが、文末に*I think* を挿入し、音韻的にも上がり調子で声も小さくなっている、自信のない様子が見受けられた。この例については、インタビュアーとユリの双方が「不確実」と分類した。

抜粋1 ユリ（留学中）Line 97-101

インタビュアー: Okay. All right. Well, so you go to Seattle. How often have you been to Seattle?
ユリ: Um, in two or three weeks, ***I think***.
インタビュアー: Uh-huh. Okay.

抜粋2は、アカリが週末を過ごすのにお勧めの場所を聞かれたときの会話である。これは、学習者・インタビュアーとともに「談話標識」と解釈した。抜粋2をみると、*I think* の前後に*um*, *hmm*などの言い淀みがあり、場つなぎの場面で*I think* が使われていることが見て取れる。また、抜粋1と2ともに文末や文中に現れる*I think* となっている。

抜粋2 アカリ（留学6か月後）Line 85-97

インタビュアー: What's your favorite beach?
アカリ: Uh, Shimohama (laugh)
インタビュアー: Ah, okay. Why do you like that one?
アカリ: Cause it's close from here.
インタビュアー: Uh-huh.
アカリ: And also not many people.
インタビュアー: Mm-hmm.
アカリ: Um, and, ***I think***, um, hmm, and wide enough. (laugh)

抜粋3と4は重大な齟齬のあった例である。抜粋3は、エミの留学直後に行ったインタビューからのものである。エミは影響を受けた人について聞かれ、カナダの留学中に仲

良かった友人を挙げたうえで、彼女とどうやって仲良くなったかを話している。

抜粋3 エミ（留学直後）Line 252-267

エミ: And she was always sitting next to me and she was super friendly person.

インタビュアー: Mm-hmm.

エミ: And **I-I think** she really wanted Japanese friend, so she tried to talk to me in Japanese and then, um, we talk-we talked every single class and then we decided to go to café or have lunch together some time, and that's how we got that close.

この *I think* について、エミ自身は「不確実」を選び、「他の人がどう思っているかはわからないけど、私はそう受け取ったよっていうのが一番かなと思います。」とコメントした。一方、インタビュアーは、「強調」と解釈し、「学習者は *I think* を繰り返して述べていることが多く、断言している確信の度合いをあげているのでは」と述べている。

抜粋4 も齟齬のあったケースである。

抜粋4 カナコ（留学中）Line 147-155

インタビュアー: Who is the most influential or important person for your study at Maynooth university?

カナコ: Um, here, during my study abroad?

インタビュアー: Uh-hmm, yes.

カナコ: Mm-hmm, **I think** one of my professors. Um, he was teaching two classes of me. One is The Politics of the EU, and the other is The Politics of the Ethnic Conflict, and both of them are really interesting.

抜粋4は、インタビュアーが留学中のカナコに、留学先で影響力のある人は誰かと尋ねた場面である。インタビュアーは、抜粋3のエミの時と同様、「強調」と解釈した。一方、カナコは、「緩和」を意図して *I think* を使用していると認識していた。その理由として、「直球的な答えを避け、語気を弱めてやわらかくし、断定しないためのものだった」とコメントしていた。

このように齟齬が生じたケースを観察すると、齟齬が生じやすいタイプの *I think* と生じにくいタイプの *I think* があることがわかった。それは *I think* の現れる文中の統語的な位置によるもので、文中や文末に現れる comment clause としての *I think* には齟齬が少なかつた。その理由は、文中・文末の *I think* の機能が「不確実」や「緩和」といったものに限定されるからだと考えられる (Quirk et al. 1985)。

それに対し、文頭に現れる *I think* には齟齬が多い傾向が見られた。文頭であっても齟齬がなかったケースもあるが、それは *I think* と共に起するハッジや副詞等で意味解釈の手掛かりがある場合である。例えば、*um, hmm* など他のフィラーが複数入っている場合は、文頭であっても母語話者・学習者の双方が「談話標識」と解釈していた。ただ、意味解

釈の手掛かりとなる共起表現がない場合は、解釈の幅が広がるため齟齬が多くなった。

このような文頭の *I think* について、インタビュアーの言葉を借りれば、「不要な場面で」*I think* を使用することで、述べる事実に対する確信をさらに強くしていると判断していると考えられる。一方、学習者は、文頭の *I think* を、主に一般化を避けて個人的な意見として述べるために使用していることが、個別のコメントからわかった。「個人的な意見」として使用する *I think* は、母語である日本語の「と思う」が影響している可能性もあるが、これについてはさらに調査と考察が必要になるだろう。

分析の結果、(ii) 学習者と母語話者の *I think* の解釈にはなぜ齟齬が生じるのかについては、統語的な位置の影響が明らかになった。特に、文頭の *I think* で、解釈の手がかりとなる共起表現がない場合は、解釈の幅が広がり、齟齬が生じる可能性が高くなる。さらに、母語話者のインタビュアーは文頭の「不要な場面」の *I think* を「強調」ととらえる傾向があったのに対し、このような傾向は学習者には見られなかつた。

4. まとめ

本稿では、学習者と母語話者間の *I think* の解釈の違いについて考察した。会話でのインタラクションは、情報を伝え合うだけではなく、互いの関係性構築にも関係すると言わわれているが (Young 2011)、話し手・聞き手間の認識的スタンス標識の解釈の相違が原因となり、自分の望む人物像と違う形で相手に受け止められる可能性もある。

今回の *I think* については、話し手と聞き手の解釈が違っても情報伝達と全体的な会話構築自体には大きな影響を及ぼさないため、互いの解釈の違いに気づくことなく、訂正・確認する機会が得られなかつたと考えられる。たとえ上級レベルの学習者であっても、比較的容易に使用できる *I think* が実は思わぬ形で受け止められる可能性がある点を注意喚起することが必要であることを示している。またその上で、母語や文化的背景、言語能力レベルも異なる人同士のコミュニケーションの際に、いかに自分の望む自己像を作り上げ、相手との関係性を構築していくかを語学教育に取り入れることが期待されると共に、近年論じられているメタ語用論的意識 (McConachy 2018) の必要性を示唆していると言えよう。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP17K02999、JP20K00908 の助成を受けたものである。

注

¹ 今回の研究は、あくまでこの会話の当事者間の解釈の差異を調べたものであり、事例研究として行うものである。この研究のみにより、母語話者・学習者についての解釈を一般化することは目指していない。

² 各機能の和訳は拙訳である。

³ *I think so.*は決まり文句として使用されており、厳密には認識スタンス標識ではないと考え、数には含めなかった。

参照文献

- Bardovi-Harlig, K., and T. Salsbury. 2004. “The Organization of Turns in the Disagreements of L2 Learners: A Longitudinal Perspective.” In Boxer, D. and A.D. Cohen (eds.), *Studying Speaking to Inform Second Language Learning*, 199–227. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Fordyce, K. 2009. “A Comparative Study of Learner Corpora of Spoken and Written Discursive Language: Focusing on the Use of Epistemic Forms by Japanese EFL Learners.” *Hiroshima Studies in Language and Language Education* 12 (1), 135–50.
- . 2014. “The Differential Effects of Explicit and Implicit Instruction on EFL Learners’ Use of Epistemic Stance.” *Applied Linguistics* 35 (1), 6–28.
- Kärkkäinen, E. 2003. *Epistemic Stance in English Conversation: A Description of Its Interactional Functions, with a Focus on I think*. Amsterdam: John Benjamins.
- Kizu, M., E. Gyogi, and P. Dougherty. 2022. “Epistemic Stance in L2 English Discourse The Development of Pragmatic Strategies in Study Abroad.” *Applied Pragmatics* 4 (1), 33–62.
- McConachy, T. 2018. *Developing Intercultural Perspectives on Language Use: Exploring Pragmatics and Culture in Foreign Language Learning*. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Young, R. F. 2011. “Interactional Competence in Language Learning, Teaching, and Testing.” In Hinkel, E. (ed.), *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning Volume 2*, 426–43. New York: Routledge.
- Zhang, G. 2014. “The Elasticity of *I think*: Stretching Its Pragmatic Functions.” *Intercultural Pragmatics* 11 (2), 225–57.

はいはい面白い面白い：アイロニー専用表現に見る慣習化された間接性*

木下蒼一朗

東京大学大学院人文社会系研究科／日本学術振興会特別研究員 DC

gingerale@asagi.waseda.jp

<Abstract> In the relevance-theoretic literature, dissociative particles in ironical utterances, such as *huh*, are standardly considered expressions which linguistically encode a procedural constraint on the higher-level explicatures. Although this view leads us to treat a dissociative attitude of irony as the higher-level explicature, it differs from any lexically encoded ex-/implicatures, in that it is explicitly cancellable, and that it is subject to Moore's Paradox. This suggests that the attitude is constituted as neither a higher-level explicature nor an implicature. This article argues that the traditional view which treats an ironical attitude as a higher-level explicature fails to capture its nature, and that it should be construed as an analogue to “conventionalized indirectness” of usual indirect speech acts.

【キーワード】：関連性理論・アイロニー・高次表意・乖離的態度・間接言語行為

1. 話し手の信念と高次表意

「今日はいい天気だ」という文 (=1a)) を発話する行為は、その発話がなされた日・場所の天気が良いということ (=1b)) のみならず、その話し手がその日・場所の天気が良いと思っているということ (=1c)) をも伝達しうる。

- (1) a. (東京にいる人物が窓の外を見ながら) 今日はいい天気だ。
b. 2022年11月26日の東京はいい天気だ。
c. 話し手は 2022年11月26日の東京がいい天気だと思っている。

より一般的に言い換えれば、明示的に命題的内容 p を意味する発話から、その発話者が p と思っているということを、私たちは推論することができる。Austin (1962: 48) が G. E. Moore の言葉を借りつつ “imply” と呼んだこの推論関係は、今日の語用論、特に関連性理論においては、ある発話の表意 (explicature) から高次表意 (higher-level explicature)

を得る語用論的プロセスの一種として理解されている (cf. Wilson and Sperber 2012: 23-24)。私たちの例で言えば、(1b) は発話 (1a) を元に構築された表意であり、(1c) はその表意に対する話し手の態度、すなわち高次表意である。

表意に対する話し手の態度であるというその性質上、一つの表意に対して復元される高次表意は「話し手は……と思っている」というものにとどまらない。たとえば話し手が嬉しそうな声色で (1a) を発話した場合、私たちは (1c) に加えて「話し手は 2022 年 11 月 26 日の東京がいい天気であることを喜んでいる」という命題的態度をより関連性の高い高次表意として復元することになる。関連性理論ではこのように、一つの表意に対応しうる高次表意は原理上無数にあるものの、そのうちどれが際立ったものとして処理されるのかは発話状況に照らした関連性次第であると考える。これはすなわち、ムーア＝オースティン的な意味での “imply” によって得られる「話し手は……と思っている」はあくまでも可能な高次表意のうちの一つとして理解されるということである。

特に、話し手がアイロニーを言っていることが明らかな場合には、単純な *imply* は成り立たない。いま、楽しみにしていた予定が雨のせいで流れてしまったという状況において話し手がおどけて (1a) を発話したとする。ここで話し手が心からその日をいい天気だと思っているとは考えがたい——状況に照らして関連性が低い——ため「話し手はその日がいい天気だと思っている」という命題的態度は際立った高次表意とはならず、代わりに「話し手はその日がいい天気だなんてとんでもないと思っている」といった命題的態度が算出される。表意に対していわば距離を取ろうとするこうした態度を関連性理論では「乖離的態度 (dissociative attitude; Wilson and Sperber 1992, 1993)」と呼び、これをアイロニーに伴う高次表意とみなすのが今日の標準である。

2. アイ日ニ一專用表現と手續的意味

先述の（1a）がそうであったように、ほとんどの言語表現はそれをアイロニカルに用いるか否かを話し手が選択することができる。しかし中には、アイロニーであることがその形式のうちに運命付けられてしまっている言語表現が存在する。

たとえば仮に、日本語用論学会大会での私の発表に対して人物 S が (2a) を発話したとすると、それをアイロニーでないものとして解釈するのは極めて困難である。もちろん S が心から私の発表を面白いと思って (2a) を発話した可能性もあるだろうけれど、そのように想定したとしても解釈の結果は変わらない。私が人の発言の裏の意図を邪推することが全くない心の清らかな人物であったと仮定しても同じである。相変わらず S はアイロニーを言っているものとして解釈されてしまう。このことは、(2a) がアイロニーとして解釈されるのは S の意図や私の受け取り方のせいではないということ示している。むしろ問題なのは (2a) が「はいはい」という余計なパートを含んでいたり、述語「面白い」が不必要に繰り返されていたりといった形式的特徴を持つことのほうだろう。これと同様のことは、同じく「余計なパート」を含む (2b), (3), (4) に関しても当てはまる。こうした特徴をもつ表現を以降便宜的に「アイロニー専用表現」と呼ぼう。

1 節に述べた通り、アイロニーに伴う乖離的態度は伝統的にアイロニー発話の高次表意であると考えられている。この考え方と上記の観察とを合わせると、アイロニー専用表現を特徴付ける「余計なパート」は、聞き手が乖離的態度のみをその高次表意として復元するよう仕向けているということになる (Higashimori 1994: 99, 東森・吉村 2003: 99)。発話形式に結びついた特定の機能が高次表意の復元のあり方を左右するというこの発想は、関連性理論による次のような文の分析において採られてきた考え方の応用である。

- (5) Mary has, *confidentially*, failed the exam. (Ifantidou-Trouki 1993: 70)
- (6) Eat your vegetables. (Clark 1991: 246)
- (7) She is a linguist, *but* she's quite intelligent. (Blakemore 2000: 475)

たとえば (5) に含まれる *confidentially* は、メアリーが内密に試験に落ちたことを伝えるために挿入されているのではなく、メアリーが試験に落ちたことを話し手が内密なものとして伝達していることを意味している。この点でこの表現は「メアリーが試験に落ちた」という表意には情報を提供しておらず、むしろその表意を内密にしようという話し手の態度、すなわち高次表意にこそ情報を提供していると言える。挿入句としての *confidentially* などが果たすこの種の働きは「高次表意への概念的貢献」と呼ばれる。

とはいって、アイロニー専用表現を特徴付ける「はいはい」や *huh?* が *confidentially* のように話し手の態度を記述する (describe) 意味を有するとは考え難いということを考えると、上の「余計なパート」たちはアイロニー専用表現が伝達する表意に対する話し手の乖離的態度を示している (indicate) と考えるほうが自然だ。これは (6) におい

て命令法標識が演ずる役割と同じものである。命令法標識は一般に「話し手がしかじかのことを命じている」ということを記述こそせざれ、その形式のうちに話し手の命令的態度を示す。(6) の聞き手はこの示しに従うことで、想定可能な高次表意の中から「話し手は聞き手が野菜を食べるよう命じている」を選び取るのである。(7) の場合も同様に、「彼女は言語学者である」と「彼女はかなり賢い」の二者が緊張関係にあるという含み（この場合は高次表意でなく推意に当たる）が談話連結詞 *but* の中に示されることにより、聞き手が得る含みはそこで示されたタイプのものに制限されることになる。こうした示しによる限定は「高次表意／推意への手続的制約」と呼ばれ、アイロニー専用表現に含まれる「はいはい」などの乖離的小詞（dissociative particle; Wilson and Sperber 1993: 22-23, Fraser 2006: 28）もこれと同じ機能=手続的意味をもつと考えられた。

2.1. アイロニー専用表現に伴う乖離的態度は取り消し可能である

しかし、概念的貢献／手続的制約によって得られた高次表意／推意が一般に取り消し可能性（cancellability; Grice 1975, 1978, 三木 2022）を欠くのに対して、アイロニー専用表現に伴う乖離的態度は言語的にコード化されているにも拘らず取り消し可能である。

(8) A1: ここだけの話、メアリーは試験に落ちたよ。

B: つまり内密にしたいってこと？

A2: #いや、内密にしたくないよ。

(9) A1: 野菜を食べなさい。

B: それって命令？

A2: #いや、命令じゃないよ。

(10) A1: 彼女は言語学者なのに賢いね。

B: その2つって対立するの？

A2: #いや、対立しないよ。

(11) A1: はいはい面白い面白い。

B: 皮肉のつもり？

A2: #いや、皮肉じゃないよ。

もちろん（11A2）を発話することは印象が悪いのだが、それでも（8-10）の各A2がもつような不合理さはそこにはない（不合理でないからこそBは言い返せず、一層悪印象に感じられると言ってもいいだろう）。この振る舞いの違いは、アイロニー専用表現に關

して復元される乖離的態度は高次表意でも推意でもないということを強く示唆する。

2.2. 高次表意とムーアのパラドクス

さらにアイロニー専用表現（およびアイロニー一般）は通常の発話と同様「ムーアのパラドクス」(Moore 1942, Wittgenstein 1953[1968]: 190) を生じさせる (Sakai 2021)。

(12) #雨が降っているよ、でも私は雨が降っているとは思わないよ。

(13) #はいはい面白い面白い、でも私は君の話が面白いとは思わないよ。

1節で述べた通り、直説法の平叙文を発話することはその発話の表意を話し手が信じているという高次表意を“imply”する。すると (12) の不合理性 (=ムーアのパラドクス) は、「雨が降っているよ」から亜人格的に (subpersonally; Recanati 2003: 310) 復元される高次表意「話し手は雨が降っていると思っている」が、後続する発話においてすぐさま否定されることで生ずる「高次表意レベルでの矛盾」として説明される。仮に (13) の前半部分の高次表意が「話し手は相手の話が面白いだなんてとんでもないと思っている」のような乖離的態度だとすると、その高次表意と後続する発話「私は君の話が面白いとは思わない」との間に矛盾は生じないはずだが、実際のところ (13) は (12) と同様に不合理に響く。この事実は、たとえアイロニー専用表現といえども、それが imply する高次表意はあくまで「話し手が……と思っている」であるということを強く示唆する。ここでもやはり、乖離的態度を高次表意であると考えるべきではないように思われる。

3. アイロニーと間接言語行為の並行性

本稿は以上の観察を根拠に、アイロニー専用表現がコード化する乖離的態度は高次表意とは別のレベルにあると主張する。この立場はアイロニーの乖離的態度を高次表意とみなす多くの研究 (e.g., 東森・吉村 2003, 今井 et al. 2021, Itani 1994, 三原 1997, 西田谷 1997, Nishikawa 2010, Sperber and Wilson 1998, Piskorska 2014, Wilson 2006, 2009, 2013, Yus 2000, 座間 2003) に反するが、本稿の主張の擁護されるべき理由が 2つある。

第一に、関連性理論では言語的アイロニー一般を自由間接話法の一種とみなした上で、話し手が他者の発言・思考をエコーすることでその帰属先である他者に乖離的態度を示す行為として取り扱うという点である (Sperber and Wilson 1995[1986], Wilson and Sperber 1992, 1993, 2012, etc.; cf. Witek 2022)。これは関連性理論における言語的アイロニー一般が、表意への話し手の態度ではなく表意への他者の態度への話し手の態度を伝

達する行為として分析されることを意味する。つまりアイロニーに伴う乖離的態度は、言うなれば“高次-高次表意”的ようなものとして暗に理解されてきたのである。乖離的態度を単純な高次表意でもなく推意でもないとする本稿の立場はこれに整合し、乖離的態度を単純な高次表意であると考える伝統的な立場はこれに整合しない。

そして第二に、間接言語行為に用いられる (14) が疑問文形式を持ちつつも事実として依頼専用表現であることを考えると、この種の表現は「この発話を依頼的態度のもとに処理せよ」という手続的意味をそのどこかにコード化していると考えられるが、その一方で「それって依頼？」と問われた話し手が「いえ、質問です」と言って自身の依頼的態度を取り消すことも——印象は悪いが——原理的には可能である。特定の言語行為への専用性と取り消し可能性を併せ持つという特徴は、本稿がこれまでに取り上げたアイロニー専用表現と並行的であるとともに、間接言語行為に伴う依頼的態度が高次表意でも推意でもないということを物語っている。

(14) Can you pass me the salt? (cf. Brown and Levinson 1987: 邦訳 91-92, 181-199)

(15) #Can you pass me the salt?; but I don't want to know if you can.

さらに (15) に見る通り、(14) はムーアのパラドクスを生じさせるという特徴においてもアイロニー専用表現と共通している。この事実は、(14) の高次表意は「話し手は聞き手が話し手に塩を渡すことを依頼している」ではなく、あくまでも「話し手は『聞き手が話し手に塩を渡すことができる』の真偽を知りたがっている」として復元されることを示している。以上のことを考えると、アイロニー専用表現（およびアイロニー一般）に伴う乖離的態度が処理されると考えられる“別のレベル”ないし“高次-高次表意”と称する領域は、決してアイロニー専用表現を説明するためだけに設定されたアド・ホックなものではなく、間接言語行為を処理する際に私たちがごく普通にアクセスしてきた領域でもあるということが確認できる。

以上の議論により、アイロニーが伝達する乖離的態度および間接言語行為は通常の意味での高次表意や推意として処理されていないという説の尤もらしさが示されたようだ。そしてこれは、そうした特殊な——ある種の演技性を含んだ——態度でさえ発話形式のうちにコード化されうるという事実が再発見されたということでもある。私はこの結論が、私たちの日常言語が避け難く有する演技性に改めて目を向けさせるという点で意義あるものだと信じているが、こうした価値判断は読者に委ねるとしよう。せめて「はいはい面白い面白い」と言われないことを願いつつ、ここは筆を擱くことにする。

*本稿は日本学術振興会の科学研究費助成事業による科学研究費補助金の交付を受けて行なった研究の成果である (JSPS KAKENHI Grant Number JP 21J22225)

参考文献

- Austin, J. L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford: Oxford University Press.
- Blakemore, D. 2000. "Indicators and Procedures: nevertheless and but." *Journal of Linguistics* 36, 463-486.
- Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. [田中 典子 (監訳) . 2011. 『ポライトネス: 言語使用における、ある普遍現象』東京 : 研究社.]
- Clark, B. (W.) 1991. "Relevance Theory and the Semantics of the Non-declarative Sentences." University of London, Ph.D. thesis.
- Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation." *Syntax and Semantics* 3, 41-58.
- Grice, H. P. 1978. "Further Notes on Logic and Conversation." In Coke, P. (ed.) *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*, 113-127. New York: Academic Press.
- Higashimori, I. 1994. "Cognition, Synonymy and Definitions." *Euralex 1994 Proceedings*, 93-100.
- 東森 勲・吉村 あき子. 2003. 『関連性理論の新展開：認知とコミュニケーション』東京 : 研究社.
- Ifantidou-Trouki, E. 1993. "Sentence Adverbials and Relevance." *Lingua* 90, 69-90.
- 今井 邦彦・岡田 聰宏・井門 亮・松崎 由貴. 2021. 『語用論のすべて』東京 : 開拓社.
- Itani, R. 1994. "A Relevance-based Analysis of Hearsay Particles: Japanese Utterance-final *tte*." *UCL Working Papers in Linguistics* 6, 379-402.
- 三木 那由他. 2022. 「言い抜け可能性と取り消し可能性」、『大阪大学大学院文学研究科紀要』62、1-17.
- 三原 京. 1997. 「付加疑問文の特性と共起関係について」、*Osaka Literary Review* 36, 118-129.
- Moore, G. E. (1942) "A Reply to My Critics." In Schilpp, P. A. (ed.) *The Philosophy of G. E. Moore*, 535-677. La Salle, Illinois: Open Court.
- 西田谷 洋. 1997. 「発話態度と話法-政治小説のアイロニ-性」、『金沢大学語学・文学研究』26、32-41.

- Nishikawa, M. 2010. "Oh as a Discourse Marker." In Raitaniemi, M., S-K. Tanskanen, M-L. Helasvuo and M. Johansson (eds.) *Interactional Perspectives on Discourse: Proceedings from the Organization in Discourse 3 Conference*, 125-148.
- Norrick, N. R. 1995. "Hunh-tags and Evidentiality in Conversation." *Journal of Pragmatics* 23, 687-692.
- Piskorska, A. 2014. "A relevance-theoretic perspective on humorous irony and its failure." *Humor* 27(4), 661-685.
- Recanati, François. 2003. "Embedded Implicatures." *Philosophical Perspectives* 17, 299-332.
- Sakai, Tomohiro. 2021. "On the Equivalence of the Pretense Account and Echoic Account of Irony." 『東京大学言語学論集』 43、221-246.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1995 [1986]. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford, Cambridge: Blackwell Publishers Inc.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1998. "Irony and Relevance. A Reply to Seto, Hamamoto and Yamanashi." In Carston, R. and S. Uchida (eds.) *Relevance Theory: Applications and Implications*, 283–293. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Wilson, D. 2006. "The Pragmatics of Verbal Irony: Echo or Pretence." *Lingua* 116, 1722-1743.
- Wilson, D. 2009. "Irony and Metarepresentation." *UCL Working Papers in Linguistics* 21, 183-226.
- Wilson, D. 2013. "Irony Comprehension: A Developmental Perspective". *Journal of Pragmatics* 59, 40-56.
- Wilson, D. and D. Sperber. 1992. "On Verbal Irony." *Lingua* 87, 53-76.
- Wilson, D. and D. Sperber. 1993. "Linguistic Form and Relevance." *Lingua* 90, 1-25.
- Wilson, D. and D. Sperber. 2002. "Truthfulness and Relevance." *Mind* 11, 583-632.
- Wilson, D. and D. Sperber. 2012. *Meaning and Relevance*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Witek, Maciej. 2022. "Irony as a Speech Action." *Journal of Pragmatics* 190, 76-90.
- Wittgenstein, L. 1953[1968]. *Philosophical Investigations*. Oxford: Basil Blackwell.
[Translated by G. E. M. Anscombe]
- Yus, F. 2000. "On Reaching the Intended Ironic Interpretation." *International Journal of Communication* 10 (1-2), 27-78.
- 座間 直樹. 2003. 「アイロニー表現とエコー発話」、『神奈川大学大学院言語と文化論集』 10、33-74.

言語使用の三層モデルからみる「マジ卽」と「ぴえん」の語用論的機能

工藤 俊

駒沢女子大学

<Abstract>

This paper is concerned with the linguistic characteristics of two Japanese teen slang words, *maji-manji* (マジ卽) and *pien* (ぴえん). The particular interest is their pragmatic function from the viewpoint of “the three-tier model of language use,” which a series of previous studies (Hirose (2013, 2016, 2017 and others)) has proposed. The main claims are as follows: (i) *Maji-manji* focuses on the so-called interpersonal relationship rather than the situation report in the model. (ii) In contrast, the use of *pien* is based on the situation report rather than the interpersonal relationship.

キーワード：マジ卽、ぴえん、言語使用の三層モデル、状況報告、対人関係

1. はじめに

本稿はまず、若者ことばの一種である「マジ卽」と「ぴえん」の例を比較考察し、類似点と相違点を整理するところから話を起こす。そして、廣瀬の一連の研究で提唱された「言語使用の三層モデル」の観点から、両表現の特徴を説明する。

- (1) a. 東北電車遅れすぎ！予定狂った最悪、、マジ卽 (Kudo (to appear))
b. 購入から5年のmacbookではスペックが追いつかないぴえん (工藤 (2021b:141))

「マジ卽」は、2016年から2017年頃を中心に流行した若者ことばである。文脈依存的で特定の意味を持たず、「高揚した感情を描出する表現であり、「悲しさ」等の否定的感情のみならず、「嬉しさ」等の肯定的感情、さらにはその他の感情的な状況を描出する表現」と定義できる。また、「ぴえん」は人の泣き声をオノマトペ化した若者ことばの一種であり、主に「悲しさ」を表す際、感動詞的に用いられる。

以下では、これらの表現を様々な観点から考察した上で、「マジ卽」は状況報告よりも対人関係調整に重きが置かれるのに対し、「ぴえん」はその逆であることを主張する。

2. 類似点

「マジ卽」と「ぴえん」を比較考察する動機づけとして、両表現は言語学的に類似したふるまいをみせることが挙げられる。本節では、両表現を意味、統語、そして談話の観点から簡単に概観する。

2.1. 意味的類似性

- (2) a. iPhone 壊れた。マジ卽。 b. 私こんな顔してたっけ？うえーんぴえん（否定的）
(3) a. ステーキ美味しすぎ！マジ卽！ b. もうほんと最高ぴえん（肯定的）
（工藤（2021b:142））

「マジ卽」のみならず、(3b)のように「ぴえん」も肯定的な感情を描出できる。つまり、両表現ともに「否定」と「肯定」という対極的な意味特性が備わっている。

2.2. 統語的類似性

- (4) a. この池マジ卽だ¹ b. みおりすげーかわいくてぴえんだ²、
(5) a. これマジ卽だった！美味しさが過ぎますわっ³ b. 桜が散ってて悲しみぴえんだった…⁴
(6) a. まぶたも腫れてるし、本当にマジ卽だよ。⁵ b. 本当にぴえんだよ⁶
(7) a. 今日忙しすぎてマジ卽だわ～～⁷ b. せっかくの土曜日暇すぎてぴえんだわ⁸
(8) a. マジ卽な感じがキュンです⁹ b. ぴえんな状況です¹⁰

(4)から(8)は、「マジ卽」と「ぴえん」が形容動詞の終止形活用語尾「だ」や連体形活用語尾「な」に接続している例である。これらはすべて、形容動詞としての特徴と合致するので、「マジ卽」も「ぴえん」も形容動詞としての用法も有する。この点で、統語的にも類似しているといえる (cf. 広辞苑第七版 (2018)、大野 (2013) 他)。

2.3. 談話的類似性

- (9) a. 幸せそうでマジ卽だね♪¹¹ b. メイク上手くいかなくてぴえんだね¹²
(10) a. 帰りの渋滞マジ卽だよ。¹³ b. お粥食べたからもう寝ます…ぴえんだよ¹⁴

廣瀬(2017)などによると、「ね」や「よ」は聞き手志向の終助詞である。(9)の場合、終助詞「ね」が両表現の終止形に続いているが、これは話者の意見に対して聞き手に同意を促すような用法である。(10)の終助詞「よ」は、聞き手にとって未知だと思わ

れる情報を伝達する際に用いられる。これらの文法性から、両表現とともに聞き手の存在を前提とした表現であるという点で類似している。

3. 相違点

2節の考察から、両表現は一見、類似した言語表現であると予測できるかもしれない。しかし、以下に示すように相違点も存在する。以下では、文脈依存度、意味素性、緩和(hedge)の3点について、両表現の特性の違いを考察する。

3.1. 文脈の依存度

- (11) a. マジ卍。 b. びえん。

(11)のように文脈がない場合は解釈に差が生じる。「びえん」は「悲しさ」もしくは「嬉しさ」を表していると予測できる一方、「マジ卍」の正確な解釈に辿り着くのは困難である(工藤(2019:66))。これは、両表現の語彙意味に還元される。先に述べたように、「びえん」は「泣く」という行為のオノマトペなので、その行為に関連付けられる「悲しさ」もしくは「嬉しさ」のいずれかに限定される。したがって、発話の意図を推測することは比較的容易である。一方「卍」は元々、寺院等を表す記号であり、感情を伝達するための言語表現ではない。つまり、若者ことばとしての「マジ卍」は、「卍」の原義が解釈にまったく反映されておらず、聞き手に大きな推論の負担を強いながら用いられる特異な表現である(工藤(2021b))。なお、現代用語の基礎知識(2022:109)には「本当に、本気で、やる気満々、上等だ、強そうなど。マジ卍は卍の強調形。」と定義されているが、上記でみた「マジ卍」の例の意味は、この定義には当てはまらない。のことからも、「マジ卍」は多様な解釈の可能性を含んでいることがうかがえる。

なお、本来は言語的意味を持たない「卍」という記号を言語表現として用いることにより、自主規制音と同等の機能を果たすことになる。その結果、聞き手は「マジ卍」の語彙意味的な手がかりが一切ない状態で、文脈のみから適切な解釈を推測することを強いられる。つまり、「マジ卍」の適切な解釈を得るには、文脈や状況に大きく依存するといえる。

3.2. 意味素性

3.1.の考察を意味素性の観点から捉え直すと、表1のようにまとめられる。

	意味素性
「マジ卽」	不特定
「ぴえん」	[SADNESS] または [HAPPINESS]

表 1:「マジ卽」と「ぴえん」の意味素性

(12) A: 月曜日はマジ卽だわ。 (13) (B は「ぴえん」の用法を知っていることが前提)

B: え？ どういう意味？ A: スマホが壊れてぴえんだわ。

B: #え？ どういう意味？

A: 「どういう意味？」ってどういう意味？

表 1 の結果は、(12)および(13)の会話にも大きく反映される。(12)の話者 B は、「マジ卽」の用法を知っていたとしても、意味素性の不特定性から、A の発言の意図を正確に把握することは困難であり、(12B)のように問うことができる。一方「ぴえん」の意味素性は[SADNESS] または [HAPPINESS] に限定され、文脈によって比較的容易に特定できる。したがって、(13)の話者 B が、「ぴえん」の意味を知っているにもかかわらず、(13B)のように聞き返すことはできない。その証拠に、A は「「どういう意味？」ってどういう意味？」と問い合わせることができる。

3.3. 緩和のタイプ

- (14) a. お兄ちゃんに理不尽なこと言われたんだけど。{マジむかつくな／マジ卽}。 (工藤 (2021a:107))
 b. あいつ、私の秘密をばらしやがった!! {マジむかつくな／マジ卽/*ぴえん} !! (Kudo (to appear))

(14a)の後半部「マジむかつくな」という発言は、話者の感情がむき出しで露骨な印象を与える。そのため、話し手に対する聞き手の心象は悪くなる可能性があり、対人関係に軋轢が生じかねない。一方、聞き手依存度が高い「マジ卽」に置き換えると、当該表現の語彙意味的な曖昧さによって、聞き手に推論の余地を与える。その結果、聞き手は話し手の明確な意図を理解することはできないながらも、文脈から否定的な内容を述べていると推測できる。言い換えると、聞き手にあえて推論の負担を課すことで、話し手は「マジむかつくな」という露骨な表現を発して、ポジティブ・フェイスの脅威にさらされることを回避しつつ、大まかな意図を聞き手に伝達することができる。この例からも、「マジ卽」は特に対人関係に配慮した表現であることが分かる。

一方、話者の怒りを表す(14b)のような文脈で「ぴえん」を用いることはできない。

これは、「ぴえん」の表す出来事が悲しみや喜びであることに起因している。では、「ぴえん」の語用論的効果とはどのようなものであろうか。

- (15) a. 私、昨日誕生日だったのにメール来なかった。今、とてもつらい。ぴえん
 b. 地元離れちゃったから寂しくて死にそうぴえん

(工藤 (2022:205))

文脈を考慮しなければ、「とてもつらい」や「死にそう」といった表現は、話し手が相当深刻な状況にあるという印象を与える。そこに「ぴえん」を付加することで、音韻的な柔らかさも相まって、深刻さを緩和する効果が生まれる。加えて(15a)では、絵文字の可愛らしさも深刻さの緩和に貢献している。この深刻さの緩和は、(15)の文脈から「ぴえん」および絵文字を省略した(16)と比較すると明確になる。

- (16) a. 私、昨日誕生日だったのにメール来なかった。今、とてもつらい。 (ibid.)
 b. 地元離れちゃったから寂しくて死にそう (ibid.)

緩和表現を使用しないことで、発話者の状況が切迫している印象を聞き手に与える。したがって、「ぴえん」および関連する絵文字の使用は、深刻さを回避する語用論的効果をもたらすと考えられる。

ここまで議論をまとめると以下のようになる。

	「マジ卽」	「ぴえん」
緩和のタイプ	怒りに起因する攻撃性の緩和	悲しさに起因する深刻さの緩和

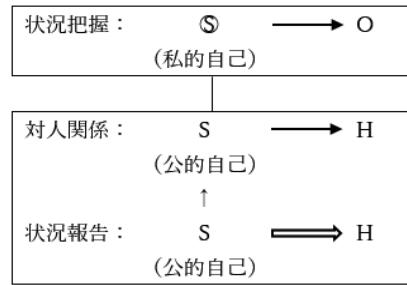
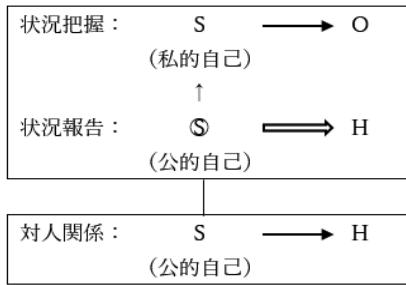
表2:「マジ卽」と「ぴえん」の緩和のタイプ

4. 言語使用の三層モデルからみた「マジ卽」と「ぴえん」

4.1. Hirose (2013)、廣瀬 (2016, 2017)

3節で明らかにしてきた「マジ卽」と「ぴえん」の相違点を説明する際、廣瀬の一連の研究における「言語使用の三層モデル」が示唆的である。廣瀬は、言語使用は「状況把握」、「状況報告」、「対人関係」の3つの層からなり、言語の持つ自己中心性（つまり無標の直示的中心）が、英語のように「公的自己」、つまり伝達の主体にあるか、日本語のように「私的自己」、つまり思考・意識の主体にあるかによって、3つの層の

組み合わせが異なると主張している。(廣瀬 (2017:2))



S: 話し手（主体） O: 状況（客体） H: 聞き手
 \longrightarrow : 捉える \Longrightarrow : 伝える ○: 無標の直示的中心

詳細な説明は廣瀬(2017)に譲るとして、ここでは本論に関わる概念の簡単な説明にとどめる。Ⓐが表す無標の直示的中心が公的自己にあるのが英語で、私的自己にあるのが日本語である。状況把握は、私的自己 S が状況 O を解釈し、一定の思いを形成する層、状況報告は、私的自己による状況把握を公的自己 S が聞き手 H に伝達する層、そして対人関係は、公的自己 S が聞き手との関係を考慮し、対人調節を行う層である。図 1 のように、英語では状況把握と状況報告が一体化し、それに対人関係の層が付加される関係になる。一方、図 2 の日本語では、状況把握が状況報告および対人関係から独立している一方、状況報告は対人関係と一体化する関係になっている。

4.2. 「マジ卽」と「ぴえん」の状況報告および対人関係

前節の三層モデルの簡単な導入を踏まえたうえで、話を「マジ卽」と「ぴえん」に戻すとしよう。両表現の意味素性をまとめた表 1 を改めてご覧いただきたい。「マジ卽」には、「卽」という記号に由来する意味解釈の不確定さがあることを述べた。つまり、この表現自体に明確な意味は備わっておらず、いわば後付けのように「喜び」、「悲しみ」、「怒り」などを表すようになったといえよう。これを踏まえると、「マジ卽」を使用する際は、置かれた状況を正確に報告するというよりも、対人関係を調節することにフォーカスが絞られているのではないかといった仮説を立てることができる。

- (17) a. お兄ちゃんに理不尽なこと言われたんだけど。{マジむかつぐ／マジ卽}。
 b. あいつ、私の秘密をばらしやがった!! {マジむかつぐ／マジ卽／*ぴえん} !!
 (= (14))

「マジむかつく」、もしくはより過激な「死ね」といった露骨な表現を使えば、状況報告という側面においては、意思伝達は問題なく達成されるであろう。しかし、その代償として「言葉の汚い奴だ」と認識される可能性も高くなる。一般に、率直な状況報告によってもたらされるリスクよりも、対人関係の維持を優先しようとする心理がはたらく。そこで、明確な語義を持たない「マジ卍」を使用することで、聞き手に推論の負担を強いながら、正確ではないものの、自身の思いをニュアンスで伝達することができる。その結果、3.3.でみた「露骨さの緩和」が達成される。この「露骨さの緩和」というのは、「マジ卍」の語義から創出された語用論的効果というよりは、意味が不明な表現に無理やり意味を乗せることで生じる語用論的効果である。

一方「ぴえん」は、自己の思いを報告すること、つまり状況報告の側面が際立つ表現である。もちろん、「深刻さの緩和」という対人関係調整機能があることは3.3.でみたが、あくまでもそれは「悲しい」という感情を聞き手に伝達しようとする意図が存在し、それを「ぴえん」という言語形式に乗せていることが前提である。

(18) a. ぴえん b. マジ卍

(18a)のように、先行文脈がない環境で「ぴえん」が発話されると、その語義から聞き手は否定か肯定のいずれかに解釈を絞ることができる。一方、「マジ卍」には特定の語義がないので、(18b)のように発話されても、発話者の心境を読み取ることは困難である。この事実からも、「マジ卍」は状況報告よりも対人関係調整を志向する表現であるのに対し、「ぴえん」は状況報告に主眼がおかれた表現であることがうかがえる。

5. 終わりに

本研究では、「マジ卍」と「ぴえん」の記述的考察から始め、そこで明らかになった両表現の違いを「言語使用の三層モデル」の観点から説明することを試みた。そして、「マジ卍」は対人関係調節に重きが置かれ、状況報告は二次的である一方、「ぴえん」は対人関係調整よりも状況報告志向であることを主張した。今後は、両表現と他の若者ことばとの比較や、英語のスラングとの比較に研究の範囲を広げていきたい。

注（以下のURLはすべて2023年4月1日最終閲覧）：

¹ <https://twitter.com/hamuhamu9434/status/1583665734441664512>（投稿日：2022.10.22）

² https://twitter.com/wayne_tsuki/status/1292707148296671232（投稿日：2020.8.10）

- ³ <https://twitter.com/yjJKAivapraTATW/status/1541622259819106305> (投稿日: 2022.6.28)
- ⁴ https://twitter.com/papa_pachomaru/status/1639913858025549824 (投稿日: 2023.3.26)
- ⁵ <https://twitter.com/hiyori09tales/status/1549300141987078144> (投稿日: 2022.7.19)
- ⁶ https://twitter.com/Ruru_chan70/status/1640964518951133184 (投稿日: 2023.3.29)
- ⁷ https://twitter.com/yaki_Typhlosion/status/1566779168326443009 (投稿日: 2022.9.5)
- ⁸ https://twitter.com/srsn_ysyk/status/1292100710948130817 (投稿日: 2020.8.8)
- ⁹ <https://twitter.com/fearal8/status/1589988745230848000> (投稿日: 2022.11.8)
- ¹⁰ <https://twitter.com/onyo0131/status/1641067584325046274> (投稿日: 2023.3.29)
- ¹¹ https://twitter.com/full_metaller/status/1297000208954359808 (投稿日: 2020.8.22)
- ¹² https://twitter.com/tamami_skgc/status/1556129716800614400 (投稿日: 2022.8.7)
- ¹³ https://twitter.com/1982_shovel/status/1458199585826873345 (投稿日: 2021.11.10)
- ¹⁴ <https://twitter.com/603sawapippi/status/1557314342965886977> (投稿日: 2022.8.10)

参考文献

- 大野 清幸. 2013. 「日本語の形容動詞に関する予備的研究：第一言語獲得過程と動的文法理論」、『愛知淑徳大学論集－交流文化学部篇－』第3号、69–95、愛知：愛知淑徳大学。
- 工藤 俊. 2019. 「若者ことば「マジ卽」の言語的特徴—「やばい」との比較を中心に—」、『駒沢女子大学研究紀要』第26号、63–74、駒沢女子大学：東京。
- 工藤 俊. 2021a. 「若者ことば「マジ卽」の語用論的特徴」、『英語学・英語教育研究』第26卷40号、99–112.
- 工藤 俊. 2021b. 「若者ことば「ぴえん」の文法的特性と推論の負担について」、『日本語用論学会第23回大会発表論文集』第16号、141–144.
- 工藤 俊. 2022. 「「マジ卽」と「ぴえん」に映る若者の心」、『ユリイカ』2022年8月号、200–208、青土社：東京。
- Kudo, S. to appear. "Japanese Teen Slang *Pien* (ぴえん) and *Mazi-manzi* (マジ卽) as a Hedge," *Proceedings of 56th Linguistics Colloquium (Linguistik International)*, Peter Lang Publishing: Bern.
- Hirose, Y. 2013. "Deconstruction of the Speaker and the Three-Tier Model of Language Use," *Tsukuba English Studies* 13, 1–28
- 廣瀬幸生. 2016. 「主観性と言語使用の三層モデル」、『ラネカーの（間）主観性とその展開』、中村芳久・上原聰（編）、333–355、開拓社：東京。
- 廣瀬幸生. 2017. 「自分の言語学—言語使用の三層モデルに向けて—」、『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』、廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子（編）、2–24、開拓社：東京。
- 『広辞苑（第七版）』、新村 出（編）。2018. 岩波書店。
- 『現代語の基礎知識2022』、自由国民社（編）。2022. 自由国民社。

誇張に用いられるメタファーの考察

角出凱紀

京都大学大学院

< Abstract >

One of the functions of metaphor is to exaggerate. A great deal of laundry, for example, is sometimes referred to as *yama-noyona-sentakumono*, “a mountain of laundry” in a hyperbolic way. For another example, heavy rain is hyperbolically referred to as *taki-noyona-ame*, “floods of rain”. In addition, an extremely hard job is metaphorically referred to as *oni-noyona-shigoto*, “a devil of a job”. This paper attempts to analyze these metaphoric hyperboles which stem from image-mappings from the perspective of grammaticalization, and claims that these metaphorical expressions have undergone the process to a greater or lesser extent, which result in the different usages.

【キーワード】：イメージ・メタファー、誇張法、文法化

1. はじめに

メタファーの主要な機能の一つとして数量や程度の誇張が挙げられる (Goatly 1997: 164)。例えば、『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版』(以下、BCCWJ。中納言バージョン 2.7.0。データバージョン 2021.03。) では、次のような実例が観察される。

- (1) ...回転鮨のネタよりもっと薄い紙のようなハムやチーズがたった一枚、パサパサパンに大事そうにはさんである ...

(PB59_00404 7020)

ここでは「ハムやチーズの薄さ」が「紙の薄さ」に喩えられているが、ハムやチーズの薄さを理解するうえで紙の薄さを媒介とする必要は全くない。言い換えれば、「紙のような」は単なる強調や誇張のために挿入されているに過ぎない。「紙のような NP」によって薄さを強調するような用例はコーパス上では他にほとんど見つからず、件の

表現は非常に新奇的なものであると思われる。しかし、誇張のメタファーは(2-4)のように定着した慣用表現となっていることがある。

- | | |
|-------------------------|--------------------|
| (2) 滝のような汗が、額から頬へと… | (OB0X_00002 21390) |
| (3) …毎日山のような洗濯物です。 | (LBi5_00033 20650) |
| (4) 鬼のような残業が待っていたりしないか。 | (OC04_01461 950) |

本研究では、このような定着した誇張のメタファーに関して以下の二点を主張することを通して、これまで軽視されてきたイメージ・メタファーに光をあてる目的とする。

- A) 多くのイメージ・メタファー由来の誇張表現が文法化を経ている。
- B) 文法化の程度差によって、スロットに生起しうる名詞句の自由度、および、誇張することができる意味内容が異なる。

本稿の流れは次の通りである。第2節ではイメージ・メタファーに関する先行研究の記述を確認し、続く第3節で本研究が則る文法化のアプローチを紹介する。第4節では、ケーススタディとして「滝のようなNP」「山のようなNP」「鬼のようなNP」の三例に関して事例分析を試みる。本研究のまとめは第5節で行う。

2. イメージ・メタファー

Lakoff (1987b) は、概念メタファー (conceptual metaphor) とは毛色が異なるものとして、イメージ・メタファー (image metaphor) の存在を指摘している。

- (5) a. My wife . . . whose waist is an hourglass.
b. His toes were like the keyboard of a spinet.

(Lakoff and Turner 1989: 90)

Lakoff (1987b) によると、概念メタファーが複雑な概念構造 (conceptual structure) を写像する一方で、イメージ・メタファーは慣習的な心的イメージ (mental image) を写像する。具体的には、(5a)では〈砂時計〉の心的イメージを〈女性の腰〉の心的イメージに写像されている。同様に、(5b) では〈鍵盤〉の心的イメージが〈爪先〉の心的

イメージに写像されている。ここで心的イメージは主に視覚的なものを指し示す。しかし、心的イメージは、本来、視覚的なものに限定されず、音響イメージや力動的イメージも含みうることに注意する必要がある (Lakoff 1987c: 146)。

そして、概念メタファーと同様にイメージ・メタファーも慣習化されることがある。Lakoff (1987a) は慣習化されたイメージ・メタファーとして二つの類型を示している。

- (6) a: pedigree 型: 根源領域の心的イメージ及びイメージ写像が存在しない
- b: dunk 型 : 根源領域の心的イメージ及びイメージ写像が存在する

例えば、「家系図」を意味する英語の *pedigree* は、「鶴の脚」を意味する古フランス語 *pie de grue* が語源である。この意味変化の背景には、<鶴の脚>の心的イメージが<家系図>の心的イメージに写像されたイメージ・メタファーが関わる。しかし、現代の英語話者にとって<鶴の脚>の心的イメージはもはや「死んだ」ものであり、したがって、イメージ写像も「死んだ」ものとなっている。一方で、バスケットボールの「ダンクショット」を意味する *dunk* は、「クッキー や ドーナツなどの軽食を自身が飲んでいる飲み物に浸す」という意味も持つ。このような多義性は、後者の心的イメージが前者の心的イメージに写像されることによって実現される。しかし、前述の *pedigree* とは異なり、現代の英語話者にとって *dunk* における両者の心的イメージは「生きた」ものであり、その写像関係も「生きた」ものである (Lakoff 1987a: 144)。

3. 文法化

次に本稿が分析に用いる文法化について簡単な紹介をしておく。Traugott (2010)によると、文法化に対するアプローチ方法は大きく二つ存在する。一方は言語変化における縮小 (reduction) に焦点をあてるアプローチであり、もう一方は拡張 (expansion) に焦点をあてるアプローチである。本研究で言うところの文法化とは後者のアプローチを指す。

Bybee (2015) は、文法化における拡張の一例としてカテゴリー拡張 (category expansion) を指摘している。

- (7) Grammaticalizing constructions also have slots or categories that start out as semantically restricted, but expand or become more schematic (covering more meanings) during the process.

(Bybee 2015: 127)

また、カテゴリー拡張はしばしば意味の漂白化 (**bleaching**) を伴うことになることが Bybee (2015: 129) によって指摘されている。

例えば、現代英語の助動詞 *can* の発達はカテゴリー拡張と意味の漂白化の相互作用によるものであると分析される (Bybee 2003, 2015)。件の助動詞のもとになった *cun-nan* は元来動詞であり、ごく限られた動詞のみを補部として許していた。しかし、中英語期に差し掛かると補部にくる動詞の種類は拡張されていくことになる。このことは、*can* の意味が *mental ability* から幅広く *ability* を表すものへと漂白化したことを示唆する。更に、初期近代英語期には *root possibility* の用法が登場し始め、それに伴い主語のスロットに人間以外のものを迎えるようになる。

表: *can* の文法化 (Bybee 2003: 606)

Stage	Subject	Main verbs
Mental ability	Human agents	Intellectual states and activities
		Communicating
		Skills
Ability	Human agents	All of the above
		Overt actions and activities
Root possibility	Human agents Passive subjects Inanimate subjects	All of the above

4. 事例分析

本論文では、ケーススタディとして冒頭に挙げた「滝のような NP」「山のような NP」「鬼のような NP」の三例を扱う。これらは全てイメージ・メタファー由来の誇張表現であるが、NP のスロットに生起できる語句の自由度、及び、誇張することができる意味内容において異なる振舞いを見せる。

4.1. 「滝のような NP」

BCCWJにおいて、「滝のような NP」の実例は全 24 例見つかるが、NP のスロット

に生起する名詞としては「雨／大雨」(10例; 41.6%)と「汗」(9例; 37.5%)が大半を占める。

- (8) a. 空から降り注ぐ滝のような雨で… (LBk9_00245 1280)
 b. 全身から滝のような汗が流れ落ち… (PB29_00363 16720)

周辺的な事例として、「涙」「小便」「時間」が各1例ずつ見つかる。

- (9) a. 父は滝のような涙を流しながら… (PB32_00158 42000)
 b. 急に馬が停ったかと思うと滝のような小便をした。 (PB29_00248 49510)
 c. …滝のような時間が、垂直に子供のなかを流れている… (OT03_00045 26910)

ここに挙げたすべての用例において共通するのは、NPのスロットに生起する名詞句が<流れる液体>という心的イメージを有していることである。唯一の例外として「時間」が考えられるが、これは<時間は水>という概念メタファー(大石 2006)の働きによるものであると説明できる。また、「滝のようなNP」によって誇張されているのは、NPの激しさや量の多さであるが、このことは<滝>の心的イメージが未だに生きたものであることを示唆する。したがって、Lakoff(1987a)の分類に従うと、dunkの類型に属するということになる。

以上の観察から、「滝のようなNP」ではNPのスロットにおけるカテゴリ一拡張はほぼ見られず、<滝>の漂白化もほとんど進んでいないと結論づけられる。言い換えれば、件のメタファー表現において文法化はほぼ進行していないものと考えられる。

4.2. 「山のようなNP」

次に、「山のようなNP」に話を移すことにする。BCCWJにおける「山のようなNP」の用例は全部で59例確認できる。このうち字義通りの用法や大きさの誇張(e.g. 山のような手)を除くと、43例は(10)に示されるように数量の誇張のために用いられている。

- (10)a. 床の上に山のような包みが置かれているのだ。 (OB2X_00116 92150)

- b. 山のような書類も… (PB59_00285 27480)
- c. 山のような借金で首が回らなくなりかけてる… (LBc9_00162 47410)
- d. …山のような家事をこなすことしばしばだった。 (LBn9_00216 1000)
- e. …彼の魂の中には群がる山のような妄想が積み重ねられて行った。 (LBo9_00222 1700)

ここで興味深いのは NP のスロットに生起する名詞句として「包み」や「書類」といった実体を持つものから、「借金」「家事」「妄想」といった実体を持たないものまで幅広く観察されるということである。大量に積み重なった包みや書類を山に喻えるというのは、極めてイメージ・メタファーらしい表現であり、両者の心的イメージ及びイメージ写像は生き生きとしたものであると言える。一方で、件のメタファー表現が実体を持たない「借金」「家事」「妄想」を NP のスロットに迎えるのは、<MORE IS UP>というプライマリー・メタファー (Grady 1997) の働きによるところが大きい。このメタファーによって、本来積み重ねることが難しい「借金」「家事」「妄想」を積み重ね、その空想上の嵩を山に喻えることが可能となるのである。また、「山のような NP」が誇張の対象とするのは専ら数量の多さのみである。このことは、<山>の心的イメージの中で「高さ」以外の側面が背景化されつつあることを示唆する。ゆえに、pedigree 型と dunk 型の中間段階に位置づける必要がある。

したがって、「山のような NP」ではカテゴリー拡張が少なくともある程度は認められる。また、<山>の漂白化も部分的であることから、前述の「滝のような NP」よりも文法化が進行していると結論づけられる。

4.3. 「鬼のような NP」

早瀬 (1990) は早くから奇妙な「鬼」のメタファーの存在を指摘しているが、先に利用した BCCWJ 上ではその使用例はほとんど観察されない。しかし、インターネットでは以下のような使用例の存在が認められる。

- (11)a. 鬼のような課題や宿題が出され…

(<https://www.leglabo.jp/blog/entry/post-126/>)

- b. 鬼のような忙しさ！

(<https://blog.goo.ne.jp/nissinbasket/e/e62dedb35c055e2e864e9609d69badae>)

- c. 今日の株価は鬼のような値下げ…

(<https://minkabu.jp/stock/7908/pick/10000000002658769>)

d. 三咲薰、鬼のようなカットインから2試合連続ゴール！！

(https://sakamoto.com/mitoma_goal20230103/)

e. ...「猫ホイホイ」が鬼のような可愛さ

(<https://www.buzzfeed.com/jp/tsunehikonishimaki/neko-hoihoi>)

前述の二例とは大きく異なり、「鬼のような NP」は NP のスロットに多種多様な名詞句が生起可能であり、それに応じてその誇張の対象も多岐にわたることが見てとれる。佐々木 (2010a) は現代日本人が＜鬼＞に対して抱く印象としてアンケート調査により＜恐い＞＜悪い＞＜強い＞＜大きい＞などがあると報告しているが、(11) に挙げた用例が誇張するのはそのいずれの属性にも当てはまらない。これに対して、佐々木 (2010b: 62) は、「それまで「鬼」に付着し性質を表現してきた「大きい」「強い」が、「鬼」のもとを離れたことによって、「鬼」のイメージに内包されない対象までも比喩可能となった」と考察している。つまり、本来の＜鬼＞の心的イメージのうちで「大きい」「強い」以外の側面がほぼ完全に背景化された結果、＜鬼＞とは無関係な「忙しさ」や「可愛さ」といったものを誇張するに至ったと考えられる。この点において、「鬼のような NP」は pedigree 型に属するイメージ・メタファーであるということになる。

以上より、「鬼のような NP」は他の二例よりもカテゴリー拡張と＜鬼＞の漂白化が進行しており、文法化の程度も三者の中で最も進んでいるということになる。

5. おわりに

本研究では、「滝のような NP」「山のような NP」「鬼のような NP」という三つのケーススタディを通して、誇張のイメージ・メタファーが文法化の過程を経ていること、及び、文法化の程度差により NP のスロットに生起する名詞句の自由度や誇張できる意味内容が異なるという二点を指摘した。

最後に本研究が抱える二つの問題点を指摘しておきたい。第一に、分析対象の少なさが挙げられる。本稿では紙幅の都合から「滝のような NP」「山のような NP」「鬼のような NP」という三例に分析対象を絞っているが、慣用的な誇張のメタファーは他にも「白魚のような NP」「もやしのような NP」など多数存在する。また、形式面に関しても「滝のように流れる汗」や「書類の山」「鬼かわいい」といったように「NP₁のような NP₂」以外にも多種多様な形式をとる誇張のメタファーが観察される。第二に、

文法化の程度差に対する考察の不足が挙げられる。本研究では誇張のメタファーの文法化に程度差が存在することを指摘したが、このような程度差が生じる背景については明らかになっていない。以上の点に関しては、今後の課題としたい。

使用コーパス

国立国語研究所（編）。『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版』（中納言バージョン 2.7.0。データバージョン 2021.03。）。

参考文献

- Bybee, J. 2003. Mechanisms of Change in Grammaticization: The Role of Frequency. In Joseph, B.D. and R.D. Janda (eds.) *The Handbook of Historical Linguistics*, 602–623. Oxford: Blackwell Publishing.
- Bybee, J. 2015. *Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goatly, A. 1997. *The Language of Metaphors* (2nd edition). London and New York: Routledge.
- Grady, J.E. 1997. Foundations of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- 早瀬 尚子. 1990. 「「鬼」はどこから来たか」、『Osaka Literary Review』 29、1–9.
- Lakoff, G. 1987a. The Death of Dead Metaphor. *Metaphor and Symbolic Activity* 2(2), 143–147.
- Lakoff, G. 1987b. Image Metaphors. *Metaphor and Symbolic Activity* 2(3), 219–222.
- Lakoff, G. 1987c. *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: Chicago University Press.
- Lakoff, G. and M. Turner. 1989. *More than Cool Reason*. Chicago: Chicago University Press.
- 大石 亨. 2006. 「『水のメタファー』再考—コーパスを用いた概念メタファー分析の試みー」、『日本認知言語学会論文集』 6、277–287.
- 佐々木 翔太郎. 2010a. 「日本と中国における『鬼』のイメージの差異について—マインドマップ調査の分析」『山口大學文學會志』 60、61–73.
- 佐々木 翔太郎. 2010b. 「『鬼』のイメージと比喩表現について—アンケート調査の分析ー」『山口國文』 33、54–68.
- Traugott, E.C. 2010. Grammaticalization. In Jucker, A.H. and I. Taavitsainen (eds.) *Historical Pragmatics*, 97–126. Berlin and New York: De Gruyter Mouton.

聞き手の commitment から見た規約的含意表現 *as* を含む節の意味解釈

徳永 和博

三重大学 (特任講師)

toku8nn@gmail.com

(Abstract)

This study reexamines parenthetical *as*-clauses that appear in sentence-initial or -final positions using a commitment-based framework (Geurts 2019). Parenthetical *as*-clauses have been characterized as expressions representing conventional implicature (CI; Potts 2002, 2005). However, this argument does not explain why negating the content of *as*-clauses is rendered felicitous, unlike other CI expressions. This paper contends that parenthetical *as*-clauses indicate assertoric commitment and hence require interlocutors to share their commitment to the content of the clauses (“commitment sharing” in Geurts’s terminology). Commitment sharing can be a starting point for negotiation between interlocutors. If the hearer declines to be committed to the content of the *as*-clauses, commitment sharing does not take place. This process explains why the content of parenthetical *as*-clauses can be denied in contrast to other CI-expressions.

Keywords: *as*-clause, commitment, conventional implicature, corpus, sociopragmatics, speech act

1. はじめに

本稿は(1)のような「挿入節として用いられる *as* 節 (parenthetical *as*-clause)」を対象に、Geurts (2019) の commitment の枠組みを用いて、その語用論的特徴を検討する¹⁾。Potts (2002) は挿入節の *as* 節を2種類に分類している。(1a)の *as* 節内では predicate に当たる部分 (*solved the problem*) が *did* で置き換えられており、(1b)の *as* 節内では、節 (*cryptography is a blast*) が省略されている。Potts (2002) では、それぞれ Predicate-*as*、CP-*as* と呼ばれている。当該 *as* 節は、(2a, b) の特徴が指摘されている。

- (1) a. Juan solved the problem, as Sven did. [Predicate-*as*] (Potts 2002: 650; 下線は筆者)
b. Cryptography is a blast, as Alan claimed. [CP-*as*] (*ibid.*: 624; 下線は筆者)
- (2) a. 挿入節の *as* 節は conventional implicature を示す表現 (CIs) の1種である。話し手は *as* 節の内容を真だと思っていることが規約的に含意される²⁾. (Potts 2002, 2005)
b. CI 表現の内容は、話し手も聞き手も否定の対象にしにくい特徴を持つ。 (Potts 2007)

第3節で確認するように (2b) の特徴づけには検討の余地がある。他の CI 表現と比べると、*as* 節は聞き手が否定の対象にしやすい傾向があるからである。そこで本稿では、第4節で取り上げる Geurts (2019) の

commitment sharing の枠組みを用いて、*as* 節が持つ社会語用論的な特徴を分析し、聞き手の立場から *as* 節の内容がどのように談話内で理解されるのかを明らかにする。そして、結論として以下の 3 点を主張する。

- (3) i. *as* 節は「節内の内容が真であるように振舞う」という「話し手の commitment」を表明する。
ii. commitment の観点から見ると、*as* 節は assertion に類似した特徴を持ち、他の CI 表現と異なり、commitment sharing を要求する。
iii. (i, ii) が *as* 節の内容の否定のされやすさに貢献している。

2. 先行研究

2.1. CI 表現としての *as* 節の特徴

Potts (2005, 2007) は、conventional implicature を示す様々な表現 (CI 表現) を扱っており、CI 表現の意味は文の真理条件的な意味から独立していると述べている。例えば、(4) の挿入句 *the cyclist* は、真理条件的な意味 (Descriptive: 〔Lance Armstrong battled cancer〕 という命題の真偽に関わる意味) とは独立した規約的に含意される意味 (*Lance Armstrong is a cyclist* という意味) を表している³⁾。

- (4) Lance Armstrong, *the cyclist*, battled cancer.
Descriptive⁴⁾ = Lance Armstrong battled cancer.
CI = Lance Armstrong is a cyclist.

(Potts (2007: 668) より本文に合わせ引用)

CI 表現の意味が真理条件的な意味と大きく異なる点は、CI 表現の意味は、談話内で話し手と聞き手の間の common ground に入るという点である。つまり、対話者間で共通知識として認識される情報なので、話し手にとっても、聞き手にとっても、真であることが当然のこととして談話内で認識される。例えば、(4) の場合、CI 表現 *the cyclist* の意味である「*Lance Armstrong* が *cyclist* であること」は、聞き手によって疑問の対象になったり、真偽を問われたりされにくくなる⁵⁾。実際、Potts (2007) は、聞き手が *No, that's wrong* と反対しても、ほとんどの場合、*Lance Armstrong battled cancer* という Descriptive の内容を否定しているように受け取られると述べている (Potts 2007: 672-673)。このように、CI 表現は、聞き手によって否定の対象にされにくくという特徴がある。

Potts (2002) は、本稿で扱う *as* 節も CI 表現の一種として分類している。(5) のように、*as* 節内の内容が真であることを規約的に含意する語であると述べている。

- (5) *As-morphemes* conventionally implicate the truth of their complement [...]
(Potts (2002: 684) より本文に合わせ引用。下線は筆者)

これまでの Potts の一連の研究を踏まえると、CI 表現である *as* 節も聞き手から否定されにくく特徴を持つと予測される。しかし、コーパスデータを観察すると、(6a) のように *as* 節の内容を否定したり、(6b) のように *as* 節の内容に嫌疑を示したりしている例が見つかる⁶⁾。

- (6) a. "But I am not an unmarried young lady, as you are."
 "I am not so young any more," Tess rejoined. (COCA: fiction)
- b. **Robin Roberts** Our thanks to the Game Show Network. For more nostalgic game show fun check out Game Show Network's "Play It Back" series featuring each decade's best shows, that's starting September 7th as you said. **Bob Eubanks** Did I say 7? **Robin Roberts** That was close enough. You still said Garvin, Gavin. (COCA: spoken より本文に合わせ引用)

(6a) は、男性である話し手が「自分はあなたのような未婚の若い女性ではない」ということを述べ、聞き手である Tess が「自分はもうそれほど若くない」という返答をしている。Tess は、話し手が述べた主節の内容に対して否定をしているのではなく、明らかに CI 表現の *as* 節の内容を否定している。(6b) についても同様である。話し手 (Robin Roberts) は概略「あなたが言ったように、Game Show Network の Play It Back シリーズが 9 月 7 日に始まる予定である」と述べているが、その後、聞き手 (Bob Eubanks) は「7 日と言いましたか」と疑問文で応答している。その後の話し手の返答 (*That was close enough*) から分かるように、話し手は聞き手が実際に述べた日付と異なる日付を言っており、聞き手にとって偽の情報を述べている。こうした例を見ると、挿入節の *as* 節は、否定のされやすさに関して、他の CI 表現と異なる特徴を持つのではないかという疑問が生じる。次節では、この疑問点を確認するために行った簡易的な容認度調査と、その結果について説明する。

3. 容認度調査

3.1. 容認度調査の概要

容認度調査の概要是 (7) である⁷⁾。もし、*as* 節が他の CI 表現と同様に否定されにくいためを持っていれば、容認度が低下することが予測される。

(7) テスト概要

- a. オンライン上のテスト (the PsyToolkit platform) を使用 (Stoet 2010, 2017)。
- b. Prolific を利用し、アメリカ英語母語話者 10 名に容認度調査を実施。
- c. フィラー文を含んだ会話のペアがランダムに表示され、聞き手の返答が自然かどうかを 4 つの尺度 (Extremely natural (EN)、Somewhat natural (SN)、Somewhat unnatural (SU)、Extremely unnatural (EU)) で答える形式を取った。
- d. 文頭・文末で使われる Predicate-*as* と CP-*as* を否定する返答 (*No, that's wrong*) を含んだ会話例を提示した。

3.2. 容認度調査の結果

以下、(8) から (15) までが、テストに用いた会話例と容認度調査の結果である。*as* 節は文頭か文末かの 2 つのタイプがあり、*as* 節内の主語は、1 人称か 2 人称かのバリエーションがある。natural か unnatural かで人數が多かった方を太字にしている。(8)-(11) は CP-*as*、(12)-(15) は Predicate-*as* である。

- (8) [CONTEXT: A few days ago, Speaker A said to Speaker B that the tunnel has been under construction for three years. Speaker B wants to point out Speaker A's mistake.]
Speaker A: Just as I said, the tunnel has been under construction for five years.
Speaker B: **No, that's wrong** [intended meaning: You didn't say that].
結果: EN (2), SN (4), SU (3), EU (1)
- (9) [CONTEXT: A few days ago, Speaker B said to Speaker A that the musical has been running for two months. Speaker B wants to point out Speaker A's mistake.]
Speaker A: Just as you said, the musical has been running for two years straight.
Speaker B: **No, that's wrong** [intended meaning: I didn't say that].
結果: EN (4), SN (3), SU (3), EU (0)
- (10) [CONTEXT: A few days ago, Speaker A said to Speaker B that the new train carries over 500 passengers. Speaker B wants to point out Speaker A's mistake.]
Speaker A: The new train carries over 300 passengers, as I said.
Speaker B: **No, that's wrong** [intended meaning: You didn't say that].
結果: EN (2), SN (4), SU (1), EU (3)
- (11) [CONTEXT: A few days ago, Speaker B said to Speaker A that the new concert hall can accommodate over 2000 people. Speaker B wants to point out Speaker A's mistake.]
Speaker A: The new concert hall can accommodate over 1000 people, as you said.
Speaker B: **No, that's wrong** [intended meaning: I didn't say that].
結果: EN (3), SN (5), SU (2), EU (0)
- (12) [CONTEXT: A few days ago, Speaker A said to Speaker B that Speaker A bought an older version of iPhone. Speaker B wants to point out Speaker A's mistake.]
Speaker A: Just as I did, Mike bought the latest iPhone.
Speaker B: **No, that's wrong** [intended meaning: You bought an older version of it, not the latest one].
結果: EN (3), SN (5), SU (1), EU (1)
- (13) [CONTEXT: A few days ago, Speaker B won second prize in the lottery. Speaker B wants to point out Speaker A's mistake.]
Speaker A: Just as you did, Juan won first prize in the lottery.
Speaker B: **No, that's wrong** [intended meaning: I won second prize, not first].
結果: EN (6), SN (1), SU (1), EU (2)
- (14) [CONTEXT: Speaker A is not so young. Speaker B wants to point out Speaker A's mistake.]
Speaker A: You're a young unmarried scientist, as am I.
Speaker B: **No, that's wrong** [intended meaning: You're not so young any more].
結果: EN (3), SN (0), SU (7), EU (0)
- (15) [CONTEXT: Speaker B is not so young. Speaker B wants to point out Speaker A's mistake.]
Speaker A: I'm a young unmarried scientist, as are you.
Speaker B: **No, that's wrong** [intended meaning: I'm not so young any more].
結果: EN (4), SN (2), SU (4), EU (0)

(8) から (15)において、(14)以外は、すべてのケースで *as* 節内の内容を否定する *that's wrong* を使った返答の容認度が高い結果となった⁸⁾。簡易的ではあるが、ここから、Potts の主張と異なり、*as* 節の内容を否定することは認可される場合が多いことが分かる。これは、他の CI 表現と異なり、*as* 節の内容が真である情報として対話者間の common ground に入るものではなく、話し手と聞き手の間で共通知識として認定するかどうかの negotiation が行われることを示唆している。この点で、(5) の一般化は再考の余地があるといえる。これを踏まえて次節では、commitment の側面から Potts の *as* 節に対する特徴づけを捉え直していく。

4. Commitment-based theory による分析

4.1. Commitment について

まず、commitment の概念について概説する。commitment とは、元々言語哲学の分野から提案された概念で、簡潔に言えば、コミュニケーションを「他者との間に規範的な関係を創り出す行為」と捉える社会的概念である⁹⁾。このアプローチでは発話の意味を以下のように捉えている。

- (16) 「話し手が何かを意味し、聞き手がそれを受け取ったときに、話し手と聞き手はそれからどういう振る舞いをするよう義務付けられるのか」(三木 2022: 7) という規範性 (normativity) の観点から話し手の意味を分析する。

つまり、発話の意味を話し手の信念や意図という心理的な概念で捉えるのではなく、「その発話は対話者間でどういう振る舞いを期待させるものなのか」という発話によって生み出される規範的な関係をベースにして発話の意味を考える。本稿で採用するのは、その中でも Geurts (2019) で提案されている social commitment と呼ばれる枠組みである。

Geurts (2019) は、(17) のように commitment を「話し手」、「聞き手」、「命題」の 3 項関係で捉えている。この 3 項関係は $C_{a,b}p$ と表され、「 p であるという前提のもとに行行為する」という話し手 a の聞き手 b に対するコミットメントの表明であると説明されている(田村 2021: 89)。

- (17) [C]ommitment is a three-place relation between two individuals, a and b , and a propositional content, p : a is committed to b to act on p , or $C_{a,b}p$, for short.

(Geurts (2019: 3-4) より本文に合わせ引用)

(17) は話し手側からの commitment を示した定義だが、重要なのは聞き手側も話し手の命題に commit するという点である。これを commitment sharing (以下、CS) と呼ぶ。(18) はその定義である。

- (18) Commitment Sharing (CS)

If $C_{a,b}p$, then ceteris paribus $C_{b,a}p$

(Geurts 2019: 17)

(18) では、「話し手側だけでなく聞き手側も、特別な事情がなければ (ceteris paribus)、話し手が発話した p が前提になるように行行為する」という commitment が成立するということが述べられている。つまり、Geurts (2019) のいう commitment とは、話し手と聞き手の同意によってはじめて成立する関係であり、両者が受け

入れなければ成立しない関係である (Geurts 2019: 19)¹⁰⁾。(17) と (18) について、Agnes が Bruce に “Clyde is mowing the lawn” と assert した場合を例に考えてみよう。Geurts (2019) の枠組みに従えば、まず (17) より $C_{a,b}p$ が成り立つので、話し手は聞き手に対して (19a) のような commitment を示すことになる。そして、CS が成立すれば、(19b) のように、聞き手側も話し手の命題に commit することになる。

- (19) a. Agnes は Bruce に対して [Clyde is mowing the lawn] が真であるように振舞う。 ((17) より $C_{a,b}p$)
- b. Bruce も Agnes に対して [Clyde is mowing the lawn] が真であるように振舞う。 ((18) より $C_{b,a}p$ が成立)

CS が成立すれば、命題 [Clyde is mowing the lawn] は話し手と聞き手の間で真である情報として対話者間で共有されることになる。聞き手に CS が拒否された場合は、この assertion は「真の情報を伝える」という機能を果たせないので、談話の更新に寄与しないことになる¹¹⁾。CS の枠組みから考えると、assertion は「話し手が真であるように振舞う情報を伝える行為」というだけでなく、「相手にもそれが真であるように振舞うことを促す行為」(規範に基づく社会的関係を構築する行為) ということができる。次節では、これを踏まえて、*as* 節が assertion に類似した特徴があることを検討する。

4.2. *as* 節の assertion らしさ

他の CI 表現と違い、*as* 節の内容が否定されやすい要因を検討するうえで参考になるのが Green (2000) の研究である。Green (2000) によれば、(20) は 2 つの assertion に分類できるという。ひとつは、*if snow is white then grass is green* という assertion であり、もうひとつは、「発話者は雪は白いものだということに commit している」という *as* 節の表す assertoric commitment である。この *as* 節の assertion らしさを念頭に置いて、Green (2000, 2018) は (20) のような *as* 節を a weak illocutionary force indicating device (weak ifid) と呼んでいる。

- (20) If snow is, as I suppose, white, then grass is green. (Green 2000: 447 より本文に合わせ引用。下線は筆者)

weak ifid について、Green (2000) は (21) のように説明している。

- (21) For the use of such a parenthetical as ‘..., as I believe’, permits the speaker to undertake assertoric commitment to a content without asserting it. Doing so can enable the addressee to understand the speaker’s peculiar commitments without the speaker having to shoulder an unwanted argumentative burden.¹²⁾ (Green 2000: 460; 下線は筆者)

(21) では概略、「*as I believe* のような挿入節を使用することによって、話し手は assertion の内容を直接 assert することなく、その内容について assertoric commitment を表明できる」ということが述べられている。換言すれば、挿入節の *as* 節は assertion の一種ということである。

これまで見てきた Geurts (2019) の枠組みと Green (2000) の分析を基に *as* 節の社会語用論的特徴を考えると、*as* 節は assertion のように、話し手の assertoric commitment (話し手は聞き手に対して *as* 節の内容が真であるように振舞うこと) を表明する表現であり、これに加えて、聞き手との CS を要求する表現であると言える。CS を要求するということは、聞き手は *as* 節で示された内容に commit するか、しないかが求められることになる。これが、否定の されやすさに貢献していると考えられる。もし CS が成立し、話し手も聞き手も *as* 節の内容を真であるように振舞うことに commit すれば、他の CI 表現と同様に、*as* 節内の情報は対話者間の共知識として扱われる。一方、話し手が *as* 節によって提示した内容に対して、聞き手が否定したり、嫌疑を示したりすることによって「事後的な修正」¹³⁾ が行われた場合は、CS が成立せず、*as* 節内の情報は対話者間の common ground に入らないといえる。

5. 結論

本稿では、他の CI 表現と異なり、*as* 節の内容が否定されやすい点に注目して、その社会語用論的要因を commitment-based theory の観点から検討した。結論として、挿入節として使われる *as* 節は、「節内の内容が真であるように振舞う」という話し手の assertoric commitment を表明し、commitment sharing を聞き手に促す表現であるため、聞き手がそれを共有するかどうかの選択が生まれるので、否定されやすいことを指摘した。

謝辞

本稿の元となる第 25 回語用論学会の発表資料を作成するうえで大変有益なコメントをくださった 3 名の匿名査読者の方々、第 25 回語用論学会でコメントをくださった先生方、大阪大学の三木那由他先生、大阪認知言語学研究会のメンバーの方々、三重大学 Ling Supper 研究会のメンバーの方々に感謝申し上げる。本稿の不備・誤りはすべて筆者の責任である。

注

- 1) 本稿では Potts (2002, 2005) の用語に従う。
- 2) 澤田 (2020: 26) によれば、implicature は「推意」という詬語が定着しているとされており、本によっては conventional implicature を「慣習的推意」と呼ぶが、本研究では特に区別なく「規約的含意」と呼ぶ。
- 3) Potts (2005) では、非制限用法の関係節や文副詞、敬語や expressives など多様な CI 表現が扱われている。こうした理由から、厳密に言えば、ここで対象としているのは「狭義の CI 表現」である。
- 4) Descriptive は Potts (2005) などで at-issue meaning (真理条件的な意味) と呼ばれるものと同様のものである。また、CI 表現の意味が真理条件的な意味と独立していることをどう確認するのかということや、CI 表現のその他の特徴については Potts (2005) を参照。また、Gutzmann(2013) は先行研究の主張の優れたまとめとなっており、CI 表現の研究を概観するうえで有益な文献である。
- 5) Potts (2007) では、この特性を assertoric inertia と呼んでいる。
- 6) 用いたコーパスは Corpus of Contemporary American English (COCA) (Davies 2008-) である。検索日は 2022 年 9 月 27 日である。
- 7) ここで行った容認度調査は非常に簡易的なものであり、今後より厳密な形で行う必要がある。
- 8) (14) は容認度が低いが、この要因については今後の課題としたい。
- 9) commitment の捉え方や定義は様々である。言語哲学の立場からは三木 (2019, 2022) や Michael (2022)、社会語用論の立場からは Elder (2021)、関連性理論の立場から Boulat and Maillat (2017)、speech act 関係では Fogal *et al.* (2018) がある。また、Michael (2022) は規範性が関わる事例だけではなく、心理的な要因も commitment の形成に重要な役割があると主張し、実験によって仮説を検証している。

- ¹⁰⁾ commitment ベースの speech act に関する研究は歴史が古く、MacFarlane (2011) では、assertion と commitment についての研究は Peirce (1934) まで遡ることが述べられている。また、代表的な研究も列挙されている。
- ¹¹⁾ Geurts (2019) は、common ground ではなく、CS が談話の更新に関わるという立場に立っている。
- ¹²⁾ Green (2000: 460) では、“without the speaker having to shoulder an unwanted argumentative burden” とされて いるが、これは筆者の見解とは異なる。例えば (6a) のように聞き手の考えている事実と異なることを *as* 節で言わされた場合、話し手は聞き手から非難される可能性もあると思われる。
- ¹³⁾ ここでは、話し手がまず commitment sharing を要求し、それに対して聞き手が事後的に共有を否定しているという意味で「事後的な修正」という表現を用いている。

参考文献

- Boulat, K. and D. Maillat. 2017. “She Said You Said I Saw It with My Own Eyes: a Pragmatic Account of Commitment.” In J. Blochowiak, C. Grisot, S. Durrelman, C. Laenzlinger (eds.) *Formal Models in the Study of Language*, 261–279. Cham, Switzerland: Springer.
- Davies, M. 2008-. *The Corpus of Contemporary American English: 560 million words, 1990-present*. [\(https://corpus.byu.edu/coca/.\)](https://corpus.byu.edu/coca/)
- Elder, C. 2021. “Speaker Meaning, Commitment and Accountability.” In M. Haugh, D.Z.Kádár., and M. Terkourafi (eds.). *The Cambridge Handbook of Sociopragmatics*, 48–68. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fogal, D., Daniel, W.H., and Matt M. (eds.). 2018. *New Work on Speech Acts*. Oxford: Oxford University Press.
- Geurts, B. 2019. “Communication as Commitment Sharing: Speech Acts, Implicatures, Common Ground.” *Theoretical Linguistics* 45, 1–30.
- Green, M.S. 2000. “Illocutionary Force and Semantic Content.” *Linguistics and Philosophy* 23, 435–473.
- Green, M.S. 2018. “Refinement and Defense of Force/Content Distinction.” In Fogal, D., Daniel, W.H., and Matt M. (eds.) *New Work on Speech Acts*, 99–122. Oxford: Oxford University Press.
- Gutzmann, D. 2013. “Expressives and Beyond: An Introduction to Varieties of Use-Conditional Meaning.” In Gutzmann, D. and Gärtner H.M. (eds.) *Beyond Expressives: Explorations in Use-Conditional Meaning*, 1–58. Netherlands: Brill.
- MacFarlane, J. 2011. “What is assertion?” In Brown J. and H. Cappelen (eds.) *Assertion*, 79–96. Oxford: Oxford University Press.
- Michael, J. 2022. *The Philosophy and Psychology of Commitment*. London and New York: Routledge.
- 三木那由他. 2019. 『話し手の意味の心理性と公共性』東京: 勁草書房.
- 三木那由他. 2022. 「意味とコミットメント」(シンポジウム「言語の意味研究の現在」, 関西言語学会 (2022 年 6 月 11 日–12 日, オンライン).
- Peirce, C.S. 1934. *Belief and Judgement*. Cambridge: Harvard University Press.
- Potts, C. 2002. “The Syntax and Semantics of As-Pretheticals.” *Natural Language and Linguistic Theory* 20, 623–668.
- Potts, C. 2005. *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford: Oxford University Press.
- Potts, C. 2007. “Into the Conventional-Implicature Dimension.” *Philosophy Compass* 2(4), 665–679.
- 澤田淳. 2020. 「第 2 章 グライス語用論」, 加藤重広・澤田淳 (編)『はじめての語用論—基礎から応用まで』, 24–40, 東京: 研究社.
- Stoet, G. 2010. “PsyToolkit - A Software Package for Programming Psychological Experiments Using Linux.” *Behavior Research Methods*, 42(4), 1096–1104.
- Stoet, G. 2017. “PsyToolkit: A Novel Web-Based Method for Running Online Questionnaires and Reaction-Time Experiments.” *Teaching of Psychology*, 44(1), 24–31.
- 田村早苗. 2021. 「コミットメント概念に基づく 2 種のコトダ構文の分析」, 『KLS Selected Papers: Selected Papers from the Meeting of the Kansai Linguistic Society 3』, 80–94.

会話中の非難から解き明かす友人同士の親しさ
—能力に関する優劣が話題となるやりとりに着目して—

西阪 亮

関西学院大学大学院

< Abstract > The purpose of this study is to examine the close relationship between friends. To approach it, this study analyzes “self-deprecation – agreement of self-deprecation” sequences, which causes inferiority complex of the self-deprecation’s speaker. Results of the analysis by using Conversation Analysis as the research methodology, I found that the speakers structure the conversation relying on “The recipient knows who he is”, and the recipients also shows by his response that he knows the speaker. Therefore, participants were referring to each other's knowledge and using it as a resource to structure their conversation. This could be one basis for being intimate.

【キーワード】：会話分析・親しい関係・敵対関係・自虐・優劣

1. はじめに

他者との優劣を決することは、関係性の維持にとって危険なものであると考えられる。例えば、Pomerantz(1984)では、話し手の自虐的発話 (self-deprecation) に対し、聞き手が同意した場合、それは話し手への批判につながる可能性があるため、人々は不同意を行う、あるいは、同意を避けることに志向すると述べられている。一方、自虐に同意し、優劣をあえて顕在化し、敵対する行為を行うこともある。

他方、敵対関係を構築することが、逆に「親しい関係性」を示し合うものとして取り扱われることもある (Bateson 1972、大津 2004)。しかし、それが常に親しい関係性を示すものとなるわけではなく、本気のものとして捉えられることもある。そのため、人々は、それが冗談であると聞き手にもわかるように、笑いや韻律操作などの方法を用いるという (大津 2004)。一方で聞き手も、冗談だと理解したことを示すために、笑ったり、話し手の話し方などを真似したりといった方法を用いることが明らか

にされている（大津 2007）。

以上の先行研究からもわかる通り、敵対関係の構築というリソースを用いて笑い合うやりとりからは、当該の会話参加者同士の親しい関係性を垣間見ることができる。他方、そもそも「親しい」とはどのようなことを指すのだろうか。例えば、日々の自分自身の経験などが常に共有されるような仲なのか、学校という場でクラスメートとして話すような仲なのか、その都度、親しさの意味合いが変わりうるもののように思われる。しかしながら、そのような様々な親しさの変数に対して、それが一体どのような親しさなのかということについては、これまで改めて問われることはされてこなかったと考えられる。

そこで、本発表では、敵対関係を構築するというやりとりの性質が、親しい関係性を表出するものであるという立場を取るのではなく、そのやりとりを行う中で「親しい関係性」が“利用されている”ことを主張する。そうすることで、親しさの本質にアプローチしていきたい。そのため、本発表では会話データの中から、冒頭で取り上げた優劣が顕在化するやりとりを取り出し、分析を行いたい。

人々の会話において、参与者間の「関係性」が立ち現れることは、これまでの研究においても指摘されている。例えば、西阪（2006）は、電話会話に関する考察の中で、「電話のかけ手と受け手の関係は電話の会話の合理性の根拠として動員されている」（p.46）と述べている。したがって、「電話の外の関係は、電話の中の様々な局面において透けて見える」（p.46）という。さらに、高木（2009）でも、電話の会話において、参与者同士の「親密な関係」が今この相互行為において実践されていることを指摘している。これらのことから、人々の会話を対象に人々の親しさを考察することは有効な手段であると考えられる。また、本発表で取り上げる事例は、特に、優劣という二項対立関係が顕在化するようなものに焦点を当てる。優劣を利用する会話に着目するのは、優劣を決すること自体が、ある程度親しくなければ困難な話題である一方で、それを利用してやりとりを構築することができる点で、親しさの根拠になりうると考えられるからである。

以上を踏まえ本発表では、友人同士の間で優劣がつくような話題の中で生じるやりとりに着目し、その中で会話参加者たちが会話を構成する上で利用している資源、さらに言えば、関係性について、会話分析の手法を用い、発話連鎖上の位置と組み立ての観点から記述する。その上で、会話参加者同士の親しい関係性がどのように立ち現れているのかを考察していきたい。

2. データの説明

本発表では2つのデータを使用した。

1つは、TalkBank (MacWhinney 2007) に収録されている Callhome から、2名の日本語母語話者による電話会話を採用した。2人（ミオとカナ）は同じ大学に通う同級生であるが、カナは現在アメリカに留学している。ミオはカナが留学中に授業の代返¹を買って出たり、ゼミ決めのための情報提供などをしていることから、良好な関係であることが推測される。

もう1つは、『日本語日常会話コーパス』(小磯他 2017) から、2名の日本語母語話者による居酒屋での録音・録画データを採用した。2人（尾形と根本）は中学の同級生であり、家がとても近く、現在でも頻繁に会う仲であるという。また、尾形は大学院生であり、就職活動中である。一方、根本は社会人である。

3. 分析

3.1. 優劣が顕在化する自虐と応答

以下の【断片1】を見てみよう。これは留学中のカナと日本に住むミオの会話である。注目する箇所は29行目(→)と30行目(⇒)である。なお、断片の書き起こし記号については、付記に掲載する表1を参照されたい²。

【断片1 「比べんな」 Callhome 1607 15:05-15:50】

((断片直前では、ミオがカナに対し、「英語なんか話して」と茶化すような言い方で依頼を行い、それに対しカナは「喋れない」と抵抗を示している。))

- 13 ミオ：喋れるようになった？ [なん-
14 カナ： [hhh
15 カナ：わか-ん::あんま喋れへんけど;そんなべ[らべら.
16 ミオ： [haha しゃ(h)べ(h)れ(h)よ
17 hoho.hh
18 カナ： [そんな喋れへんけど::,
19 ミオ： [na 聞きとれることは聞きとれる?=
20 カナ：=でも(.)言つとうことは大体わかる.(0.3)うん.
21 ミオ：わかるようになった?
22 カナ：うん:.
23 (0.7)
24 ミオ：やるやん,
25 (1.0)
26 カナ：わかるようになったかな::普通の,
27 (2.0)
28 カナ：喋つとうこととか.=
29 →ミオ：=<少なくとも>私より勝てる? huhuhu
30 ⇒カナ：.hhhhhhまhあhねh:
31 ミオ：↑.h↑.h↑.h↑.h

- 32 カナ：haha:
33 ミオ：￥比べんな：って￥?
34 カナ：うん：..(と h か h って h／比 h べ h ん h-) わからへん。

29 行目からの連鎖に至るまで、ミオはカナに対し、英語が話せるようになったか、聞き取れるようになったか、と質問している（13、19 行目）。それらに対し、カナは、喋ることはできないが、聞き取りはできるようになったと答える（15、17、20 行目）。カナの応答に対し、ミオは「やるやん」と肯定的な評価を与える。しかし、その評価の後、カナは「普通の喋っていることはわかる」と、自身の能力についてグレードダウンするような発話をを行う（26、28 行目）。29 行目はそのようなカナの発話の後の位置で産出される。

ミオの 29 行目の発話に注目すると、「少なくとも」という最低限であることを表す副詞が私（ミオ）に修飾する形で産出されている。したがって、ミオは自分自身を最低として、その自分よりもカナが勝てるかを聞いていると言える。このことから、29 行目のミオの発話には自虐的性質が含まれているように見える。それに対し「まあね」と答えることは、質問に対する応答を産出すると同時に、ミオの英語力が低いという自虐におおむね同意することにもなるだろう。また、29 行目は「勝てる？」という質問であり、カナが上であることを表明しているように見える。それを「まあね」と認めるることは、自身の優勢な立場を認めることにもなる。したがって、29 行目に対する 30 行目の応答は、カナとミオの優劣の差を顕在化させていると言える。そのようなやりとりの後、ミオとカナは笑い（31、32 行目）、続く 33 行目でミオは「￥比べんな：って￥？」と、にやけを伴いながら質問を行う。この発話には「って」という引用を示す表現が用いられているものの、「比べんな」という、カナの発話には表れていないものが引用されている。それらを含んだ発話が語尾を上げて産出されていることから、カナに対する何らかの確認要求を行っているように見える。

続いて、【断片 2】も見てみよう。この事例にも、【断片 1】と類似する連鎖構造が見られる。注目する箇所は 33 行目（→）と 35、37 行目（⇒）である。

- 【断片 2 「かなあうんて」 CEJC_T006_009 03:48-04:46】
((尾形は、データ収録の協力によって 12 万の報酬がもらえるらしい。))
23 根本：.h::::° いいな° 1 2 万おれもほしいな::,
24 尾形：いいじゃん，(.) もらってんじゃ[ん，]
25 根本： [あ] やべ。((食べ物を落とす))
26 (0.7)
27 根本：え？(.) もらってないよ::.
28 尾形：nhh

- 29 (8.0)
 30 根本：<もらっ↑てん>なんてよくゆうよね,
 31 尾形：° いや。にじゅうなん万もらってるっ[しょ：.]
 32 根本： [(cough)]
 33 →根本：3, 4年したらお前の方がもらうぜ,
 34 (1.5)
 35 ⇒尾形：かなあ,
 36 根本：> うん。<.=
 37 ⇒尾形：=うん。
 38 (2.0)
 39 根本：かなあうんて.hh
 40 尾形：うん。
 41 (2.9)
 42 尾形：わからんよ。

23行目で根本は、尾形が会話コーパスの協力によって12万円の報酬を受け取ることに羨ましさを示す。それを受け、尾形は根本が何かしらの報酬をもらっている³ことに言及し、根本からの羨みを回避しているように見える。対し、根本は「もらってない」と否定を行い(27行目)、しばらく沈黙が続いた後⁴、「<もらっ↑てん>なんてよくゆうよね,」と一度途切れたやりとりを再開し、非難にも聞こえる発話をを行う。それを受けて、尾形は「° いや。にじゅうなん万もらってるっしょ：.」と、根本がもらっている給料だと思われる金額に言及することで反論する。33行目はその後の位置の発話である。

根本の33行目の発話を注目すると、「お前の方が」と、明らかに自分と尾形の「3, 4年」後の給料を比べている。そして、「もらうぜ」と述べていることから、尾形の給料が自分よりも上になっていることを表明している。一方で、この発話はその比較という性質上、将来的に根本が尾形よりも給料面で下になっていることが示唆される。このことから、33行目の根本の発話には自虐的性質が含まれているように見える。それに対し「かなあ」、そして、「うん」と答えることは、将来的に根本の給料よりも自分が高くなっていることをおおむね認めると同時に、根本の給料が自分より低いことをおおむね認めることになる。したがって、33行目に対する35、37行目の応答は、根本と尾形の優劣の差を顕在化させていると言える。そして、その後に続く、根本の「かなあうんて.」という、引用を示す表現「って」が用いられた発話は、根本が産出した発話を取り上げ、明示的に繰り返していることから、その根本の発話全体に対して問題があったことを指摘し、非難しているように見える。

以上みてきたように、2つの断片は、自虐的に聞こえる発話に対し、おおむねそれに同意する発話がなされ、優劣が顕在化する。そしてその後、引用表現「って」を用

会話中の非難から解き明かす友人同士の親しさ一能力に関する優劣が話題となるやりとりに着目して—

いた発話によって確認要求や指摘がなされるという類似した連鎖構造なっている。

3.2. 親しい関係性

2つの断片で共通することは、自虐を行う話し手が、「私より」や「お前の方が」と、他でもなく自分自身と聞き手を比べていることである。さらに、その自虐が行われる位置は、【断片1】では、評価がグレードダウンされた（26、28行目）後、【断片2】では、「もらっていない」という主張（27、30行目）に対して反論（31行目）が行われた後である。これらを踏まえると、自虐発話は、直前の発話に対し、自分自身を引き合いに出すことで反論の根拠を提示するもののように見える。言い方を変えれば、聞き手が自身の英語力を測る、あるいは、将来の給料の高さを見積もる資源として、話し手は自分自身を比較対象として提示していると言える。このようなやり方は、聞き手が「自分のことを知っている」ことを“あてにした”発話のデザインだと言ってもよいかもしれない。他方、聞き手は話し手によって提示された比較対象であれば、これまで認めることに抵抗を示していた自身の英語力の向上や報酬への羨みに対して、おおむね同意の応答を行っている。つまり、話し手がどのような英語力なのか、給料がどれくらいなのかといった情報を持っていることを表明していると考えられる。したがって、両断片における会話参加者たちは、「お互いに関する知識や状況を、お互いに参照し合える関係にある」と言えるだろう。

このように、本発表で分析してきた事例には、「相手が自分のことをよく知っている関係にある」ことを、発話の組み立ての資源、あるいは、反論のための資源として用いている。そしてそれは話し手だけでなく、聞き手もそれに志向した応答を行っていることから、お互いにそのような関係性を会話のやりとりの中で利用し合っているのである。この事実は、親しい関係であることを証明する一つの根拠となりうるのではないだろうか。

5. おわりに

人々の会話の中には、その会話をうにあたって参照されている「関係性」が見え隠れする。自分と相手を比べ、その優劣について言及することも、会話参加者同士の関係性が立ち現れているように見える。本発表では、一人の話者が、「相手の能力が自分より上だ」という発話をを行い、もう一人の話者がそれを認めるような発話をを行うという一連の発話連鎖を分析し、会話の中で参照されている会話参加者間の関係性について考察してきた。そして、会話参加者たちがお互いに、お互いに関する知識を参照

して発話を構成することで、お互いが「知識を共有している」ということを示し合っているということがわかった。

一方、「知識を共有している」だけでは、「親しい関係性」であることは言い切れないだろう。仕事で同じ内容を共有していたり、ある出来事について同じ記憶を共有していることもある。「知識の共有」が、なぜ親しいことの証明になるのかについては今後データのより精緻な記述によって考察を深めていく必要があるだろう。また、相手に関する知識を用いることで一体どのような相互行為を達成しようとしているのかについて、本発表では追及できなかった。これらについては今後の課題としたい。

付記

表1 書き起こし記号一覧

記号	説明	記号	説明
[]	発話の重なりの始まり 発話の重なりの終わり	. / , ? / ?	下降調/弾むような音/ 少し上昇調/上昇調
° 文字°	小さな音	文字	強い音
↑ 文字	音が急激に上がる	> 文字 <	早く話している
↓ 文字	音が急激に下がる	< 文字 >	遅く話している
:	音の伸び	=	発話が切れ目なく続く
h / .h	呼気音/吸気音	(数字)	沈黙の秒数
文(h)字(h)	笑いながら話している	((文字))	動作などの注意書き
¥文字¥	笑いを含む音	# 文字 #	かすれた音

注

¹ 本人に代わって授業に出席すること。

² 本発表で提示するデータの書き起こしには、特殊な記号が用いられる。記号に関しては、Gail Jefferson によって考案され、西阪・串田・熊谷（2008）が日本語でも利用できるように作成したものを参考にしている。

³ 根本もコーパス協力者であることから、同じく報酬をもらう可能性も考えられる。一方、「テイル」表現が使われていることから、社会人である根本が継続的に受け取っている給与のことであるとも考えられる。いずれにしてもこの発話の時点では判断できない。

⁴ 沈黙の間、2人は料理を自分のお皿によそっている。

参照文献

- Bateson, G. (1972) *Steps to an ecology of mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- 小磯花絵・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉. 2017. 「「日本語日常会話コーパス」の構築」、『言語処理学会第 23 回年次大会発表論文集』、775-778.
- Mac Whinney, B. 2007. "The TalkBank Project." In J. C. Beal, K.P. Corrigan and H. L. Moisl (eds.). *Creating and digitizing language corpora: Synchronic databases. Vol. 1*. Hounds-mills: Palgrave-Macmillan, 163-180.
- 西阪仰. 2006. 「関係の中の電話／電話の中の関係」、山田敬一（編著）『モバイルコミュニケーション：携帯電話の会話分析』、45-56、大修館書店。
- 西阪仰・串田秀也・熊取智子. 2008. 「特集「相互行為における言語使用：会話データを用いた研究」について」、『社会言語科学』10 (2)、13-15.
- 大津友美. 2004. 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ライトネス－遊びとしての対立行動に着目して－」、『社会言語科学』6 (2)、44-53.
- 大津友美. 2007. 「会話における冗談のコミュニケーション特徴－スタイルシフトによる冗談の場合－」、『社会言語科学』10 (1)、45-55.
- Pomerantz, A. 1984. "Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes." In A. John and H. John (eds.). *Structures of social action: Studies in conversation analysis*. Cambridge: Cambridge University Press, 57-101.
- 高木智世. 2009. 「社会的実践としての日常会話 II –「親しさ」の実践－」、『論議現代語・現代文化』3、47-64.

他者の巻き込みによる組織としての報告の実践：
学校協議会報告の事例にみられる参与役割の複雑性

畠 和樹
東京都市大学

<Abstract> Utilising conversation analysis, this work focuses on complexity of participation in institutional multi-party activity of the School Management Council. In the meeting, the principal takes a representative position to deliver the report, but has not been involved in the work; which is instead carried out by the practitioner-in-charge. The paper illustrates the principal's practice to request confirmation without ceasing the reporting by a temporal gaze shift to the practitioner. The practice makes it relevant for a minimal engagement of the practitioner to approve or complement the content of the report. Such mutual orientation promotes groupness providing the report from the organisation, not the reporter individually.

【キーワード】：多人数会話・会議報告・参与役割・視線・領き・認識的地位

1. 研究の背景

多人数会話は常に複数の聞き手がいることからして、参与者の役割は二者会話よりも複雑であることが知られている。二者会話では、話し手と受け手の関係性は比較的明らかであろう。しかし多人数会話においては、話し手が発話を宛てた参与者、これを「行為の受け手 (addressee)」とするならば、その役割は話し手の発話が直接宛てられていない「傍参与者 (side participant)」とは異なるものといえる (Goffman 1981)。会話の文脈が常に更新されていくように、参与者各々の役割も、その時々の状況によって移行する。ゆえに、参与者がその時々の場面において何に志向し、いかなる役割を提示していく、それをどのような技法をもって（他の参与者にとって）観察できるようしているのか等、各参与者の役割がいかなる資源たるのかを明らかにすることは、活動の共同構築を捉えるうえで重要である (Rae 2001: 273)。

本稿は、筆者が「日本語用論学会第25回大会」で発表した内容に基づき、会議の報告者が関係参与者の従事を報告活動の資源として取り込む現象に着目する。収録した

会議には、あまり内情に詳しくない参与者もいれば、潜在的に報告者と同等もしくは以上の知識や経験を持つ実務担当者も出席している。これはまさに、Goodwin (1986) が指摘した通り、参与者には多様な認識的地位 (Heritage 2012) があることを示唆している。このような場面で、報告者は一時的に視線を、報告内容に最も関連する参与者に宛てることで承認や補足を得る機会を作る。¹ そこで承認や補足を行った参与者的役割は、単に報告が宛てられた受け手としてではなく、報告内容を評価できる立場にある実務者としての振る舞いである。本稿では、そのような実務者の報告への含有が、現在の報告が報告者個人ではなく、組織としての報告を達成する手法であることを論じたい。

2. データ

収録したデータは、ある小学校で 2021 年度に開催された学校協議会²を約 16 時間にわたり録画・録音したものである。この会議には、学校と地域の連携を高めるため、当該学校管理職 2 名（校長・教頭）、当該学校教員 2 名（うち 1 名は教務主任）、当該学校児童の保護者代表 2 名、地域住民 3~4 名、学識経験者（委員長）1 名、学校地域連携コーディネーター 1 名が参加している。いずれの会議回も会議室や図書室で円卓の形式で行われ、会議進行を管理するため教頭が議事を務める。まずは校長から学校の状況や運営の在り方について報告が行われる。その後の質疑時間で出席者からの質問や意見が承認され、特段の問題や疑義がない場合は次の議題に進む。その後、委員長である学識経験者によって補足説明の依頼や評価が与えられる。

図 1 会議参与者の座席配置



3. 分析

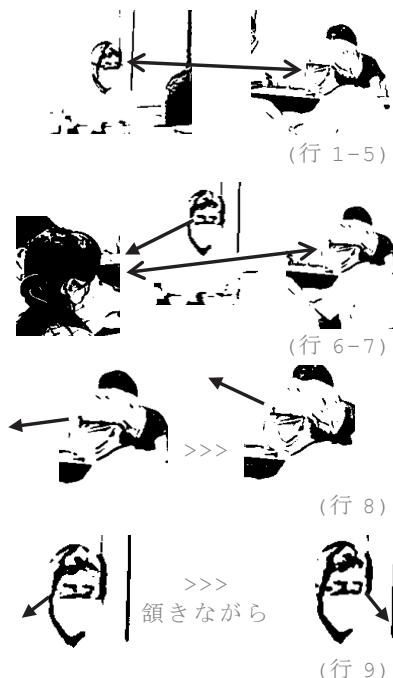
分析対象である学校協議会の報告場面において、校長はあくまで組織の代表として報告を行う制度的な立場にあるものの、実際に業務を担当したわけではなく、それに深く携わった経験を持つのはむしろ実務を担当した教員である。それ故に、報告が校長

の主観に基づくものとして聞こえること、もしくは誤った情報を伝えるリスクがある。このような報告者と実務者間の認識の差の課題に対処すべく、報告者は①身体の向きを保持したまま視線を実務者へ宛てるという二つの志向を両立 (Mondada 2013)させ、②その発話部分に平叙文を用いることで、報告活動を遂行しながらも、実務者に報告内容の確認を要求する。そして実務者は「頷き」によって受け手の役割を示し (Stivers 2008)、内容を承認する、あるいは最小限の発話をもって報告を補足する。この報告者と実務者の一時的な相互志向が、組織化された合意を呈示し、現在の報告が報告者個人の主観に基づくのではなく、組織としての報告であることが主張される。

事例1は、3年生以上の児童の自宅学習が想定よりも涉っていたことが、委員長に報告される場面である。報告者は6行目で進捗の抄りについての理由を述べる際、一時的に視線を移すことで、その報告箇所の受け手に実務者を指定する (Lerner 1996)。そして報告の宛先であった委員長も、7行目で実務者に視線を向ける。一方で、報告者と委員長ともに、身体の大部分は変わらず互いに向いていることから、報告自体は遂行中であること、ないしは実務者への志向は一時的なものであることが示唆される (Schegloff 1998)。

事例1

- | | | |
|----|------------|---|
| 1 | 報告者 : | あの - (.) 状況下の :
学習 (.) 内容を :
提供できたっていうのは ::
(0.5)
それは (.) |
| 6 | 報告者 | #積み重ね
#視線変更 (→実務者) |
| 7 | 委員長
実務者 | %だろうなあ :: \$=
%視線変更 (→実務者)
\$頷き |
| 8 | 報告者 | =つて い#うのは
#視線変更 (→委員長)
思い%ます |
| 9 | | |
| 10 | 委員長 | %頷き + 視線変更 (→校長)
(0.3) |
| | 報告者 : | % (.) >(た)だく #逆↑に : |



報告者による6-8行目の発話には、その発話構成から、報告の遂行を中断することなく実務者に確認を要請するデザインが見てとれる。もし実務者へ内容の確認を取るのであれば、疑問文を使うこと、あるいは語尾のイントネーションを上げる構成で(Sacks and Schegloff 1979)、より明示的な構成を用いることができたはずである。一方で、報告者は視線の変更と平叙文を用いることを選択する。この発話構成によって、実務者に宛てた箇所もあくまで報告の一部として産出された発話であるといえる。また、報告者はここで“だろうなあ”(行7)という言い方を用いることで、進捗が渉った理由が“積み重ね”であるとしながらも、それを自身では断定できないスタンスを呈示しているように見える。そして、当該の発話箇所を伸長させることで、実務者に何らかの応答を行う機会が提供され、そこで実務者による領きが産出される(行7)。その領きを得たことで、報告者は視線を委員長に戻しながら報告を継続する(行8)。

ここで注目したいのは9行目に行われた委員長の振る舞いである。委員長は実務者による領きを得た後に報告者へ視線を戻すが、それを領きながら行っている。この委員長の振る舞いには、報告者あるいは実務者への理解を示す以上の働きがあろう。むしろ、報告が遂行される中で、実務者からの他者承認を報告の一部として受け取ったことを呈示する行為といえよう。つまり、実務者の領きは、単に報告の受け手としての振る舞いではなく、実務者の立場から行われる承認として、組織による報告を達成する資源として組み込まれたものである。

前述の事例で確認した報告者の振る舞いと同様のものが、報告活動を遂行する上で何らかの困難がある場合において、実務者の支援を求める際にも確認できる。この場合、視線を宛てられた実務者は報告内容の補足を為すべく発話順番をとる。この点を確認するため、事例2を参照したい。これは夏休み明けに既定の授業日数を満たしているかどうかについての報告が行われている場面である。抜粋部分の直前で、報告者は授業日数を満たせる見通しであることを報告する。そして1行目は、授業日数だけでなく、肝心の学習進度にも問題がないことに言及する発話の開始部である。

事例2

- | | | |
|---|-------|--------------------|
| 1 | 報告者 : | 実は#もう |
| | 報告者 | #視線変更(→右前方) |
| 2 | 報告者 | (1.1) #(1.0) |
| | | #視線変更(→実務者) |
| 3 | | とーとー |
| 4 | | (0.8) |
| 5 | | とっくにクリ\$ア(h)してた(h) |
| | 実務者 | \$視線変更(→????) |



6	と [い う か]	
7	実務者 :	[\$ (え)] と
	報告者	\$ 視線変更 (→ 報告者)
8		らくらくで \$す =
	報告者	\$ 頷き
9	報告者 :	= # \$う (h) ん
	報告者	# 頷きながら 視線変更 (→ 右前)
	実務者	\$ 座り直し
10		(1.7)
11	報告者 :	二かけづ::



>>>
頷きながら
(行 9)

1–6 行目の発話構成から、報告者が理解上の問題か、あるいは当該報告を行うことに対する躊躇か、報告を遂行する上で何らかのトラブルを抱えていることが示唆される。まず、報告の途中で 1.1 秒の沈黙が生じたあと、報告者は実務者に視線を変更し、そこから更に 1.0 秒間の沈黙をおく（行 2）。その後、報告者は視線を実務者に宛てたまま、自己修復を実行しながらも発話を継続するが（行 3–5）、“とっくにクリアしていた”を笑いながら産出し、かつ、それを“というか”（行 6）に接続させることで、報告としては曖昧な内容が伝えられる。これら進行性の滞りを含む発話構成には、現在の報告を発話の通りに理解すべきとしながらも、同時に、その報告内容には何らかの問題があるという報告者自身の認識が表れているといえる（Potter and Hepburn 2010）。

報告者が実務者に視線を宛て続けていたことは、学習進度の達成度を語る上での認識上の権威（Heritage and Raymond 2005）が実務者にあることを報告者が認めるものであろう。実務者も、自身が報告内容をよく知る立場にあること、そして報告者が自身に確認を求めていることを理解したからこそ、報告者の発話が完了可能点に至った 7 行目で発話順番を取っている。その際、実務者は“(学習進度を) とっくにクリアしていた”という事実報告を最小限の発話でアップグレードする。この実務者による評価を、報告者は頷きながら視線変更する振る舞いによって報告の一部として承認したこと（行 9）、もともとは曖昧に伝えられた報告についての報告者と実務者の合意が前面化し、報告者が 11 行目以降で補足説明を行う流れに進む。

これまでの事例に共通して観察できることは、実務者による従事の度合いに違いはある、報告者が実務者に、組織の構成員として報告へ従事する機会を与えることである。上述の報告者の振る舞いは、どの参与者が報告内容について最も知りえて、承認や補足を行うことが可能な立場にいるのかを相互行為上で明らかにする。例えば事例 3 では、報告内容に関する質疑の際に、委員長は質問を報告者ではなく、実務者に宛てている。なお、1 行目はコロナ禍で長期に亘って対面授業ができなかつたにも関わらず、どの学年においても学習進度に問題が無かつたという報告が行われた直後の場

面である。また、ここに至るまでに、報告者は前述の方法を用いて、複数回、実務者から報告内容に関する承認を得ていたことを付言しておく。

事例 3

- 31 (2.1)
32 委員長： >そ%れは< [#な z-=
委員長 %視線変更 (→実務者)
報告者 #視線変更 (→委員長)
33 報告者： [こ↑れ-
34 委員長： =%\$#なぜです↑か
委員長 %視線変更 (→報告者)
実務者 \$視線変更 (→委員長)
報告者 #腕を組み、後ろにもたれかかる----->
35 (0.3) \$(1.6) #(0.5)
実務者 \$視線変更 (→報告者)
報告者 -----#視線変更 (→実務者)
36 %(0.4)
委員長 %視線変更 (→実務者)
37 校長： #教員が いま #
報告者 #視線変更 (→委員長) し, 左腕を教員に向ける#

委員長は 32 行目で、授業の進度に問題が無かったことの理由を問いかける際、実務者へと視線を移す。この委員長の振る舞いから、委員長はもともと回答者として適任な存在が報告者ではなく実務者であると理解していたことが示唆されよう。しかし、その委員長の質問が報告者の発話開始と重複したことから、委員長は即座に視線を報告者に戻し、34 行目で質問を再開する。

報告者は 35-36 行目で、求められた回答を出さずに 3 秒近く沈黙おく。この間、報告者は後ろにもたれ掛かる動作、および実務者へと視線を宛てる振る舞いをもって自身の参与の度合いを下げるような、ひいては報告者自身からの回答を予期させない様子を見せる。そして実務者も、発話順番を取ることはせずとも、報告者の視線に同調するように視線を合わせ続ける。ここで委員長は報告者からの応答を待つこともできたはずだが、36 行目で再度、実務者へと視線を宛てる。その後、報告者は 37 行目において、実務者を回答者として明示的に指名する。

本事例は、報告者によって実務者が回答者として適任であることが明示される前に、委員長がそれを予期できていたことを示している。つまり、委員長の質問は、報告者個人に向けられたものではなく、実務者を含めた、組織に対するものであることがわかる。

4. 結語

本稿では、報告者が実務者の従事を報告の資源として取り込む技法に着目した。報告者によって伝えられた内容が、実務者から承認、あるいは補足されることで、遂行されている活動が、個人による報告ではなく、組織としての報告であることが前面に出されているといえよう。本稿で扱った事例が示すことは、話し手のみが報告を遂行する者でもなければ、報告者を除く個々の参与者が均等に報告に従事するわけでもない、参与者各々の立場の中で、話し手と受け手の一元的な関係を超えて、組織としての参与の在り方が際立つ場面である。

ここから示唆されることは、やはり参与役割の複雑性である。会議報告において各々が為す役割は、報告を宛てられたか、宛てられていないかという点からは自明とならないことを、本稿の事例は示している。参与者の役割はあくまで相互行為の帰結として捉えられるものであり、参与者の行為連鎖から独立した体系として記述すべきではない。報告者による実務者の従事を資源として取り込む振る舞いは、その時々で常に更新されていく会話の文脈をよく表しているだけでなく、「参与」という単一な概念をとらえ直す意義の一つを与えると考える。

断片記号

[]	発話重複の開始・終了箇所	exa-	発話の中斷
(.)	0.2秒未満の沈黙	> <	速く発声された箇所
(0 . _)	(上記以上の) 沈黙の秒数	< >	遅く発声された箇所
=	切れ目のない続行	exam	音の強調箇所
()	聞き取りが困難な発話箇所	(())	転写者のコメント
↑↓	直後の音の上昇・下降	:	音の伸長
h	呼気音	---	振る舞いの継続箇所
#	振る舞い(報告者)の開始・終了箇所		
%	振る舞い(委員長)の開始・終了箇所		
\$	振る舞い(実務者)の開始・終了箇所		

謝辞

本発表の要旨採択時に示唆に富むご助言をくださった審査委員の皆さま、また発表時にご指摘・ご提案を下さった遠藤智子先生、田中廣明先生に感謝いたしたい。また、本研究はJSPS科研費 20K02466の助成を受けている。貴重な会話データの収集にご尽力いただいた井上健先生と屋敷和佳先生、および研究目的での公開に快諾いただいた参加者の皆様に感謝申し上げる。

¹ 本稿は紙幅の都合から口頭発表した事例のみに注目するが、実務者から訂正が入った事例もコレクションには確認できる。

² この会議には正式名称があるものの、その名称が対象地区や小学校を特定してしまうため、本稿では便宜上「学校協議会」としていることに留意されたい。

参照文献

- Goffman, E. 1981. *Forms of Talk*. England: Blackwell.
- Goodwin, C. 1986. "Audience Diversity, Participation and Interpretation." *Text* 6(3), 283–316.
- Heritage, J. 2012. "Epistemics in Action: Action Formation and Territories of Knowledge." *Research on Language and Social Interaction* 45, 1–25.
- Heritage, J., and Raymond, G. 2005. "The Terms of Agreement: Indexing Epistemic Authority and Subordination in Talk-in-Interaction." *Social Psychology Quarterly* 68(1), 15–38.
- Lerner, G. H. 1996. On the Place of Linguistic Resources in the Organization of Talk-in-Interaction: "Second-Person" Reference in Multi-Party Conversation. *Pragmatics* 6, 281–294.
- Mondada, L. 2013. "Embodied and Spatial Resources for Turn-taking in Institutional Multi-party Interactions: Participatory Democracy Debates." *Journal of Pragmatics* 46(1), 39–68.
- Potter, J., and Hepburn, A. 2010. "Putting Aspiration into Words: 'Laugh Particles', Managing Descriptive Trouble and Modulating Action." *Journal of Pragmatics* 42(6), 1543–1555.
- Rae, J. 2001. "Organizing Participation in Interaction: Doing Participation Framework." *Research on Language and Social Interaction* 34(2), 253–278.
- Sacks, H., and Schegloff, E. A. 1979. "Two Preferences in the Organization of Reference to Persons in Conversation and Their Interaction." In G. Psathas (ed.) *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, 15–21. New York: Irvington.
- Schegloff, E. A. 1998. "Body Torque." *Social Research* 65(3), 535–596.
- Stivers, T. 2008. "Stance, Alignment, and Affiliation during Storytelling: When Nodding Is a Token of Affiliation." *Research on Language and Social Interaction* 41(1), 31–57.

「逆に言えば」の使用に関わる論理関係および談話構造：「裏を返せば」との比較

水田洋子

国際基督教大学

<Abstract> Japanese *gyaku-ni ieba* ('reversely speaking', GK) as a discourse marker raises the following questions: What kind of reverse relation does *gyaku* indicate? Specifically, does it indicate the reverse relation in logic? Does GK just provide an alternative way of describing the matter, or does it also involve new information? Is GK compatible with *ura-o kaeseba* ('putting it the other way round', UR)? This work provides a comparative analysis of the functions of GK and UR, based on the quantitative and qualitative analyses of corpus data, and sheds light on their relations to discourse participants' thought and understanding.

【キーワード】：逆に言えば、論理関係、談話構造、裏を返せば、コーパス分析

1. はじめに

日本語の「逆に言えば」(GK)は、その前後に述べられる内容の談話中での関係を示すため、条件節から発達した談話標識とみなせる。GKは日常的に使われるが、その使用について以下の問が生じる—「逆」はどのような観点からの逆関係を表すのか。特に、GKの前後の命題は論理学における「逆」の関係 (McCawley, 1998; 野矢, 2006) にあるのか。また、「言えば」は表現上の違いを表すのか、それとも内容的な新情報も関わっているのか。更に、類似の表現「裏を返せば」(UR)とは互換なのか。

辞書における記述では GK と UR の違いがわからない。談話構造の分析、談話標識全般の性質や個別の談話標識に関するさまざまな研究があるが (Ajmer, 2002; Fischer, 2006; Lenk, 1998; Mann and Thompson, 1988; Onodera, 2002; Shinzato, 2017; Webber and Prasad, 2009)、GK や UR についての理論的・実証的な研究は見当たらない。

本研究では、コーパスデータを用いて GK と UR の用例の質的・量的分析を行い、それぞれの談話中での意味機能を解明するとともに、両者の比較を行う。それにより、GK と UR が談話中での話者と聴者の思考にどのように関わっているかを考察する。

2. 先行研究と予備知識

2.1. 先行研究

まず辞書における記述を見る。便宜上、ウェブ上で利用可能な辞書を使った。Weblio類語辞典（GRAS グループ株式会社, 2022）には、GK の意味は「一つの事柄に対して反対の角度から見た時の表現」および「あることが逆の効果をも生むさま」とあり、前者の意味における同義語として UR が挙げられている。「広辞苑無料検索 広辞苑」の「逆」の項では、意味①として「物事の順序や方向が反対であること。さかさま」とあり、意味③として論理学における「逆」が書かれている(Sora, 2022b)。「裏を返す」については、意味②として「同じ事柄を逆の面から言う」と書かれている(Sora, 2022a)。「広辞苑無料検索 大辞林」には「裏を返す」の項の意味②に「（「裏を返せば」の形で）逆の面から言え。逆の言い方をすれば」とある(Sora, 2022c)。したがって、これらの辞書では、GK と UR は同義として扱われている。

修辞構造理論 (Mann and Thompson, 1988) では、談話の展開を所定の関係を使って分析できるが、GK と UR は共に対比 (Contrast) や精緻化 (Elaboration) という関係を表すものとなり、それ以上の詳細は扱えない。談話標識に関する研究 (Ajmer, 2002; Fischer, 2006; Lenk, 1998; Mann and Thompson, 1988; Onodera, 2002; Shinzato, 2017; Webber and Prasad, 2009) の中にも GK や UR についての理論的・実証的な研究は見当たらない。

2.2. 予備知識

言語表現の表す内容が論理（学）的な内容とどのように関わっているかについて、言語学や論理学の双方から論じられている (McCawley, 1998; 野矢, 2006)。更に、言語の使用における論理上の混乱やトリック、特に詭弁についても議論されている(久野, 2019; 野崎, 2017)。談話中で言語表現の意味を正しく理解するには、単に語彙や構文を理解するだけではなく、背後にある論理構造や談話構造を正しくとらえることが肝要となる。

予備知識として、命題間の論理的な関係をまとめておく。命題 p と q に対して、命題 X を「 $p \rightarrow q$ 」（p ならば q）とすると、命題「 $q \rightarrow p$ 」（q ならば p）、「 $\neg q \rightarrow \neg p$ 」（q でないならば p でない）、および「 $\neg p \rightarrow \neg q$ 」（p でないならば q でない）はそれぞれ X の逆、対偶、裏と呼ばれる。ここで、「 \rightarrow 」は論理的含意の関係を、また「 \neg 」は命題の否定を表す論理記号である。任意の命題 X とその対偶は同値である(両者の真偽は同じ)。特に、X が真ならば、X の対偶命題も真である。しかし命題 X が真であっても、X の逆や裏の命題は真とは限らない。

論理的な真（分析的な真）と経験的な真を区別することが必要である。例えば、「2023 年 2 月の日数は 28 日である」という命題に対して、その逆「2023 年のある月の日数が

28 日なら、その月は2月である」は、現実世界においては真であるが、それはもとの命題から論理的に導かれるものではない。

知識や推論における論理と語用論の関係も注意を要する。例えば、「雨が降っていたら傘をさす」が表すのは、2つの事象の間に経験的に見られる関係であり、論理的な含意関係ではない。また、命題Xからその逆や裏を導くことは、論理的にはできないが(上記)、日常的な推論においては意味を持ち、それぞれアブダクション(abduction)および誘導推論(invited inference/reasoning)と呼ばれる。例えば、「歩行者が傘をさしているから雨が降っているのだろう」という推論は、「雨が降っていたら傘をさす」という経験的な規則からその逆を導くもの(アブダクション)である。また、「ノートを貸してくれたらコーヒーを御馳走するよ」と言わされた場合、その裏にあたる「ノートを貸してくれた場合のみコーヒーを御馳走するよ(貸してくれなかつたらコーヒーを御馳走しない)」という含意を汲み取るのは誘導推論である。

こうした、経験的な背景や発話の意図などの語用論的な要素が関わる推論は、日常言語においては頻繁に行われるが、論理的に正しい推論との区別がつかなくなると、思考や議論において混乱が生じる。詭弁はこの点を巧みに利用したものである。

3. 方法

現代日本書き言葉均衡コーパス 通常版』(BCCWJ) を用いて、GK と UR について文字列検索(前後文脈は各 200 字)を行い、UR については物理的な「裏返す」の意味での用例 3 件を除外して、それぞれ 196 件および 63 件の用例を得た。まず用例全体を概観し、論理構造や対照に関わる主要な「タイプ」を挙げ、全用例にタイプのラベルを付けた。そしてタイプの種類や基準を明確化した後、ラベル付けの結果を確認・修正した。更に、各用例に対して GK と UR の互換性を判定した。

4. 論理構造や対照に関わる「タイプ」

GK および UR が表す談話中の関係について、以下のようにタイプ A~G を設けた。A~D は命題間の論理関係であり、A は逆、B は裏、C は対偶、D は論理的含意である。E は 2 つの物事の対照に関わるもの、F は前の内容の精緻化(詳細説明など)、G は表現上の言い換えである。

今、GK と UR に関わる対照要素を X および Y とする。C(対偶)では X(p ならば q) と Y(q でないならば p でない)が同値であるが、A(逆)、B(裏)、D(論理的含意)では X と Y は同値でない。A および B については、X が真であっても Y が真とは限らない。D については、X の逆が成り立つのは X が同値関係のときに限られる。E は視点(ど

こから／どこを見る）に関わる。E11 と E12 は X と Y が連動する場合で、X と Y が広義の形式と実態の関係にある場合を E12、それ以外の関係にある場合を E11 とした（上下、左右、肯定的／否定的な側面などの関係）。E2 は X と Y が連動しない場合（新しい視点の導入など）である。D、E2、F、G では、X と対照されるのは X の否定であり、その結果、「別の、新たな」の意味が関わっている。

上記のタイプのそれぞれと GK-UR の互換性について、例を示す。コーパス（BCCWJ）の用例中の「逆に言えば」と「裏を返せば」はそのまま書き、置き換えを略語で、非互換を「#」（許容できない）で表し、文末にタイプを示す。BCCWJ のデータの末尾にサンプル ID と開始位置を付した。

- (1) 一人暮らしの女は、物騒だから名前を書かないんだ。{逆に言えば／UR}、名字だけで、名前が書いてない部屋は女の一人暮らし、と考えてほぼ間違いない (LBt9_00152 9260) [A 逆]
- (2) 私は、イタリアで使っている材料を使い、レベルを保っていれば、すべてイタリア料理であると考えています。 {逆に言えば／#UR}、イタリアで使っていない材料を使った場合は、それはイタリア風ではあろうけれど、イタリア料理そのものではないと思います。 (LBb5_00012 1180) [B 裏]
- (3) 出家修行の魅力というのは何かと言うと、この社会の外に出るということです。#そういう方法に非常に多くの若い人たちが魅力を感じたということは、{裏を返せば／GK}、この社会の非常に多くの側面が肯定できない、むしろこの社会こそ憎むべき、否定すべきものであるという心情をこの社会は生み出してしまっていたのではないか。 (LBk3_00072 12500) [B 裏]
- (4) アサリ掘り禁止だそうですよ、ご隠居。 {逆に言えば／UR}、採れるってことですよね。 (OY15_06072 230) [E 視点 12]
- (5) 七十歳まで働くことを選べる社会というのは私も大賛成でありますし、{逆に言えば／#UR}、七十歳まで働くことが魅力ある社会をつくることが必要じゃないかと思うんですが、(OM68_00001 289020) /[F 精緻化]
- (6) そういう土木建造物の健全度と申しますか、{逆に言えば／#UR}、危険度と申しますかをランクづけをいたしております、(OM35_00006 902230) [G 表現（言い換え）]

用例(1)において、命題 p と q を「p: 女の一人暮らし」および「q: 表札は名字だけで名前は書かない」とすると、GK の前後にある X および Y はそれぞれ「p ならば q」および「q ならば p」を表すため、タイプは「A 逆」と分析される。つまり、X の逆 Y も成り立

つと主張している。GKはURに置き換えるても自然である。用例(2)および(3)はともに「B裏」のタイプである。前者はGKを含む例で、GKをURで置き換えると不自然である。(3)はURを含む例であり、URをGKに置き換えるても自然である。用例(4)は「アサリ掘り禁止」というルールから、「そういう禁止事項を設けてあるのは、実際アサリが採れるからだ」という背景情報を読み解くことを表す。したがって、GKのタイプは広義の形式と実態の関係を表す「E 視点 12」と分析でき、GKをURに置き換えるても自然である。用例(5)は、七十歳まで働くことを選べる社会から更に踏み込んで、七十歳まで働きたいと積極的に思える社会に言及しているため、GKが表すのは「F 精緻化」の関係と分析される。URに置き換えると不自然である。用例(6)は「G 表現（言い換え）」と分析できる。「健全度が大きい／小さい」は、「危険度が小さい／大きい」と同じことであるため、説明上の言い換えと考えられる。このGKをURで置き換えると不自然である。なお、「健全度」と「危険度」は対照的な側面に注目したものであるため「E 視点 12」も候補となる。しかし健全度に加えて危険度という新たな視点を与えるのではなく、「と申しますか」にも表されるように、ランク付けの呼び方の違いに言及しているため、「G 表現（言い換え）」とした。このように分析の別解がある場合にはより適切なものを選んだ。

5. 分析結果

5.1. 量的分析

まず量的分析の結果を表1に示す。特に注目すべきところを太字で表す。

表1 GKおよびURの使用に関する論理関係と談話構造の量的分析結果

分析項目		タイプ										合計
		A 逆	B 裏	C 対偶	D 論理的 的意	E 視点 11	E 視点 12	E 視点 2	F 精緻 化	G 表 現	不明	
件数	GK (URと互換)	9 (1)	13 (10)	29 (27)	1 (0)	58 (57)	14 (14)	35 (0)	3 (0)	26 (0)	6 N.A.	196 (109)
	UR (GKと互換)	0 N.A.	5 (5)	1 (1)	0 N.A.	28 (28)	22 (20)	3 (1)	2 (1)	1 (1)	1 N.A.	63 (57)
分布 (%)	GK (U互換率)	4.6 (11.1)	6.6 (76.9)	14.8 (93.1)	0.5 (0)	29.6 (98.2)	7.1 (100)	17.9 (0)	1.5 (0)	13.2 (0)	3.1 N.A.	100 N.A.
	UR (GK互換率)	0 N.A.	7.9 (100)	1.6 (100)	0 N.A.	44.4 (100)	34.9 (90.9)	4.8 (33.3)	3.2 (50.0)	1.6 (100)	1.6 N.A.	100 N.A.

全体での GK-UR 互換率(%)	1/9 (12.5)	15/18 (83.3)	28/30 (93.3)	0/1 (0)	85/86 (98.8)	34/36 (94.4)	1/38 (2.6)	1/5 (20.0)	1/27 (3.7)	N.A.	166/ 259 (64.1)
-------------------------	---------------	------------------------	------------------------	------------	------------------------	------------------------	---------------	---------------	---------------	------	------------------------------

表1に示す通り、件数の合計は、GKはURの約3倍あった。分布は、URは主にE11とE12に集中しているのに対し、GKはC、E2、Gでの使用も一定程度あり、E12が比較的少ない。互換性は、全体では64.1%であったが、互換率の高いタイプと低いタイプに二極化している。互換性、分布、件数を総合的に考慮すると、①GKとURがほぼ互換なタイプはE11、②GKに特徴的なのはC、E2、およびG、③URに特徴的なのはE12であると分析できる。

5.2. 質的分析

次に、例を挙げてGKとURの質的な比較をする。非互換は、「#」（許容できない）および「??」（かなり不自然）で表す。

- (7) 「石神」「小傘」では一曲の中心が歌謡によって作られる。高揚する部分で歌謡が用いられるのだが、{逆に言えば／#UR}、歌謡によって舞台が高揚し、狂言の「狂」の状態がかもし出されるのである。(LBb7_00034 57040) [A 逆]
- (8) 人の悪口や批判というものは、{??GK／裏を返せば}、嫉妬や自分自身に自信がないことのあらわれのような気がします。違うでしょうか。(PB26_00137 90500) [E 視点12]
- (9) そこで生み出されるサービスの良し悪し（中略）に関係なく、一定の料金が支払われます。{GK／裏を返せば}、それ以上のサービスや工夫をしたとしても何らの経済的見返りは得られない仕組みになっています。(Lbf3_00026 63210) [E 視点12]

(7)は命題「舞台が高揚→歌謡を使用」の逆が成り立つことを新情報として述べている。GKは「逆に」の意味で使われており、実際、「言えば」を除いて単に「逆に」とした方が明確である。URでは逆の命題の成立を前提としているニュアンスが生じるため不自然である。(8)は、現象（悪口や批判）に伴う実態（心の中）についての推測を述べている。(9)は互換であるが違いがある。GKは同じ命題をくだいて説明する立場を表し、URは聴者が気付いていない重要なこと（特に、物事の本質）を暴くようなニュアンスを生じる。基本的に、「逆」も「裏」も、内在的な基準によるものと相対的なものとがある（例。「名札が上下逆になっている」 vs. 「『山本』の逆は『本山』だ」、「服を裏返しに着ている」 vs. 「紙に字を書いて裏返す」）。更に、コーパスデータの質的分析により以下のことが示

唆された。①GK および UR における「逆」／「裏」は、相対的なものに限られる、②GKにおいては、「逆」は X の否定として「別の、新たな」の意味を表し、「反対」の意味ではなくなる場合がある（4 節で言及）、③UR においては、常に表と裏にあたる要素がセットとなる、④UR においては「裏」が「隠れている面」を表し UR は「隠れている部分を推測したり暴いたりする」のニュアンスを持つ場合が多い。

(8) および(9)における GK と UR の違いは、上記④を示唆する。また、表 1において GK と UR に偏りが見られる部分（C 対偶、E 視点 12、E 視点 2、G 表現）は上記②～③と密接に関わっている。

6. 議論と理論的含意

GK は、文字通りには、「逆に」と異なり同値の命題を別の言い方で述べるように解釈できる。例えば上記のように、用例(7)では、UR と同様に、逆の命題の成立を前提とする含意が誤って生じ得る。タイプ B、E2、F についても同様である。

語彙的な意味や構文などは理解していても、談話の論理的な流れを正しく把握できない場合や、話者が意図したトリックや詭弁に聴者が陥る可能性がある。本研究は、GK に関して話者と聴者の思考やコミュニケーションを助ける基礎となることが期待できる。

翻訳や英語教育にも関与する。GK および UR の英訳では、単純に *conversely* や *reversely* と直訳することはできず、どのような対照が関わっているのかを見極める必要がある。その際、本研究における分析が有用である。例えば B は *on the other hand*、C は *conversely*、E11 は *by contrast*、E12 は *actually*、G は *in other words* などが適切だろう。

7. 結論

GK と UR の使用には基本的に何らかの対照的な観点が関わる。論理関係や対照関係のタイプに基づいてコーパスデータを質的・量的に分析することによって、具体的な特徴が明らかになった。GK は使用範囲がより広く、ニュアンスも含めれば GK と UR の互換性は限定的であることが示された。

談話標識は談話中の論理関係や談話構造を理解するための重要な手がかりとなる。その反面、適切に使用・理解されなければ混乱を招く可能性もある。本研究では GK について意味機能を掘り下げた。得られた知見は、我々の思考やコミュニケーションに還元することができる。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP22K18461 の助成を受けたものである。

参照文献

- Ajmer, K. 2002. *English Discourse Particles: Evidence from a Corpus. (Studies in Corpus Linguistics 10)*. John Benjamins Publishing Company.
- Fischer, K. (ed.) 2006. *Approaches to Discourse Particles*. Elsevier.
- GRAS グループ株式会社 2022. 「逆に言えばの類語・言い換え・同義語」Weblio 類語辞書 <https://thesaurus.weblio.jp/content/逆に言えば> (7/13/2022 に閲覧)
- 国立国語研究所言語開発資源センター 2021. 現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ 中納言 コーパス検索アプリケーション
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search> (中納言 2.6.0 データバージョン 2021.03)
- 久野五郎 2019. 『矛盾、誤謬、詭弁、強弁、偽善、屁理屈』 東京図書出版.
- Lenk, U. 1998. *Making Discourse Coherence: Functions of Discourse Markers in Spoken English*. Gunter Narr Verlag Tübingen.
- Mann, W.C., and Thompson, S.A. 1988. "Rhetorical Structure Theory: Toward a Functional Theory of Text Organization." *Text* 8(3). 243-281.
- McCawley, J. D. 1998. *Everything that Linguists Have Always Wanted to Know About Logic...but were Ashamed to Ask (2nd ed.)*. University of Chicago Press.
- 野崎昭弘 2017. 『詭弁論理学』(改版) 中公新書.
- 野矢茂樹 2006. 『入門！ 論理学』 中公新書.
- Onodera, N. 2002. *Japanese Discourse Markers: Synchronic and Diachronic Discourse Analysis (Pragmatics & Beyond New Series)*. John Benjamins Publishing Company.
- Shinzato, R. 2011. "From a Manner Adverb to a Discourse Particle: The Case of *yahari*, *yappari* and *yappa*." *Journal of Japanese Linguistics* 27, 17–44.
- Sora 2022a. 「裏を返す」広辞苑無料検索 広辞苑 (EBWeb バージョン 1.2.13)
<https://sakura-paris.org/dict/広辞苑/prefix/裏を返す> (11/10/2022 に閲覧)
- Sora 2022b. 「逆」 広辞苑無料検索 広辞苑 (EBWeb バージョン 1.2.13)
<https://sakura-paris.org/dict/広辞苑/prefix/逆> (11/10/2022 に閲覧)
- Sora 2022c. 「うらを返す」 広辞苑無料検索 大辞林 (EBWeb バージョン 1.2.13)
(11/10/2022 に閲覧)
- Webber, B. and Prasad, R. 2009. "Discourse Structure: Swings and Roundabouts." In Behrens and Fabricius-Hansen (eds.) *Structuring Information in Discourse: the Explicit/Implicit Dimension* (Oslo Studies in Language, Vol. 1, No.1), 171-190.

SNSにおける新奇表現「どうぞする」にみる「どうぞ」のメトニミー的意味拡張

三瀬 凪乃

立命館大学大学院文学研究科

<Abstract>

This study analyzes the semantic usage of a novel expression *dōzo-suru*, frequently observed in Japanese texting language, and discusses its semantic structure from the viewpoint of reference point construction. This paper points out that these expressions are divided into two major semantic usages, and then it claims that this expression consists of the form of "quotation '*dōzo*' + *suru*'. In conclusion, it is found that the quotation part refers to the utterance "*dōzo*" in interaction scenes such as daily conversations and make it possible to mean two different acts performed along with utterances.

【キーワード】：SNS、新奇表現、拡張的用法、メトニミー、参照点構造

1. はじめに

インターネットの普及により、話し言葉や書き言葉とは異なる特徴を持つ「打ち言葉」と呼ばれる新しい言葉が生まれた。本研究で取り扱う「どうぞする」表現も、三瀬・岡本(2021)にて分析された「Vて、どうぞ」表現と同様に、ソーシャル・メディア上で多用されていることから、「打ち言葉」の一つであるといえる。

本稿では、この「どうぞする」表現に着目し、Twitterを用いて実際の用例を収集した上で、先行研究で指摘されている「どうぞ」の特徴をもとに、その意味用法を明らかにする。さらに先行研究に加え、コーパスを用いて相互行為場面における「どうぞ」の使用実態を明らかにすることで、書き言葉・話し言葉双方の観点から当該表現における「どうぞ」の特徴を探り、本表現の新奇的な意味用法について考察を行う。

2. 「どうぞする」表現について

はじめに、本研究で取り扱う「どうぞする」表現について簡単に説明する。本表現はソーシャルメディア上で多数観察される表現である。以下(1)に具体例を挙げる。

- (1) a. (レジで) レジ袋取れないから、ずっとお先にどうぞしてた。
b. ティッシュ探して 1 枚とってどうぞしてた.

このように「どうぞする」表現は、さまざまな活用形で使用され、意味的側面においても多様な意味を持っていることが窺える。また、これらの表現は『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』や『日本語日常会話コーパス (CEJC)』において現代語としての用例数が 0 件であることから、打ち言葉特有の表現であると考えられる。

3. 先行研究

「どうぞする」表現の分析を行う前に、「どうぞ」に関する先行研究を概観する。

まず、「どうぞ」は「してください」などの特定の言語形式と呼応し (工藤 2000)、それらの表現を予告するために文頭に近い位置に現れるという構文的特徴を持つ (cf. 益岡・田窪 1992)。また、日本語では「てください」などの文末の言語形式によって <依頼>などの意味が表現されることから、これらの形式と呼応する「どうぞ」の働きは余剰であり、モダリティの強調や明確化という役割を担うことが中心的機能であると主張する研究も存在する (cf. 中右 1980)。さらに、「どうぞ」は行為指示表現に関わり、<助言><許可>といった<勧め>を表す (cf. 武内 2015)。

「どうぞ」に関する先行研究の多くは、小説などの表現や作例を用いて分析を行っていることから、本章で挙げた先行研究は書き言葉における「どうぞ」の特徴を整理したものであるといえる。

4. 分析 1

4.1. 分析手法

先行研究の「どうぞ」の特徴を踏まえた上で、「どうぞする」表現の意味用法について分析を行う。分析にあたり、Twitter の「高度な検索」機能を用いて「どうぞする」とその活用形を含む用例を 368 例収集した。期間は 2021 年 10 月 16 日から 2021 年 11 月 2 日に設定した。

4.2. 分析結果

分析の結果、「どうぞする」表現には次のような特徴が観察された。

まず、本表現における「どうぞ」は動詞「する」と結びつくことで、全て何らかの行為や動作を行うことを表す表現として使用されている。その際、具体的な行為や動

作は明示されず、前後の語や文脈によって判断可能となる。そして、「どうぞする」表現における「どうぞ」が表すこれらの行為や動作は、大きく分けて2つに分類することができる。1つは(A)「人に何らかの行為を促す<勧め>行為」、もう1つは(B)「何らかの対象の移動を伴った動作主の具体的な行為」である。この点に関しては後に詳しく説明する。

4.2.1. 「どうぞする」表現の例外的特徴

「どうぞする」表現の意味用法について分析・考察する前に、収集した用例の中に見られた当該表現の例外的特徴について述べる。

まず、(2)のように「どうぞ」と「する」の間に記号を含む表現が60例見られた。

(2) (レジ後ろの人に対して)「お先にどうぞするか迷います。

これらの表現で使用される記号はカギ括弧や「!」、「～」などさまざまである。本稿では、当該表現も「どうぞする」表現として扱うが、これらの表現は無標の「どうぞする」表現と異なり、各記号との関係性も踏まえて考察されるべきであるため、本稿では記号を含まない表現を中心に考察することとする。

2つ目に、(3)のような「どうぞどうぞする」という表現が58例(記号込みを含む)観察された。

(3) 前でリーマン5、6人がどうぞどうぞして

本稿では、これらの表現も含めて「どうぞする」表現と称することとする。しかし、「どうぞ」を1つしか含まない表現との比較は行わず、これらに関しては別途機会を設けて考察する。

4.2.2. 「どうぞする」表現の2つの意味用法

前節で、分析結果から「どうぞする」表現の意味用法が2つに大別できると指摘した。本節では、それぞれの意味用法について詳しく説明する。

まず、「どうぞする」表現における「どうぞ」が(A)「人に何らかの行為を促す<勧め>行為」を表すものに関して、以下(4)に具体例を挙げる。

- (4) a. (レジで) レジ袋取れないから、ずっとお先にどうぞしてた 😱
b. (電車の待ち列で前の人に対して)乗らないのでってよけてどうぞしろよ。

(4)は、人に対して何らかの行為を勧めている。関連研究では「どうぞ」が＜勧め＞に関わる語であることが指摘されているため、これらの表現における「どうぞ」は従来の意味用法に一致している。

次に、(B)「何らかの対象の移動を伴った動作主の具体的な行為」を表すものの具体例を以下 (5) に挙げる。

- (5) a. (2歳の子供が犬に) ティッシュ探して1枚とってどうぞしてた 😊
b. 欲しいのあればどうぞどうぞするから、(中略) 声掛けてね 😋
c. カレー煮込み直すの億劫になってくるね。。冷凍庫へどうぞするかな。。

(5) は、「渡す」「あげる」「入れる」といった動作主の具体的な行為を表している。(B) は、(5)a, b のような「渡す」「あげる」といった譲渡動作がほとんどである。また、「ティッシュ」や「冷凍庫へ」などのように譲渡対象や譲渡先が明示される傾向にある。これらは関連研究における「どうぞ」の意味用法とは一致しない。

5. 考察 1

なぜ「どうぞする」表現において、人に行きを促す＜勧め＞に関わる語である「どうぞ」が動作主の具体的な行為、特に譲渡行為を表すことが可能となるのであろうか。

本稿では、当該表現が「《引用としての「どうぞ」》 + 動詞「する」」の形式から生じたものであると考察する。この考察は、当該表現の例外的特徴に見られる (2) のようなカギ括弧付きの表現からも支持される。そして、この《引用としての「どうぞ」》が山口 (2018) の述べる「引用名詞類」にあたると考える。

引用名詞類は直接引用によって表され、引用される発話は特定の誰かの発話ではなく、原則として抽象的で一般的な発話が引用される。また、これらの引用部は基本的に《...ということば/表現》という意味合いで、名詞として使用されるという特徴も持つ。例えば、「「ネコ」は2モーラからなる語である」(山口 2018: 242) のような表現における「ネコ」が引用名詞類に該当し、引用部は《「ネコ」ということば》を指している。これに対し、“Don’t you ‘hello mother’ me!” (*ibid.* 242) のような表現は引用名詞類の拡張的用法であるとされ、メトニミー (metonymy) を介して、引用された語や表

現と近接関係にある行為や性質などを表す用法を持つことも指摘されている。先の例では、「おはようお母さん、じゃないでしょ」と訳され、引用部の表現は近接関係にある発話の行為、つまり《当該表現を口にする》ことを表している。

引用名詞類のこれらの用法を踏まえて、「どうぞする」表現の考察に戻る。後続の動詞「する」との関係性から、当該表現における「どうぞ」が引用名詞類の中心的用法として、《「どうぞ」ということば》を意味するとは考えにくい。そのため、拡張的用法として「どうぞ」と近接関係にあるものが示されていると考えられる。本稿では、本表現において(6)の下線部のように日常会話場面に見られる発話を含む用例が多数観察されることから、当該表現が日常会話との関わりを持つと考える。

- (6) a. 110cmくらいの女の子に屈んではいどうぞしたい
 b. 人が来るたびお先どうぞしながらだったので結構時間掛かったなあ。

6. 分析 2

5章の考察を踏まえて、本章ではCEJCの全文検索システム『ひまわり』を用いて「どうぞ」を含む会話データを抽出し、該当するデータの前後の会話と発話者の動作を書き起こし分析を行うことで、相互行為場面における「どうぞ」の使用実態を明らかにする。収集した用例は全部で125例である。

6.1. 分析結果

分析の結果、全データ中105例において「お先にどうぞ。」のように、指示内容が明示されず、特定の言語形式とも呼応しない形で使用されていることが明らかとなった。関連研究では、「どうぞ」は「てください」などの特定の言語形式と呼応すると指摘されていた。しかし分析の結果、相互行為場面においては「どうぞ」は多くの場合一語のみで使用され、特定の言語形式が呼応する発話はわずかであった。このことから、相互行為場面における「どうぞ」は特定の言語形式と結びつかず、一語のみで使用される傾向にあるといえる。

また、発話と発話者の動作の関係性の観点では、40例のデータにおいて「どうぞ」を含む発話の前後に発話者から会話参与者に向けて何らかの物の移動が伴っていた。さらにそのうち発話と同時に動作が行われていたものは34例であった。また中には、動作に合わせて発話を調整したり(図1)、言い直したりするものも見られた(図2)。

相互行為場面において、「どうぞ」が先行研究で指摘されてきた聞き手に対する行為指示を表す表現として使用されているのであれば、発話者は動作（譲渡動作）と必ずしも発話のタイミングを合わせる必要はない。しかし、実際には発話と動作のタイミングは一致し、また前述したように動作に合わせて発話を調整する場面も見られた。このことから、相互行為場面における発話「どうぞ」と譲渡動作は密接な関係にあるといえる。



図 1: 会話 ID_S002_007 における発話と動作



図 2: 会話 ID_T016_004b における発話と動作

7. 考察 2

5章において、「どうぞする」表現における「どうぞ」が引用名詞類の拡張的用法として、「どうぞ」という語と近接関係にあるものが表されていると考察した。本稿では、前節の相互行為場面における「どうぞ」の使用実態の分析結果から、当該表現における「どうぞ」が近接関係にある《相互行為場面における発話「どうぞ」》を示すと考える。そしてさらに、この《発話「どうぞ」》を参照点として介することで、発話場で行われる 2 つの行為、(a) 人に何らかの行為を促す＜勧め行為＞と (b) 動作主の＜譲渡行為＞のいずれかを意味することが可能となると考察する。

われわれ人間は、日常生活の中である対象を把握したり指示したりする際に、別により把握しやすいものを介して、目的の対象を認知することがある。Langacker (1993: 5-6) はこの経由点となる対象を参照点 (reference point)、そしてこのような認知能力を参照点能力 (reference-point ability) と呼び、目標の対象を把握するまでの認知プロセスを図 3 のように図式化した。この認知能力は言語 (あるいは言語現象) とは区別される存在ではあるが、照応、指示表現、話題化などの言語現象の発現にはこの認知能力が関わっている

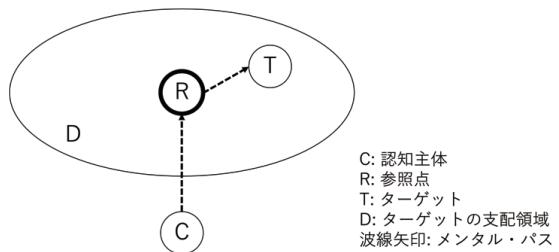


図 3: 参照点認知 (Langacker 1993: 6)

(山梨 2000: 86)。先の引用名詞類の拡張的用法で挙げた「メトニミー」も参照点能力に関わる言語現象の一つである。

この観点を踏まえ、「どうぞする」表現では、当該表現の「どうぞ」が図4のような二重の参照点構造を有しているために2つの異なる行為を表すことができると考える。まず、「どうぞする」表現における《引用名詞類の「どうぞ」》が参照点 R_1 として、近接関係にある《相互行為における発話「どうぞ」》(= T_1) を指す。そしてこの T_1 により、相互行為の場が喚起され、さらにこの《発話「どうぞ」》を参照点 R_2 として介することで、「どうぞ」を伴う相互行為場面で行われる2つの行為 (a) 人に何らかの行為を促す<勧め行為>(= T_{2a})と (b) 動作主の<譲渡行為>(= T_{2b}) を表すと考えられる。「どうぞする」表現では、このような参照点構造を有した「どうぞ」が動詞「する」と結びつくことによって、これらの行為を行うことを表すことができると考える。

しかし、「どうぞする」表現の(B)では、(5)cの「冷凍庫へどうぞするかな。。」のように、移動は伴うが譲渡行為とは異なる行為を表す例もいくつか観察された。これらは、「冷蔵庫」などのように譲渡先として人ではなく場所が表される。このことから、(5)cのような例は場所を擬人的に捉えたメタファーによる拡張的使用法であると考えられ、これらは「どうぞする」表現の譲渡行為を表す例から派生したものであると考えできる。しかし、このような用例は数が限られており、その詳細は明らかではない。そのため、これらは表現として派生しつつある段階であると考えられる。

最後に、本稿における以上の分析と考察をまとめると図5のように表すことができる。

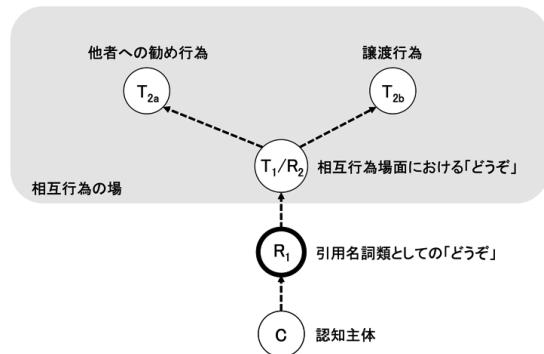


図4: 「どうぞする」表現における「どうぞ」の参照点構造

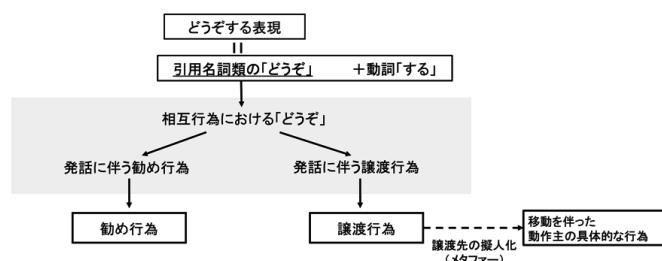


図5: 「どうぞする」表現の意味構造

8. おわりに

本稿では、「打ち言葉」における新奇表現「どうぞする」について分析・考察を行った。一方、Twitter 上には (7) のような表現も存在する。

(7) a. 眠気がこんにちはしたので寝て起きてから作業する

b. ピアノかエレクトーン、どちらかさよならするか、

(7) の「こんにちは」や「さよなら」は挨拶表現であるが、ここでは動詞「する」と結びついて、「(眠気が) 来ることや「捨てる」ことを表していることから、「どうぞする」表現と同様の性質を持つと予想される。このような共通性から「打ち言葉」では、言葉の意味や用法だけでなく、発話時の出来事といった言語に関わる多様な側面を柔軟に用いていると考えられる。

参照文献

- 工藤浩. 2000. 「副詞と文の陳述的なタイプ」, 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩, 『日本語の文法(3) モダリティ』, 164-234, 東京: 岩波書店.
- Langacker, R. W. 1993. "Reference-point Constructions", *Cognitive Linguistics*, 4, 1-38.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法一改訂版一』, 東京: くろしお出版.
- 三瀬凪乃・岡本雅史. 2016. 「Vて、どうぞ」—SNS における陳述副詞「どうぞ」の拡張的用法ー」, 『日本語用論学会第 23 回大会発表論文集』, 16, 81-88.
- 中右実. 1980. 「文副詞の比較」, 国広哲弥 (編) 『日英語比較講座 第 2 卷文法』, 157-219, 東京: 大修館書店.
- 武内道子. 2015. 「ポライトネス表明<どうぞ>と<どうか>」, 『手続き的意味論—談話連結語の意味論と語用論—ひつじ研究叢書<言語編>第 128 卷』, 195-216, 東京: ひつじ書房.
- 山口治彦. 2018. 「引用表現の広がりとつながりを追う—引用名詞類とその意義拡張をもとにー」, 『英文学研究 支部総合号』, 1, 241-250.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』, 東京: くろしお出版.

使用コーパス

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香. 2022. 『『日本語日常会話コーパス』—設計・構築・特徴—』, 国立国語研究所, 「日常会話コーパス」プロジェクト報告書 6.

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』 http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

* 謝辞

本稿は日本語用論学会第 25 回大会（2022 年 11 月 26 日、於：オンライン開催）において発表した内容に加筆、修正を施したものである。発表に際し、貴重なご助言をくださった方々に感謝申し上げます。

現代英語における speak of the devil の語用論的拡張について

山内 昇
大同大学

<Abstract>

The phrase “speak of the devil” is commonly used in conversation under three conditions: the person (a) has been mentioned earlier, (b) is visible to the speaker, and (c) is a human or an animate being. However, exceptions where one of these conditions is not met exist. This study employed a corpus-based approach to examine the frequency of these exceptions. The findings reveal that these exceptions have been rare but consistent since the 1980s and 1990s. The study further argues that the three conditions form a set of preference rules that allow the phrase to be used if one condition is not met, so long as the others are fulfilled.

【キーワード】: speak of the devil・既出性・視認性・有生性・優先規則体系

1. はじめに

本研究で扱う speak of the devil は日本語の「噂をすれば」に相当する諺表現である。当該表現は「悪魔の名前を口に出すと悪魔を呼び出してしまう」という民間信仰に由来し (Balázs & Piirainen 2016: 29), 元々は and 等位節を伴い, 文字通りの意味で使用されていた (e.g., Speak of the devil and he's sure to appear. (Gray 1939: 264))。しかし, 現在では, 話題に上がった人物が偶然その場に現れたことを聞き手に伝えるために使用される (e.g., X: I heard Sally got tenure. [Sally appears.] Y: Well, speak of the devil. (Gasser & Dyer 1986: 388))。辞書や Gasser & Dyer (1986) の記述を踏まえると, 当該表現の使用条件は①ある人物が直前の会話で話題に上がっており (既出性), ②その人物が発話者の視野内に物理的に現れ (視認性), ③その人物は有生物である (有生性) という 3 つの条件に分けられる。しかし, 当該表現のより多くの実例を観察してみると, これらの条件のいずれかを満たさない事例が一定数存在することが分かる ((1-3) 参照)。

- (1) HEDGES: Who's the boy? —— BEAN: Little Bill. All grown up now. War hero.
—— HEDGES: Is that so? —— BEAN: Expecting him home any day now. ——
HEDGES: You planning a big homecoming, are you? —— BEAN: Like I said, war
hero. Big deal, town this size. Speak of the devil. [LITTLE BILL'S WIFE
APPEARS.] That's, uh, Little Bill's wife. Pilar. (Edge (Film 2015))
- (2) ASHLEY: What's her name? —— SOPHIA: Michelle Foley. I thought maybe I'd
show her around this weekend. —— ASHLEY: That should be nice. —— SOPHIA:
[TEXT MESSAGE ALERT] Speak of the devil. (The Wrong Girl (Film 2015))
- (3) BOB: We are celebrating tonight. It is Evelyn's birthday. [A BIRTHDAY CAKE IS
SERVED AT THE TABLE.] Speak of the devil, here it is. Look at that.
(The Infiltrator (Film 2016))

(1-3) では、それぞれ、話題の人物本人ではなくその妻が現れた際（既出性に違反）、話題の人物からメールが届いた際（視認性に違反）、誕生日祝いの話の最中にケーキが運ばれてきた際（有生性に違反）に、当該表現が使用されている。本研究では、これらのように上記①②③の条件の一部を満たさない事例を「語用論的拡張事例」と呼ぶ。The Oxford English Dictionary (2nd Edition)によれば、当該表現の歴史は長く、talk of the devil の場合、その最古例は 1666 年のものである。2023 年までの 357 年間に渡り、当該表現は様々な辞書や研究で扱われてきたが、上述のような語用論的拡張事例の存在は一切指摘されてこなかった。

そこで本研究では、The Movie Corpus (Movies) (Davies 2019) から抽出した 254 例に基づき、(a) 語用論的拡張事例はどの程度使用されているのか、(b) 語用論的拡張事例はいつ頃発生したのかを調査する（第 3 節）。そのうえで、(c) 既出性・視認性・有生性の 3 条件の一部が欠けたとしても使用が認められる理由を優先規則体系 (Preference Rule Systems) (Jackendoff 1990: 35–37) の観点から考察する（第 4 節）。第 2 節では、Movies からのデータ収集の方法を示す。

2. データ収集の方法

本研究で使用する Movies は 1930 年代から 2010 年代までに公開された約 2 万 5 千作の映画の英語字幕から構成されるコーパスである。その規模は約 2 億語である。データの収集手順は以下の通りである。①検索インターフェイスにおいて speak of という文字列を検索した。②検索結果として表示される 1862 例

を Microsoft Excel のシートに貼りつけ、手作業で該当例と見なせるデータを抽出した（272 例）。③抽出データを精査し、重複例等を除外した（26 例）。④他表現の検索結果でも、実際の映像で *speak of the devil* と発話されていた場合はデータに追加した（8 例）。以上の手順により 254 例の該当例を抽出した。

3. 使用頻度及び発生時期

本節では、(a) 語用論的拡張事例はどの程度使用されており、(b) いつ頃発生したのかを示す。254 例全ての実際の映像を確認し、ある人物/事物が (i) 先行文脈において旧情報/新情報となる事例、(ii) 発話者の視野内に物理的に現れる/現れない事例、(iii) 有生物/無生物となる事例のトークン頻度 (FREQ) と割合 (%), 100 万語ごとの頻度 (FPM) を年代ごとに算出した。

3.1. 既出性

本研究では、旧情報と新情報の分類として、Birner (2006) による分類を援用する。Birner (2006: 46) は、談話における情報の新旧 (D(iscourse)-Old/New) と聞き手にとっての情報の新旧 (H(earer)-Old/New) の組み合わせから、旧情報と新情報を 4 つの区分に分けている。D-Old/H-Old には、さらに 2 つの下位区分を設けている。D-Old/H-Old (Evoked: Identity) は既出語句を同一指示する情報であり、D-Old/H-Old (Evoked: Elaborating) は先行文脈の事柄と精緻化推論を介して関係づけられる情報である。D-Old/H-New (Bridging Inferable) は先行文脈の情報と橋渡し推論を介して関係づけられる情報である。D-New/H-Old (Unused) は先行文脈で言及されていないが、聞き手が知っていると話し手が認識している情報である。D-New/H-New (Brand-new) は先行文脈に言及されておらず、話し手が聞き手も知らないと認識している情報である。

本研究では、Evoked: Identity の場合に限り、既出性の条件を満たすと仮定する。表 1 に各分類の使用頻度を示す。既出性を満たす Identity の事例は全体の 77.95% (198 例) を占める。既出性に違反する Elaborating の事例は 4.33% (11 例), Bridging Inferable の事例は 6.30% (16 例), Unused と Brand-new の事例は合わせて 0.78% (2 例) である。全体の 10% 程度がこの条件に違反することが分かる。それらの違反事例は 30 年代と 40 年代に 1 例ずつ観察されるが、大体の事例が 80-90 年代くらいから観察され始める。未分類としたのは先行場面が省略された事例等である (10.63% (27 例))。

表 1 既出性

		1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	2010s	合計
D-Old/H-Old: (Evoked: Identity)	FREQ	2	3	3	1	6	6	35	49	93	198
	%	0.79	1.18	1.18	0.39	2.36	2.36	13.78	19.29	36.61	77.95
	FPM	0.30	0.31	0.28	0.11	0.59	0.42	1.42	0.96	1.47	0.99
D-Old/H-Old: (Evoked: Elaborating)	FREQ	1	0	0	0	0	1	0	2	7	11
	%	0.39	0.00	0.00	0.00	0.00	0.39	0.00	0.79	2.76	4.33
	FPM	0.15	0.00	0.00	0.00	0.00	0.07	0.00	0.04	0.11	0.06
D-Old/H-New: (Bridging Inferrable)	FREQ	0	1	0	0	0	1	2	2	10	16
	%	0.00	0.39	0.00	0.00	0.00	0.39	0.79	0.79	3.94	6.30
	FPM	0.00	0.10	0.00	0.00	0.00	0.07	0.08	0.04	0.16	0.08
D-New/H-Old: (Unused)	FREQ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	%	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.39	0.00	0.00	0.39
	FPM	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.04	0.00	0.00	0.01
D-New/H-New: (Brand-new)	FREQ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	%	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.39	0.00	0.39
	FPM	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.00	0.01
未分類	FREQ	2	2	0	0	1	1	5	6	10	27
	%	0.79	0.79	0.00	0.00	0.39	0.39	1.97	2.36	3.94	10.63
	FPM	0.30	0.20	0.00	0.00	0.10	0.07	0.20	0.12	0.16	0.14

3.2. 視認性

本研究では、ある人物/事物が speak of the devil の発話場面に物理的に現れ、発話者が視認できる場合に、視認性の条件を満たすと仮定する。表 2 に視認性の有無ごとの使用頻度を年代ごとに示す。

表 2 視認性

		1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	2010s	合計
視認性あり	FREQ	3	6	2	1	6	9	34	43	85	189
	%	1.18	2.36	0.79	0.39	2.36	3.54	13.39	16.93	33.46	74.41
	FPM	0.46	0.61	0.19	0.11	0.59	0.64	1.38	0.84	1.34	0.95
視認性なし	FREQ	2	0	1	0	1	0	9	17	35	65
	%	0.79	0.00	0.39	0.00	0.39	0.00	3.54	6.69	13.78	25.59
	FPM	0.30	0.00	0.09	0.00	0.10	0.00	0.37	0.33	0.55	0.33

視認性を満たす事例が 74.41% (189 例) を占め、満たさない事例は 25.59% (65 例) に留まる。視認性に違反する事例は 30 年代に 2 例、50 年代に 1 例、70 年代に 1 例観察されるが、大部分は 90 年代以降から使用が増加する。

視認性に違反する 65 例は、以下 3 タイプに分けられる。第一に、部屋/建物

等の外部から発話場面に関与する場合である。その手段として、ノック（7例）、使用人や自動音声を介した伝聞（3例）、車のクラクション（1例）、ドアベル（5例）、建物の電気を落とす（1例）、声（4例）、物音（2例）がある。第二に、通信機器等を介して発話場面に関与する場合がある。電話（7例）、（宇宙船の）通信装置（1例）、ポケベル（1例）、ビデオ電話（2例）、携帯電話（23例）、メール（6例）が挙げられる。第三に、音や気体など肉眼では見えないものが発話場面に関与する場合がある。警報音（1例）や放屁（1例）が挙げられる。通信機器の発達など、発話場面の関与する可能な手段が拡大することにより、当該表現の使用範囲も拡大したと考えられる。

3.3. 有生性

本研究では、Silverstein (1976) による名詞句階層を援用し、[+human] か [-human/+animate] となる個体が発話に関与する場合に限り、有生性を満たすと仮定する。表 3 に各分類の使用頻度を年代ごとに示す。

表 3 有生性

		1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	2010s	合計
[+human]	FREQ	5	6	3	1	6	8	36	54	108	227
	%	1.97	2.36	1.18	0.39	2.36	3.15	14.17	21.26	42.52	89.37
	FPM	0.76	0.61	0.28	0.11	0.59	0.57	1.46	1.05	1.71	1.14
[-human/+animate]	FREQ	0	0	0	0	1	0	4	3	3	11
	%	0.00	0.00	0.00	0.00	0.39	0.00	1.57	1.18	1.18	4.33
	FPM	0.00	0.00	0.00	0.00	0.10	0.00	0.16	0.06	0.05	0.06
[-animate]	FREQ	0	0	0	0	0	1	3	3	8	15
	%	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.39	1.18	1.18	3.15	5.91
	FPM	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.07	0.12	0.06	0.13	0.08
未分類	FREQ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	%	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.39	0.39
	FPM	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.01

[+human] の事例は 89.37% (227 例) であり、[-human/+animate] の事例は 4.33% (11 例) である。両者を合わせると、全体の 93.7% (238 例) は有生性を満たしていることになる。[-animate] の事例は 80 年代以降に 5.91% (15 例) と極めて少数ではあるが存在している。無生物の具体例として、死体（2 例）、食べ物（3 例）、乗り物（3 例）、看板（1 例）、企業広告（1 例）、アクセサリー（1

例), 雑誌の表紙写真 (1 例), 履歴書 (1 例), 警報 (1 例), 放屁 (1 例) が挙げられる。これらは無生物ではあるが何らかの点で人間に関わるものである。未分類とした 1 例は目前の光景に先行発話との共通性が見られる場合である。

3.4. 第 3 節のまとめ

第 3 節では, 語用論的拡張事例は低頻度ではあるものの, 一定の使用が確かに認められることを示した ([-既出性] (11.04%), [-視認性] (25.59%), [-有生性] (5.91%))。拡張事例の多くは 80-90 年代から発生することを示した。

4. 優先規則体系に基づく考察

本節では, 既出性・視認性・有生性の 3 条件の一部が欠けても使用が認められる理由を優先規則体系 (Jackendoff 1990) の観点から考察する。優先規則体系とは, 複数の優先規則から成る体系であり, 優先規則とは, その規則が満たされる場合に典型的となり, その規則が満たれない場合に非典型的となる規則である。

表 4 に既出性・視認性・有生性の組み合わせごとの使用頻度を示す。表 1 及び表 3 で未分類とした事例は除外した。

表 4 条件の組み合わせごとの使用頻度

	既出性	視認性	有生性	FREQ	%	FPM
A	+	+	+	136	60.18	0.68
B	+	-	+	53	23.45	0.27
C	-	+	+	18	7.96	0.09
D	+	+	-	7	3.10	0.04
E	-	-	+	4	1.77	0.02
F	-	+	-	4	1.77	0.02
G	+	-	-	2	0.88	0.01
H	-	-	-	2	0.88	0.01

A は全条件を満たす場合であり, 最も頻度が高く, 全体の 60.18% (136 例) を占める。A の場合が最も典型的な用法である。BCD は条件を一つ満たさない場合である。頻度の観点から, A よりも典型性が低下する。また, BCD の頻度差は視認性, 既出性, 有生性の順番で優先度が高くなることを示している。EFG は条件を二つ満たさない場合である。BCD の頻度と比べると EFG はより非典型的であると考えられる。EFG の具体例を (4-6) に挙げる。

- (4) NICOLE: We're this close to solving a murder that nobody even knows has happened. [CELLPHONE RINGING] —— MILO: Speak of the devil. —— NICOLE: Really? —— MILO: Hey, Bobby, what's up? (*The Bounty Hunter* (Film 2010))
- (5) HANNAH: [TO ANDREW] This is Curtis. He provides light for Western Maine... —— ANDREW: Oh, yeah? —— CURTIS: Yeah. Hannah: ...and single-handedly keeps the deer population under control. [...] —— CURTIS: Speak of the devil. Got some venison from the deep-freeze. (*Tumbledown* (Film 2015))
- (6) HARRY: That chick in the casket, she won't even match up with that ringer you been toting around. You ever think about that? —— GAY: Actually, he did, Harry. [CELLPHONE RINGING] That's why he's cremating the body. —— HARIAN: Yeah, you ready? Speak of the devil. Gotta go. Perry, nice to have known you. (*Kiss Kiss Bang Bang* (Film 2005))

(4-6) では、それぞれ、殺人事件について調査している際に警察 (Bobby) から電話があった際 ([-既出性][-視認性][+有生性]), 鹿の頭数調節に関する話の中で持参した冷凍の鹿肉を取り出した際 ([-既出性][+視認性][-有生性]), 証拠隠滅のために火葬する死体 (the body) を運び出す準備が整ったという電話があった際 ([+既出性][-視認性][-有生性]) に、当該表現が使用されている。

H は全条件を満たさない場合である。該当する 2 例を (7) と (8) に示す。

- (7) GABRIEL: What are you learning in school? You learning fun stuff? —— JOHNATHAN: We read, do recess, listen to music, dance. —— GABRIEL: Rec... What kind of...? Dancin' around? That sounds very arty-farty to me, bud. Speak of the devil. [FART NOISE] —— JOHNATHAN: Dad! (*Man Down* (Film 2015))
- (8) DANNY: [CELLPHONE RINGING] Hello? —— MILES: Look at that, Danny. Right on time. You've just earned yourself extra minutes on the next task. [FIRE CALL SIGNAL RINGING] And speak of the devil, there's the bell for Round 4.

(*12 Rounds* (Film 2009))

(7) では、息子が学校で習ったことに関し、父親が arty-farty と評した後、放屁をする際に当該表現が使用されている。(8) では、the next task の合図となる火災報知器の警報音が電話越しに聞こえた際に当該表現が使用されている。定義上、

どちらも全条件を満たしていないが、前者は fart をメタ言語的に受けるという点で既出性が認められ、後者はふざけて警報音を始まりのゴングに見立てているという点でメトニミカルな既出性が認められるため、容認されると考えられる。

以上を踏まえると、既出性・視認性・有生性の 3 条件は優先規則体系を成しており、全条件が満たされる場合に最も典型的な用法となり、一部の条件を欠くとしても可能な用法の範囲に収まっていると考えられる。

5. おわりに

本研究では、当該表現の語用論的拡張事例がどの程度使用されており、いつ頃発生したのかを調査し、既出性・視認性・有生性は例外を許す相対的な優先規則であることを示した。理論的示唆として、語用論的拡張は優先規則体系の一部を欠くように起こり、体系全体を崩さない範囲で幅が制限されるという点が挙げられる。発展的課題としては、①先行文脈の事柄と発話場面に関与する事物の関係性がどこまで許容されるのか、②当該表現の使用の背後には人物を都合良く物語に導入したいという脚本家側の動機もあるのではないかなどが挙げられる。

参考文献

- Balázsi, J. and E. Piirainen. 2016. “Devil in Wolf’s Clothing: Variations on the Theme of “Speak of the Wolf/Devil and He Appears”.” *Proverbium* 33, 29–50.
- Birner, B. J. 2006. “Inferential Relations and Noncanonical Word Order.” In B. J. Birner and G. Ward (eds.) *Drawing the Boundaries of Meaning: Neo-Gricean Studies in Pragmatic and Semantic in Honor of Laurence R. Horn*, 31–51. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Silverstein, M. 1976. “Hierarchy of Features and Ergativity.” In Dixon, R.M.W. (ed.) *Grammatical Categories in Australian Languages*, 112–171. Canberra: Australian National University.
- Davies, M. 2019. *The Movie Corpus*. <https://www.english-corpora.org/movies/>.
- Gasser, M. and M. Dyer. 1986. “*Speak of the devil*: Representing Deictic and Speech Act Knowledge in an Integrated Lexical Memory.” *Proceedings of the Eighth Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, 388–398.
- Gray, L. H. 1923. *Foundations of Language*. New York: The Macmillan Company.
- Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge: The MIT Press.

ハッシュタグの順序：場所を表すタグを中心に

山崎由佳

京都大学大学院

<Abstract>

This paper shows some tendencies in the order of hashtags on social media. Since hashtags can be placed within the text unlike the traditional metadata, the way in which hashtags are placed displays an interesting deviation from the word ordering in natural languages. This paper focuses on hashtags indicating “location”, and analyzes posts on Twitter and results of questionnaires. It has been clarified that (i) the “large to small” order (e.g., #Japan #Kyoto) is found to be predominant in Japanese posts, but not in English posts, and that (ii) the order of hashtags is likely to accord with the order of media images rather than the order suggested in the text.

【キーワード】：ハッシュタグ、語順、類像性、マルチモーダル、SNS

1. はじめに

本研究は、ハッシュタグの順序における傾向性を探るものである。

ハッシュタグは、ソーシャルメディアのTwitterに2007年に登場した(Pasho 2017, Twitter Japan 2022)。これは形式的には、ハッシュ記号(#)で始まり、スペースや句読点等を含まない文字列¹が続いているものである。

TwitterやInstagramといったソーシャルメディアは、指定したタグを含む投稿を検索・表示する機能を提供する。ここから、ハッシュタグは、メディアのシステムが保証するメタデータ性を持つといえるだろう。ただしハッシュタグは、写真の撮影日や撮影場所のような、コンテンツ自体から分離した形でデータの情報を記述する従来型のメタデータとは異なり、Zappavigna (2015, 2018:32) が指摘するように、テキスト自体の内部でシームレスに機能することができる。

このようなハッシュタグについての言語学的な研究は、形態論的・語用論的な観点から実施されてきている(Caleffi 2015, Scott 2015, Zappavigna 2015, 2018)が、複数のハッシュタグの並びとその構造についての研究は、筆者の知る限りでは未開拓である。

ハッシュタグの順序については、ソーシャルメディア自体が強い規則を与えるわけではない。しかし「日常的な」言葉を用いて流通するハッシュタグも多い以上、言語的な慣習が影響しないとは言い切れまい。

ここで、順序交換という視点を導入する。ソーシャルメディア上の投稿内にあるハッシュタグの列には、(1) のように、構成要素の順序が（この表現だけ見れば）交換可能なものがある一方、(2) のように、順序を入れ替えると、意味的な関係が大きく変化する場合も含めて、問題が生じるものがある。

- (1) a. 「#月曜日#猫」（この並びを含む投稿は Twitter に複数存在）
 b. 「#写真#風景」（この並びを含む投稿は Twitter に複数存在）
- (2) a. 「#あ#り#が#と#う」（この並びを含む投稿は Twitter に複数存在）
 b. 「#だから#楽しい」（この並びを含む投稿は Twitter に複数存在）
 c. 「#気温じゃない#心が#熱い漢」（投稿@Queen18006894 (2021)²の中）

この (1) は、要素を同時並行的に処理してもよきそうな「箇条書き的」（「並列的」）な並びだといえよう。他方、(2) は、既存の言語の規範に依拠する、「直列的」な並びであるといえよう。

本研究が問うのは、(1) のような、順序交換で必ずしも問題が生じるとはいえない場合にも、特定の順序が優位になるような傾向性が生じるであろうか、ということである。一見規範性から離れた部分においての傾向性を追究することは、人間が言語を創発する上での自然なやり方や、言語に関わる認知の仕方を照射し、また、言語運用上の社会的戦略を探ることにもつながると期待される。

2. 順序に関わる動機—類像性を参照して—

順序に関わる動機として、本研究で注目するのは、類像性(iconicity)の概念である。類像性とは、形式と意味の関係であり、特にある種の構造的な性質・特徴を保つような対応関係などを示す。類像性は、言語表現を分析し、ある言語表現の頻度がなぜ高くなっているのかについての説明を試みる上で有効である。

Haiman (1983)では Iconic Motivation として、(i) 表現の言語学的な距離は表現間の概念的な距離に対応する、(ii) 表現の言語学的な分離性はそれが表す対象や事象の概念的な独立性に対応する、(iii) 対話者間の社会的な距離は、指示内容が等しければ、メッセージの長さに対応する、ということが挙げられている。また Givón (1991)では、

機能的・概念的・認知的な近さと記述上の近さを表す近接性の原理や、出来事の順序と記述の順序の一致を表す線条性的意味的原理などが述べられている。これらをハッシュタグの考察に用いることも可能であろう。なお、類像性は、基本的に、全表現が必ず従うような条件を与えるものではない。ハッシュタグの固まり方や順序に関わる「柔らかな」秩序を探る本研究と、その点でも相性が良いのではないかと考えられる。

3. 場所を表すハッシュタグの事例から抽出した順序に関する仮説

分析の対象として、「場所」を表すハッシュタグに着目した。場所については、大小関係、近接性、といった、類像性に関わる性質を挙げることができる。本研究では、特に「#京都」というハッシュタグを中心に分析を実施した。「京都」は、観光地としての特色も持ち、さまざまな面が現れるのではないかと期待されたためである。

Twitter の投稿を中心に事例を観察し、ハッシュタグの順序と関係するのではないかと推測された要素・仮説を 5 つ抽出した。本研究では (a) と (c) を主に扱い、それぞれ第 4 節と第 5 節で論じる。

- (a) 地理的な包含関係と関係する
- (b) 同一種・近い意味のものをまとめる(近接性)
- (c) 出来事や、ハッシュタグ以外のテキスト・添付されたメディアにおける登場順と一致させる
- (d) 投稿の suffix 部分（他のテキストより後。Tsur and Rappoport (2012)の用いた区分）において、投稿のトピック・テーマを表すタグが頭に配置される
- (e) 投稿アカウントが店などを名乗る場合に、その店などの名称を表すタグが最後に配置される

補足 (a) の意味を説明するために「#鴨川 #京都 #上賀茂橋」という例を挙げる。「#鴨川 #京都」には「小→大」、「#京都 #上賀茂橋」には「大→小」という関係が成立する。(c) については、例えば観光についての投稿で、訪れた寺社仏閣が「→」で繋がれて記された場合にその後のハッシュタグの箇条書きでも同じ順番で示される、という現象が挙げられる（これは実例³を参考としたものである）。

4. 地理的な包含関係があるハッシュタグの順序についての分析

Twitter 上の投稿の分析と、アンケート調査により、地理的な包含関係と順序の関係

の分析および検証を実施した。

(A) Twitter 上の投稿の分析

Twitter 上の投稿を取得し、ハッシュタグで示される場所の大小関係と並び順について評価を行った。言語間での違いを調べるために、日本語・英語投稿を取得した。

対象データ Twitter の API を使って取得した、次の条件を満たす投稿データ（日本語投稿 129 件/英語投稿 149 件）。

条件 「日本語なら#京都 / 英語なら#kyoto」というタグを含み、このタグと同じ「ハッシュタググループ」(ハッシュタグ以外の文字列を含まない塊)に、場所を表すタグを他にも含む⁴。

評価方法 同じハッシュタググループに属する、場所を表すタグの間に、「大→小」「小→大」「同スケール」といった関係があるかどうかを、投稿ごとに人手で評価し、その合計をカウントした。注意点を以下に述べる。

- 注意点**
- (1) 2 つのタグの間に別のタグがあっても関係は「有」とする。
 - (2) 別言語で言い換えたタグを別だとみなすと「有」になる場合（例：「#京都 #kyoto」）は特別枠で数える。(3) 店名を場所とみなすと「有」になる場合（例：「#(店名) #京都」）も特別枠で数える。ただし (3) の基準には曖昧性があり、寺社名やタグ “#kyotoaqarium” はこの枠に入れていない。

結果 日本語投稿 129 件（投稿年月日：2019/1/1 - 2019/1/10）の評価を表 1 に、英語投稿 149 件（投稿年月日：2019/1/1 - 2019/1/31）の評価を表 2 に示す。

表 1 : 日本語投稿 129 件についての評価

関係	大→小	小→大	同スケール
別言語言い換え・店名抜きでも有	58	28	34 or 35 ⁵
別言語言い換えのために有（非：店名のため）	1	6	7
店名のために有（非：別言語のため）	12	12	0
別言語かつ店名のために有	0	5	0

表 2 : 英語投稿 149 件についての評価

関係	大→小	小→大	同スケール
別言語言い換え・店名抜きでも有	52	96	32
別言語言い換えのために有（非：店名のため）	7	3	27（同じ場所の翻訳含む）
店名のために有（非：別言語のため）	1	1	0
別言語かつ店名のために有	0	0	0

英語投稿では、「小→大」が「大→小」、「同スケール」の2倍近く見受けられた。ただし、似た投稿（同一ユーザー等）が10種類（3回以上が8種類）見つかり、全てを除くと同程度であった。ただしそれでも、日本語投稿との間に差が見受けられた。

考察 日本語・英語投稿の差について

日本語投稿では「大→小」が「小→大」の約2倍あり、英語投稿では逆に半分ほどであった。これは「住所表記」の慣習が認識に影響している可能性を含めた上でも、両言語における認識を反映した、類像的な現象ではないかと考えられる。

この結果解釈の参考として、鍋島(2006)の、対となる概念等を対象として、意味世界の順序と言語上の順序についての調査を言語横断的に行った研究を参照する。これによれば、英日ともに「大→小」の順が基本でありつつ、場合によっては英語を含む印欧グループでは逆転が起きることである。さらに「part-whole（日：「全体と部分」）」「state and federal（日：「連邦と州」）」「local and state（日：「州と地方」）」等で、英語の順序と日本語の順序が逆転していることも述べられている。鍋島(2006)の結果自体が本研究に適用されるわけではないが、「日本語では大→小が多く、英語ではそうとは限らない」という点での合致を見せていている。

(B) 仮想投稿組み立て式アンケート調査による分析

包含関係と順序について、別角度からの検証のため、日本語の仮想投稿を組み立てもらうアンケート調査を、Googleフォームを利用して行った。回答者は大学生を中心であり、ハッシュタグ閲覧経験率は100%であった。

方法は、設問中に【状況】とハッシュタグ等の「要素」（要素は縦に並列）を示し、各要素を何番目に置くかの選択肢を提示し、順番を回答してもらうものである。

以下、同じ地名ハッシュタグを用いた2設問とその結果について述べる。

- 設問〈ア〉
 - 【状況】京都旅行1日目、伏見に行った。晴れていた。ここで天気についての投稿をする。
 - 要素：#京都, #関西, #伏見, #天気, 晴れています。（この設問では、実際の選択肢では「#天気」「晴れています」を逆の順で提示している）
- 設問〈イ〉
 - 【状況】伏見にある人気店「カフェ FOX」に行った。
 - 要素：#京都, #関西, #伏見, #カフェ FOX, 最高だった！

なお、「関西」「京都」「伏見」には「関西⇒京都⇒伏見」という包含関係がある。

結果 39 回答から無効回答を除外し、「#京都」「#関西」「#伏見」の並び方をグラフにした結果を示す。(なお、順番は地名の頭文字で示している)

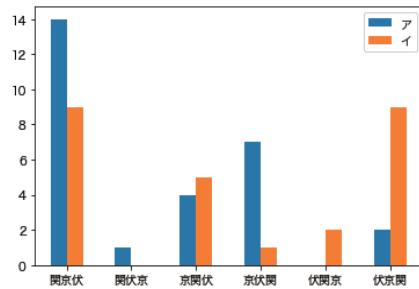


図 1: 3 要素をその形で含む個数

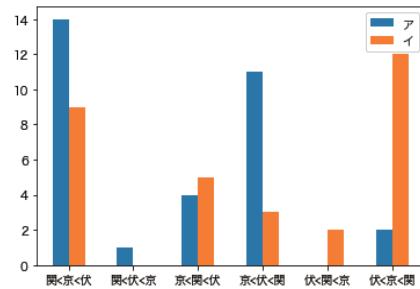


図 2: 3 要素をその順番で含む個数

設問 〈ア〉〈イ〉とともに、「#関西」「#京都」「#伏見」の順は 1 位か 2 位であった。

〈ア〉では「#京都」が 3 タグの最初となる回答も多く、〈イ〉では「#伏見」「#京都」「#関西」の順も多かった。

考察 〈ア〉と〈イ〉の差には【状況】での地名提示順（〈ア〉は京都が最初で、〈イ〉は伏見が最初である）が関係する可能性が考えられる。しかし、両者共に、【状況】で提示していない「#関西」（最も広い地域を表すタグ）が先頭にくる割合が高いのは、大小関係についての認識の反映ではないだろうか、と考えられる。

5. ハッシュタグの順序と他の順序の一貫についての分析

Twitter のようなソーシャルメディアでは、画像や動画を投稿に添付することができる。マルチモーダル的な観点から、メディアの順とハッシュタグの順との関係に着目したアンケート調査を実施した。調査対象者と調査方式は前節と同様である。

設問中の【状況】と「要素」が同一で、添付メディアが違う設問を 3 問用意した。



図 3: 〈エ〉 イメージ



図 4: 〈オ〉 イメージ



● 設問 〈ウ〉〈エ〉〈オ〉

- 【状況】京都旅行 1 日目、銀閣寺から平安神宮に行った。
- 要素：#京都, #銀閣寺, 行ってきた, #平安神宮
- メディア：〈ウ〉は画像なし。予め「銀閣寺」「平安神宮」として示した画像を、

〈エ〉は銀閣寺・平安神宮の順、〈オ〉は逆順で【要素】の下に提示。

各設問を順序の点で整理する。〈ウ〉は「イベントの時系列順+【状況】での語としての提示順 (+ 選択肢・【要素】での提示順)」がすべて「銀閣寺」<「平安神宮」の順である。〈エ〉はさらに「メディア画像の順」も一致するが、〈オ〉は逆に「メディア画像の順」が逆の「平安神宮」<「銀閣寺」を表すものである。

結果 得られた 39 回答から無効回答を除外し、「#銀閣寺」と「#平安神宮」の並び方をグラフにして示す。

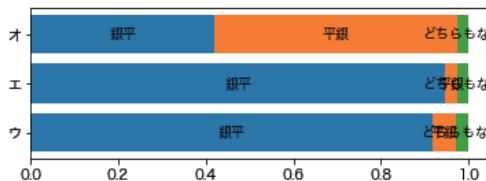


図 5: 2要素をその形で含む割合

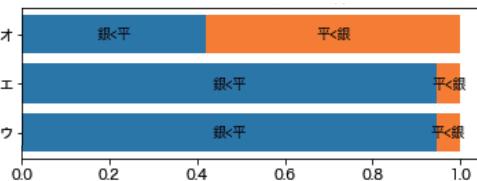


図 6: 2要素をその順番で含む割合

〈ウ〉と〈エ〉では「#銀閣寺」が「#平安神宮」より前になる場合が 9 割を超えた（なお〈ウ〉 \leq 〈エ〉）のに対し、〈オ〉では逆の並び・順番が過半数であった。

考察 メディア画像の順を逆にするだけで多数派が変わったことから、画像の重要性がうかがえる。とはいっても逆転後は 5~6 割程度であったため、他の順番(テキストでの登場順・イベントの発生順など)らが一致すると力は拮抗しうるとも考えられる。一方、〈オ〉を最後に提示したことが回答に影響した可能性は否定できない。

6. 結び

本研究の主要な結果を改めて記す。(i) 場所を表すハッシュタグの配置法について、得られたデータでは、日本語投稿で「大→小」の順が優位となる傾向が見られたが、英語投稿では異なった。両言語間の違いは、鍋島(2006)とも合うような結果であった。(ii) ハッシュタグの順番を、メディア画像の順番と一致させる傾向が見られた。

今後の課題として、次のことが挙げられる。(i) 別のハッシュタグを用いた調査。特に、異なる結果が出た場合には、それぞれのタグが置かれている文脈を分析する。(ii) 順序一致(第 5 節)については、イベント時系列順と【状況】での提示順を変えた調査を行い、さまざまな要素への順序の影響度合いを予想・評価する。

¹ ハッシュタグの中で許容される文字には、プラットフォームごとに制約がある。

² @Queen18006894. 2021/7/20. URL:

<https://twitter.com/Queen18006894/status/1417354425018978311> より（参照：2023/3/27）。

³ @TTT_yamagata. 2021/11/17. URL:

https://twitter.com/TTT_yamagata/status/1460913768188178432 より（参照：2022/11/10）。

⁴ 特定のタグを含む投稿の取得は自動で行ったが、場所を表すタグを他にも含むか否かは目視によって判断した。

⁵ 「#三条」と「#河原町」を同スケールとみなすか。グラフでは0.5件とした。

参考文献

- Caleffi, P. M. 2015. “The ‘Hashtag’: A New Word or a New Rule?” *SKASE Journal of Theoretical Linguistics [online]* 2015 12(2), 46–69.
- Givón, T. 1991. “Isomorphism in the Grammatical Code: Cognitive and Biological Considerations.” *Studies in Language* 15, 85–114. DOI: 10.1075/sl.15.1.04giv.
- Haiman, J. 1983. “Iconic and Economic Motivation.” *Language* 59(4), 781–819.
- 鍋島弘治朗. 2006. 「世界秩序 (World Order) 序説：類型論的アプローチ」、『關西大學文學論集』56(1)、93–116.
- Pasho, J. 2017. “#INSERTDIETHERE: Tracing the Techno-Linguistic Associations of Dietary Hashtags on Instagram.” Master’s Thesis. Carlton University.
- Scott, K. 2015. “The Pragmatics of Hashtags: Inference and Conversational Style on Twitter.” *Journal of Pragmatics* 81, 8–20. DOI: 10.1016/j.pragma.2015.03.015.
- Tsur, O and Ari R. 2012. “What’s in a Hashtag? Content Based Prediction of the Spread of Ideas in Microblogging Communities.” *Proceedings of the Fifth ACM International Conference on Web Search and Data Mining*. WSDM ‘12 New York, NY, USA: Association for Computing Machinery. DOI: 10.1145/2124295.2124320.
- Twitter Japan. 2022. 「15年前ハッシュタグはTwitterから生まれました」, URL: https://blog.twitter.com/ja_jp/topics/events/2022/hashtagday (参照：2023/1/1).
- Zappavigna, M. 2015. “Searchable Talk: The Linguistic Functions of Hashtags.” *Social Semiotics* 25(3), 274–291. DOI: 10.1080/10350330.2014.996948.
- Zappavigna, M. 2018. *Searchable Talk: Hashtags and Social Media Metadiscourse*. London: Bloomsbury Publishing.

比喩の観点からみた「告白行為」動詞の通言語的考察

中山信彦

埼玉大学

<Abstract> This paper compares the vocabulary denoting the speech act of confiding in Japanese, Chinese, Korean, English, German, and Russian from the viewpoint of figurative language and describes similarities and differences among them. It classifies the vocabulary according to what sense each item is used in to mean “to confide”. The six languages are similar in that they have many items with a sense “speak”, “open”, “take out”, or “show”. The items with any of the latter three senses can be given a unified account if the act of confiding is to be conceptualized as that of opening the speaker’s heart, take out and show what is hidden in it.

【キーワード】：類義語・メタファー・メトニミー・概念化・語用論的要素

1. 序論

告白行為を表す動詞の類義語・類義表現には「打ち明ける」「泥を吐く」などのような比喩的なものが多く含まれる。本稿は、「告白行為」動詞を比喩の観点から日本語・中国語・韓国語・英語・ドイツ語・ロシア語の6言語で比較し類似点・相違点を明らかにすることを主な目的とする。本稿のような視点からの告白語彙研究は、外国語文献・日本語文献を問わず、通言語的にはもちろん一つの言語においても全くないと言っても過言ではない（*Web of Science* および *CiNii* の検索による）。

本稿で対象とするのは、「自分自身に関わる内容で公言しにくいことを（新情報として）聞き手に伝える」ことを表す語彙（以下、慣用表現も含むものとする）である。伝える内容は、悪いことでもよいし、そうでなくともよい（例えば恋愛感情など）が、「自分自身に関わる」ということが重要であり、従って、たとえ秘密の内容であっても「暴く」「告げ口する」のように「自分自身に関わる」ことには使わないものは扱わない。また、「口を滑らせる」のように行行為が意図的でないことを含意するものも省いた。

語彙の採択の目安は、上で定義した意味を持ち、单一動詞の場合はしかも「秘密を～（～a secret）」または「心中を～（～one's heart）」という（または言語によっては前置詞付きの補語などを伴う）文型で「～」の位置に入れて使えることであるが、厳密な基準とまでは言えない。「告白行為」動詞というカテゴリーの外延は明確に定めがたく、このカテゴリーはプロトタイプ構造を持つと考えられる。

データはまずシソーラスに求めるが、シソーラスが貧弱な場合は普通の辞書で探したりインフォーマントに尋ねたりして補った。

次に、どのような観点からみて「告白する」という意味で使われるかによって語彙を分類した。観点は、まず共時的な関連する他の意味によって、それがなければ語構成や語源によって設定する。例えば「(本音を)漏らす」は「水を漏らす」に見られる基本義から考えて＜出す＞という観点を、「告白する」は語構成要素の「白」が「話す」という意味を持つため＜話す＞という観点を、*confess* は語源により＜認める＞という観点を設定する。

2. 6言語の類似点と相違点

6言語のデータを上述した観点から分類してまとめた結果を示す（図1）^{注1}。

図1 日本語・中国語・韓国語・英語・ドイツ語・ロシア語^{注2}の「告白行為」動詞
(下位範疇は右下げで示す)

話す： 告白する 白状する 自白する (以上、日) gào bái[告白] sù[诉] tán xīn[谈心]

tǎn bái[坦白] (以上、中) kopayk[告白]-hata kocoy[告罪]-hata

tayta capayk[自白]-hata (以上、韓) speak out one's heart speak (out)

one's mind tell (以上、英) vygovorit' vygovorit'sja gorovit' po dušam

(以上、露)

認める： confess fess up admit^{注3} acknowledge own own up (以上、英)

gestehen eingestehen zugeben bekennen Farbe bekennen

einbekennen (以上、独) soznať'sja priznat'sja (以上、露)

悔いる： 懺悔する (日) chànhuǐ[忏悔] (中) yeycham[禮懺]-hata chamhoy[懺悔]-

hata (以上、韓) pokajat'sja (露)

供える： 自供する (日) gòng[供] gòngchēng[供称] gòngrèn[供认] zìgòng[自供]

(以上、中) cakong[自供]-hata (韓)

差し出す： hé pán tuō chū[和盤托出]（中）

信頼する： confide (英) doverit' poverit' (以上、露)

渡す： vydat' (露)

分かち合う： hoynho[懷抱]lul selo nanwuta (韓) podelit'sja razdelit' (以上、露)

はたく： (kasum.ul / kantam.ul) thel.e-nohta (韓)

出す： 漏らす ぶちまける さらけ出す 肺肝を出す (以上、日) tāoxīn[掏心] tāo xīnwōzi[掏心窓子] (以上、中) nay-po.ita (韓) out with it 「考えていることを言え」 let it all hang out 「さらけ出す」 (以上、英) auspacken (独) vyložit' vyložit'sja (以上、露)

吐く： 吐く 泥を吐く 吐き出す 吐露する (以上、日) tǔ[吐] tǔlù[吐露] tǔshí[吐实] (以上、中) key.wuta seltho[説吐]-hata siltho[實吐]-hata sil-thoceng[實吐情]-hata tholo[吐露]-hata thosel[吐説]-hata thoceng[吐情]-hata thochwul[吐出]-hata thopha[吐破]-hata tho[吐]-hata (以上、韓) spit it out 「泥を吐く」 (英)

出る： come out come out of the closet 「同性愛者であることを明かす」 come out with (以上、英) herausrücken (独)

注ぐ、流す： pour out (英) izlit' izlit'sja (以上、露)

投げつける： obrušit' (露)

通す： tòudǐ[透底] tòutáng[透膛] (以上、中)

傾ける： 肝胆を傾ける (日) dào[倒] qīngsù[倾诉] qīngtǔ[倾吐] (以上、中)

裏返す： ocang[五臟] kkaci twi-cip.e-po.ita (韓)

見せる： 明かす 打ち明ける 肺肝を明かす (以上、日) bàolù[暴露] liàngchǒu[亮丑] liàngdǐ[亮底] liàngsī[亮私] shì'ài[示爱] tǎnlù[坦露] tǎnlù[袒露] (以上、中) nay-po.ita (韓) reveal disclose disbosom unbosom declare expose (以上、英) offenbaren sich offenbaren verraten (以上、独)

覆いを取る： kka-nohta (韓) bare lay bare unveil uncover unclothe undress (以上、英) enthüllen (独) obnažit' (露)

並べる： chénqíng[陈情] (中)

広げる： phye-nohta (韓) razvernut' (露)

開く： 胸襟を開く 肝胆を披く 肺肝を披く 披瀝する (以上、日) pī gān lì

dǎn[披肝沥胆] pī gān lì xuè[披肝沥血] pīhuái[披怀] pīlì[披沥] pīlù
gāndǎn[披露肝胆] (以上、中) kasum.ul heychye-nohta kantam.ul
heychita kantam.ul yel.e-nohta sok(.ul)/ma.um.ul the-nohta
philyek[披瀝]-hata (以上、韓) open open up unlock (以上、英) öffnen
sich öffnen (以上、独) otkryt' otkryt'sja raskryt' raskryt'sja
priotkryt' (以上、露)

割る： 打ち割る 腹を割る 底を割る 口を割る

はじける： bàoliào[爆料] (中)

吹く： pwulta pwullim-hata (以上、韓)

荷を降ろす： disburden unburden unload get off one's chest (以上、英)
vygruzit' vyvalit' (以上、露)

汚れをとる： come clean make a clean breast of

その他： 腹心を布く 告解する 自首する 落ちる (以上、日) jiāodài[交代]
jiāoxīn[交心] shízhāo[实招] tóuàn[投案] zhāo[招] zhāogòng[招供]
zhāorèn[招认] zhíshū xiōngyì[直抒胸臆] zìshǒu[自首] (以上、中)
capok[自服]-hata caswu[自首]-hata (以上、韓) blurt out cry on
someone's shoulder (以上、英) beichten singen (以上、独) otvesti dušu
posvjatit' ispovedovat' ispovedovat'sja ob"jasnit'sja v ljubvi (以上、
露)

まず6言語の類似点としては、<話す><開く><出す><見せる>という観点から捉えられる語が多い。後の三つは、話し手の心中に隠されているものを、^{注4}心を開くことによって出し、見せることとして告白行為が概念化されている、と考えると統一的に説明できる。後述するように告白のメタファーは経験的な基盤があると考えられる。Sweetser (1990: 42, 45)は、身体的な知覚と内的な感覚とのメタファー的な結びつきは体系的なものであり、そのうちのあるものは普遍的または通文化的かもしれない、と述べているが、同様のことが告白語彙にも当てはまると思われる。

次に相違点としては、<認める>は英・独・露に見られ、<出す>の下位範疇《吐く》は日・中・韓に多く、<荷を下ろす>及び<見せる>の下位範疇《覆いを取る》は英語に多い。これらの相違点がそれぞれの言語の文化的背景とかかわるのかどうかについては今後の課題とする。

なお、設定した観点には含意関係や連続性が認められる。例えば、何かを<傾ける

>ことはその中に入っているものを<出す>ことを含意する。また、ロシア語の *otkryt'* は語義区分に応じて「〈ふたのあるものを〉あける」「〈たたんであるものを〉開く、広げる」「おおいを取る」「(栓などを開けて) だす」などの訳語が（東郷ほか編.1988）、韓国語の *phye-nohta* は同様に「広げて敷く」「(本を) 開いておく」などの訳語が（油谷ほか編. 2018）あてられており、観点相互の境界線が明確には引けないことを示している。

3. 個別的な語彙項目の考察

Lakoff and Johnson (2003[1980]) の概念メタファー理論から見ると《吐く》は起点領域（身体的な嘔吐）と目標領域（精神的な吐露）との間で複数の要素が対応する点で注目される。即ち、「泥を吐く」を例にとると、嘔吐する者が吐露する者に、前者の体内にある有害な物質 (=泥) が後者の心中にある罪悪感 (の原因) に、嘔吐行為に伴う (特に嘔吐直前の) 身体的苦痛が吐露行為に伴う (特に吐露直前の) 精神的苦痛に、嘔吐の後の有害な物質の除去による爽快感が吐露の後の罪悪感の軽減による安堵感に、それぞれ対応するのである。^{注5}

これらの要素のうち、やや観点は異なるが告白行為の結果を焦点化した表現が英語の *make a clean breast of* であろう。罪深いことを告白することが、それがもたらす結果である「心の浄化」として表現されている。この点で、この表現にはメタファーだけでなく時間のメトニミーもかかわる。つまり、*mark* が「点数 (をつける)」という結果的意義でもって、それに先行する「採点する」プロセスを意味するのと同様に〔結果でプロセス〕を表すメトニミーパターンの一例である（瀬戸 2005：151）と考えられる。

cry on someone's shoulder は、〔結果でプロセス〕を表すメトニミーのさらなる例であると考えられるが、Deignan (2005: 65、訳書 78 頁) では「メトニミー由来のメタファー」の例として挙げられている。つまり、それは「通常、意図的に誰かに向かって悩みを話し、同情を引き出すことを意味すると同時に、実際の行動が字義通りに聞き手の肩ですすり泣くかもしれないという特徴を持っている」という点において、メトニミーの動機づけを持っている」(訳書 79 頁) とされる。

時間のメトニミーという点から見ると、「胸襟を開く」「腹を割る」などは〔原因でプロセス〕を表す例である（瀬戸 2005：152）と考えられる。

4. 新奇な告白表現

新奇なメタファーは慣用的なメタファーを拡張して作られることが多い、ということが指摘されているが (Lakoff and Turner (1989: 67); Lakoff (1993: 210))、告白に關しても以上述べた比喩の類型が、文学作品に見られる以下のような非慣用的な告白表現に生かされていることが確認された（下線追加）。（3）～（5）で問題となっている *unravel*、*vystavljal'*、*razorvat'* の最も関連性のある意味は、それぞれ「ほどく」「人目にさらす」「分断する」であり、「告白する」は使用した辞書には見当たらない。

(1) 疑いの塊りをその日その日の情合^{じょうあい}で包んで、そっと胸の奥にしまって置いた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。（夏目漱石『こころ』新潮文庫：上 19）

(2) その極^{きよく}あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼^{せま}った。[中略] 私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴せかけようとしているのです。（同上：下 2）

(3) He broke into my very Soul by it; and I unravell'd all the Wickedness of my Life to him: (Daniel Defoe, *Moll Flanders*. Penguin Classics: 366)

彼はそれによって私の魂の奥底にはいりこみ、私は生涯の一切の悪事を彼に物語りました。（デフォー『モル・フランダーズ（下）』岩波文庫：176）

(4) i xot' i vnutrenno stydjas' togo, čto vystavljaet svoi intimnejšie čuvstva, tak skazat', na «vseobščij pozor», (F.M.Dostoevskij, *Brat'ja Karamazovy*. Polnoe Sobranie Sočinenij v Tridcati Tomax, Tom Četyrnadcatyj. Izdatel'stvo Nauka: 423)
自分のもっとも内密な感情をいわば《世間のさらしもの》にすることを内心では恥じながらも、（ドストエフスキイ『カラマーゾフの兄弟（中）』新潮文庫：第 9 編 4）

(5) Ved' ja, tak skazat', dušu moju razorval popolam pred vami, (ibid.: 446)
だって僕は、いわばあなた方の前に心を真っ二つに割ってみせたんですよ、（同上：第 9 編 7）

5. 「告白行為」動詞と語用論的要素

3. で述べたように、「告白行為」動詞に観察されるメトニミーの一部は *make a clean breast of* や *cry on someone's shoulder* に見られるように心の重荷を下ろすことに関係がある。山中（2020）は否定的な内容をもつ狭義の告白の発語内行為を Coleman and Kay (1981) の原型意味論的な考え方に基づいて記述し、さらに告白という発話行為の計画から遂行までを含めた全過程を、Lakoff (1987) のプロトタイプ・

シナリオという考え方を援用して記述した。

上述した＜心の重荷を下ろす＞は、仮定した発語内行為の1要素でもあり、仮定したシナリオの最終段階「告白がもたらす影響」の一つでもある。このように発話行為の語用論的要素が、発話行為動詞の意味の一部として組み込まれている（これは「吐く」についても当てはまる）ことは興味深い。

注

- 1 「吐露する」など、複数の観点（＜出す＞＜見せる＞）から分類できる項目については、煩雑を避けるため原則としていずれか一つの観点に属させる。
- 2 ロシア語の動詞の形態には完了体と不完了体の区別があるが、告白行為の表現には完了体の方がより自然である、というインフォーマントの指摘に従い完了体を代表として挙げる。なお、ロシア語のデータに関しては埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程（当時）の Olga Anosova 氏に大変お世話になった。厚く御礼申し上げる。何らかの誤りがあれば、全て著者の責任である。
- 3 *admit* と *acknowledge* に関しては、以下のように、問われていないことを自発的に告白する文脈で使われている例がある（下線追加）：

(Pip の後見人である弁護士の Jaggers は、かつて殺人容疑で裁判にかけられた女性の依頼人と、その隠し子で別の女性の養女になった娘について語ろうとする。)
“....But now, about this other matter. I'll put a case to you. Mind! I admit nothing.”
(Dickens, Charles. *Great Expectations*. Penguin Classics: 412f.)

I acknowledged my sin unto thee, and mine iniquity have I not hid. (Psalm 32: 3-5, *KJV Open Bible*, Thomas Nelson.)
- 4 Dancygier and Sweetser (2014: 65、訳書 90 頁)によると《秘密は隠すことである》というメタファーがある。
- 5 これと似た見方が Dancygier and Sweetser (2014: 83、訳書 115 頁)によるブレンディングを用いた *mental detox* (心の解毒) などの分析にある。即ち「有毒な成分の除去が身体の治療につながる」ということが「有毒な考えの除去が心の状態の改善につながる」ということに結びつけられている。

参照文献

- Coleman, L. and P. Kay 1981. “Prototype Semantics: the English Word ‘Lie’.” *Language* 57(1), 26-44.

- Dancygier, B. and E. Sweetser. 2014. *Figurative Language*. New York: Cambridge University Press. (野村益寛 他訳『「比喩」とは何か—認知言語学からのアプローチー』開拓社、2021年)
- Deignan, A. 2005. *Metaphor and Corpus Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins. (渡辺秀樹 他訳『コーパスを活用した認知言語学』大修館書店、2010年)
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. 1993. "The Contemporary Theory of Metaphor." In Ortony, A. (ed.) *Metaphor and Thought* (2nd edition), 202-251. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 2003[1980]. *Metaphors We Live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Turner. 1989. *More than Cool Reason: a Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 瀬戸 賢一. 2005. 『よくわかる比喩』東京：研究社。
- Sweetser, E.E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. New York: Cambridge University Press.
- 山中 信彦. 2020. 「プロトタイプに基づく告白の語用論」『日本語用論学会第 22 回大会発表論文集』(第 15 号)、161-168.

参考資料

Glosbe 辞書 <https://ja.glosbe.com>

小稻義男 他編. 1980. 『研究社新英和大辞典（第 5 版）』東京：研究社。

Open thesaurus.de Synonyme und Assoziationen <https://www.openthesaurus.de>

北京・商務印書館 小学館 共同編集. 2016. 『中日辞典（第 3 版）』東京：小学館。

柴田武・山田進編. 2002. 『類語大辞典』東京：講談社。

Thesaurus.com <https://www.thesaurus.com>

富山芳正 他編. 1993. 『郁文堂独和辞典（第二版）』東京：郁文堂。

東郷正延・染谷茂・磯谷孝・石山正三編. 1988. 『研究社露和辞典』東京：研究社。

油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎編. 2018. 『小学館韓日辞典』東京：小学館。

「私、○○な人だから」 —会話における自己呈示—

山本 綾
東洋大学

<Abstract>

This study examines how Japanese speakers describe themselves as *X na hito* or *X suru hito* [I am the kind of person who is/does X] in conversation. This *X na/suru hito* construction serves as a platform for self-representation in Goffmanian sociology (Matsuoka, 2021), albeit stigmatized as a sign of a speaker's arrogance. A quantitative analysis of approximately 200 hours of conversations shows that the construction is found across age groups, used typically by female speakers, and often co-occurring with certain self-referring expressions and clause-final particles. A qualitative analysis identifies several interactional patterns preceding and following the construction.

【キーワード】：○○な人・自己呈示・日本語日常会話コーパス・自称詞

1. はじめに

1.1 本研究で扱う現象

会話においてある参加者が自分自身について語るときに、「私、○○な人だから」「実は○○する人なんだ」のように「人」を用いることがある。例えば、『日本語日常会話コーパス』では以下の発話が見られる。

事例1 わたし (Y タイク|体育)館とかだめな人。

事例2 それ気になっちゃう人(L なんで)。

こうした言い回しは、しばしば若者や女性など話し手の属性と結びつけられたり、幼稚さや自己中心性の現れだと批判されたりする。試しに Yahoo!知恵袋で「私って○○な人」と検索すると、「若いねえちゃんがいいますよね」、「『あなたは私という人を知るべきです』という、傲慢で独善的な発想が根底にある」「自信がないとき、あるいは可愛い物言いと思って」などのコメントが見られる。接遇マナーを説く実用書では、「自分を突き放しているようでいて実は自分のことがかわいくて仕方がないナルシス

トなのでは」と評されている（日本語俱楽部 1999: 164-165）。

1.2 先行研究

2001 年に文化庁が実施した世論調査によれば、「『わたしへ…な人なんですよ』という言い方をすることがある」と答えた人は 6.2% いた。地域による顕著な差は見られないが、男性より女性がわずかに多く、また男女ともに若年層を中心に比率が高いとされる（文化庁文化部国語課 2001）。

社会学の分野では、松岡（2021）が「私って〇〇な人だから」について作例に基づき考察している。松岡（2021）によれば、これは自己呈示（self-presentation; Goffman 1959, 1981 ほか）と呼ばれるふるまいの一つであり、〇〇に相当する役割を持つ人間として接してほしいと他者に訴える印象操作とされる。

自己呈示は、社会心理学の分野でも研究対象となっている。「他者の自分に対する認知あるいは評価を統制するために、自己に関する情報を伝達しようとする意図を伴った行動」と定義され（栗林 1995: 110）、実験や質問紙調査が行われている。

「〇〇な／する人」をめぐって世論調査や社会学的な考察、自己呈示についての社会心理学的な実証研究が進む一方で、実際のコミュニケーションの場で誰がどのように「〇〇な／する人」と発話するのか、会話の相手がどのように応答するのかについてはまだ明らかになっていない。そこで本研究では、話し手が自らについて「〇〇な／する人」と述べるふるまいを自己呈示ととらえ、日常の会話における実態を調査する。研究課題は次の 2 点である。

研究課題 1 「〇〇な／する人」発話は、誰によってどのようになされるのか

研究課題 2 「〇〇な／する人」発話は、会話のどのような流れの中で現れ、どのように応答されるのか

2. 資料と方法

2.1 会話資料

本研究では、既知の間柄によるインフォーマルな会話を資料として用いた。筆者が収録した大学生たちによる雑談（12 組、約 4 時間）ⁱと、『日本語日常会話コーパス』に収録された家族や友人・知人・同僚などの関係にある話者たちによる雑談と用談（577 組、約 188 時間）ⁱⁱである。

2.2 方法

まず、会話資料から「〇〇な／する人」発話が含まれるやりとりを全て抜き出し、

発話者自身を指していると解釈できる事例を抽出した。次に、研究課題1について量的分析を行った。分析の観点は、「〇〇な／する人」発話の頻度、発話者の属性、共起する形式である。続けて研究課題2について、先行および後続するやりとりのパターンを探る質的分析を行った。

3. 結果

3.1 頻度

「〇〇な／する人」発話は、大学生間の雑談では5事例、『日本語日常会話コーパス』では14事例見られた。1時間あたりの出現頻度に換算すると、前者では約1.3回、後者では約0.07回となる。発話した実人数は、大学生雑談で4人、『日常会話コーパス』では11人であった。前者では8人につき1人、後者では約78人につき1人が、自身について「〇〇な／する人」を用いたことになる。

3.2 発話者の属性

3.1で示した15人の発話者の内訳は、女性が12人、男性が3人であった。ただし、本研究の会話資料では女性話者が男性話者よりも多い（女性482人、男性412人）。そこでFischerの正確確率検定を行ったところ、性別で有意な偏りが認められた（片側、 $p=0.03$ ）。女性の方が、自らについて「〇〇な／する人」と発話する傾向が強いと言える。

年齢層を見ると、文化庁による2001年の世論調査結果（1.2参照）とは異なり、若年層が中心とは言い切れないことが判明した。発話者15人のうち10代が5人と1/3を占めるものの、20代2人、30代1人に対して、40代と50代で各3人、60代でも1人が用いていた。

3.3 共起する形式

「〇〇な／する人」発話全19事例について、自称詞の有無と種類を調べた。その結果、自称詞有りの事例の方が多いことがわかった。自称詞の種類は、図1に示すようにワタシ（アタシ、アーシを含む）が最も多く見られた。

次に、言いさし（統語的に文が完結しない状態で話者が交替する）と言い切り（統語的に文が完結してから話者が交替する）に二分したうえで、発話末に現れる表現を調べた。その結果、言いさし事例数が言い切り事例数を上回ること、言いさしのなかでもダカラと共にしやすいことがわかった（図2参照）。

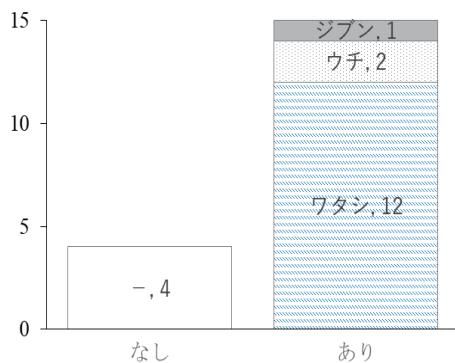


図 1 自称詞の有無と種類

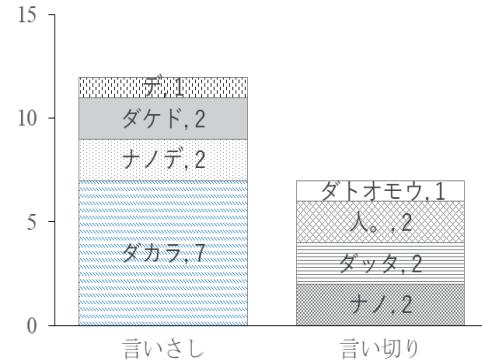


図 2 発話末の表現

3.4 先行するやりとり

「〇〇な／する人」発話の直前のやりとりをみると、会話の焦点が誰に当たっているか、また何らかの対立や対比が見られるかによって分類できた。典型的には、ある会話参加者の性格・能力・職業などの固定的な属性や行動・習慣などに焦点が当たったところで、その参加者が「〇〇な／する人」と発話する。特定の会話参加者に焦点が当たっていない場合、会話参加者たちの間または会話参加者とそれ以外の人物・集団との間で、嗜好や主張などに対立や対比が見て取れた。ただし、明らかな対立や対比が見られなくても、「〇〇な／する人」発話が現れることもあった。分類を図3にまとめ、それぞれに対応する事例を示す。

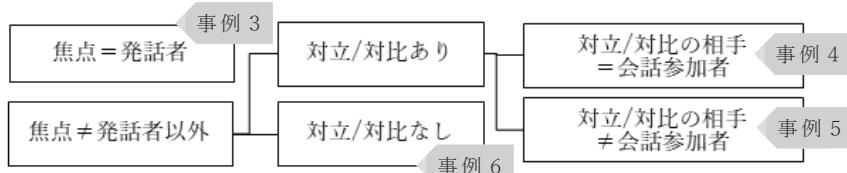


図 3 「〇〇な／する人」発話に先行するやりとりの類型

事例3：越谷の職業に焦点がある。越谷は無職であり、自身について「お仕事を探してゐる人」と説明する（『日本語日常会話コーパス』T022_011）

雪室 (R とっき)さんは今何してんの?。@IC02・IC03に向かって
((5行省略))

越谷 今 求職者。

雪室 (T あ)。

越谷 (F あの:) お仕事を探してゐる人。

事例4：夕食に使った食材をめぐって家族間で対立が生じる。一ノ宮がさとしに不満を示し、生クリームを「消化できない人」だと主張する（同コーパス T004_001）

- 一ノ宮 生クリームとか(D ウ)どっしゃり入れたんでしょ?。
 ((3行省略))
- 一ノ宮 で 生クリームって
 さとし うん。
- 一ノ宮 あたし(W モ|もう)す%ごい消化 全然できない人なの。

事例5：娘の瀬菜が文化祭準備の不満を母に語る。自身を他の学生たちと対比させ、苦境にあって「エネルギーをひたすら燃やす人」と称する（同コーパス T024_007）

- 瀬菜 もう(R 創発大)の文化祭とかばからしく(U て)行ってらん(U ねえ)よ。
 ((6行省略))
- 瀬菜 (W アーシ|あたし)はね:
 ((2行省略))
- 瀬菜 (L ほ:かの人がね:)
 みどり うん。
- 瀬菜 愚痴をゆうような状況でね
 みどり うん。
- 瀬菜 (F その:) かわいそうなのに頑張ってるわたしってゆうので:
 瀬菜 エネルギーをひたすら燃やす人だから:。

事例6：同僚どうしで酒の好みを語り合っており対立や対比は見られないが、玲子が自分はかつて発泡酒を「あまり買わない人だった」とふりかえる（同コーパス C001_013）

- 辰嶋 エチゴビールすごくよかったです。
 玲子 あたしもなんかね 発泡酒は:
 辰嶋 うん。
 玲子 あんまり買わない人だったの。

3.5 後続するやりとり

「〇〇な／する人」発話に続く他の会話参加者の受けこたえを見ると、〇〇に含まれる内容を会話の資源として利用するか否かによって大別できた。図4に示すように、利用しない場合は2つ、利用する場合は4つのパターンが見られた。

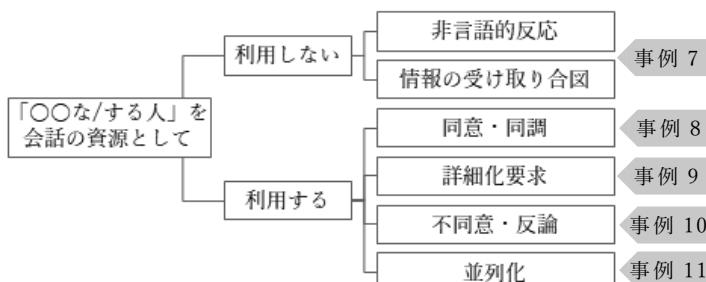


図4 「〇〇な／する人」発話に後続するやりとりの類型

事例 7：美佳が TV 番組を「ばんばん見てる人だから」と述べると、水野と遙は笑い（L）で反応し、あいづち「ふーん」、繰り返し「二時間」で情報の受け取りを合図するものの、美佳の発話内容をさらに掘り下げはしない（同コーパス C002_006c）

美佳 二時間サスペンスとか こう ばんばん見てる人だ(U から)。
水野 (L)
遙 ふーん。
水野 (U 二時間)。
美佳 もう大好きなの。

事例 8：体育実技のフットサルが話題となっており、長谷が「絶対動かない人」だろうと自嘲すると、西中が「ずっと立ってる人でしょ」と同調する（大学生間の雑談）

西中 フットサル、取ってた。
橋下 いいなー。
長谷 うん、取っても、私、絶対動かない人だと思う
西中 ゴール脇にずっと立ってる人でしょ（笑）。

事例 9：島が朝は「ぎりぎりまで寝たい人」と述べると、左田が起床から出発までを逆算する質問を重ね、詳細化を促す（大学生間の雑談）

島 え、うち、時間ならぎりぎりまで寝たい、寝たい人だから。
左田 え、待って、待って。じゃ、何時に出るの？いつも 1限のとき。

事例 10：「争い事、嫌いな人だけね」という榎の自己評価に対し、上戸は「うん」に続けて、榎が他人を頻繁に罵っていると反論する（大学生間の雑談）

榎 争い事、嫌いな人だけね、私ね。
遠山 ((笑))
上戸 ((うん))うん でも、よく、でも、き、汚い言葉、使ってんじやん。

事例 11：bingo大会の結果について弓絵が「全然当たらなかった人」と述べると、佐竹が「あたし自身も」と自分の体験を語り始めようとする（同コーパス T011_007）

弓絵 なんて(W ュ|ゅう)んだっけ リーチになったのに：
佐竹 うん。
弓絵 全然当たらなかった人だったの。
咲乃 (L)
佐竹 あっ。
佐竹 あたし あたし：
弓絵 知らない?
((7行省略))
佐竹 でも あたし自身も:す%ごく当たらなかっ
弓絵 なんだか。

4.まとめ

本研究では、日常の会話において参加者が自分自身について述べる際に「人」を用いる現象に着目し、研究課題1、「〇〇な／する人」発話が誰によってどのようになされるのか、2. 会話のどのような流れの中で現れ、どのように応答されるのかについて探った。1の結果として、「〇〇な／する人」発話の出現頻度は高くはなく、発話者は女性が多いが若年層に著しく偏っているわけではないことが明らかになった。また、自称詞（例、ワタシ）を伴うとともに、発話末にはダカラが現れやすくその位置で話者が交替する傾向が見られた。2の結果として、ある会話参加者に焦点が当たったり対立や対比が顕在化したりすると、「〇〇な／する人」発話が現れることが示唆された。「〇〇な／する人」発話がなされると、他の会話参加者がその情報を会話の資源として利用する場合もあれば、受け流す場合もあると確認された。会話の資源として利用するやりかたとして、同調や反論など4通りが見られた。

本研究で用いた会話資料の中には、「タイプ」「系」「派」によって自身について語る事例も見られた（例、うち、結構、あの、い、あんまイライラしないタイプかなと思つたり）。今後は、「人」に類似したカテゴリー化表現も対象に含め調査を行いたい。また、本研究では「〇〇な／する人」発話に至る過程と発話直後の会話の展開について類型化を試みたが、個々の事例についてより詳細な記述、検討を加えたい。「人」およびその類似表現を用いた自己呈示の様子をミクロレベルで捉えるにあたっては、成員カテゴリー化装置（Sacks 1972a, b）やスマール・ストーリーとポジショニング（Bamberg 2004ほか、秦 2017）の枠組みが有効ではないかと考えている。

謝辞 日本語用論学会第25回大会にてコメントをくださった方々にお礼を申し上げます。本研究はJSPS科研費JP21K00658の助成を受けています。

注

ⁱ 2者間会話4組と3者間会話8組、会話の長さは平均して約20分間／組である。

ⁱⁱ 話者はのべ862人（内訳：男412女450）、0-4歳から95-99歳までの年齢層が含まれる。

2者間会話280組、3者間会話111組、4者間会話92組、5者間以上の会話94組を含み、会話の長さは平均約20分間／組である（国立国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト2022、白田ら2018）。

参考文献

- Bamberg, M. 2004. "Narrative Discourse and Identities." In Meister, J. C., T. Kindt, W.

- Schernus and M. Stein (eds.) *Narratology beyond Literary Criticism*, 213-237. Berlin and New York: Walter de Gruyter.
- 文化庁文化部国語課. 2001. 『平成 12 年度国語に関する世論調査』 (https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/92701201_19.pdf)
- Goffman, E. 1959. *The Presentation of Self in Everyday Life*. New York: Anchor.
- Goffman, E. 1981. *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 秦 かおり. 2017. 「スマート・ストーリー」、鈴木亮子ほか（編）『話しことばへのアプローチ』、249-252、東京：ひつじ書房。
- 国立国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト. 2022. 『日本語日常会話コーパス有償版』 東京：大学共同利用機関法人人間文化研究機構.
- 栗林 克匡. 1995. 「自己呈示：用語の区別と分類」、『名古屋大學教育學部紀要 教育心理学科』 42、107-114.
- 松岡 智文. 2021. 「アーヴィング・ゴフマンの社会学—ありふれた『コミュニケーション』を考える—」、『Cute.Guides』 (<https://guides.lib.kyushu-u.ac.jp/goffman>) .
- 日本語俱楽部. 1999. 『そんな「言葉づかい」では恥をかく 2—日本語、正しいいつもが間違いだらけ—』 東京：河出書房新社.
- Sacks, H. 1972a. "An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology." In D. Sudnow (ed.) *Studies in Social Interaction*, 31-73. New York: The Free Press.
- Sacks, H. 1972b. "On the Analyzability of Stories by Children." In Gumperz, J., and D. Hymes (eds.) *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, 325-345. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 白田 泰如・川端 良子・西川 賢哉・石本 祐一・小磯 花絵. 2018. 「『日本語日常会話コーパス』における転記の基準と作成手法」、『国立国語研究所論集』 15、177-193.
- Yahoo!知恵袋 (https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q12199124647?sort=1&page=1)、 (https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13357683) .

中国語“給”の語用論的機能¹

楊世沢

京都大学大学院

<Abstract> Through comparisons with the words *bāng*, *wèi*, and *xiàng*, this paper aims to explore the usage restrictions and pragmatic functions of *gěi* in Chinese to shed light on the pragmatic aspect of construal, a concept in cognitive linguistics. The results indicate that *gěi* is often used in private situations and intimate relationships. From this, two pragmatic functions are adduced: showing an intimate relationship with the hearer and shortening the speaker's personal distance from the hearer. This paper further suggests that the concept of construal is not simply concerned with how the speaker construes an event, but that the aspect of the speech situation should also be taken into consideration.

【キーワード】：給・使用制限・語用論的機能・捉え方

1. はじめに

中国語の授受表現として、“給”(give)があげられる。“給”は語用論的機能について長期にわたって議論されている。本稿は受容者を二人称に絞り、“帮”(help)、“为”(for)、“向”(to)に置き換えられる文を分析することで、“給”的使用制限及び語用論的機能を明らかにし、認知言語学で提唱される「捉え方(construal)」の語用論的側面を考察することを目的とする²。

本稿は全4節からなり、以下のような構成になっている。次の第2節では、先行研究を概観したうえで、問題点と本稿の位置づけを示す。第3節では、“給”的使用制限及び語用論的機能を検討し、「捉え方」の語用論的側面を論じる。最後に、第4節では全体をまとめ、今後の課題を示す。

2. 先行研究

これまでの研究では、中国語の“給”には日本語授受動詞のような目上・目下という人間関係による語用論的制限がないとされている。例を見てみよう³。

- (1) a. 老师，我给您拿吧。
b. ?先生、私が持つてあげましょうか。

(原文は (17)、(18b)、楊 2009: 4)

楊 (2009: 4) は授受表現が用いられる (1b) は「語用論的条件に抵触する」と述べており、語用論的条件を次のように指摘している。

- (2) 日本語では「目上の人」または敬意を払われるべき人物が相手の場合、その人への恩恵授与を明示すると失礼な言い方になってしまふ。(中略) 逆に、受益標識を用いると、恩着せがましいニュアンスが出てしまい、場合によってはかえって不自然な表現になる場合がある。(楊 2009: 4-5)

中国語では、“給”を用いた (1a) は「このような語用論的含意はなく、“給”は単なる与格名詞としての受益者を導入しているにすぎない」と述べている (楊 2009: 5)。

つまり、日本語のテアゲルは押し付けがましいニュアンスがあるため、聞き手が目上の人で、かつ受益者である場合、テアゲルの使用を控えた方がよく、一方、中国語の“給”は単に受益者を導く機能を果たし、聞き手の身分を問わず、誰に対しても使えるのである。

ただし、“給”を用いる文が本当に誰に対しても使えるかについて、意見が分かれている。永江 (2005) は行為者がどの状況で手を貸すかによって、「相手が行為をしている状況」、「相手が手助けを求める状況」、「相手に手助けを求められない状況」との3つに分け、“帮”と“給”的共通点と差異を考察している。「相手が行為をしている状況」と「相手が手助けを求める状況」では、“給”的使用には恩着せがましいニュアンスがあり、失礼となると主張している。例を見てみよう。

- (3) a. 哎，对不起。我给你拿吧。
b. 哎，对不起。我帮你拿吧。

(原文は (19A)、(19')、永江 2005: 116-115)

(3) は相手が「かばんを持つ」行為をしている状況で、話し手が手助けをする文である。永江 (2005: 115) によると、(3a) は「たくさんの荷物を抱えて四苦八苦しながら持っている家族や仲の良い友達同士では用いられるが、初対面の人に用いるのは『あ

なたはできないだろうからしてやるよ』というニュアンスに聞こえるため失礼になる」という。

以上、“給”の語用論的機能に関する先行研究を概観した。本稿は永江（2005）の結論を支持し、“給”には語用論的使用制限があると主張する。ただし、永江（2005）にはまだ検討の余地があると思われる。まず、永江（2005）は“給”と“帮”を中心に考察しているが、授与を意味する“給”は“帮”だけではなく、“为”、“向”にも置換できる。そのため、“給”的語用論的制限を考察する場合、“帮”的例だけでなく、“为”、“向”的例も視野に入れるべきである⁴。また、永江（2005）は手助けすることが自然かどうかという観点から“給”を考察しているが、筆者の語感では、“給”的使用は、発話場面などとも関わると思われる。例えば、親しい間柄であっても、会議など改まった場面においては、(3a)は使われにくい。よって、本稿は“帮”、“为”、“向”を対象として、人間関係と発話場面という2つの側面から、“給”的語用論的制限及び機能を探る。

3. 考察

本節では、“給”的語用論的制限を探り（3.1節）、それをGu（1990）による理論で説明する（3.2節）。それをもとに、“給”的語用論的機能を2点提案し（3.3節）、捉え方の語用論的側面を考察する（3.4節）。

3.1. “給”的使用制限

結論から言うと、本稿は“給”がプライベートな場面で聞き手が親しい間柄に使われるという使用制限を提案する⁵。以下では“帮”、“为”、“向”的順に考察する。まず、“給”と“帮”的違いから検討しよう。

- (4)
 - a. 你去歇着吧，剩下的我给你做。
 - b. 你去休息吧，剩下的我帮你做。

(4a)と(4b)はともに「聞き手に休憩を取らせ、話し手が残りの部分をする」の意味である。“給”が用いられる(4a)の方は、話し手による動作の押し付けが強く感じられ、くだけた表現といつても差し支えない一方、(4b)はより丁寧に聞こえる。そこで、(4a)はプライベートな場面で聞き手が親しい間柄に使われ、(4b)は改まった場面か疎遠な人に使われる。これは、“歇着”と“休息”的違いからも裏付けられる。“歇

着”と“休息”は同じく「休む」を意味するが、“歇着”の方はより口語に近く、“休息”はどちらかというと文語に近い。したがって、“歇着”は“給”と共に起した方が自然で、“休息”は“帮”とともに使った方が自然である。

次に、“为”的例を見てみよう。

- (5) a. 这是我给你准备的一点小礼物，请务必收下。
- b. 这是我为你准备的一点小礼物，请务必收下。

(5a) と (5b) はともに「ささやかなプレゼントですが、ぜひ受け取ってください」の意味である。(5a) は聞き手に授与するニュアンスが強く、プライベートな場面で聞き手が友達など親しい間柄に使いやすく、(5b) はより正式に聞こえ、フォーマルな場面や疎遠な人に使われやすい。これは“初次见面（はじめまして）”を加えることでさらに検証できる。“初次见面”は改まった場面で初対面の人に使われる挨拶言葉であるため、(5a) と共に起しにくく、(5b) と共に起した方が自然である。あえて (5a) と共に起すると、話し手が聞き手より人間関係の上位に立っており、自分の地位をアピールするように聞こえ、不快感を覚えさせる可能性がある。

最後に、“向”的例を見てみよう。

- (6) a. 我来给你解释一下。
- b. 我来向你解释一下。

(6a) と (6b) はともに「聞き手に説明する」の意味である。(4)、(5) と同じ、(6a) はプライベートな場面で親しい人に用いられ、そうでない場合、(6b) が使われる。公聴会などの質疑応答を想像しよう。これはかなり正式な場面だといえ、しかも通常この場で聞き手は心理的に疎遠な人としてみなされる（いくら親しい間柄であっても、ひとまず疎遠な人のように扱うのがふつうだろう）。そこで、この場合には (6b) の使用が自然である。(6a) をすると、上からの目線が強く感じられ、「私はあなたより分かるから、教えてあげるよ」というように聞こえる。たとえその立場に相応しい人に言われても、やや不快感が残るかもしれない。(6a) はむしろ友達同士の私的な場面で使われる。

以上、“帮”、“为”、“向”と比較しながら、“給”的使用制限を考察した。繰り返しになるが、“給”は動作の授与を強く意味しており、改まった場面かつ親しい間柄に使われる。では、なぜ押し付けがましいニュアンスがあるのに、“給”が友達

やプライベートな場面に使えるのか。以下の3.2節では、これについて説明する。

3.2. 理論的説明

本節ではポライトネス理論を土台として説明する。Brown and Levinson (1987) によるポライトネス理論が提唱されて以来、その普遍性は常に議論されてきている (Ide 1989; Gu 1990)。Gu (1990) は中国語を考察し、次のような問題点を指摘している。

- (7) a. (T)he Chinese notion of negative face seems to differ from that defined by Brown and Levinson. For example, offering, inviting, and promising in Chinese, under ordinary circumstances, will not be considered as threatening H's negative face, i.e. impeding H's freedom.
- b. (I)n interaction politeness is not just instrumental. It is also normative.

(Gu 1990, 241-242)

そして、Gu (1990) は中国のポライトネス (*lǐmào*) を、尊敬すること (respectfulness), 謙遜 (modesty)、熱意 (attitudinal warmth)、上品 (refinement) という4つの観念と誠意 (sincerity)、均衡 (balance) という2つの原則でまとめている。

本稿は、とりわけ「熱意」の概念を援用する。Gu (1990: 239) は「熱意」を “self's demonstration of kindness, consideration, and hospitality to other” と定義している。(7a) の指摘から明らかに、Brown and Levinson (1987) によるネガティブフェイスを侵害する行為は中国語話者にそうと見なされない場合がある。さらに言うと、中国語話者にはむしろ、わざと聞き手の私的領域に踏み込むことで自分の熱意を表す習慣がある。年齢や年収など、西洋人にとって個人情報だと捉えられる内容を尋ねることや (Huang 2008: 99-100)、招待を何度も繰り返す (Zhu and Bao 2010: 851) といった行為は、中国語話者にとっては私的領域を侵害するものではなく、逆に話し手の熱意を表すためのストラテジーだと考えられている。聞き手も自分のことが侵害されるように捉えるのではなく、相手の意図をきちんと理解でき、互いに支障なくコミュニケーションが進められる。もちろん、話し手の意図が分かることでも、場合により、不快感を覚える人もいる。そこで、フォーマルな場面や、相手とまだ心理的に距離を持っていると認識する際に、このストラテジーは利用しない。

“給”の使用もこれに当てはまると言えることができる。“給”は授受の意味を持ち、聞き手の領域に強く介入するように見えるが、聞き手の領域に介入することは話

者の熱意の表示だとも考えられ、Gu (1990) による中国語のポライトネス理論に従えば、この時の“給”はポライトネスを示す表現と認められる。そこで、プライベートな場面で聞き手が親しい間柄と認識する場合、“給”が使われる所以である。

3.3. 語用論的機能

3.1 の使用制限をもとに、本稿は“給”的語用論的機能として、「親しい人間関係を示すこと」と「心理的距離を縮めること」をあげる。以下では順にみてみる。

まず、「親しい人間関係を示すこと」について、この機能は 3.1 で説明した“給”的使用制限「聞き手が親しい間柄に使われる」からの発展である。つまり、“給”は親しい間柄で使われるため、「聞き手が話者にとって親しい人である」という認識を表す標識として機能しているのである。

例えば、友達に (4a) のような言い方をすると、聞き手と近い距離を保っていることを示し、人間関係をうまく維持できる。親しい間柄にあえて (4b) のような言い方をすると、距離感が生じてしまい、聞き手に不安を感じさせる。

さらに、“給”が親しい人間関係を示し、同時に、発話の場をよりプライベートのように感じさせることで、人との心理的距離が縮められるのである。例えば、

- (8) a. 您放心吧，我们给您送货上门。
- b. 您放心吧，我们为您送货上门。

店員はふつう客に (8b) を使うはずであるが、(8b) の代わりに (8a) を使うことで、親しさを示すと同時に、プライベートのような雰囲気を作り上げ、発話の場が柔らかくなるとともに、客との心理的距離を縮める⁶。そこで、客の信頼を得、客に安心して購入させることができる。つまり、“給”はポジティブ・ポライトネスとして機能するのである。

3.4. 「捉え方」の語用論的側面

捉え方の語用論的側面について、以下のようない指摘がある。

- (9) a. (C)onstrual is not simply a cognitive process. Construal is always for a purpose in a communicative act. That is, meaning involves construal for the purpose of communication. (Croft 2009: 410)

- b. 話者（認識・表現者）が、どのような対象をどのように捉えて（construe; あるいは認識して）聞き手に提示するか。そのような捉え方を背後から支えている認知のメカニズムはどのようなものか。（本多 2006: 7）

認知言語学では、言語表現は人間の認知を反映し、同じ事象の異なる言い方は人間が事象に対する認知上の違いを反映するとされている。ただし、(9) からも明らかのように、「捉え方」はより広く、聞き手も含んでいなければならない。本稿はその一例をあげた。“給”と“帮”、“为”、“向”が置き換えられる場合、どちらを選ぶかは単に話者の事象認知を反映するのではなく、聞き手との関係をどのように認識するかも反映する。親しい間柄であれば、“給”を、そうでない場合、“帮”などを使う。さらに、本稿の分析結果は聞き手の側面だけでなく、発話場面なども包含すべきだと示唆する。発話場面に対する話者の認識によって、“給”と“帮”などの使用に違いが生じる。要するに、言語は常にコミュニケーション機能を果たす以上、「捉え方」も事象レベルに留まらず、コミュニケーションの側面、つまり語用論的側面も入れるべきである。

4. おわりに

以上、“帮”、“为”、“向”と置き換えられる文を考察することで、“給”的使用制限と語用論的機能が明らかになった。これを踏まえ、「捉え方」の語用論的側面を考察した。“給”は熱意を表し、プライベートの場面で親しい間柄によく使われる。“給”はポジティブ・ポライトネスとして機能するので、状況によって親しい人間関係を示すことや、距離を縮めるために使われるという語用論的機能があげられた。本稿では受容者を二人称に限定したが、一、三人称の考察も必要であると思われる。また、本稿で提案した使用制限をさらに検証するためには、アンケート調査が必要であり、これらは今後の課題として残される。

注

¹ 本稿は日本語用論学会第25回大会（2022年11月26日、オンライン開催）で発表した内容をもとに執筆したものである。有益な助言をくださった方々に感謝を申し上げる。

² 当然、すべての“給”が“帮”、“为”、“向”に置き換えられるわけではない。

そのため、本稿でいう使用制限はあくまで置換できる場合に限られる。

³ 本稿における用例は特に断りのない限り、筆者による作例である。

⁴ “給”に置き換えられる語として“替”（代わりに）もあげられる。ただし、“替”は当該行為が相手の本業に含まれるという点で“給”と異なっているため、考察対象から外す。

⁵ ここでいう「親しい間柄」とは、血縁関係などで決められる絶対関係ではなく、話者が聞き手との関係をいかに扱っているかという相対的な心理的関係である。

⁶ ただし、距離を縮めようとするのはあくまで話し手側のことであって、聞き手がそれをどう受け取るか、つまり、この機能は順調に果たされるかは別の問題になる。

参照文献

- Croft, W. 2009. "Toward a Social Cognitive Linguistics." In V. Evans and S. Pourcel (eds.) *New Directions in Cognitive Linguistics*, 395-420. Amsterdam: John Benjamins.
- Gu, Y. 1990. "Politeness Phenomena in Modern Chinese." *Journal of Pragmatics* 14(2), 237-257.
- 本多 啓. 2006. 「認知意味論、コミュニケーション、共同注意—捉え方（理解）の意味論から見せ方（提示）の意味論へー」、『語用論研究』8、1-13.
- Huang, Y. 2008. "Politeness Principle in Cross-Culture Communication." *English Language Teaching* 1(1), 96-101.
- Ide, S. 1989. "Formal Forms and Discernment: Two Neglected Aspects of Universals of Linguistic Politeness." *Multilingua* 8-2/3, 223-248.
- 永江 貴子. 2005. 「“帮”と“给”的共通点と差異」、『お茶の水女子大学中国文学会報』24、122-108.
- 楊 凱栄. 2009. 「中日受益表現と所有構造の対照研究」、『日中言語研究と日本語教育』2、1-12.
- Zhu, J., and Bao, Y. 2010. "The Pragmatic Comparison of Chinese and Western 'Politeness' in Cross-cultural Communication." *Journal of Language Teaching & Research* 1(6), 848-851.

能楽の稽古場面における指導行動のマルチモーダル会話分析： 指導者はどのように身体動作の訂正を行うのか

李 頌雅

大阪大学

<Abstract>

This study aims to clarify the features of instructors' verbal and nonverbal behaviors and learners' reactions by observing the interactions in a classroom practicing the Japanese dance Noh. It uses multimodal conversation analysis to examine video-recorded data. Results show that, first, the instructor starts a correction sequence by identifying problems with the learner's bodily movements. Second, the instructor demonstrates the correct movements and compares them with those that the learner is struggling with. Third, the learner is observed to adopt the said bodily corrections by imitating the instructor's movements.

【キーワード】multimodal conversation analysis（マルチモーダル会話分析）、身体的技術の指導、能楽教育、訂正

1. はじめに

語用論、社会言語学の分野では、武道 (Råman 2019)、ダンス (Keevallik 2010)、楽器演奏 (名塩 2018) などの身体的技術の指導の研究に関心が高まっている。本研究では、文化を伝承する教育現場の実態を解明することを目的とし、身体動作の指導場面から、能楽教室での稽古を取り上げる。特に、仕舞（能の一部分だけを演じる短い舞のこと）の場面に着目する。具体的には、指導者である能楽師が身体動作を指導する際に用いた言語・非言語行動の特徴及びそれに対する学習者の反応の解明を目的としている。

2. 先行研究

2.1 能楽稽古における指導言語

本研究で着目する能楽の稽古場面に関しては、言語面では「指導言語」が注目され

てきた。例えば、城間（2004）によると、学生の能楽サークルでは、上級生が新入生に対して仕舞の型を説明する際、型を分解して手順として提示し、擬態語や比喩を用いる。一方、中西（2013）は、能楽の指導者による動作を促す指示や、比喩表現の多用を観察した。ただ、いずれの研究でも、非言語行動と学習者の反応は主な分析対象ではないため、本研究では、それも含め相互行為の側面から能楽の稽古場面を分析することを目指す。

2.2 言語の訂正と身体動作の訂正

会話、相互行為における言語的リソースに関する訂正については、Schegloff, et al. (1977) が「修復の組織」に関する論文で「他者訂正（other correction）」に言及している。他者訂正には出現の制約があり、主に大人と子ども、指導者と学習者の相互行為に観察されるという。また、他者訂正是社会化的媒体でもあると述べられている。

本研究が扱う現象は会話における聞き取りや理解の問題を修復するための修復組織の概念とは異なり、教育上の目的を持つものだと考えられるが、修復組織の「開始」の概念を参照しつつ、身体動作に関する訂正の連鎖上の特徴を明らかにする。

一方、身体動作の指導における訂正の研究については Keevallik (2010) が挙げられる。Keevallik が着目したダンス教室では、指導者による身体動作の操作や調整に、ことばを用いた訂正があり、また指導者が「身体的引用（bodily quoting）」を用いて、間違った動作と正しい動作を比較することも観察されている。ただ、この研究は主に指導者による身体的引用に着目している。本研究では、Keevallik の知見を踏まえ、身体的引用の他に使用された行動と生徒の反応を視野に入れて分析を行う。

2.3 本研究のリサーチ・クエスチョン

2.1、2.2 節の先行研究を踏まえ、本研究では、下記のリサーチ・クエスチョンを中心的に分析を行う。

1. 能楽仕舞の稽古において、指導者である能楽師はどのように学習者の間違った動作を指摘し、正しい動作を示して訂正するのか。
2. 指導者の訂正を受けた学習者は、どのような反応を示すのか。

3. 調査方法とデータ概要

本稿では、近畿地方にある子ども向けの能楽教室で収録した映像データ（計 10 時間）を分析対象にしている。全ての参加者（指導者、保護者）に研究の趣旨について

説明し、同意書に署名していただいた。調査概要は表1の通りである。

表1 調査概要

収録時間	2022年8月～10月中旬。月2回、1回2時間。
場所	市民団体が小学校と連携して運営している子ども向けの能楽教室（近畿地方）
参加者	指導者の 能楽師2名 （1名は謡と仕舞を指導。1名は太鼓を指導） 小中学生6名 （稽古歴6～9年）、 大人2名 （稽古歴1年未満）
稽古の流れ	①始めの挨拶 ②謡 ③太鼓 ④仕舞 ⑤全員による演出 ⑥終わりの挨拶
収録方法	教室でビデオカメラを2台設置して録画
分析資料	映像データ（約10時間）

データの分析方法としては、Mondada (2018) が提唱したマルチモーダル会話分析の記述方法を参照し、次の手順に従って事例分析を中心に行なった。①映像を繰り返して観察し、トランスクriptを作成する。②指導者による訂正の事例を集め、コレクションを作成する（本稿で用いたコレクションには訂正の事例が34例ある）。③共通した言語・非言語行動と連鎖上の特徴を分析する。

4. 分析結果：能楽仕舞の訂正に見られる特徴

本節では、まず全体的に観察した結果について述べる。能楽仕舞の稽古に見られる訂正は、①開始、②実行、③学習者の反応、④完結、に分けることができる。ただ、実行と学習者の反応は複数のターンにわたって、交互で行われることもある。訂正に見られる連鎖上の特徴は下記の表2の通りである。

表2 能楽仕舞の訂正に見られる連鎖上の特徴

段階	観察された言語・非言語行動
① 訂正の開始	・指導者による受け手の特定（呼びかけなど） ・問題となった動作の指摘 (動作の説明、評価、動作を特定する指示語の使用、実演)
② 訂正の実行	・指導者による正しい動作の説明と実演 ・間違った動作の再現・比較 ・正しい動作を分解した行為指示 ・学習者の動作の調整
③ 学習者の反応	頷き、模倣、行為指示に従った動作の実践による訂正の受け入れ
④ 訂正の完結	指導者による肯定的評価／受け入れの反応

表2に示された通り、訂正は、指導者による受け手の特定から始まる。そこで、問

題となった動作が指摘される。次に、訂正の実行に移るが、指導者による正しい動作の説明と実演が行われる。その説明においては、間違った動作の再現または比較がなされることが観察される。また、正しい動作を分解し、学習者に行行為指示をして、段階的に動作を正すこともある。訂正の実行においても学習者が動作を間違える場面では、指導者が手もしくは扇子などの道具で学習者の身体に触れ、動作を調整することも観察された。指導者の訂正を受けた学習者は頷き、模倣もしくは指導者の行為指示に従って動作を実践することで訂正を受け入れることを示す。最後に、指導者が指導者による肯定的な評価または受け入れの反応を示すことで訂正の連鎖を完結させる。

以下、上記の表2を踏まえて、3つの事例を分析する。最初に提示する事例1は、Y先生が生徒とともに基本的な型の稽古をした後、生徒Dに話しかける場面である。

事例1 (2022年9月) 生徒D: 稽古歴6年・小学6年生

01	Y先生:	Dちゃん↑ちょっとだけ↓低いかな ちょっとこうなっ。ちゃう。 (右手で扇子を持ち、肩の高さまで上げる) もうちょっと。高く。(.) (右手で扇子を持ち、頭の高さまで上げる) #図1	 ぐ::っと押していく。 (右手で扇子を持ち、前へ押す)
04	生徒D:	(立つ) --> (右手で扇子を持ち、頭の高さよりも上に上げる)	
05	Y先生:	(生徒Dを見る) -----> そう。 (生徒Dの右手を触って高さを調整する) そう>その方がかっこいい。< うん。(.) 。オッケーオッケー。	
11	生徒D:	(右手を下ろす)	



図1 03行目前半

事例1では、稽古の終了後、Y先生が生徒Dに呼びかけることで、訂正の受け手として指名している。そして、同じ発話内で、問題となった動作を指摘し、次の02行目で動作を説明しながら、生徒の身体動作を再現している。指摘する際、Y先生は「低い」という評価を与え、正しい動作の基準から逸脱していたことを示している。また、補助動詞「～てしまう」が伴う形式で動作を説明することで、その動作が望ましくないものであることを示し、否定的な態度を表している。次に、正しい動作の説明(03行目)を行うと同時に、その動作の実演も行っている。Y先生が正しい動作を示した後、生徒Dもその動作を模倣している(05行目)。それに対して、先生が一旦「そう」と承認し、生徒の手に触って身体動作を調整し、「その方がかっこいい」と肯定的な評価を与えている。最後に受け入れの反応を示し、訂正の連鎖が終了する。

次の事例2は「竹生島」の稽古の終了後、Y先生が生徒Dを呼びかける場面である。

事例 2 (2022年9月) 生徒D: 稽古歴6年・小学6年生

01 Y先生: はいオッケー::。
 02 | はい立って。 |
 03 | (立つ) |
 04 生徒C、D: | 《立つ》 |
 05 Y先生: Dちゃん(.)大きく最後も。 (Dを向いて、扇子を持った右手を前に回す)
 | この後(1.1)
 | 《右足、左足で1回ずつ踏む》
 06 | よいしょとちょっとこう|(0.7)|ちいちゃくなっちゃった。 |
 | 《一周回る》 | | 《上半身を縮め、左膝を立てて跪く》 |
 07 うん(.)|大きく胸張って | |
 | 《自分の胸を触ってから立ち上がる》 |
 08 ね(0.7)|座ったらば|(0.5)|ドン。 |
 | 《一周回る》 | | 《背筋を伸ばして、左膝を立てて跪く》 |
 #図2



図2 08行目後半

09 ね(0.4)|頭からキュッと糸が出てる感じ。 |
 | 《左手で自分の額を触って、引き出すように手を上げる》 |
 #図3

10 Y先生: |で大きく胸張って |
 | 《両手を広げて、Dに背を向け、窓の方に向く》 |

11 生徒D: | 《両手を広げる》 |

12 Y先生: | 《でこの感じ。》 |

13 生徒D: | 《徐々に両手を下げる》 |



図3 09行目

14 Y先生: | ね、座るところも|(1.0)ね(0.5)|こうちっちゃくなっちゃうから。 |
 | 《後ろのDに向く》 | | 《上半身を縮める》 |

15 Y先生: | 胸張った。まま。 |

16 Y先生: | 《背筋を伸ばす》 |

17 生徒D: | オッケー? |

18 Y先生: | 《微かに頷く》 |

Y先生: | うん。 |

| 《頷く》 |

まず、先生が呼びかけることで生徒Dを訂正の受け手として指定している。次に、「大きく最後も」と動作に関する指示を出しているが、問題となった動作が明瞭ではないため、Y先生は問題となった動作を再現し、「ちいちゃくなっちゃった」と形容詞と補助動詞が伴う形式で評価し、その動作に対する否定的なスタンスを示している(06行目)。続いて、訂正の実行に移る。Y先生は正しい動作を説明し、実演もしつつ、注目してほしい胸の部分に手を当てて生徒の注意を惹く。その後、「ドン」と動作の擬音語を発話すると同時に、背筋を伸ばして実演している(08行目)。さらに、擬態語「キュッと」、「頭から糸が出てる」という比喩表現を用いながら、その表現を描写するジェスチャーを用いている。この動作は演舞にないものであるが、その動作を用いて比喩表現を説明することが観察されている。一方、生徒が両手を広

げて、さらに Y 先生の動作に合わせて、正しい動きを模倣している（11 行目）。その後、Y 先生は再び生徒の動作を指摘し、適切な動作を示している（14 行目）。さらに、生徒 D の理解状態を確認する（16 行目）。生徒 D もかすかに頷くことで理解を示している（17 行目）。最後に、先生が受け入れの反応（18 行目）を示して訂正を終わらせている。全体的に、動作に関する説明と非言語行動の実演が共起している。

次の事例 3 では、「玄象」の仕舞の稽古中に、Y 先生が生徒 A に話しかける。

事例 3 (2022 年 8 月) 生徒 A：稽古歴 6 年・中学 1 年生／生徒 B：稽古歴 9 年・中学 3 年生

01	Y 先生:	♪ 「<八代龍馬>に(0.7)引:::::::か:::::::れ:」 ♪ (節に合わせてすり足で歩く)
02	生徒 A,B:	(節に合わせてすり足で歩く)
03	Y 先生:	そ↑こ↓もそこも。《生徒 A を向く》
04		えっとね(.)えっと(0.5) こっち行くでしょ？ (袴を上げて踝まで見せる-----→)
05	生徒 A:	(Y 先生の隣に行く)
06	Y 先生:	この足あるでしょ？ (左足を出す)
07		この中心-あの:つま先の↑ところ↓に(.) かける。 (左足のつま先に右足をかける) (左足のつま先に右足をかける)
08	生徒 A:	そうそうそう。
09	Y 先生:	で(0.3)もう一度(0.4) 左足をねじって (0.4)右足をねじってちょうど(1.5) 正面に来たいんだけれども、
10		(左足をねじる)
11		今見てたら(0.3) ↑ちょ↓っとこういくかな。 (右足を左足から少し離れたところに出す)
12		(0.9)
13	Y 先生:	感じとして(1.0) ね (後ろを向いて生徒 A を見る)
14	Y 先生:	「<八代龍馬>に(.)引か:::れ」 (歩き回って、右足のつま先を上げて出す)
15	生徒 A:	《足をそろえる》
16	Y 先生:	うん。 左出して&
17		(左足を出し、生徒 A の足元を見つめる) -----→
18	生徒 A:	《足をそろえ直して、左足を出す》
19	Y 先生:	もう一個&
20	生徒 A:	《右足を踏み出す》
21	Y 先生:	左出して&
22	生徒 A:	《左足を踏み出す》
23	Y 先生:	そう。 ここにかける。
24		(右足を左足のつま先にかける) #図 4
25	生徒 A:	《右足を左足のつま先にかける》
26	Y 先生:	そう:::そうそうそれですいぶん違う。<



図 4 25 行目

演舞の途中、先生の動きと謡の節に従い生徒がすり足で歩いているが、Y 先生が生徒 A の動きに気づき、4 行目で問題となった動作を指摘している。ここでは、演舞の途中のため、その時点の動きに対して指示語「そこ」を使用し、体の向きを生徒 A の方に変更する。この発話と動作により演舞を一旦中断させ、訂正に移行する。また、

ここでは呼びかけはないが、先生が体の向きを変更することで、生徒Aが訂正の受け手であることを示している。

訂正の実行に移るにあたって、先生が確認要求で生徒Aの注意を惹き、さらに袴をあげて足を見せる。つまり、これから正しい動作を実演することを受け手に予測させている。続いて、正しい動作を説明しながら実演している(07行目)。そこで生徒Aも先生とほぼ同時に正しい動作を実践している。その後、先生は問題となった動作を説明し、再現している(11行目)。つまり、07行目で示した正しい動作との比較がなされている。続いて、先生が問題となった動作の少し前の動きを再現しつつ、問題となった動作の準備段階に移って右足を出しているが、生徒Aが足をそろえて、動作を実践するための準備段階に入っている(15行目)。そこで、先生も生徒の動きを確認し、「左出して」と動作を分解し、最初の行為指示を出している(17行目)。それに応じて生徒Aも指示に従って左足を出しているが、その後、先生がさらに「もう一個」と「左出して」と段階的な行為指示を出している。一方、生徒Aもその指示にしたがって動作を実践している。そして、Y先生が「ここにかける」と正しい動作を説明すると同時に、動作を実演している(24行目)。生徒Aも動作を真似している。最後に、Y先生が肯定的な評価(「それですいぶん違う」)を与えて、訂正を終わらせている。

5. 考察とまとめ

以上の3つの事例を踏まえて、能楽仕舞の訂正に見られる特徴について考察する。まず、複数の学習者がいる場面において、指導者が受け手を特定してから訂正することから、個別指導を行っていることが分かった。また、言語行動(指摘、説明)と非言語行動(実演)の同時進行を通して、学習者にとって理解可能なものにするような指導方法が観察された。これは、一種の「受け手に合わせたデザイン(recipient design)」(Sacks 1992)と言えるだろう。一方、学習者の反応に関しては、指導者の説明と実演に合わせ、もしくは行為指示に従い、身体動作を模倣することで、学習活動に参加していることが明らかになった。

本稿では、一つの教育現場を取り上げた一部の事例ではあるが、能楽仕舞の稽古場面における、指導者による訂正の特徴を明らかにした。演舞では、実践・訂正・実践を繰り返す稽古の形式を通して、身体的技術が習得されていくと考えられる。またこの教室では、「頭ではなく体で覚える」という学習方法が強調されている。稽古を何度も重ね、さらに細かく動作に関する訂正を受けることで、学習者が一つ一つの動きを身につけていくと考えられる。

今後の課題としては、仕舞の動作に関する説明に着目し、今回観察された比喩表現も含め、使用された言語・非言語行動を解明することが挙げられる。また、仕舞のほかに、謡と太鼓の稽古場面もあるため、そこに見られる訂正の特徴を明らかにしたい。

参照文献

- Keevallik, L. 2010. "Bodily Quoting in Dance Correction." *Research on Language and Social Interaction*, 43(4), 401–426.
- Mondada, L. 2018. "Multiple Temporalities of Language and Body in Interaction: Challenges for Transcribing Multimodality." *Research on Language and Social Interaction*, 51(1), 85–106.
- 中西紗織. 2013. 「能の稽古における指導言語に関する研究：「わざ言語」を手がかりとして」、『北海道教育大学紀要. 教育科学編』64(1)、111-119.
- 名塩征史. 2018. 「三味線の稽古場面における師匠と習い手の相互行為—マルチモーダルな指導における発話形式の使い分けー」、『社会言語科学会第 42 回大会発表論文集』、13–16.
- Råman, J. 2019. "Budo Demonstrations as Shared Accomplishments: The Modalities of Guiding in the Joint Teaching of Physical Skills." *Journal of Pragmatics*, 150, 17–38.
- Sacks, H. 1992. *Lectures on Conversation*. (G. Jefferson, Ed.). Oxford: Blackwell.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G. and Sacks, H. 1977. "The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation." *Language*, 53(2), 361–382.
- 城間祥子. 2004. 「身体の技を伝え指導することば—能楽の稽古の事例をもとに」、『日本語学』23(1)、pp. 52-60.

付表 トランスクリプトの記号

記号	意味	記号	意味
。	語尾の音調が下がっているイントネーション	[文字]	発話が重なる部分
、	平らなイントネーション	:	音の伸ばし（一つで 0.1 秒を示す）
(0.4)	0.4 秒の沈黙	↑↓	音調の極端な上がり下がり
(.)	0.2 秒以下のポーズ	下線	強調されている部分
>文字<	発話の速度が速い部分	((文字))	非言語行動または注記
<文字>	発話の速度が遅い部分	¥ 文字 ¥	笑いながら発話された部分
?	上昇調イントネーション	=	間がなく繋がっている発話
♪	語尾の音が上昇超イントネーションほど上がってないが、多少上がっている場合	h	笑い
◦ 文字 ◦	音が小さい部分	.h	吸気音
-	発話が途切れている部分	「文字」	謡の詞章、台詞の部分
文字	非言語行動が言語行動と重なる部分	♪ 文字 ♪	謡の節に合わせて謡う部分
-----→	非言語行動の持続		

Changes in Linguistic Landscape of Japan: Life ‘with Corona’

Saya IKE

Meijo University

<Abstract>

This study investigates longitudinal changes in COVID-19 related signage in Japan. Collecting over 2,000 signs in Kyoto and Nagoya over two years, it documents the ongoing changes in Linguistic Landscapes (LL). The data reveal a significant decrease in bottom-up temporal request signs and increase in unified and formalised request signs. While many signs were put up in front of the shops in 2021, signs were discreetly displayed inside the shops (i.e., backgrounded) in 2022. The backgrounding of such signs also suggests that the signs have truly become part of the ‘landscape’, losing the primary function of being noticeable. The current LL investigation proves that the LL is fluid and mirrors what is valued at the time in a given society.

【Keywords】: linguistic landscapes, COVID-19, directive speech act, signage

1. Introduction

The COVID-19 pandemic in 2020 stopped the world, and our mobility was severely restricted. The first case of the COVID-19 in Japan was identified on January 16th, 2020, followed by the first ‘state of emergency’ announced by the government on April 7th. Then, the Linguistic Landscapes (LL) drastically changed all over the world. This study investigates longitudinal changes in COVID-19 related signage in Japan. Upon collection of over 2,000 signs in Kyoto and Nagoya over two years, it documents the ongoing changes of social norms and practices reflected in the local LLs.

2. Background

The theory of Linguistic Landscape (LL) was proposed in the 1990s by scholars such as Spolsky and Cooper (1991) and Landry and Bourhis (1997). LL in general refers to the language signs that are visible in public spaces such as road signs, billboard signs, and shop signs. Earlier studies (e.g., Landry & Bourhis, 1997; Spolsky & Cooper, 1991; Tan, 2014) focused on

bilingual communities where two or more languages were spoken on a daily basis, and argued that the language choice in signs represented the identity of community. The study focus was then expanded to multilingualism, and many studies have been conducted to document the use of English as an additional language in sign in the wave of globalisation (e.g., Backhaus, 2007; Malinowski, 2010; Reh, 2004). Reh (2004) especially discusses the level of English translation of the original, dominant language, whether it is a complete translation of the message or partial translation. More recently, multimodal aspects of LL have been discussed. For example, Jaworski and Thurlow (2010) use a term ‘semiotic landscape’ and argue for taking into consideration of the use of space where signs are placed. Similarly, Marshall (2021) shows some examples of signs integrated into objects in a park, naming them ‘grassroot artefacts’. Also, there have been more selective approaches, focusing on a specific type of signs such as graffiti (Pennycook, 2010) and tourism posters (Jaworski & Thurlow, 2010), or specific location within the areas such as stations (De Los Reyes, 2014). Pragmatic aspects, especially directive speech acts, have also been recently focused (e.g., Bayne, 2018; Ferenčík, 2018; Morrow, 2015; Nishijima, 2014; Svennevig, 2021).

In the last few years, the LL drastically changed around the world, heavily influenced by the demographic and social changes under the pandemic. There have been reports of the shift from multilingual signs to monolingual (Dunn, Coupé, & Adams, 2020; Marshall, 2021; Nakamura, 2022). In particular, Marshall (2021) reports the increase of top-down signs issued by national and/or local government authorities, and Ike and Hori (2021) report such signs were often related to directive speech acts, such as reminding to keep social distance, repeatedly sanitize or wash your hands, and to wear masks. Also, Nakamura (2022) argues that signs in Tokyo-Kanagawa area are not sufficient for non-Japanese speaking residents. However, there has not been sufficient studies on LL, especially in the COVID era. Thus, this study attempts to fill the gap by longitudinally documenting the LL in two cities in Japan, Kyoto and Nagoya.

In what follows, it will present the overview of the data, show preliminary pragmatic analysis of signage related to COVID-19, and report changes in LL over the two years.

3. Survey

The first preliminary survey was conducted in July to August, 2021 in Kyoto, and the second follow-up survey was conducted one year later in August, 2022. The survey area was also expanded to include Nagoya for comparison.

The areas were chosen following Backhaus (2005), who found over 1,000 items in a 190m street in Tokyo. The area in Kyoto is approximately 400 square metres around Karasuma subway station in Shijo area (one of major tourist spots in Kyoto), consisting of four blocks and include key industries (banks, post offices), large commercial institutions (department stores, company buildings), franchised restaurants/shops, private shops/restaurants, and residential buildings/houses. An area in Nagoya was then chosen to match the area in Kyoto for the second survey. It is also approximately 400 square metres around Sakae station, a popular tourist spot in Nagoya, consisting of six blocks with a similar mixture of buildings.

Taking a selective approach, signs visible from a street were surveyed but only the signs identified as COVID-19-related were photographed. The main criteria for identification were specific words such as ‘corona (COVID-19)’, ‘*kansen* (infection)’, ‘*shodoku* (sanitising)’ and ‘*kyori* (distance)’, as well as notification of restricted business hours and entry ways that were in practice at the timeⁱ. Individual items were all separately recorded. In addition, multiple items were often placed next to each other and displayed together. Taking a semiotic landscape approach, multiple signs in one space were also recorded as a combination sign.

Each sign was then coded partially basing on classification by Reh (2004), according to its place type, duration type, modality type, content type, and sender/receiver type. The focus in this paper is especially on the last two codings; content type (i.e., speech acts) and sender type. The sender was coded roughly in two ways: the top-down signs produced by national or local governments, and bottom-up signs produced by individual shops and restaurants.

4. Results and Analysis

4.1. Overall results

From the two surveys, a total of 2,031 signs were collected as summarised in Table 1 below.

Table 1. The number of signs in each location

	1 st survey 2021	2 nd survey 2022	Total
	KYOTO	KYOTO	NAGOYA
individual signs	610	553	463
combination of signs	151	149	105
Total	761	702	568
			2,031

There were 761 COVID-19-related signs in Kyoto in 2021, which decreased to 702 in the second survey in 2022. This may be because that many shops were either closed or operating with restricted business hours in 2021 due to the prevention measures that were in place at the time, and there were signs of temporary closure or shorter business hours. Meanwhile, there were 568 signs in Nagoya in 2022. Although the total number of the signs is noticeably smaller than that in Kyoto, the number is high enough for comparison. Of the three sets of data, about 25% of the signs are in a form of multiple display (n=151 in Kyoto 2021, n=149 in Kyoto 2022, and n=105 in Nagoya 2022).

Similar to reports elsewhere, there are very few English signs. Less than 10% of the individual signs were in English in Kyoto in 2021 (8.9%) and in Nagoya in 2022 (8.4%). The second survey in Kyoto in 2022 showed a slight increase in English signs (13.3%), but most of the English signs were produced at the department store and large scale commercial buildings, often on a hand sanitizer, and often only for part of the information. Thus, As Nakamura (2022) pointed out, there is still very little English available overall.

4.2. The first survey in Kyoto

In analysing the first set of data from Kyoto 2021, a particular attention was paid to directive signs, especially requests (e.g., “please wear a mask”). A total of 251 signs involved directive speech acts, of which the majority (n=216) were bottom-up signs, produced by individual shops and restaurants. It was also found that there were many formulaic expressions in bottom-up signs, and the request itself was fairly ambiguous. Figure 1 below is an example.

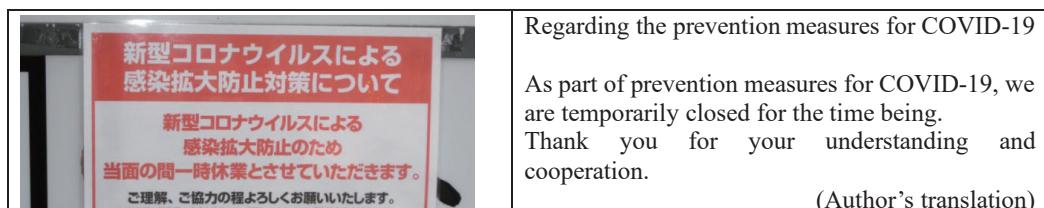


Figure 1. Example of formulaic expression

Figure 1 is part of a bottom-up, temporal closure sign of a restaurant. It is an announcement, but at the end there is an ambiguous request for the viewers (customers) in a phrase “gorikai, gokyoryoku yoroshiku onegai itashimasu (thank you for your understanding / for your cooperation)”. In fact, this phrase was often used without any specific requests.

It should also be noted that bottom-up signs often involved some creativity. Marshall (2021) showed creative signage in a park in Vancouver, and it was observed also in Kyoto. For example, there was a line of stickers in front of a computer and mobile phone provider shop. Each sticker was different, showing different types of product available at the store, and placed 2 meters apart from each other in line. These were discreetly guiding its customers to wait in line, keeping the social distance in their own creative way. The letters on stickers did not have any linguistic directive speech acts, but the use of space created a semiotic landscape (Jaworski & Thurlow, 2010) and successfully delivered the directive speech act message.

While many of the bottom-up directive speech act signs in the first survey were fairly direct and clear, the above two examples show how the message can be integrated into the Japanese context of politeness.

4.3. The second survey: Comparisons

This section will first present a preliminary analysis of the two areas, and shows the changes in LL in two years focusing on the two data sets from Kyoto.

As mentioned earlier, the proportion of request signs were similar between Kyoto and Nagoya. There was also a similarity in the use of top-down signs between the two areas. Table 2 below shows an example of most frequently observed top-down signs at restaurants.

Kyoto		Nagoya	
(a) Certificate sticker	(b) "Kyoto manner" poster	(c) Certificate sticker	(d) List of prevention measures

Figure 2. Examples of top-down signs

These were all top-down signs, issued by a local, prefectural government. Stickers (a) (n=55) and (c) (n=30) indicate that the restaurant has met the prevention requirements set by the local government. In Kyoto, these stickers were often placed together with another top-down advisory sign of customer behaviour (b). In Nagoya, there was an additional check list (d) placed with the sticker to show what requirements were met. Often times those stickers were

the only visible signs outside restaurants, especially at small scale private restaurants. Thus, the preference of top-down signs was common in two places, but top-down signs were at the local government level, and not so much of the national level. This means that even though the approaches taken in two areas are almost identical, the signs themselves are quite different in each area, contributing to the different LLs in each location.

Compared to the first survey in 2021, there were fewer creative bottom-up signs and more standardised and unified signs in Kyoto. In the surveyed area, 31 restaurants and shops had a standardised request format in some variations as shown in Figure 2 below.

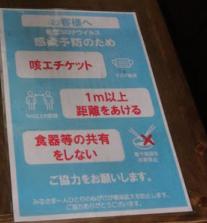
(a)	(b)	(c)
		
<ul style="list-style-type: none"> • Wearing a mask • Sanitising hands • Refrain from entering if experiencing any symptoms 	<ul style="list-style-type: none"> • Up to 5 people at once • Keep social distancing • No speaking 	<ul style="list-style-type: none"> • Coughing etiquetteⁱⁱ • Keep at least 1 meter to each other • No sharing plates

Figure 3. Examples of standardised request format

As can be seen in the three pictures of behavioural requests, the font, the background colour, and the use of iconic illustrations are all unified. These were not observed in Nagoya, so it can be assumed the format is locally created and shared among the restaurants with some blank spaces so that each restaurant can put in their own requests. As a result, most of the creative, temporal request signs disappeared and community-specific standardised forms replaced those signs. Some top-down signs of prevention measures and behavioural advices were also hidden behind other signs and no longer visible. This may indicate that top-down signs that were produced as general guidelines of prevention measures have lost their authority and significance. Instead, bottom-up sign producers have worked together during the COVID era in sharing requests and their needs in preventing the infection, giving the local LL to a more bonded-community flavour.

On the other hand, it was noted that objects, especially sanitizers, did not always accompany signs in the second survey. Sometimes a sanitiser was placed without any signs, or

blended with other objects. This suggests that sanitisation has become a norm and no longer requires special attention with a sign.

5. Discussion and Concluding Remarks

The two-year investigation of the COVID-19-related signs in two areas has shown a number of social practices. There was a decrease in the number of COVID-19-related signs in Kyoto in the second survey due to the removal of restrictions. However, the analysis also suggests that the backgrounding and blending of signs or sanitisers indicate normalised prevention measures. In 2021, in which everyone was still trying to understand the disease and working hard to survive, similar requests such as wearing masks and social distancing in different formats (e.g., handwritten vs. typed, bottom-up vs. top-down) were placed next to each other forming a strong semiotic message of the importance of prevention measures. A year later in 2022, many of the request signs have been reorganised and sorted out, and some signs have become standardised. The standardised forms not only indicate stronger community and regional efforts rather than individual efforts, but also indicate more authority within the local context. By having the standardised form, shops and restaurants seem to be forming their own authority in positioning themselves as a group over the customers. In addition, these unified forms of signs have contributed to forming the local LLs. Top-down signs and stickers that are issued by prefectural governments also add colours to the LLs. As argued elsewhere, LLs mirror what is valued at the time at the place. That is, in the last two years, the life ‘with corona’ has become widely accepted, and thus signs have lost their function of ‘standing out, to be visible’ but instead become truly part of the landscapes. With the world changing very fast yet again, Japan has moved towards the life ‘after corona’, re-opening its borders to international tourists and easing prevention measure requirements. Another year of continuing investigation of the LLs will show how the social practices change accordingly. It is believed that there is a need for documentation of temporal signs over time in order to reveal longitudinal construction of cultural norms and changes in linguistic choices.

Funding

This work was partially supported by JSPS KAKENHI (C) Grant Number (22K00519)
Multimodal Discourse Analysis of Linguistic Landscapes: Life 'with Corona'.

ⁱ At the time of the first survey, *man-en boushi tou juuten shochi* (priority preventative measures) were in action. This means that the restrictions were not as severe as the state of emergency but businesses were still heavily restricted including shorter business hours and no-alcohol policy in addition to social distancing and wearing masks.

ⁱⁱ “coughing etiquette” refers to a Japanese norm of behaviour. It is advised to cover your mouth when coughing, preferably with a mask, but with sleeves or hands if not.

References

- Backhaus, P. (2005). Signs of Multilingualism in Tokyo: A Diachronic Look at the Linguistic Landscape. *International Journal of the Sociology of Language*, 2005(175/176), 103-121. doi:10.1515/Ijsl.2005.2005.175-176.103
- Backhaus, P. (2007). *Linguistic Landscapes: A Comparative Study of Urban Multilingualism in Tokyo*. Clevedon; Buffalo: Multilingual Matters.
- Bayne, K. (2018). Manner Posters as an Element of the Japanese Linguistic Landscape. *Bulletin of Seisen University Research Institute for Cultural Science*, 39, 140-113. doi:10.24743/00001060
- De Los Reyes, R. A. (2014). Language of “Order”: English in the Linguistic Landscape of Two Major Train Stations in the Philippines. *Asian Journal of English Language Studies*, 2(1), 24-49.
- Dunn, J., Coupé, T., & Adams, B. (2020). *Measuring Linguistic Diversity During COVID-19*. Paper Presented at the Fourth Workshop on Natural Language Processing and Computational Social Science, Online.
- Ferenčík, M. (2018). Im/Politeness on the Move: A Study of Regulatory Discourse Practices in Slovakia’s Centre of Tourism. *Journal of Pragmatics*, 134, 183-198. doi:<https://doi.org/10.1016/j.pragma.2018.05.011>
- Ike, S., & Hori, Y. (2021). *COVID-19 Discourse in Linguistic Landscape: Dynamic Positioning Through Pragmatic Usage*. Paper Presented at the 24th Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan Online.
- Jaworski, A., & Thurlow, C. (2010). *Semiotic Landscapes: Language, Image, Space*: Bloomsbury Academic.
- Landry, R., & Bourhis, R. Y. (1997). Linguistic Landscape, and Ethnolinguistic Vitality. *Journal of Language & Social Psychology*, 16(1), 23-49.
- Malinowski, D. (2010). Showing Seeing in the Korean Linguistic Cityscape. *Linguistic Landscape in the City*, 199-215.
- Marshall, S. (2021). Navigating COVID-19 Linguistic Landscapes in Vancouver’s North Shore: Official Signs, Grassroots Literacy Artefacts, Monolingualism, and Discursive Convergence. *International Journal of Multilingualism*, 1-25. doi:10.1080/14790718.2020.1849225
- Morrow, P. R. (2015). Directives in Japanese: Evidence from Signs. *World Englishes*, 34(1), 78-87. doi:<https://doi.org/10.1111/weng.12119>
- Nakamura, J. (2022). COVID-19 Signs in Tokyo and Kanagawa: Linguistic Landscaping for Whom? *Asia-Pacific Social Science Review*, 22, 80-94.
- Nishijima, Y. (2014). Politeness in Sign Expressions: A Comparison of English, German, and Japanese. *Intercultural Communication Studies*, 23, 110-123.
- Pennycook, A. (2010). *Language as a Local Practice*. NY: Routledge.
- Reh, M. (2004). Multilingual Writing: A Reader-oriented Typology -- With Examples from Lira Municipality (Uganda). *International Journal of the Sociology of Language*, 2004(170), 1-41.
- Spolsky, B., & Cooper, R. L. (1991). *The Languages of Jerusalem*: Clarendon Press.
- Svennevig, J. (2021). How to Do Things with Signs. The Formulation of Directives on Signs in Public Spaces. *Journal of Pragmatics*, 175, 165-183. doi:<https://doi.org/10.1016/j.pragma.2021.01.016>
- Tan, P. K. (2014). Singapore’s Balancing Act, from the Perspective of the Linguistic Landscape. *Sojourn: Journal of Social Issues in Southeast Asia*, 29(2), 438-466.

Interpretability of pragmatic gaps in Armenian and Japanese Noun Modifying Clause Constructions

Luiza Kloyan & Kaoru Horie

Nagoya University

luizakloyan39@gmail.com

<Abstract>

Our aim is to reconsider Noun-modifying clause constructions (NMCCs), which have been divided into two major types (European-type and Asian-type) in linguistic typology. From this perspective, Armenian NMCCs are an interesting case in point as they include not only “European”-type finite NMCCs, but also non-finite NMCCs. Crucially, the latter NMCCs resemble “Asian”-type GNMCCs (Matsumoto 1997) like Japanese. This study thus compares Armenian “non-finite” NMCCs and Japanese NMCCs. It was found that Armenian NMCCs show similar patterns of acceptability with their Japanese counterparts when the head noun is “causally” or “temporally” connected to the modifying clause by pragmatic inference. However, the parallelism ends when the head noun needs to be “spatially” connected to the modifying clause. This indicates that the “spatial” connectivity gaps between the head noun and the modifying clause are harder to fill by pragmatic inference than the “temporal” or “causal” connectivity gaps.

【Keywords】：Noun-modifying clause constructions (NMCCs), Armenian language, Japanese language, finite NMCCs, non-finite NMCCs, “spatial”, “temporal”, “causal” connectivity gaps, interpretability of pragmatic gaps

1. Introduction

Noun-modifying clause constructions (NMCCs) have been a topic of cross-linguistic investigations for a long time. These investigations lead to a mindset in linguistic typology that European and Asian languages have distinct types of NMCCs and can be divided into two linguistic groups. Specifically, many East and South East Asian languages have been found to possess “General Noun Modifying Clause Constructors (GNMCCs)” (Matsumoto 1997). A GNMCC is a single noun-modifying construction covering a wide range of interpretations including, but not limited to a “relative clause” interpretation, as shown in (1) in Japanese:

- (1) [atama ga yoku-naru] hon
head NOM good-become book
'the book (*by reading which one's*) head gets better' (Matsumoto 1997:7)

Armenian, an Indo-European language, is an interesting case in point as it possesses not only "European"-type finite clause constructions, but also non-finite clause constructions, which resemble "Asian"-type GNMCCs. This study compares Armenian "non-finite" NMCCs and Japanese NMCCs.

2. Armenian language

Modern Eastern Armenian (MEA) constitutes its own branch of the Indo-European language family. With this regard, it must be noted that main grammatical features of MEA resemble those of Indo-European languages. As it is shown in (2), MEA marks nouns for case, number and person.

- (2) gn-ac-ner-s mek'ena-ner-um...
buy-RES.PTCP.PL.1 car-PL.LOC
"In cars that we bought..."

On the other hand, MEA is the only IE language that is considered to have no grammatical gender. Another feature far from common in modern IE languages is agglutinative system of declension, which is highly developed in MEA, as shown in (3). It is known that agglutination is a core element of Turkic languages, as well as Caucasian languages like Georgian, and some Asian languages, such as Japanese.

- (3) č'hamajayneč'vac
NEG.'agree'. CAUS. PASS. RES.PTCP
「同意されていない／同意されていなかった」

These are a few examples to show that Armenian language does shows some unique and mysterious features compared to all the other IE languages and a thorough investigation is needed.

3. Noun-modifying clause constructions

The main interest of this study is, interpretability of pragmatic gaps in Armenian and Japanese Noun Modifying Clause Constructions. As it was mentioned above, NMCCs

have been a topic of cross-linguistic investigations for a long time. These investigations lead to a mindset in linguistic typology that European and Asian languages have distinct types of NMCCs and can be divided into two linguistic groups. Comrie (1996, 2002) broadly classifies RCs of the world languages into European type and Asian type. European type RCs are those in which relations between head nouns and modifier clauses are defined syntactically. Asian type RCs are the ones in which the relationship between head nouns and modifier clauses is determined by pragmatic factors. English is a typical example of the European type and Japanese is a typical example of the Asian type (Other languages: Korean, Chinese, Ainu, Dravidian, Turkish languages (excluding Turkish)). Matsumoto (1997) suggested that many East and South East Asian languages have been found to possess General Noun Modifying Clause Constructions (GNMCCs). GNMCC is a single noun-modifying construction covering a wide range of interpretations including, but not limited to a “relative clause” interpretation, as shown in Japanese example (4).

(4) [頭が良くなる] 本

‘the book (by reading which one’s) head gets better’

(Matsumoto 1997)

3.1 Armenian NMCCs

Armenian, is an interesting case in point as it possesses not only “European”- type finite clause constructions, such as (5)

Finite RCs (=European type)

- (5) Erexaner-ə, voronk ‘banjarelen šat en utum,
 child.PL.DEF who-Pl vegetable a lot are eat=PRES.PTCP
 aveli arołj en.
 More healthy are

‘Children who eat vegetables a lot are likely to be more healthy.’

but also, non-finite (participial and infinitival constructions) clause constructions, which resemble “Asian”-type GNMCCs, such as (6) and (7).

Non-finite RCs (=Asian type)

- (6) [Aynteł k‘n-ac] tla-n...
 over there sleep-RES.PTCP boy-the

'the boy sleeping over there'

- (7) [Inč‘ vor mek-i duř-ə cec-el-u] jayn-ə.
 someone-GEN door-the hit-INF-GEN sound-the
 'the sound of someone knocking at the door'

3.2 Parallels between Japanese and Armenian languages

Similarly, to a Japanese GNMCC (8), which can mean either (8a) or (8b) according to the world knowledge of the speaker, its Armenian counterpart is subject to two interpretations as well.

- (8) [野村さんが買った] 場所はどこですか。 (Japanese, JP)

- a. 'Where is the place (in which) Mr. Nomura bought (something)?'
- b. 'Where is the place (which) Mr. Nomura bought?'

(Matsumoto 1997: 42;modified)

- (8') [Paron Nomura-yi gn-ac] vayr-ə orteł ē? (Armenian, AR)
 Mr. Nomura-GEN buy-PTCP.RES place-DEF where is
 'Where is the place {in which/which} Mr. Nomura bought.'

To understand better how world knowledge influences the meaning of the sentence we can consider examples (9a) and (9b).

- (9) a. [[ともちやんが買った]店]はどこ。

'Where is the store (in which) little Tomo bought ()?'

- b. [[ドナルド・トランプが買った]店]はどこ。

'Where is the store (which) Donald Trump bought?'

Matsumoto (1997)

- (10) a. [[P'ok‘rik Tomo-yi gn-ac] xanut‘-ə] orteł ē?
 little Tomo-GEN buy-PTCP.RES shop-DEF where is
 'Where is the store (in which) little Tomo bought ()?'
 b. [[Donald T'ramp‘-i gn-ac] xanut‘-ə] orteł ē?
 Donald Tramp-GEN buy-PTCP.RES shop-DEF where is
 'Where is the store (which) Donald Trump bought?'

The extent of similarity between Armenian and Japanese constructions is rather striking. Armenian GNMCCs are deemed acceptable just like their Japanese counterparts when the head noun can be "causally" or "temporally" connected to the modifying clause by

pragmatic inference.

“causally” connected GNMCCs

- (11) ... [tarec‘ knoj-ě sep‘akan bnakaran-um dažanabar span-el-u]
elderly woman-GEN own apartment-LOC brutally murder-INF-GEN
meładrnak‘-ov datapart-v-el ē c‘mah azatazrk-man.
charge-INST sentence-pass-INF is life imprisonment-DAT

<https://www.azatutyun.am>

“...was sentenced to life imprisonment on *charges of brutally murdering an elderly woman in her own apartment.*”

- (12) [erkar tari-ner artasahman-um apr-el-u] ardyunk‘-ə... (AR)
long year-PL abroad-LOC live-INF-GEN result-DEF
‘the result of living/having lived abroad’
(12') [長年外国に住む／住んだ]結果... (JP)

“temporally” connected GNMCCs

Similarities among two languages can be detected regarding to the rule of the ‘temporal continuity’ (Kato 2003) as well. Kato (2003) notes that the difference in acceptability in two sentences below is related to temporal continuity. (13) is possible as there is certain continuity between the head noun and the modifying clause. While in (13') we cannot observe such kind of continuity, as a result, (13') is unacceptable. This observation is also true about their Armenian counterparts.

- (13) a. [徹夜をした] 朝は、妙に目が冴えるものだ。 (白川 1986: 10)
b. [Ambołj gišer art‘un mnac‘-ac] aravot-ə ač‘k‘-er-s
all night awake remain-PTCP.RES morning-DEF eye-PL.my
tarōrinakoren parz en.
weirdly clear are
- (13') a. *[寒い冬の夜外で遊びすぎた]肺炎
b. *[zmřan c‘urt gišer-ə drs-um šat xałac‘-ac]
winter.GEN cold night-the outside-LOC a lot of play-PTCP.RES
t‘ok‘aborb-ə.
pneumonia.DEF

However, despite the parallelism between the two languages, in some cases we can

observe some differences in their meanings. One of such cases is the ambiguity related to the tense interpretation of Armenian sentences, as shown in example (14). As we can see from its Japanese counterpart, in Armenian sentence (14) the modifying clause could be interpreted either as temporally preceding or succeeding to the head noun.

(14) [xn̊juyk‘-in masnake‘-el-u] aravot-ə... (AR)

party-DAT participate-INF-GEN morning-DEF

(14') [パーティーに参加する／参加した]朝...(JP)

‘the morning before/after participating in party...’

As we confirmed above, Armenian RCs are mostly acceptable in case of “causally” or “temporally” connected constructions. However, the picture changes when we change the topic to “spatially” contiguous GNMCCs.

“spatially” contiguous GNMCCs

These kinds of constructions show least level of acceptability among all kinds. In some cases, it might seem acceptable as in example (15), but as we look closely at the meaning, we can see that these constructions are different from their Japanese counterparts. In case of (15) the Japanese language could be interpreted as a. or b., which have different interpretability regarding time, while the Armenian sentence can only be interpreted as an intention regarding to the future tense.

(15) Nra bnakvel-ik‘ dimac‘i bnkaranə mek tari araj
he.GEN live.FUT.PTCP2 front.GEN apartment one year ago
veranorogec‘in.
reform. AOR.3PL

‘A year ago, they reformed the apartment in front of us, that he is planning to live.’

(15') 彼が住む目の前のマンションは一年前に修理した。

- a. ‘A year ago they reformed the apartment in front of us, where he lives.’
- b. ‘A year ago they repaired the apartment in front of the place he lives.’

However, in some rare cases, with a relatively low level of acceptability, “spatially” connected relational RCs can also be observed in Armenian language.

(16)? [erexayi k‘n-el-u] kołk‘i senyakum
child.GEN sleep-ING-GEN side-GEN room.LOC

cnołnern ēin k‘n-um.
 parent.PL.DEF are sleep-PTCP.PRS
 ‘Parents are sleeping in the room next to their children.’

- (17)? Nra ašxat-el-u kołki grasenyak-um k‘uyrn ē
 he/she.GEN work-INF-GEN side-GEN office.LOC sister.DEF is
 ašxat-um.
 work-PTCP.PRS
 ‘His sister works in the company next to his workplace.’

3.3 Why Genitive Case?

It should be noted, that all relational NMCCs require the genitive case of the infinitive in Armenian. As we know Genitive is a grammatical case used in a variety of languages primarily to indicate possession and composition. However, as seen in (18) or (19), the usage of the Genitive case is quite broad and it can also be used in phrases to express “time/location and event relationship”, or “causal-event result relationship”, etc.

Time and event relationship

- (18) garnan anjrew (春雨)
 spring.GEN rain

Causal-event result relationship

- (19) šak‘ari hivandut‘yun ((砂糖の病気) 糖尿病)
 sugar.GEN disease

However, the Genitive case requires some semantic relation between the modifying clause and the head noun. For example, “spatially” contiguous constructions might require spatial adjacency. Ex. (21) is acceptable as we can confirm such spatial adjacency, while in (22) the spatial adjacency can not be confirmed, thus it appears unacceptable.

- (21) sari dimac‘i dašt (山の前の畑)
 mountain.GEN front.GEN field
 (22)*sari dimac‘i sar (山の前の山)
 mountain.GEN front.GEN mountain

Infinitive in Armenian is rather an agent noun (denoting action), and it is natural that in RCs it requires Genitive case. However, it could be assumed that above mentioned

semantic features of Genitive case affect the acceptability of infinitival constructions as well. That is, “spatial” infinitival constructions can be acceptable in case of spatially adjacent phrases (ex. 23), but cannot be so when such adjacency is not confirmed (ex. 24).

- (23) [xanut‘ gn-al-u] kes čanaparh-in ...
 shop go-INF-GEN half way-DAT.DEF
 「[店に行く] 途中で...」
- (24) *[xanut‘ gn-al-u] dimac‘-i połoc‘-um ...
 shop go-INF-GEN front.GEN street-LOC
 「[店に行く] 前の道で...」

4. Conclusion

In this study we compared Armenian “non-finite” NMCCs and Japanese NMCCs. It was found that Armenian NMCCs show similar patterns of acceptability with their Japanese counterparts when the head noun is “causally” or “temporally” connected to the modifying clause by pragmatic inference. However, the parallelism ends when the head noun needs to be “spatially” connected to the modifying clause. This indicates that the “spatial” connectivity gaps between the head noun and the modifying clause are harder to fill by pragmatic inference than the “temporal” or “causal” connectivity gaps. It was also concluded that the genitive property of the infinitive in Armenian makes it harder to fill “spatial” connectivity gaps between the head noun and the modifying clause by pragmatic inference than the “temporal” or “causal” connectivity gaps.

References

- Comrie, Bernard (1996) “The Unity of Noun-Modifying Clauses in Asian Languages.” *Pan-Asiatic linguistics: Proceedings of the fourth international symposium on languages and linguistics*, 1077-1088. Salaya, Thailand: Mahidol University at Salaya.
- Comrie, Bernard (2002) “Typology and Language Acquisition: The Case of Relative Clauses.” In: Ramat, Anna Giacalone (ed.) *Typology and Second Language Acquisition*, 19-37. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 東京: ひつじ書房.
- Matsumoto, Y. (1997) *Noun-Modifying Constructions in Japanese: A Frame Semantic Approach*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

***It* versus *That* as the Subject of English Set Phrases**

NAKAMURA Akira

Atom University

<Abstract> This article discusses the selection of *it* versus *that* as the subject of English set phrases where either of the two anaphors has a non-nominal antecedent in the preceding context. Previous literature on the problem is shown to be inadequate, and a new pragmatic prediction is proposed. The author argues that in the current exchange between speakers A and B, the latter's choice of *that* rather than *it* to refer to the previous information offered by A could be seen as B's flouting of Paul Grice's maxim of quantity, and that this non-observance of the maxim might cause the use of *that* to bring out implicatures such as B's interest, attention, surprise, concern or empathy as to what A has just said.

【Keywords】: *it, that, the quantity maxim, flouting, implicature*

1. Introductory remarks

The problem this paper will attempt to solve is that of finding a principle that underlines the selection of *it* versus *that* as the subject of set phrases. The two examples in (1) are typical cases, in which *it* or *that* is the anaphor and the information expressed in the first utterance is the antecedent.

- (1) a. ‘Is he coming?’ ‘That depends. He may not have the time.’
b. ‘Do you think you’ll go back to college?’ “*It all depends*. I will if I can afford it.”¹

(1a) is from OALD and (1b) from MWCD. The former describes the phrase as ‘that depends | it (all) depends’, and the latter regards *it depends* as a variant form of *that depends*. This kind of explanation suggests that *It depends* is used in place of *That depends* in (1a), and *It all depends* can be replaced by *That all depends* in (1b).

The problem to be considered in the present paper, that is, the examination of the choice between anaphoric *it* and *that* is not an unfamiliar one, and it has been treated in several books or articles, and there are at least two treatises that are entirely devoted to it, i.e. Kamio & Thomas

(hereafter K & T) (1999) and Takahashi (2004).

This paper proposes a pragmatic approach to the remaining issues raised through reviewing K & T (1999) and Takahashi (2004). This pragmatic approach, derived from the quantity maxim proposed by Grice (1989), might formulate a logical and original conclusion that could resolve the research questions raised by the examination of the two studies: (i) what does the speaker's selection of *it* versus *that* communicate to his or her addressee?; (ii) how can we explain conversation exchanges, such as (1b), where the antecedent, expressed in the first speaker's utterance, is immediately followed by the anaphor *it* used by the second speaker?

The data for the discussion in this paper are mostly dialogue examples which include set phrases with *it* or *that* appearing as entry heads in Spears (2012). However, examples of the following types are not included in the author's analysis: (i) examples including *it* or *that* with nominal antecedents; (ii) examples where *it* or *that* requires the hearer to carry out a complex process of inference to arrive at their antecedents; (iii) examples demonstrating that the hearer was already aware of the speaker's information while the speaker imparted that information in his or her utterance; (iv) examples including formal *it*; (v) examples including preparatory *it*.

2. Literature review

This paper restricts its review to K & T (1999) and Takahashi (2004), because the former discusses the choice between *it* and *that* based on related articles published prior to it, and the latter approaches the issue in reference to the former, and because the two studies approach the matter from different points of view, i.e. a functional linguistic view and a cognitive linguistic view.

2.1. A functional linguistic analysis: K & T (1999)

K & T (1999) make two claims about the referential properties of *it* and *that*. The first claim is that *it* refers to information already known and already present in the speaker's central store of knowledge while *that* refers to incoming information which is more peripherally located in the speaker's knowledge. The following are two of their examples that illustrate the first claim.

(2) [A rushes into the room excitedly]

A: Guess what! I just won the lottery!

B1: *It's amazing!

B2: That's amazing!

(K & T 1999: 291)

(3) A: Guess what! I just won the lottery!

B: (Yes,) it's amazing! I heard about it on the radio, and I've invited everyone on the block to our house for a party! (K & T 1999: 293)

With respect to (2) and (3), K & T explains: ‘... speaker A’s statement is completely novel information to speaker B; in this context, the response in B1 is quite artificial, whereas B2 is a natural expression of surprise at hearing unexpected news. However, B1, *It's amazing!*, could be an acceptable response to the same announcement, in a different context. Imagine that before A arrives home, B hears the names of today’s lottery winners read over the radio. In this case, A’s statement is prior knowledge² to B at the point when A utters it’. K & T contend that this is the reason why *it's amazing* is natural in the discourse in (3)

K & T’s second claim is that ‘*that* narrowly specifies its referent, whereas *it* refers broadly: while *that* points, *it* evokes’ (p. 296). An example to demonstrate their position is:

(4) Sonja was born out of wedlock, but I never revealed a. *it* / b. *that* to her. (K & T 1999: 296)

As to example (4), K & T explain: ‘... *it* in this context refers broadly to a set of related facts and events: *it* means something like “that Sonja was born illegitimately, and the whole story of her mother’s disastrous affair with the Prime Minister, the dangerous international intrigue which resulted from it, etc.”’

2.2. A Cognitive linguistic analysis: Takahashi (2004)

K & T’s views shown above seem to be defended by Takahashi (2004), who offers three cognitive linguistic views about the selection of *it* versus *that*. His first claim is that *it* and *that* have a different degree of specificity, and that *it* is more abstract than *that*. His second claim is that *it* refers to the most salient thing in discourse while *that* refers to a salient thing. One of Takahashi’s examples is:

(5) Luke: Why would I need mouthwash? I brush my teeth twice a day.

Sharon: Sometimes *that's/it's* not enough, especially for people who love garlic as much as you do. (Based on Takahashi 2004: 26-27)

Takahashi writes that the choice between *it* and *that* is related to the difference in saliency between *it* and *that*. He also remarks that the use of *that* sometimes emphasizes the action of brushing teeth twice a day.

Takahashi's third claim is that *it* refers to a thing in the speaker's short-term memory while *that* refers to a thing in the speaker's immediate memory. This claim is consistent with that of K & T (1999).

2.3. Issues remaining unresolved

Examining K & T (1999) and Takahashi (2004) has raised two potential issues. Firstly, although the two studies have accounted for how information referred to by the use of *it* or *that* is processed and stored in the human mind, they have not discussed fully what the speaker's choice of *it* or *that* communicates to the hearer. Secondly, the two studies' claims seem to have no application to cases such as (6)-(15) below,³ in which *it* is used to refer to newly acquired information. Note that in these examples, what the first speaker utters is followed immediately by the second speaker's response in lieu of pause or delay.

- (6) Sally: (smoking a cigarette): Do you mind if I smoke?
Bill: **It doesn't bother me any.** (Spears 2012:110)
- (7) John: Do you suppose we should report that man to the police?
Jane: **No, it isn't worth it.** (Spears 2012: 111)
- (8) Tom: Shall I wrap all this stuff back up?
Mary: No. **It's not worth the trouble.** Just stuff it in a paper bag. (Spears 2012: 111)
- (9) Tom: I'm leaving you. Mary and I have decided that we're in love.
Sue: So, go ahead. **It doesn't matter to me.** I don't care what you do. (Spears 2012: 112)
- (10) A: We'll sell the sofa and buy some comfortable chairs.
B: Great! **It sounds like a plan.** (Spears 2012: 112)
- (11) Sally (lighting a cigarette): Do you mind if I smoke?
Bill: **It won't bother me at all.** (Spears 2012: 112)
- (12) Bob: Is it okay if I sign us up for the party?
Sally: **It works for me.** (Spears 2012: 112)
- (13) Mary: Do you mind carrying all this up to my apartment?
Tom: **It's no trouble.** (Spears 2012: 115)
- (14) John: Can we go to the mountains for a vacation this year?

Jane: **It's out of the question.**

(Spears 2012: 116)

- (15) Bill: I'm going to take my car to the racetrack and see if I can race against someone.

Sue: **It's your funeral.**

(Spears 2012: 118)

In these examples, there seems to be very little time for the second speaker to incorporate the information communicated by the first speaker into the second speaker's central store of knowledge. Moreover, there seems to be no time for the second speaker to think of a set of facts or events related to the new information communicated by the first speaker. These two facts are inconsistent with K & T's two claims.

According to Takahashi's third claim, the referent of *it* must be already present in the speaker's short-term memory. It seems, however, that in (6)-(15) the second speaker had no time to store the referent of *it* in his or her short-term memory. Rather, the second speaker seems to store it in his or her immediate memory. To deal with these remaining issues, the author presents a pragmatic perspective in the next section.

3. An alternative pragmatic approach

In exophoric reference the use of *that* is frequently accompanied by the speaker's indexing acts such as gestures of gazing in that direction, whereas using *it* normally need not involve any such acts. This corroborates the following inference: in exophoric reference *that* refers to the thing which is unidentifiable by the hearer without the speaker's indexing acts; *it* refers to the thing which is identifiable by the hearer without such acts.

From this inference, the following prediction seems applicable: in anaphoric reference the use of *that* rather than *it* when referring to the thing which has been already identified by the hearer could be regarded as the flouting of the quantity maxim by Grice (1989) in that the use of *that* is more informative than is necessary for the current context (*that* is two letters longer than *it*, and the former takes a longer time to pronounce than the latter).⁴

From this prediction, the following proposal could be made: this non-observance of the maxim might bring out implicatures with the use of *that*; those implicatures might be the speaker's emotional reactions such as interest, surprise, concern, sympathy, anger or satisfaction. In other words, in anaphoric reference, the speaker uses *that* when he or she communicates his or her emotional reaction to the information given by the addressee.

4. Discussion

This section addresses examples (6)-(15), using the proposal shown in the preceding section. The set phrases could be semantically grouped into four types:

Type A: the set phrases in (6), (9), (11) and (13), which could be paraphrased as ‘you will give me no trouble; you can go ahead’.

Type B: the set phrase in (7) and (8), which could be paraphrased as ‘it is worthless to do the action; don’t bother to do the action’.

Type C: the set phrases in (10) and (12), which could be paraphrased as ‘I agree with you’.

Type D: the set phrase in (14) and (15), which could be paraphrased as ‘no way; I warn you of some danger’.

In Type A phrases, the second speaker might sound indifferent to what the first speaker uttered, or at least they do not seem to convey apparent emotional reactions to what the first speaker will or wants to do. Therefore, the second speaker’s use of *it* could be seen as reasonable.

In Type B, like Type A, the second speaker is taken be indifferent to what the first speaker wants to do. This leads to the second speaker’s use of *it*.

Type C phrases are interpreted to show the second speaker’s interest or agreement. Thus, his or her choice of *That sounds like a plan* and *That works* rather than *It sounds like a plan* and *It works* appears to be reasonable. However, Spears (2012) only lists the *it*-versions, which implies that in examples (10) and (12) the second speaker’s reaction to the first speaker’s information is not strong enough to use *that*. The same speculation seems to apply to Type D phrases, which are taken to show the second speaker’s concern or disagreement.

Additional possible support for the author’s discussion might come from the following table showing the frequencies of the set phrases in examples (6)-(15) and their *that*-versions in the COCA corpus. Note that the set phrases with non-contracted forms as well as those with contracted forms are listed in the table.

Table 1: COCA frequency research results

type	<i>It</i> -versions	tokens	<i>That</i> -versions	tokens
A	It doesn’t bother me any.	0	That doesn’t bother me any.	1
A	It does not bother me any.	0	That does not bother me any.	0
A	It doesn’t bother me at all.	22	That doesn’t bother me at all.	9
A	It does not bother me at all.	1	That does not bother me at all.	1
B	It isn’t worth it.	31	That isn’t worth it.	4

B	It's not worth it.	382	That's not worth it.	1
B	It is not worth it.	20	That is not worth it.	2
B	It's not worth the trouble.	8	That's not worth the trouble.	0
B	It isn't worth the trouble.	0	That isn't worth the trouble.	0
B	It is not worth the trouble.	1	That is not worth the trouble.	0
A	It doesn't matter to me.	87	That doesn't matter to me.	14
A	It does not matter to me.	3	That does not matter to me.	1
C	It sounds like a plan.	3	That sounds like a plan.	27
A	It won't bother me at all.	1	That won't bother me at all.	0
A	It will not bother me at all.	0	That will not bother me at all.	0
C	It works for me.	109	That works for me.	100
A	It's no trouble.	88	That's no trouble.	5
A	It is no trouble.	3	That is no trouble.	0
D	It's out of the question.	93	That's out of the question.	76
D	It is out of the question.	11	That is out of the question.	11
D	It's your funeral.	54	That's your funeral.	1
D	It is your funeral.	0	That is your funeral.	1

These frequency data might include examples that have been excluded from the author's analysis in this paper (see section 1). Hence, strictly speaking, the figures indicated in the table might not work satisfactorily to support the discussion of (6)-(15). Even so, the author thinks that these data suggests that (i) *it* rather than *that* tends to occur in Type A and B phrases; (ii) as to Type C, *That sounds like a plan* rather than *It sounds like a plan* frequently appears, and *It works* and *That works* are both preferred; (iii) with respect to Type D, *It's (It is) out of the question* and *That's (That is) out of the question* are both preferred, but *It's funeral* appears much more frequently than *That's (That is) your funeral*.⁵

5. Concluding remarks

This paper has proposed a pragmatic prediction which complements K & T (1999) and Takahashi (2004). In short, the author has made the following claim about the pragmatic property of English *that*: the speaker's choice of *that* rather than *it* communicates that his or her emotional feelings are rather strong.

Interestingly enough, K & T give the following example, where *it* refers to totally new information.

- (16) A: My dog was just bitten by a poisonous snake!

B: I'm sorry to hear it. Will he be all right? (K & T 1999: 300)

K & T explain: '... B unconsciously represents the referent of the pronoun as having been

incorporated into his or her store of knowledge as a means of communicating sincere involvement in the news which speaker A announces. This constitutes a pragmatically-motivated falsification of the actual status of the referent of *it*, which serves to express B's solidarity with A ... This property is limited to quasi-idiomatic expressions like *I'm glad to hear it* or *I'm sorry to hear it...* (p. 300). This observation is contrastive to the author's in that K & T regard the use of *it* as communicating the speaker's emotions. K & T further claim this pragmatic property of *it* is limited to a number of set phrases, which is different from the author's claim. These points are worth discussing for future work.

Notes

1. The words *It* and *depends* are originally italicized.
2. 'Prior knowledge is typically information which a speaker already has access to before it enters into the relevant conversational exchange' (K & T: 1999: 291).
3. In examples (6)-(15), the set phrases are shown in boldface.
4. *That* carries stress, while *it* normally does not. Grice (1989: 51) remarks: '... stress clearly does in fact on many occasions make a difference to the speaker's meaning; indeed it is one of the elements which help to generate implicatures'.
5. The author cannot speculate why *It is funeral* seems to be the standard form.

References

- Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
Kamio, A. and M. Thomas. 1999. 'Some Referential Properties of English *It* and *That*.' In A. Kamio, K. Takami, and S. Kuno (eds.), *Function and Structure: In Honor of Susumu Kuno*, 289-315. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
Spears, R. D. 2012. *Common American Phrases in Everyday Contexts: A Detailed Guide to Real-Life Conversation and Small Talk*. 3rd ed. New York: McGraw-Hill.

Corpora and dictionaries

- COCA: *Corpus of Contemporary American English* (<https://www.english-corpora.org/coca/>).
MWCD: *Merriam-Webster.com Dictionary* (<https://www.merriam-webster.com/dictionary/>).
OALD: *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 8th ed. 2010. Oxford University Press.

The Use of Overt First-Person Singular Pronouns in Opinion-Negotiation Sequence
in Japanese Conversation

Miyabi Ozawa
(University of Wisconsin-Madison)

<Abstract>

This paper investigates how the utterances with overt first-person singular pronouns contribute to the execution of particular actions in the opinion-negotiation sequence, where the co-participants negotiate their individual's internal and evaluative position about circumstance. Adopting the framework of Interactional Linguistics and Conversation Analysis, the study analyzes naturally occurring conversation taken from the Corpus of the Everyday Japanese Conversation from the National Institute for Japanese Language and the author's video-recorded collection. The study shows that the overt forms are assembled in different social actions depending on how the co-participants align with the previous assertions toward the circumstance they are discussing.

Keywords: overt first-person singular pronoun, assertion, epistemic primacy, lack of epistemic access, disalignment

1. Introduction

Given that the overt first-person singular pronouns are marked in Japanese, the study aims to answer three research questions: (1) When is the overt first-person singular pronoun used in the opinion-negotiation sequence?; (2) What types of actions are accomplished by the utterance with the first-person singular pronoun in the opinion-negotiation sequence?; (3) How is the use of the overt first-person singular pronoun relevant to showing a speaker's stance about the circumstances about which they negotiate their opinions?

2. Person “pronouns” and the use of the first-person singular pronouns in Japanese

Previous studies have shown a number of aspects in personal pronouns in Japanese, which are at least different from Indo-European languages. Some studies argue that there is no “pronoun” system in Japanese that corresponds to the Indo-European languages (e.g. Kanzaki 1994; Suzuki 1973). This is because Japanese personal “pronouns” have a number of forms and function as nouns in syntactic and epistemological perspectives (e.g. Ishiyama 2008; Kindaichi et al 1993; Makino and Tsutsui 1986; Shibasaki 2005; Whitman 1999). In addition, varieties of forms associated with the first-person singular pronouns are dependent upon contexts, including the level of formality (e.g. Kataoka 2002; Shibatani 1990; Suzuki 1973) and gender identities (e.g. Kataoka 2002; Saito 2018; Suzuki 1973). For these reasons, personal “pronouns” in Japanese express not only referential but also non-referential indexicalities (Silverstein 1976).

Examining the use of personal pronouns in Japanese conversation, especially the one in the nominative position, calls for an additional layer of issue: non-occurrence of subject in Japanese. From a cognitive and semantic perspective, the speaker as the center of epistemology is not often overtly stated in Japanese, such as when expressing internal states (c.f. Iwasaki 1993). In terms of the relationship between language and culture/society, it has been argued that subjects are “omitted” or not explicitly stated because the listener understands what the speaker means from the context (Hasegawa and Hirose 2010, Hinds 1982, Hinds 1986, Ide 2006) or the ground (‘*ba*’) which governs the context (c.f. Fujii 2016, Ide 2020, Fujii 2020); the speaker is grounded in the context as one of the elements of conversation and assumes each element involving the listener in the field is shared knowledge, resulting in not explicitly stating the subject of the self.

Despite the fact that a number of studies reveal the uniqueness of the Japanese personal pronouns including the first-person singular pronouns, as well as its markedness in conversations, few studies focus on the actual usage, especially in the cases of the first-person singular pronoun. Ono and Thompson (2003) discuss how the overt first-person singular pronouns work beyond its referential consideration in conversation by presenting the “emotive” and “frame-setting” functions. Furthermore, Lee and Yonezawa (2008) add the functions of “contrast” and “emphasis.” These previous studies suggest that the overt first-person singular pronouns in Japanese conversations, which are marked, are relevant to expressing the speaker’s subjectivity or contrastive sense to others including the listener. In addition, to my knowledge, sequential analysis has not been usually adopted to investigate the

use of the first-person singular pronouns in interaction. The current study, therefore, focuses on the “opinion-negotiation sequence” where the co-participants show subjectivity and contrast by claiming their internal and evaluative position about circumstances, which might be different from others.

3. Analytical Frameworks and Analytical Focus

3.1. Analytical frameworks: Interactional Linguistics and Conversation Analysis

The study adopts methodologies of Interactional Linguistics (IL) and Conversation Analysis (CA). IL and CA observe sequences of turns in social interaction that are collaboratively co-constructed by the participants. The sequential analysis is concerned with how a turn is composed, as well as where that turn is produced as part of a sequence of turns/actions. By looking at the use of the first-person pronoun vis-a-vis the sequential context and ongoing action formations, rather than looking at just the utterance by itself, we can uncover the nature of the usage of the first-person singular pronouns in Japanese daily conversations.

3.2. Analytical focus and related concepts

3.2.1. “Opinion-negotiation sequence”

The study uses a term “opinion-negotiation sequence” defined by Mori (1999): the sequence in which co-participants negotiate the individual’s internal and evaluative position about circumstance, which has been shared and is accessible to them. In the opinion-negotiation sequence, co-participants may show their stance toward different aspects of the same target (i.e. circumstance) or toward multiple related objects by “assertion” (Vatanen et al. 2021; Vatanen 2014) and/or other semiotic resources (c.f. Goodwin and Goodwin 1987). “Assertion” in this study borrows the definition by Vatanen et al (2021) and Vatanen (2014), which is where “the speaker asserts, claims, or states something about the world and typically also evaluates it” (Vatanen et al. 2021: 311).

3.2.2. Epistemics in interaction

In analyzing interactions by IL and CA, ‘who knows what’ turns out to be an object of extreme importance to participants as they go about trying to make sense of their interactions

together. Knowledge (i.e. ‘epistemics’) in interaction means the participants’ right and obligations to know or not know certain things.

In opinion-negotiation sequence, knowledge of the target(s) discussed is crucial because co-participants negotiate their internal and evaluative position based on the information they obtain with regard to the target. Whether one has access to the target or not is referred to epistemic access, which is expressed by epistemic stance, that captures the moment-by-moment positioning of participants with respect to each other in and through the talk (Clift 2016: 203). Furthermore, when the speaker indicates greater familiarity with the referent better compared to the interlocutor, the speaker has a relative right to know and claim about the target, or relative authority of knowledge, which is referred to as “epistemic primacy” (c.f. Stivers et al. 2011).

4. Data

The study uses two sets of video-recorded naturally occurring conversations, involving two, three, or four friends, in Japanese. One of the sets are six conversations from the Corpus of Everyday Japanese Conversation from National Institute for Japanese Language (NINJAL) and Linguistics (Koiso et al. 2022); and the other sets are four conversations video-recorded by the author in Tokyo and Kanagawa in 2018. In these conversations, the participants negotiate their opinion toward a wide range of topics including some events they participate in, particular foods, mutual friends or acquaintances, and so forth.

5. Data Analysis

5.1. Overview of the overt first-person singular pronouns observed in opinion-negotiation sequences

Among the data, what is identified as “opinion-negotiation sequences” include 31 overt first-person singular pronouns, whose forms are *watashi* (20 cases), *atashi* (four cases), *ore* (five cases), *boku* (one case), and *uchi* (one case). The overt first-person singular pronouns with these forms are assembled in different social actions depending on how the co-participants align with other’s assertions toward the target(s) they are discussing. A morpho-syntactic feature of these overt forms in opinion-negotiation sequences is that more than 80% of the cases are in the nominative position, which comprises of the one with zero

postpositional particles (54.8%), a highlighting particle *mo* ('also') (9.7%), a topic marking particle *wa* (3.2%), and a case particle *ga* (nominative) (12.9%).

5.2. The most significant type of action observed with the overt first-person singular pronouns in opinion-negotiation sequence

In opinion-negotiation sequence, what overt first-person singular pronouns do differ depending on how the co-participants align with the previous assertion(s). When the speaker or the co-participant does not align with the previous assertion, the overt first-person singular pronouns display epistemic access to the target(s) in account, which is the most significant type observed in the data. There are 13 cases where the overt first-person singular pronoun is used in account. These overt first-person singular pronouns, with one exception, occur when the speaker shows either lack of epistemic access to the target or epistemic primacy toward the target. These first-person singular pronouns are seen in the recipient's account for not being able to align with the co-participant(s) or in the speaker's account to pursue an alignment.

Among the 13 cases, four cases appear in the utterance which displays lack of epistemic access to the target in account for not being able to align with the co-participants. For example, in Excerpt (1), where Kana and Nao negotiate their views on the danger of playing in the river, the first-person singular pronoun *watashi* is used (line 4) in the accounting utterance for not being able to align with the co-participant's assertion about the scariness of playing in the river (line 1). At line 4, Nao displays her lack of epistemic access to the river, which shows her inability to make a judgment as an account for not being able to agree with Kana's assertion about the scariness of playing in the river (line 1).

(1) Playing in the river

- 01 Kana: *hutsuuni watashi kawaasobi de shinu jishin ga aru*
 'I am confident I will die by playing in the river'
- 02 Nao : *ehhehehehe ((laugh)) ((putting her hand on her mouth))*
 'hahaha'
- 03 Nao : *uso?*
 'seriously?'
 ((Kana is putting her hand on her mouth and probably open

her mouth to say something, but nothing is heard/ audible))

- 04 → Nao : ***ya watashi sonnna kawa itta koto nai,***
'well I haven't played in the river that much'

Claiming lack of epistemic access works as a strategy to account for disagreement rather than a simple display of the state of unknowing because the speaker could still state their opinion or evaluation, or agree with the prior speaker based on their limited knowledge (c.f. Mori 1999: 120). In this sense, displaying lack of epistemic access is a strategy for avoiding overt disagreement but still doing disagreement.

The rest of the nine cases display the speaker's epistemic primacy to the target in account for not being able to align with the co-participant(s) or to pursue an alignment. In Excerpt (2), for example, Ogata utters the first-person singular pronoun ore (line 10) to bring his personal experience showing not being able to align with the availability of shrimp cream rice, expressed by Kaneko (line 5).

(2) *Ebikuriimu raisu* ('Shrimp cream rice')

Context: Four participants, who are old friends from the same junior high school, are at a restaurant in their neighborhood. Kaneko found *ebikuriimu raisu* ('shrimp cream rice') on the menu, which is nostalgic to them.

- 01 Koga: *are kyushoku igai de tabeta koto nai [yo.*
 '(I) haven't eaten one except at the school lunch.'
- 02 Kane: *[nai!*
 '(I) haven't'
- 03 Koga: *ebikuriimu raisu tte.*
 'shrimp-cream-rice'
- 04 Ogat: *un.*
 'yeah'
- 05 Kane: *dokoni ittara kuennoka tteyuu.*
 'where the heck can (we) eat (such food)?'
- 06 Hama: {laugh}
- 07 Koga: *ne.*
 'right'

- 08 Ogat: *a*
 'oh'
- 09 Koga: [youshoku nano? nannano mitaina.
 'Is it a western food? Or what?'
- 10 → Ogat: [ore tsukuttayo.
 'I made it'
- 11 Kane: __tsukutta hahahaha
 '(you) made it? hahaha'
- 12 Ogat: __tsukutta __tsukutta
 'I made it'
- 13 Kane: e. jibunde?
 'by yourself?'
- 14 Ogat: un.
 'yeah'
- 15 Kane: ♫jisakuka♫
 'self made'

The utterance with the overt first-person singular pronoun *ore* at line 10 shows disalignment considering the fact that other three participants moved forward to agree with the fact that the shrimp cream rice is rare up until Ogata says *a*. The token *a* is so-called a change of state token, which shows that the preceding inquiry was unexpected and has a shift in awareness (Hayashi and Hayano 2018). Ogata's utterance at line 10 preceded by a does not cooperate by facilitating the proposed activity or sequence, accepting the presuppositions and terms of the proposed action or activity, nor matching the formal design preference of the turn. In this sense, the overt first-person singular pronoun *ore* is in a disaligned utterance.

6. Discussion and Conclusion

By taking the sequential analytical perspective, the study found that the most frequent context they appear is when displaying (lack of) epistemic access to the target(s) in account for not being able to agree or for pursuing agreement. We have also seen some compositional features: they are all nominative and occur in a single unit. Furthermore, we have also seen that the type introduced in this study appears when the speaker or co-participant does not

align with the other's previous assertion. The analysis suggests that the usage reflects the nature of contingency of conversation. That is, the usages of overt first-person singular pronouns are attributed to co-participants' negotiation of their epistemic access to the target(s) and/or degree of alignment and affiliation to the previous assertions. We have seen that the co-participants participate in social action with the attention of others' epistemic and affective stance, and the overt first-person singular pronouns are deployed to convey the speaker's position with the effort of avoiding potential face-threatening. For example, when the speaker does not align with the co-participant's assertion, they demonstrate their epistemic access to the target with the overt first-person singular pronoun and account instead of directly saying "I don't agree with you" with the overt form. As such, the overt first-person singular pronouns are deployed in managing the relationship with co-participant over the course of interaction.

References (selected)

- Couper-Kuhlen, E. and Selting, M. 2017. *Interactional Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press
- Koiso, H., Amatani, H., Den, Y., Iseki, Y., Ishimoto, Y., Kashino, W., Kawabata, Y., Nishikawa, K., Tanaka, Y., Usuda, Y., and Watanabe, Y. 2022. "Design and Evaluation of the Corpus of Everyday Japanese Conversation," *Proceedings of LREC2022*, 5587-5594.
- Lee, D., and Yonezawa, Y. 2008. "The Role of the Overt Expression of First and Second Person Subject in Japanese." *Journal of Pragmatics* 40 (4): 733–67.
- Mori, J. 1999. *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese: Connective Expressions and Turn Construction*. John Benjamins Publishing Company.
- Ono, T., and Thompson, S. A. 2003. "Japanese (*w*)*atashi/ore/boku* I: They're Not Just Pronouns." *Cognitive Linguistics* 14 (4).
- Vatanen, A., Endo, T., and Yokomori, D. 2021. "Cross-Linguistic Investigation of Projection in Overlapping Agreements to Assertions: Stance-Taking as a Resource for Projection." *Discourse Processes* 58 (4): 308–27.

Appendix

The conversational data used in this study has been transcribed based on Jefferson (2004).

Colloquialization and genre variation: the case of the *let's* construction

Yoshikata Shibuya

Kanazawa University

<Abstract>

This study discusses the *let's* construction in English. The construction has been studied from a grammaticalization standpoint, where a comparison is often made with its ‘full’ form, the *let us* construction (e.g. Hopper and Traugott 2003: 10-13). The construction has also been approached from a colloquialization perspective (e.g. Leech *et al.* 2009: 240-241), the perspective taken in the present study. Based on the results of multiple statistical analyses performed on data from the Corpus of Historical American English, this study demonstrates the collocational and genre variations between the *let's* and *let us* constructions to argue that the former is not a mere informal variant of the latter.

Keywords: colloquialization, collexemes, genre variation, the *let's* construction, COHA

1. Introduction

This article discusses the *let's* construction as in *Let's go through the details, she says* (COHA, 2017, NEWS, *Los Angeles Times*). The *let's* construction has been given various names, including a “first-person imperative” (Quirk *et al.* 1985: 829), a “first-person plural imperative” (Leech *et al.* 2009: 240), and an “adhortative” (Hopper and Traugott 2003: 10). The *let's* construction is often compared to the *let* construction because of the formal and functional similarities, with the key grammatical difference between the two being that the *let* construction can be passivized as in *We were let go*, while the *let's* construction cannot (Hopper and Traugott 2003: 10). Another important aspect that has been noted in the literature is that the *let's* construction can be used in highly diverse ways. The various usage patterns found with this construction are discussed by Hopper and Traugott (2003: 11-13). In terms of grammaticalization, the following examples are given (Hopper and Traugott 2003:

10-11; notation *lets* without an apostrophe indicates that the subject is other than the first-person plural):

- (1) a. Lets give you a hand. (i.e. let me give you a hand)
- b. Let's you and I take 'em on for a set. (1929, Faulkner, *Sartoris* 111.186: OED let 14.a)
- c. Lets you and him fight.
- d. Lets you go first, then if we have any money left I'll go.
- e. Lets wash your hands. (Cole 1975: 268)
- f. Lets eat our liver now, Betty. (Cole 1975: 268)

While grammaticalization is undoubtedly a key notion in discussing the *let's* construction, the interest of the present study is to explore the construction from a colloquialization standpoint (see Section 4 for the sequential nature of grammaticalization and colloquialization). Colloquialization, or “the shift to a more speech-like style” (Leech *et al.* 2009: 239), is often described as a widespread ongoing phenomenon in modern English (e.g. Hundt and Mair 1999). For example, Leech *et al.* (2009) hypothesize that colloquialization is partly responsible for the increase in certain semi-modals such as *be going to*, *be supposed to*, *have to*, *need to*, and *want to* (section 5.2), in the progressive (chapter 6), and also for the changes in frequency in the decline of the *wh*-relatives and the corresponding rise of the *that*- and zero relatives (section 10.5.1). Leech *et al.* also discuss the *let's* construction from the perspective of colloquialization by exploring the use of *let's* and *let us* in American and British English from the early 1960s to the early 1990s. Using the Brown family corpora, they suggest that the increase in frequency of *let's* and the corresponding decrease in *let us*, especially in American English, is a manifestation of colloquialization (for details, see Leech *et al.* 2009: 240-241).

While Leech *et al.*'s study undoubtedly provides important insights into the ways in which colloquialization has influenced the development of the *let's* construction, there are some areas that lack clarity. That is to say, it is unclear how much statistical significance their argument has; much of their claim is based on frequency comparisons without drawing on advanced statistical methods. Their study also lacked reference to the collocation preferences of the *let's* construction. However, as argued in Construction Grammar (see e.g. Hilpert 2019),

it is critical to address which words are likely (or unlikely) to collocate with a given construction if one is to understand the construction in depth.

Against this background, the present study seeks to fill in some of the gaps left unaddressed in the work of Leech *et al.* More specifically, it aims to examine the colloquialization claimed to be occurring in the *let's* construction a) by using a larger data set than the one used by Leech *et al.*, b) using advanced quantitative corpus-linguistic methods, and c) investigating changes over a longer period of time than was studied by Leech *et al.* Taking the above three points into consideration, this study compares the *let's* and *let us* constructions and discusses their properties in terms of collocation and genre variation.

2. Methods

2.1. Data collection

Data were collected from the 2021 edition of the Corpus of Historical American English (COHA, Davies 2012). Five genres were examined in this study: TV/Movies (TVM), Fiction (FIC), Magazines (MAG), Newspapers (NEWS), and Non-Fiction Books (NFB). In COHA, TVM only contains data from the 1930s onward, which is why the present study examined the data from the 1930s to the 2010s. The COHA interface was used to collect data by searching for instances constituting the combinations of *let's* + a verb and *let us* + a verb. After manual cleaning of the data, the data set comprised 59,793 tokens of the *let's* construction and 8,141 tokens of the *let us* construction.

2.2. Research questions and analytical methods

As noted above, Leech *et al.* (2009) state that the frequency of *let's* increased while that of *let us* decreased, especially in American English. In response to this, the present study set the research questions (RQs) as follows:

- RQ1. Can the increase in the frequency of *let's* and the decrease in the frequency of *let us* be confirmed in the COHA data?
- RQ2. Is there any difference between the *let's* and *let us* constructions in terms of their collocational preferences? If so, how do they differ?
- RQ3. Do the *let's* and *let us* constructions differ in terms of their relationship with genre? If so, how do they differ?

In addressing RQ1, a correlation test (Kendall's Rank Correlation) was used to evaluate whether the diachronic patterns observed in the COHA data were significantly correlated with time. If RQ1 is answered in the affirmative, we could conclude that Leech *et al.*'s (2009) "colloquialization hypothesis" (p. 240) is justified. If RQ1 is answered in the negative, we could conclude that Leech *et al.*'s hypothesis is probably in need of revision. Nevertheless, one must keep in mind that an increase in *let's* and a decrease in *let us* cannot necessarily be taken as evidence of colloquialization, because, as discussed in grammaticalization theory, the two constructions do not always allow alternation (cf. also Section 1). Furthermore, changes in the frequency of a construction are also affected by the changes in the frequency of the words that occur in it. The results obtained through RQ1 should thus be treated with caution. In order to go one step further than discussing the frequency of *let's* and *let us*, one can examine their collocational and genre preferences. Toward this end, RQ2 and RQ3 were set up. The theoretical motivation for RQ2 is the "Principle of No Synonymy" (Goldberg 1995: 67), which suggests that variants that are formally different should also be functionally different. If the *let's* and *let us* constructions show a substantial variance with respect to their collocational preferences, it can be inferred that the former cannot be a mere informal variant of the latter. Conversely, if the *let's* and *let us* constructions do show a strong similarity, then it may be possible that the former can be always used as an informal paraphrase of the latter. The focus of RQ3 is on the relationship between genres. Leech *et al.* did mention the genre variations, but, as noted above, their study did not have the level of statistical rigor that the present study has. In addressing RQ2, distinctive collexeme analysis (DCA; Gries and Stefanowitsch 2004) was used. Although DCA is a highly effective method for identifying the differences between the two constructions in terms of their collocational preferences, it is a method that was originally designed to identify collocational preferences in alternating constructions. The goal of addressing RQ3 was instead to capture the dynamic nature of colloquialization by applying multiple distinctive collexeme analysis (MDCA; Gries and Stefanowitsch 2004) to obtain input for correspondence analysis (CA; Desagulier 2014), which was used here to clarify the diachronic relationship between the genres examined. In this study, the analytical methods were carried out using R (R Core Team 2022) with collostructional analysis performed using Coll.analysis 4.0 (Gries 2022). (The following sections will discuss the results of the analyses. Note that in the interest of space the plots and

tables representing the results will not be shown below. The interested reader is referred to the material that I used at my presentation.)

3. Results and discussion

Starting with RQ1, when a Kendall's test was performed for the *let's* construction without taking into consideration cross-genre variations, no statistically significant increase was found ($p = 0.2595$). If the differences in genres were taken into account, there was still no evidence of a statistically significant increase in FIC ($p = 0.2595$), whereas the other four genres did indicate a statistically significant increase ($p < 0.05$). As for the *let us* construction, a statistically significant decrease was confirmed in all the data sets ($p < 0.05$). Based on these results, the answer to RQ1 can be a partial no, meaning that Leech *et al.*'s (2009) colloquialization hypothesis may be in need of revision.

Turning to RQ2, the most common verbs in the *let us* construction were identified to be *assume*, *be*, *consider*, *hope*, *know*, and *say*, while the *let's* construction was found to be very strongly associated with *face*, *get*, *go*, *have*, and *see*. DCA also detected an inter-genre variation. In the *let us* construction, thinking verbs such as *consider*, *assume*, *suppose* were prominent in NFB, while *know* was overwhelmingly dominant in other genres. In the *let's* construction, *see* and *face* were also found in NEWS, in addition to high-frequency verbs that were widely prominent in other genres, including *go* and *get*. The results also provided insights into diachronic variations. For example, in the *let us* construction, *say* was the most strongly attracted collexeme in MAG in the 1930s and 1940s, while, in the same genre, *know* showed an increase in prominence, as in other genres. As for the *let's* construction, *face* was the most strongly attracted collexeme in NEWS from the 1960s through the 1980s. Based on the results, the answer to RQ2 would be that there are indeed differences between the two constructions in their collocational preferences. The results indicate that the *let's* construction cannot simply be considered an informal contracted form of the *let us* construction, because they are associated with a different set of collexemes. Based on Biber *et al.*'s (1999: section 5.2) classification of lexical verbs, the *let us* construction is shown to be strongly associated with mental verbs, while the *let's* construction with activity verbs. The distribution of collexemes also includes variation with respect to genres and time periods, suggesting the need for their close scrutiny.

Finally, regarding RQ3, starting with the *let's* construction, MDCA showed that verbs of action such as *get*, *go*, *check*, *move*, *walk*, and *sit*, were most commonly found in FIC and TVM, while verbs of thought such as *assume*, *hope*, *think*, and *consider*, were particularly prominent in MAG, NEWS, and NFB. CA, which was performed subsequent to MDCA from which the input was obtained (see Section 2.2), then revealed that FIC and TVM were the most proximate in terms of collexemes. The genre that was most likely to be found around FIC and TVM was MAG. NFB and NEWS were seen as quite different from the speech-like genres such as FIC, TVM, and MAG. However, in the 1970s and especially since the 1990s, NEWS showed an approach to the speech-like genres, while NFB maintained a distance from them. The results indicate that in general, the types of verbs that co-occur with *let's* became more and more similar to speech-like style as time went by. As for the *let us* construction, MDCA showed that verbs of thought such as *recognize*, *hope*, and *remember*, were, again, prominent in MAG, NEWS, and NFB. A key difference between the *let us* and *let's* constructions was the prominence of *know* and *help* in TVM and the presence of *hear*, *talk*, and *speak* in FIC. CA showed that TVM and FIC were slightly distant from each other in the 1930s and 1940s. NEWS, MAG, and NFB also kept their respective distances from each other. However, after the 1950s, the distance between TVM and FIC began to become smaller, while MAG moved closer to TVM and FIC, especially after the 1990s, but it separated again from the speech-like cluster consisting of TVM and FIC in the 2010s. As for NFB and NEWS, they continued to maintain their distinctiveness. The answer to RQ3 is hence that the two constructions differ in their interaction with genres. Colloquialization seems to be occurring in both constructions, with respect to the role of genres. TVM is the text type considered closest to the spoken language in the COHA data. The approach of FIC and MAG to TVM observed in both constructions is indicative of the fact that these constructions are undergoing colloquialization. That is, they are becoming increasingly similar to spoken-style. In the literature, the written style of English is said to be becoming more and more similar to spoken language. Leech *et al.* (2009: 239), for example, mention that in modern English, language in NEWS has come to be similar to the spoken style. Based on the results of the present study, this is considered partially true, because in the COHA data it was only in the *let's* construction that NEWS showed an approach to the speech-like genres such as TVM and FIC. Biber (2003: 169) also notes that the language used in fiction is becoming more similar to that

of spoken English. Biber's observation is consistent with the present study. With respect to collexemes, colloquialization certainly seems to be taking place in both constructions.

4. General discussion and conclusion

What conclusions can be drawn from the results reported in Section 3, taken together? Most simply put, the *let's* and *let us* constructions are two different ‘constructions’ (in the sense of the term as characterized in Construction Grammar; see e.g. Hilpert 2019: section 1.2), and it is not the case that *let's* is merely an informal variant of *let us*. Of course, as mentioned in Section 1, the fact that they are separate constructions has long and widely been recognized in grammaticalization research. However, it should be noted that while grammaticalization theory offered irregular patterns as proof (see Section 1), the present study compared the ‘regular’ patterns of *let's* and *let us* to reach the conclusion.

Leech *et al.* (2009: 237-240) mention that grammaticalization is more of a psychologically motivated language-internal process in that it concerns the interface between the lexicon and the grammar, while colloquialization is discourse-pragmatic in nature in that it is a phenomenon concerned with social influences in language change. In the present study, the *let's* construction was taken for a case study, and colloquialization was discussed in terms of frequency, collexemes, and genre in which the construction is used. Importantly, as stated by Leech *et al.* (2009: 241), grammaticalization and colloquialization can be described as “sequential” processes, which suggests that an integrated analysis of the two could lead to a Cognitive Sociolinguistic study (e.g. Geeraerts *et al.* 2010). In any case, this article only provides a preliminary investigation of not only the relationship between the *let's* and *let us* constructions, but also how the concept of colloquialization itself should be understood. A more detailed study would require tackling a variety of challenges, including statistical hypothesis testing, comparisons among varieties of English, more detailed register/ genre analysis, and diachronic studies over longer time frames.

References

- Biber, D. 2003. “Compressed Noun-phrase Structures in Newspaper Discourse: The Competing Demands of Popularization vs. Economy.” In J. Aitchison and D.M. Lewis (eds.) *New Media Language*, 169-181. London: Routledge.

- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Cole, P. 1975. “The Synchronic and Diachronic Status of Conversational Implicature.” In P. Cole and J.L. Morgan (eds.) *Speech Acts*, 257-288. New York: Academic Press.
- Davies, M. 2012. “Expanding Horizons in Historical Linguistics with the 400-million Word Corpus of Historical American English.” *Corpora* 7(2), 121-157.
- Desagulier, G. 2014. “Visualizing Distances in a Set of Near-synonyms: *Rather*, *Quite*, *Fairly*, and *Pretty*.” In D. Glynn and J.A. Robinson (eds.) *Corpus Methods for Semantics: Quantitative Studies in Polysemy and Synonymy*, 145-178. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Geeraerts, D., G. Kristiansen and Y. Peirsman (eds.) 2010. *Advances in Cognitive Sociolinguistics*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Goldberg, A.E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: Chicago University Press.
- Gries, S.T. 2022. Coll.analysis 4.0. A script for R to compute perform collostructional analyses.
- Gries, S.T. and A. Stefanowitsch. 2004. “Extending Collostructional Analysis: A Corpus-based Perspectives on ‘Alternations’.” *International Journal of Corpus Linguistics* 9(1), 97-129.
- Hilpert, M. 2019. *Construction Grammar and its Application to English*, 2nd ed. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Hopper, P.J. and E.C. Traugott. 2003. *Grammaticalization*, 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hundt, M. and C. Mair. 1999. “‘Agile’ and ‘Uptight’ Genres: The Corpus-based Approach to Language Change in Progress.” *International Journal of Corpus Linguistics* 4(2), 221-242.
- Leech, G., M. Hundt, C. Mair and N. Smith. 2009. *Change in Contemporary English: A Grammatical Study*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.
- R Core Team. 2022. *R: A Language and Environment for Statistical Computing*. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. <https://www.R-project.org/>.

Corpus Analysis of Japanese and Hungarian Negative Emotive
Words from a Discourse Interactional Perspective

Martina Katalin Szabó^{1,2,3}, Naoki Otani¹

¹Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo, Japan

²Institute of Informatics, University of Szeged, Szeged, Hungary

³Computational Social Science – Research Center for Educational and Network Studies (CSS-RECENS), Centre
for Social Sciences, Budapest, Hungary

Szabo.Martina@tk.hu

otani@tufs.ac.jp

<Abstract>

The main goal of this paper is to uncover the wide range of different uses and pragmatic functions of the so-called *Negative Emotive Words* (henceforth NEWs) based on the corpus data of two languages belonging to different cultures, namely Hungarian and Japanese. *NEWs* refer to words having a prior negative semantic content, but they can lose it partly or totally in certain use cases, e.g. En. *terribly nice* or *the party was terrific!* (Szabo and Bibok 2019). To that end, two NEWs have been selected: the Hungarian *durva* (lit.) ‘harsh’ and the Japanese やばい (*yabai*) (lit.) ‘dangerous’. We analyze word-form variations of the two words, including *durván* of *durva* and *yabe* and *yabaku* of *yabai* (Putri 2021). Our investigation demonstrated similarities and differences between the two words, identifying several features about the Hungarian and Japanese NEWs that had not been known so far.

Keywords: Hungarian, Japanese, Negative emotive words, Politeness Theory, Intensifiers, Interjections

1. Introduction

This paper discusses Negative Emotive Words (henceforth NEWs) that have a prior negative semantic content (on their own, i.e. without context). It is known that these words often lose the negative semantic content partly or entirely in certain use cases, e.g. En. *terribly nice* or *the party was terrific!* (Szabo and Bibok 2019). In the literature NEWs are mainly discussed within the group of intensifiers. However, they can have several other meanings and functions as well (Szabó et al. 2022). For instance, they may express a positive evaluation or the surprise of the speaker, and they

may also be used as an interjection. In this paper we attempt to discover the range of different uses and pragmatic functions of NEWs in Hungarian and Japanese, on the basis of a corpus analysis. For the investigation, two NEWs have been selected: the Hungarian *durva* (lit.) ‘harsh’ and the Japanese やばい (*yabai*) (lit.) ‘dangerous’. We also analyze word-form variations of the NEWs in question, such as *durván* of *durva* and *yabe* and *yabaku* of *yabai* (Putri 2021).

The paper is structured as follows: First, we briefly discuss the relevant literature on the examination of NEWs, with special regard to studies dealing with NEWs in the Hungarian and Japanese languages. Second, we present the corpus of the analysis along with the methodology of the corpus processing and annotation procedure. Third, we show the basic data of the annotation, and the results of the manual analyses. Fourth, we discuss the results concerning the Hungarian and the Japanese data, and then, from a comparative perspective. Throughout the text, some observations are made with corpus examples. Lastly, we summarize the main findings of the research work, and then state our intentions on plans for future study.

2. Literature review

Despite the fact that more and more authors have been investigating NEWs (e.g. Dragut and Fellbaum 2014; Jing-Schmidt 2007; Laczkó 2007; Paradis 2001, 2008; Szabó and Bibok 2019; Szabó et al. 2022; Wierzbicka 2002, among others), the authors who focus on functions of NEWs other than intensification is just a handful. For instance, as far as we are aware, only Andor (2011), Szabó (2018), Szabó and Bibok (2019) and Szabó et al. (2022) discuss the phenomenon when a NEW expresses a positive evaluation of the speaker towards the given information e.g. *brutális alaplap* (lit. ‘brutal motherboard’—‘high quality motherboard’) (authors call this usecase *polarity shift*). In addition to the intensifier and polarity shifting functions, NEWs may have some other pragmatic function, e.g. in a certain context they express the surprise of the speaker or are used as an interjection (see above, Section 1). However, we are not aware of any paper that systematically scrutinizes all these functions and uses of NEWs based on a large language dataset.

There are some studies that analyze the phenomenon in the Hungarian language. They mainly discuss the issue from the viewpoint of semantic development of NEWs over time (e.g. Andor 2017; Varga 2019). Regarding specifically the word *durva* in the Hungarian language, to the best of our knowledge, there is only one paper (Andor 2011) that dealt specifically with this NEW, and another that examined this NEW together with other NEWs (Szabó et al. 2022).

As for Japanese, most of the papers discussing NEWs focus on their historical development, analyze their acceptability by Japanese speaker groups, or just take note of them as an existing phenomenon in the Japanese

language, which is especially popular in the language of the younger generation. Some of these papers focus specifically on the NEW *yabai* (e.g. Sano 2005; Konno 2015; Putri 2021).

3. The corpus and the methodology of the analysis

For the Hungarian cases, we analyzed the data of HuTongue Corpus, consisting of spontaneous speech texts (Vincze et al. 2021). The corpus consists of 1,149,457 tokens (without punctuation). For the Japanese cases, the Corpus of Everyday Japanese Conversation (CEJC corpus, Koiso et al., 2018) was applied, consisting of approximately 2,400,000 tokens. All occurrences of the NEWs in question were filtered out, and we annotated different syntactic, semantic and pragmatic features of NEWs.

As for syntactic features, we decided whether the NEW in the given example was an adjective, an adverb or an interjection, i.e. they constituted an utterance by themselves (Ameka 1992; Norrick 2009). Regarding semantics, we annotated evaluative semantic content, i.e. how the speaker evaluated what he or she said. There were three options in this case, namely positive, negative or neutral. We shall refer to this semantic feature here by the term *sentiment* from the research field of computational linguistics instead of a more general linguistic term polarity.¹ Besides sentiment, we annotated other semantic features, such as the exact meaning and function of the given NEW. We annotated three types: literal or figurative sense, intensifier function and emotive usage. In the latter case, the original negative semantic content is already bleached and the NEW expresses feelings or impressions of the speaker about the given piece of information, e.g. *A parti óriilet volt!* ‘The party was crazy!’. Then, we scrutinized all the occurrences from a pragmatics point of view. A study that systematically analyzes NEWs from a pragmatic viewpoint was not been conducted prior to the current analysis, so we did not have any pragmatic systematization that we could rely on. Thus, we referred to some pragmatic papers on interaction, with special regard to the Framework of Politeness Theory² (Quirk et al. 1985; Östman 1995; Kockelman 2003; Kádár 2017). This part of our analysis was basically exploratory; we investigated the range of pragmatic functions such as agreement and disagreement, calling someone’s attention, a compliment, an evidential marker, an attention marker, etc. (Fraser 2009).

4. Results of the analysis

Firstly, let us review the Hungarian results. The raw frequencies of each form were the following: *dúrva*: 213 (0.0185%) and *dúrván*: 44 (0.0038%). Surprisingly, *dúrva* and *dúrván* have completely different features in the Hungarian corpus. The main function of *dúrva* is interjection (42.77%) and it does not have an intensifier function at all. Then, both *dúrva* and *dúrván* mostly have a positive or neutral meaning. In the case of *dúrva*, it accounts for 69.64% all together, while *dúrván* accounts for 62.92% of the total.

Durva has some specific pragmatic function in almost half the cases (47%). For instance, it occurs in an agreeing utterance, expressing agreement and support toward the speaker (1a), or functions as an attention marker indicating that the listener can understand and follow what was said (1b) (Fraser 2009):

- (1) a. –Nem tudtam jobbra fordítani a fejemet. Az nagyon szar volt. ‘I couldn’t turn my head to the right. That was really shit.’

–**Durva.** ‘Crazy.’

b. –Ki a „hedonista”? ‘Who is the „hedonist”?’

–[...]

–Habzsolja az életet. ‘The one who really enjoys life.’

–Habzsolja az életet? **Durva.** ‘Really enjoys life? **Ok / I see.**’

In contrast to *durva*, *durván* has an intensifier function in most cases (48.14%) and the category “emotive” is less represented here. *Durván* basically has no special pragmatic function, with two exceptions. When they do, they occur in an agreeing, supporting reply or they function as an evidential marker. For the latter, see (2) below.

- (2) Hát igen, ez lenne az alap, csak ez Magyarországon már luxusnak számít, **durván**. ‘Well yes, it should be a basic thing but in Hungary it is treated as some kind of luxury, **really**’

As for Japanese, the raw frequencies of each form were the following: *yabai*: 609 (0.025%), *yabe*: 37 (0.0015%) and *yabaku*: 57 (0.0024%). The details of the corpus investigation are shown in the table below:

	adjective	adverb	interjection	noun	total
<i>yabai</i>	224	0	377	8	609
<i>yabaku</i>	2	32	23	0	57
<i>yabe</i>	0	0	32	0	32
total	226	32	432	8	698

The three forms *yabai*, *yabaku* and *yabe* appear 698 times in total (*yabai* 609 times, *yabaku* 57 times and *yabe* 32 times). They show interesting distribution as to their parts of speech: though *yabai* and *yabe* is etymologically

adjectives and *yabaku* is an adverbial form of *yabai*, 62% of the three forms are used as interjections. That is, they do not modify anything. Rather, they show subjective feelings by the speakers.

Likewise, we found the interesting behaviors as to the sentiment features. Though *yabai* is originally related to negative values, reversal of polarity is observed: 15% of the three forms expresses positive evaluation. However, though the polarity of *yabai* is somehow weakened in some examples, Japanese *yabai* seems to hold either positive or negative evaluation at least to some extent. So, even if it intensifies the state illustrated by the modified nouns or verbs, *yabai* is not a pure intensifier; rather, it always includes the speakers' subjective evaluation to the modified objects.

5. Discussion

As we have seen, our findings identified several features on the frequency distribution of each wordform and their functions. In addition, differences in the frequency distribution of these meanings and functions of both the Hungarian and Japanese NEWs were noted.

Regarding the Hungarian data, we found that the wordform without a suffix, i.e. *durva* is represented in our corpus approximately five times more often than the suffixed form, i.e. *durván*. We also saw that *durva* and *durván* have markedly different features and functions. The main function of *durva* is interjection and this NEW does not have an intensifier function in the corpus at all. Then, in contrast to *durva*, *durván* does not occur as an interjection in the corpus at all. Our findings also showed that both *durva* and *durván* have a positive or neutral meaning in most cases. In the latter case, namely when the given NEW is neutral, it expresses the extreme nature of the topic or the surprise of the speaker. We think that the fact that the analyzed words are positive or neutral in most cases reflects the desemantization of these NEWs, i.e. their prior negative semantic content has already faded a lot.³ We also learned that *durva* – in contrast with *durván* – usually has some specific pragmatic function and it is often used as a positive politeness marker, i.e. expressing agreement and support towards the speaker, as well as an attention marker. Based on the markedly different semantic features and syntactic patterning, we argue that both wordforms in question are in an advanced state of semantic-pragmatic development. However, this development has not led to the same result, i.e. exactly the same semantic-pragmatic function.

Regarding the Japanese data, our discussion can be summarized as follows: First, in the investigation, Japanese *yabai* is annotated based on the criteria that was used for the analysis of Hungarian *durva*. Though these criteria are effective for classifying various examples of *yabai* to some extent, it is necessary to focus on other features as well in order to capture the characteristics of *yabai* in more depth. Second, basically, the use of *yabai* can be classified into the two types. The first type shows the state of nouns or clauses such as “it is *yabai*” or “He is *yabai*.” The second shows the subjective emotion of speakers such as “I feel ‘*yabai*’ to something”. The former can be labeled

as “objective use” and tends to be realized as adjectives and adverbs, while the latter can be labeled as “subjective use” and tends to be realized as interjections. Third, positive evaluation of *yabai* tends to be associated with certain contexts, such as eating something or complimenting a dog. Fourth, the various pragmatic use of *yabai* might emerge from lexicalization of contextual meanings. When *yabai* co-occurs with certain phrase such as *yabai doushiyou* or *yabai yabai yabai*, its contextual meanings are entrenched in the lexical meaning of *yabai*, and the pragmatic/contextual meanings become a part of lexical meaning. Finally, a reduplication of *yabai* tends to have pragmatic functions. For example, *Yabai, yabai, yabai* has a function to ask for suggestions, meaning “what should I do.”

As for the features of NEWs from a comparative linguistic perspective, our study showed that NEWs are able to express a range of speaker’s subjective and intersubjective stances in both examined languages, and they should be viewed as noteworthy markers of positive politeness (despite this, it is not widely discussed topic in the literature). We also observed signs of semantic-pragmatic development (bleaching the prior negative semantic content) of NEWs, as well as the differences in the progress and results of this process. In addition, the change of word classes was observed in both datasets. For instance, NEWs can be used as interjections in both languages, indicating the speaker’s emotion, but Japanese *yabai* and Hungarian *durván* are mainly used as intensifiers. As far as the main differences are concerned, as we mentioned, *durvá* and *durván* are mostly neutral but *yabai* is negative in most cases. Then, *yabai* tends to be used as an expletive while Hungarian *durván* tends to be used as an intensifier.

6. Summary

Here, we analyzed the wide range of different usage and functions of Negative Emotive Words (NEWs) based on corpus data of the Hungarian and Japanese languages. Our findings uncovered several features of the Hungarian and Japanese NEWs (along with the similarities and differences between each examined wordform) that had not encountered so far, as well as similarities and differences between the two languages. Semantic bleaching of meaning, reversal and neutralization of negative semantic content, along with the change of word classes (e.g. interjections and intensifiers) were observed in both languages. Closely connected to all of these, NEWs are able to express a range of speaker’s subjective and intersubjective stances. At the same time, identified semantic-pragmatic functions and syntactic patterning highlighted the progress of these NEWs in the semantic-pragmatic development at different levels. What is more, this development has not led to the same result, even within each language.

In the future, we intend to carry out a more detailed analysis of the pragmatic features of NEWs. In the study, we plan to especially focus on the semantic and pragmatic development of NEWs over time, utilizing historical corpora and corpora of other domains as well.

¹ In pragmatics, polarity is, in essence, the relation between semantic opposites, such as *hot-cold* (Israel 2004). Since we are interested in the evaluative semantic content, the term sentiment—referring to the evaluative meaning specifically—is more accurate and appropriate here.

² A speech act can threaten the other's "negative face," their wish to be left in peace, or "positive face," their wish to be appreciated (Kádár 2017). Politeness comes into existence with the other's face needs in mind: In order to ameliorate the effect of a face threatening act, the speaker will make use of negative politeness strategies. What is more, positive politeness strategies express friendliness and solidarity (Daly et al. 2004).

³ NEWs proceed through a desemantization procedure over time, during which they gradually lose their lexical meaning (for more details, see Szabó et al. 2022).

References

- Ameka, F. 1992. "Interjections: the Universal yet Neglected Part of Speech." *Journal of Pragmatics* 18, 101-118.
- Andor, J. 2011. "De durva ez a tema! – Megfigyelések a melléknévi polaritásváltásról." [This is a Damn Topic! – Observations on Polarity Changing of Adjectives] *Hungarológiai Évkönyv* 12., 33-42.
- Andor, J. 2017. "A lexikai fokozás polaritásváltásairól." [On the Polarity Change of Lexical Intensification] In Gecső T. and Szabó M. (eds.) *Az ellenét nyelvi és norverbális kifejezésének lehetőségei*, 11-17. Székesfehérvár–Budapest: Kodolányi János Főiskola–Tinta Könyvkiadó.
- Daly, N., Holmes, J., Newton, J., Stubbe, M. 2004. "Expletives as Solidarity Signals in FTAs on the Factory Floor." *Journal of Pragmatics* 36(5), 945-964.
- Dragut, E., Fellbaum, C. 2014. "The Role of Adverbs in Sentiment Analysis." In *Frame Semantics in NLP: A Workshop in Honor of Chuck Fillmore*, 38-41. ACL, Baltimore, MD.
- Fraser, B. 2009. "An Account of Discourse Markers." *International review of Pragmatics*, 1(2), 293-320.
- Israel, M. 2004. "The Pragmatics of Polarity." In Horn, L., Ward, G. (eds.) *The Handbook of Pragmatics*, 701-723. Oxford: Blackwell.
- Jing-Schmidt, Z. 2007. "Negativity Bias in Language: A Cognitive-Affective Model of Emotive Intensifiers." *Cognitive Linguistics* 18(3), 417-443.
- Fraser, B. 2009. "An Account of Discourse Markers." *International Review of Pragmatics* 1(2), 293-320.
- Kádár, D.Z. 2017. Politeness in Pragmatics. In *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*.
- Kockelman, P. 2003. "The Meanings of Interjections in Q'eqchi' Maya: from Emotive Reaction to Social and Discursive Action." *Current Anthropology* 44, 467-490.
- Koiso, H., Den, Y., Iseki, Y., Kashino, W., Kawabata, Y., Nishikawa, K. Y., ... & Usuda, Y. (2018). Construction of the Corpus of Everyday Japanese Conversation: An Interim Report. In *Proceedings of the Eleventh International Conference on Language Resources and Evaluation* (LREC 2018), 4259-4264.
- Konno, H. 2015. "The Grammatical Significance of Private Expression and its Implications for the Three-Tier Model of Language Use." *English Linguistics* 32(1), 139-155.
- Laczkó M. 2007. "Napjaink tizenévesinek beszéde szóhasználati jellemzők alapján." [The Speech of Today's Teenagers Based on Word Usage Characteristics] *Magyar Nyelvőr* 131(2), 173-184.
- Norrick, N. R. 2009. "Interjections as Pragmatic Markers." *Journal of Pragmatics* 41(5), 866-891.
- Östman, J.-O. 1995. "Pragmatic Particles Twenty Years After." In Wärvik, B., Tanskanen, S.-K., Hiltunen, R. (eds.) *Organization in Discourse. Proceedings from the Turku Conference*, 95-108. University of Turku.
- Paradis, C. 2001. "Adjectives and Boundedness." *Cognitive Linguistics* 12(1), 47-65. <https://doi.org/10.1515/cogl.12.1.47>
- Paradis, C. 2008. "Configurations, Construals and Change: Expressions of Degree." *English Language and Linguistics* 12(2), 317-343. <https://doi.org/10.1017/S1360674308002645>
- Partington, A. 1993. "Corpus Evidence of Language Change: The Case of the Intensifier." In Baker, M., Francis, G., Tognini-Bonelli, E. (eds.), *Text and Technology: In Honour of John Sinclair*, 177-192. Amsterdam: John Benjamins.
- Putri, A.A., Haristiani, N. 2021. "Register Analysis on High School Students' Language in Japanese Manga and Anime." In *Fifth International Conference on Language, Literature, Culture, and Education (ICOLLITE 2021)*, 104-111. Atlantis Press.

-
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., Svartvik, J. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Sano, S. 2005. "On the Positive Meaning of the Adjective *yabai* in Japanese." *Sophia Linguistica: Working Papers in Linguistics* (53), 109-130.
- Shioda, T. 2003. "Attributive Variation in Popular New Expressions and the Media: '-tte-iuka', 'yabaku-nai'? From the Nationwide Survey on Linguistic Change in the Japanese Language in the Recent Years (1)." *The NHK Monthly Report on Broadcast Research* (53-4), 12-33.
- Sinclair, J.M. (ed). 1987. *Looking up*. London: Collins COBUILD.
- Sinclair, J.M. 1991. *Corpus, Concordance, Collocation*. Oxford: Oxford University Press.
- Szabó M.K. 2018. *A szentimentétek módosulásának a problémája a magyar nyelvű szövegek szentimentelemezésében, különös tekintettel az értékvesztésre és az értékváltásra*. [Problems of Sentiment Analysis on Hungarian Texts, with Particular Regard to Polarity Loss and Polarity Shift] PhD Thesis. University of Szeged, Doctoral School in Linguistics, Ph.D. Programme in Hungarian Linguistics, Szeged, Hungary. June 2018. <https://doi.org/10.14232/phd.9976>
- Szabó M.K., Bibok K. 2019. "Értékvesztésre és értékváltásra képes lexémák újabb vizsgálata." [A novel Analysis of the Elements that Can Undergo a Loss of Polarity and Polarity Shift] *Argumentum* 15, 639-649.
- Szabó M.K., Vincze V., Bibok K. 2022. "“Thank You for the Terrific Party!” – An Analysis of Hungarian Negative Emotive Words". *Corpus Linguistics and Linguistic Theory*. <https://doi.org/10.1515/cllt-2022-0013>. In press.
- Szabó M.K., Dam B., Vincze V. 2023. *On the Semantic Development of Negative Emotive Intensifiers in Hungarian News*. Manuscript.
- Varga M. 2019. *Középmagyar kori világi szövegek nyelvtörténeti vizsgálata, különös tekintettel a szövegtani és pragmatikai sajátosságokra*. [A Historical Linguistic Investigation of Middle Hungarian Secular Texts: Textual and Pragmatic Aspects] PhD Thesis. ELTE, Nyelvtudományi Doktori Iskola.
- Vincze V., Üveges I., Szabó M.K., Takács K. 2021. "A magyar beszélt és írott nyelv különböző korpuszainak morfológiai és szófaji vizsgálata." [Morphological and Phonological Examination of Various Corpora of the Hungarian Spoken and Written Language] In Berend, G., Gosztolya, G., Vincze, V. (eds.) *XVII. Magyar Számítógépes Nyelvészeti Konferencia* 169-182. Szegedi Tudományegyetem, Informatikai Intézet, Szeged. ISBN 9789633067819
- Wierzbicka, A. 2002. "Australian Cultural Scripts – Bloody Revisited." *Journal of Pragmatics* 34(9), 1167-1209.

Historical Pragmatics using State-Space Models¹

Akitaka Yamada

a.yamada.hmt@osaka-u.ac.jp

Abstract. In Historical Pragmatics, we cannot easily rely on contemporary speakers' introspections. Therefore, quantitative examination of frequency tables assumes particular importance. A commonly used statistical technique is Chi-square analysis. However, this analysis has a number of limitations that make it unsuitable for investigating chronological time series data. Moreover, too much dependency on Chi-square analysis may result in biased and/or misleading interpretations. To overcome these shortcomings, this paper recommends the use of State-Space Models, more specifically, the Bayesian implementation of Dynamic Generalized Mixed-Effects Models (DGMM). The advantages of these models are demonstrated in two case studies that examine the variations found in Japanese honorific constructions.

Keywords: Chi-square analysis, State-Space Model, Historical Pragmatics, honorifics

1. Introduction: methodological issues in Historical Pragmatics

Historical Pragmatics is the study of language use in the past, and its development over time — although there are differences in definition between the Anglo-American tradition and the Continental European style (Goossen 1995; Jucker 2008; Taavitsainen and Jucker 2010). From a methodological perspective, one controversy is whether to study a language by relying solely on spoken data. In recent literature, however, the clear-cut dichotomy between spoken and written language has been challenged, and instead their continuity has been emphasized (Jucker 2008; Taavitsainen and Jucker 2010). Under this reassessment, each piece of writing is now seen as a mixture of different modes of language, thus laying a theoretical foundation for justifying the use of written texts in Historical Pragmatics.

However, this does not mean that all methodological issues are settled. A lingering problem for Historical Pragmatics which, in my view, has not received enough attention is the choice of quantitative methods. Of course, quantitative studies are not the only research method, and it is not my intent to promote one method over another. But in most cases, practitioners of Historical Pragmatics have no choice but to develop their arguments by relying on the frequency of constructions of their interest; digital corpus archives make this task easy. No one would deny that statistical methods are useful for fine-grained investigations. Nonetheless, when compared to other fields of humanities or social sciences (such as economics, psychology, and sociology), advanced statistical methods have not been as widely used. As a result, simplistic statistical models are blindly utilized to the extent that interpreting the data becomes biased or even misleading. One such practice is the use of Chi-square analysis.

The purpose of this present study is, therefore, to introduce an underused and advanced

¹ There was a typo in the title included in the program: *Space-State → State-Space.

	1901-1950	1951-2000
Construction A	20	35
Construction B	44	32

Table 1 A hypothetical classification table for Chi-square analysis.

statistical model, the State-Space Model, and to embed Historical Pragmatics into the larger context of Digital Humanities (Blei and Lafferty 2006, McCart 2014). After reviewing the limitations of descriptive and inferential statistics using Chi-square analysis, this paper presents the basics of the State-Space Model, and demonstrates how the analysis is applied to chronological data by taking two recent studies of honorifics for our primary examples.

2. Common practices in the literature

2.1. Descriptive statistics

A departure-point of a corpus/philological study is to create a table summarizing the frequency of the observed constructions (see for example Table 1). It is possible to develop an analysis that directly interprets the numbers in the table, but this line of descriptive approach has several disadvantages. First, the interpretation may depend too much on the researcher's subjective impression. Second, the table is just a sample of a larger population, the understanding of which is, in most cases, the ultimate goal of linguistic inquiry.

2.2. Inferential statistics: Chi-square analysis

To overcome these problems, inferential statistics has been developed, which allows us to make an inference about the structure of the population in a less subjective manner. For example, Chi-square analysis can be applied to the data in Table 1 ($\chi^2 = 5.0897$, $df = 1$, $p\text{-value} = 0.02407$). Under the commonly assumed threshold of $\alpha = 0.01$, it would be concluded that the null hypothesis that there is no difference between the two time periods is maintained. In such a setting, one cannot argue for the presence of a language change. Note that, as an elaborate modification, Fisher's exact test is utilized for smaller sample sizes (aka Collostructional Analysis, Gries and Stefanowitsch 2004; Stefanowitsch 2013), but it is essentially the same as Chi-square analysis in that it applies to data with a discrete classification table.

As common as these tests are, they are not suitable for diachronic corpus studies for at least the following reasons. First, for Chi-square analysis, we need to categorize the otherwise 'continuous' time variables into an arbitrary 'discrete' set of time periods. In Table 1, the samples are classified as either occurring before 1951 or after 1950, but this cut-off point is completely arbitrary, and the results differ under different cut-off points. For example, by using two more cut-off points, one could create the results seen in Table 2. Then, when Chi-square analysis is applied to these numbers, a very small $p\text{-value}$ is obtained ($\chi^2 = 16.999$, $df = 3$, $p\text{-value} = 0.0007$), so unlike in our previous table, we could conclude that there was a change in language use, despite the fact that the data itself remains unchanged.

Second, in Chi-square analysis, independent fixed effects variables are not incorporated. The lack of explicit manipulation of independent/confounding variables can result in a biased interpretation. For example, suppose that Construction A is favored in the past tense

	1901-1925	1926-1950	1951-1975	1976-2000
Construction A	10	10	10	25
Construction B	22	22	22	10

Table 2 Using different cut-off points for the data in Table 1.

	1901-1950	1951-2000
Construction A	200	350
Construction B	440	320

Table 3 A classification table with a larger sample size.

throughout the 20th century, and the relatively large number of uses of Construction A during 1976–2000 in Table 2 is, in fact, not attributed to language change, but to the fact that there are many more past tense constructions collected than from the other three time periods. Naïve classification tables such as Table 2 fail to differentiate the effect of such confounding variables from the real chronological change. Thus, we need to explicitly incorporate intra/extralinguistic variables, whether they are fixed-effects or random-effects factors.

Finally, a large sample size results in a very small p-value, regardless of there being a substantial difference in population. Unlike in traditional experiments, where human subjects are recruited and the sample size is often smaller than in corpus linguistics, the data size used in corpus linguistics is quite large and thus tends to give a smaller p-value, which in turn makes a Type I error more likely. For example, the ratio in Table 3 is exactly the same as in Table 1. Nonetheless, due to the large sample size, the null hypothesis is rejected with a small p-value ($\chi^2 = 58.342$, df = 1, p-value = 2.203e-14).

3. State-Space Model

Given the discussion so far, an ideal model for statistical analysis of diachronic language change should meet the following requirements:

- (1) Desiderata
 - a. Track down the ‘continuous’ language shift/change as clearly as possible.
 - b. Incorporate fixed-effects/random-effects variables — intra-/extralinguistic factors.
 - c. Deal with the p-value issue by using a large sample size.

The Bayesian estimation of elaborate Dynamic Generalized Mixed-Effects Models (DGMM), as described below (Hagiwara 2021), is demonstrated to have these desired properties, and hence to be superior to Chi-square analysis in all respects.

3.1. State-Space Model

In the State-Space Model, observed values at time t are assumed to be generated on the basis of the latent state at a given time, which is related only to the state at the previous time point. For example, suppose that the i -th observed value at time t , $y_i^{(t)}$, is a binary outcome variable,

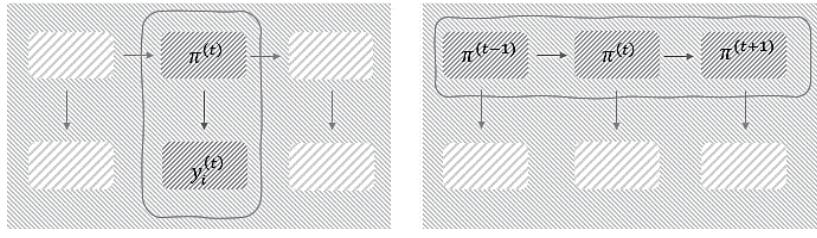


Figure 1 State-Space Model: (Left) Observation equation; (Right) State equation.

representing whether the meaning in question is expressed by Construction A ($y_i^{(t)} = 0$) or Construction B ($y_i^{(t)} = 1$). It is assumed that the probability of using Construction B is determined by the latent state $\pi^{(t)}$ at the given time point. If $\pi^{(t)}$ is large, then Construction B is likely to be pronounced, and if it is small, then Construction A is more likely. Researchers cannot directly observe every value of $\pi^{(t)}$, and it is a hypothesized construct; for this reason, it is called the LATENT STATE. The left panel in Figure 1 captures this relation between $y_i^{(t)}$ and $\pi^{(t)}$, and the mathematical formula describing this relation is called the OBSERVATION EQUATION. In our case, the equation is expressed as follows:

$$(2) \quad y_i^{(t)} \sim \text{Bern}(\pi^{(t)})$$

The latent state is, however, not assumed to be stable across time; if it becomes larger, then Construction B becomes more popular. The right panel in Figure 1 represents the change of $\pi^{(t)}$, and the formula describing this chronological relation is called the STATE EQUATION. While there is a degree of freedom regarding how we postulate the relation, a commonly used model is the one with the random-walk structure, as shown in (3). The main objective of the State-Space Model is to estimate the magnitude of each latent state, so we can track down the trend in time series data.

$$(3) \quad \pi^{(t)} \sim N(\pi^{(t-1)}, \sigma_w^2)$$

3.2. Dynamic Generalized Mixed-Effects Model (DGMM)

The aforementioned State-Space Model can be extended by explicitly incorporating intra- and extralinguistic factors. For example, irrespective of the year, Construction B may be preferred when it is used in the past tense; some predicates are more likely to be used in Construction B, or Construction B is more easily produced in some genres (sociolinguistic environments). Just as in the practice of Variation Theory (Cedergren and Sankoff 1974), the presence or absence of certain linguistic features is coded as a fixed-effect variable, and the idiosyncratic property of open-class elements (such as verbs and genres) as a random variable (Yamada 2022a, b). For example, by taking the i -th observation of the j -th genre at given t , the value of $\pi_{ij}^{(t)}$ can then be modeled as a linear combination of the intercept $\gamma_{00}^{(t)}$, the random variable u_{0j} , and the

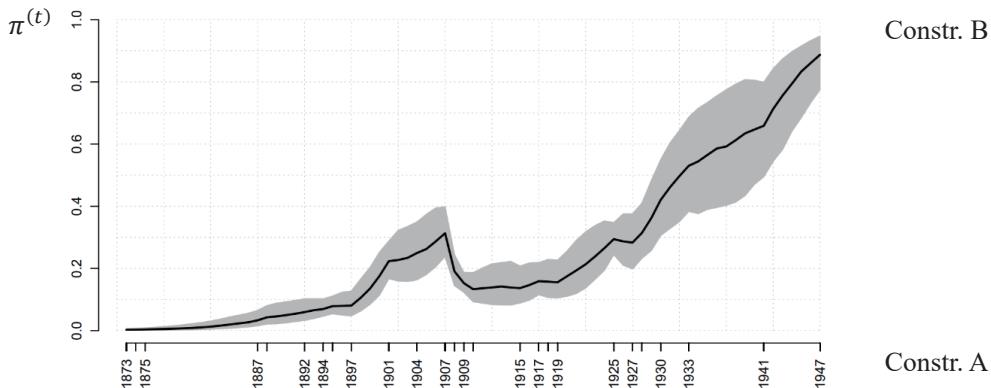


Figure 2 Posterior distributions for $\pi^{(t)}$.

fixed-effects term βx_i (aka the Dynamic Generalized Mixed-Effects Model or DGMM):

$$(4) \quad \pi_{ij}^{(t)} = \text{inv_logit}\left(\gamma_{00}^{(t)} + u_{0j} + \beta x_i\right); \quad u_{0j} \sim N(0, \sigma_{00}^2)$$

In a recent development in computation statistics, estimation becomes fairly easy within the Bayesian framework; the examples introduced in Section 4 are estimated by Stan on R (Gelman et al. 2013). For example, Figure 2 shows what the results of DGMM looks like. Based on the solid line (the posterior median), and the gray-shaded area (the credible intervals), we can interpret how the probability of Construction B changes. Notice that in DGMM, we do not segment the time points into a set of arbitrary time ranges, thus circumventing the problem of Chi-square analysis in (1)a. As more clearly shown in Section 4, the posterior distributions for fixed- and random-effects variables are also calculated (= (1)b), and since the shaded area captures the uncertainty, researchers can make an inference without resorting to the notorious p-value (= (1)c), as is done in Frequentist statistics. In this way, the three desiderata in (1) are clearly satisfied. DGMM is superior for diachronic linguistic data in all respects.

4. Case studies

4.1. Case 1: Development of the use of *des-* in the canonical adjective construction

The honorific allocutivity (i.e., the addressee-honorification system) underwent a significant change in the 20th century (Kawaguchi 2014); Construction B in (5) became gradually more popular, making the old variant (Construction A) less common.

- (5) a. Construction A: [canonical adj. (*i*-adj.)] + *gozai-mas* ‘ADJ-HON_U-HON_A’
- b. Construction B: [canonical adj. (*i*-adj.)] + *des* ‘ADJ-HON_A’

Yamada (2022a) applied DGMM to the data in CHJ (the Corpus of Historical Japanese), assuming the structure in (6) for the population, and revealed how the change was affected by several extra-/intralinguistic factors.

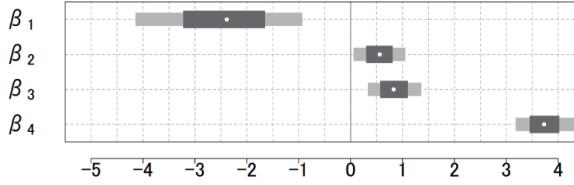


Figure 3 Posterior distributions for the fixed effects.

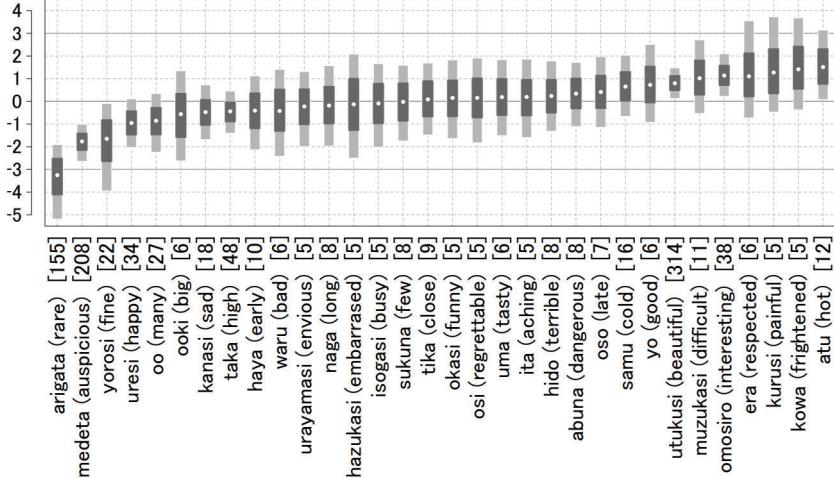


Figure 4 Posterior distributions for the random effects (i.e., the canonical adjective).

$$(6) \quad y_{ij}^{(t)} \sim \text{Bern}\left(\text{inv_logit}\left(\beta_0^{(t)} + \beta_1 x_{1i}^{(t)} + \beta_2 x_{2i}^{(t)} + \beta_3 x_{3i}^{(t)} + \beta_4 x_{4i}^{(t)} + u_{0j}\right)\right)$$

$$u_{0j} \sim N(0, \tau^2); \beta_0^{(t)} \sim N\left(\beta_0^{(t-1)}, \sigma_\zeta^2\right)$$

The estimated posterior distributions for $\pi^{(t)} = \text{inv_logit}(\beta_0^{(t)})$ are shown in Figure 2, and those of the fixed- and random-effects are given in Figures 3 and 4, respectively.

4.2. Case 2: Diachronic alternation between *sase-te kure* and *sase-te moraw*

When a speaker describes an event, the execution of which is permitted by an authoritative and honorable person, one of the applicative constructions in (7) is chosen (Yamada 2022b).

- (7) a. Construction A: *-sase-te kure (kudasar)* ‘-CAUS-CV APPL (APPL.HON)’
- b. Construction B: *-sase-te moraw (itadak)* ‘-CAUS-CV APPL (APPL.HON)’

To reveal the historical change of these constructions, Shiina (2021) conducted a corpus study using BCCWJ and Aozora Bunko. Applying Chi-square analysis, she concluded that the non-honorific use of Construction A (*-sase-te kure*), and the honorific use of Construction B became popular in the 20th century.

However, Yamada (2022b), who re-analyzed the Aozora Bunko corpus (the same data examined by Shiina 2021) points out that the aforementioned generalization is not easy to

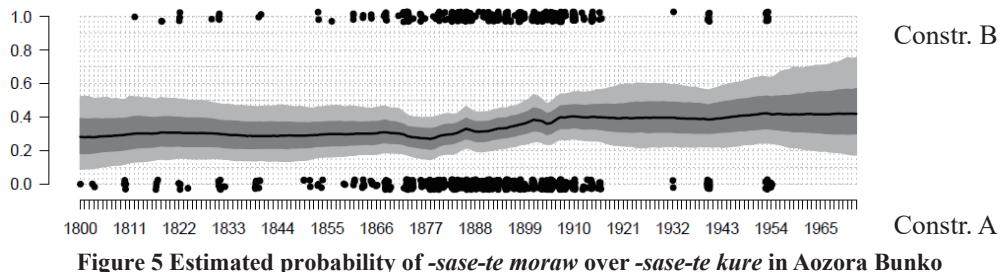


Figure 5 Estimated probability of -sase-te moraw over -sase-te kure in Aozora Bunko

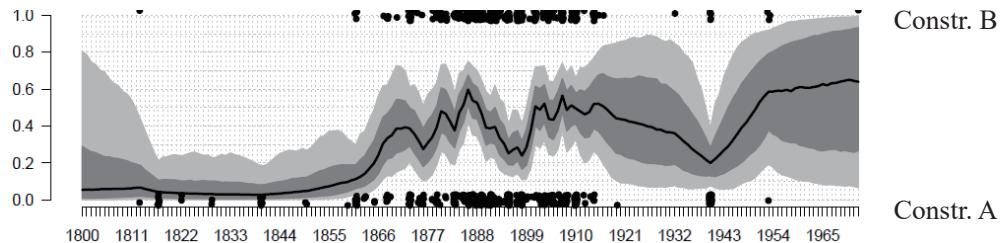


Figure 6 Estimated probability of -sase-te itadak over -sase-te kudasar in Aozora Bunko

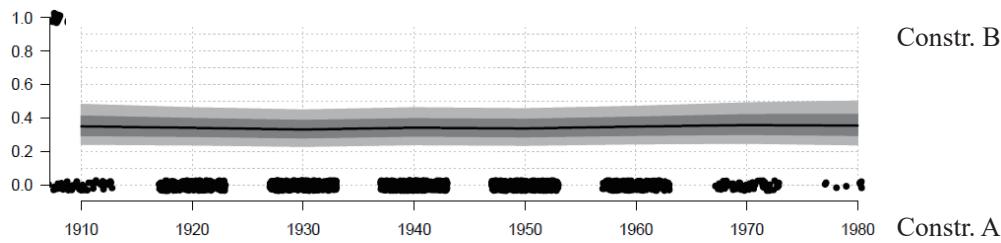


Figure 7 Estimated probability of -sase-te moraw over -sase-te kure in BCCWJ

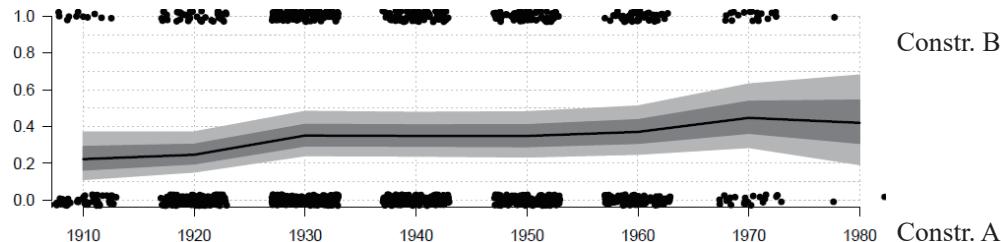


Figure 8 Estimated probability of -sase-te itadak over -sase-te kudasar in BCCWJ

maintain with the estimated results of the parameters of the following Time Series model assumed for the population (Figures 5 and 6); the subscripts i and j represent the i -th observation of the j -th verb and $\gamma_{00}^{(t)}$ is the intercept for the probability of producing Construction B at t , which has a random walk structure with variance σ_w^2 ; u_{0j} represents the uniqueness of the verb j , and β_1 is the coefficient for the honorification.

$$(8) \quad y^{(t)} \sim \text{Bern}\left(\text{inv_logit}\left(\gamma_{00}^{(t)} + u_{0j} + \beta_1 x_{ij}\right)\right); \quad u_{0j} \sim N(0, \sigma_{00}^2); \quad \gamma_{00}^{(t)} \sim N\left(\gamma_{00}^{(t-1)}, \sigma_w^2\right)$$

Additionally, Yamada (2022b) examined the data from BCCWJ, and suggested (i) that the ratio between *-sase-te kure* and *-sase-te moraw* remains stable irrespective of the author's birth year; and that (ii) while the use of *-sase-te itadak* came into use in the 19th century — for the simple reason that this construction was never utilized in any earlier period — it did not become popular enough to outnumber the competing construction (*-sase-te kudasar*) (Figures 7 and 8). In this way, Time Series Analysis enables us to make a finer-grained analysis of language change, which would not be so easy to detect with Chi-square analysis.

References

- Blei, D. M. & John D. L. 2006. Dynamic Topic Models. *Proceedings of the 23rd International Conference on Machine Learning*, 113-120.
- Cedergren, H. J. & Sankoff, D. 1974. Variable Rules: Performance as a Statistical Reflection of Competence. *Language* 50(2). 333–355.
- Gelman, A., Carlin, J. B., Stern, H. S., Dunson, D. B., Vehtari, A. & Rubin, D. B. 2013. *Bayesian Data Analysis* [3rd edition]. London: CRC Press.
- Goossens, L. 1995. Historical Linguistics. *Handbook of Pragmatics: Manual*, ed. by J. Verschueren, J.-O. Östman & J. Blommaert, 323–9. Amsterdam: John Benjamins.
- Gries, S. Th. & A. Stefanowitsch. 2004. Extending Collostructional Analysis: a Corpus-Based Perspective on ‘Alternations.’ *International Journal of Corpus Linguistics* 9(1), 97–129.
- Jucker, A. H. 2008. Historical Pragmatics. *Language and Linguistics Compass* 2(5), 894-906.
- Hagiwara, J. 2021. *Time Series Analysis for the State-Space Model with R/Stan*. Singapore: Springer.
- Kawaguchi, R. 2014. *Teineitai Hiteikei no Barieeshon ni Kansuru Kenkyuu [A Study of Variations among Negative Polite Forms]*. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- McCart, T. M. 2014. *A Statistical Analysis of Witchcraft Accusations in Colonial America: A Time Series Count Data Analysis*. Ph. D. Thesis, Youngstown State University.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shiina, M. 2021. “*Saseteitadaku*” no Goyooron: *Hito wa Naze Tukaitaku Naru no ka* [*The Pragmatics of “Saseteitadaku”*: Why do People Want to Use it?]. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Stefanowitsch, A. 2013. Collostructional Analysis. In T. Hoffmann, and G. Trousdale (eds), *The Oxford Handbook of Construction Grammar*. 290-306. Oxford: Oxford University Press.
- Taavitsainen, I. & A. H. Jucker. 2010. *Historical Pragmatics*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Yamada, A. 2022a. Constructionalization of the Japanese Addressee-Honorification System. The 23rd Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association. J. F. Oberlin University. Sep 3-4.
- Yamada, A. 2022b. Tekiyoiki no Tuuziteki Koubun Koutai: “*Saseteitadaku*,” “*Sasetemorau*.” “*Sasetekudasaru*” and “*Sasetekureru*” no Sentaku nitaisuru Zyootai Kuukan Moderu o Motiita Zikeiretu Bunseki [Diachronic Constructional Alternation of High-Applicative Forms: A Time-Series Analysis Using a State-Space Model for the Choice among “*Sasete itadak*,” “*Sasete moraw*,” “*Sasete kudasar*,” and “*Sasete kure*”]. Oral Presentation at the 66rd Meeting of the Mathematical Linguistic Society of Japan. Sep 17, Tokyo, Nihon University.

付 錄

Appendix

『大会発表論文集』(Proceedings) 執筆規定 (日本語による発表をされた方用)

第25回『大会発表論文集』(Proceedings) (第18号)

日本語用論学会では、2005年度より、毎年の大会で発表された論文をとりまとめ、大会後に、『大会発表論文集』を発行しています。つきましては、大会の「研究発表」、「シンポジウム」、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」にて発表されました皆様で、ご投稿を希望される方々は、以下の要領で原稿をご提出ください。なお、投稿を希望されない方は提出不要です。

1. 執筆規定

1. 用紙・枚数：

A4用紙、横書き。「研究発表」は8ページ以内、「シンポジウム」は当該シンポジウム内の発表1件につき6ページ以内、「ワークショップ発表」、「ポスター発表」は4ページ以内(注：要旨、参照文献を含む。「ワークショップ発表」では、当該ワークショップ内の発表1件につき4ページ以内)。字数は自由。

2. 書式：

- 余白は上下30mm、左右25mmとする。1行文字数、行数、段組などは自由(ただし、文字のサイズは極端に小さくしないこと)。
- 原稿の1ページ目には、タイトル(中央揃え)、氏名(右揃え)、所属(E-mailアドレスは任意)(右揃え)を記し、そのあと2行空けて要旨、本文を続ける。(裏面の「原稿のイメージ」を参照)

* 共著論文の場合は、著者ごとに「氏名(所属)」の様式にて右揃えで記す。

- 「はじめに」または「序論」の節は「0.」からではなく、「1.」から始めること。
- 例文の前後は1行、各節の前は1行空ける。
- 原稿のヘッダーやフッターには、何も記載しないこと。
- 注を付ける場合は巻末とし、本文と参照文献の間にまとめて入れる。
- 参照文献のフォーマットは『語用論研究』の投稿規定・スタイルシートに従うこと(本学会のホームページ https://pragmatics.gr.jp/journal/contribution_rule.html 参照)。

<特にご留意いただきたいこと>

- (1) 英語の文献と日本語の文献を混在させて、アルファベット順に並べる。

(2) 英語の文献名は、**内容語の語頭は大文字**、機能語の語頭は小文字とする。

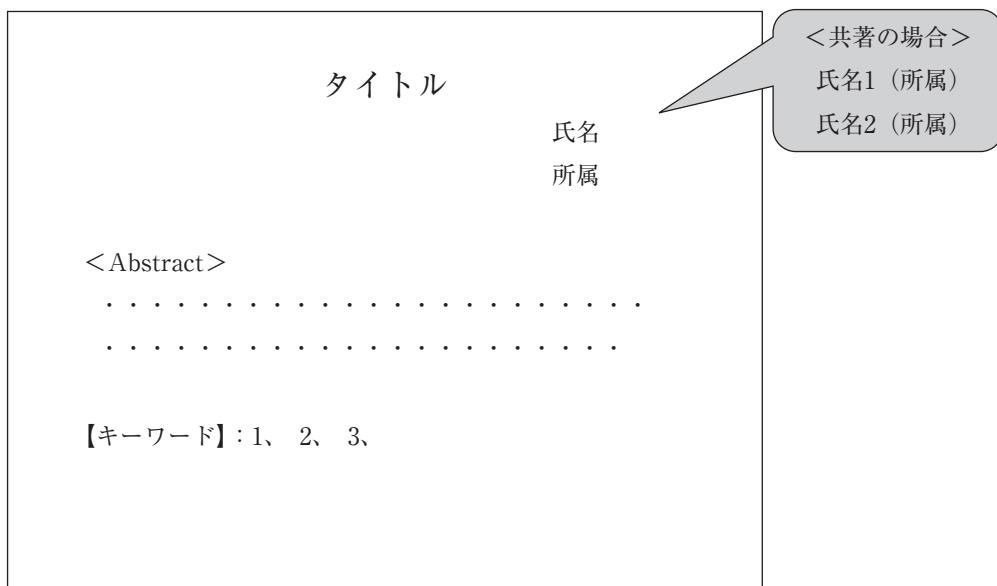
3. 要旨：

- a. 要旨は（日本語での論文も含め）全て**英語**によるものとし、約100語で書く。
- b. 要旨は<Abstract>とページの左上に記し、行頭をインデントしないこと。

4. キーワード

- a. 要旨の下に**1行空けて**「【キーワード】：」と明記し、日本語で5個以内を添える。
- b. キーワードと本文との間は**2行空ける**。

原稿のイメージ（1ページ目）



2. その他の注意事項

- a. 内容は、大会発表に沿ったものとする。(この際、タイトルの**変更は不可**とするが、内容について、発表時のコメントをふまえて修正を加えることは妨げない。)
- b. 使用言語は、発表言語に合わせて、**日本語**とする。
- c. 『プロシーディングズ』に掲載した内容は、さらに発展させて、『語用論研究』に投稿することができる。その場合は、必ず十分な加筆・修正を施すこと。

3. 原稿の提出方法

- a. 「原稿ファイル」を、本学会のホームページにある「会員専用ページ（マイページ）」の発表論文投稿画面にて Microsoft Word か PDF で投稿する。但し、ワークショップの場合は、代表者が全員分を取りまとめて投稿のこと。
- b. 投稿者の連絡先などの個人情報については、投稿ページの画面に記載された指示に従い、入力すること。

4. 原稿の提出期限

2023年3月31日（金）23:59（日本時間）（この時刻までに投稿を完了すること）

*上記の締切日時を過ぎると投稿ページが閉鎖され、投稿できなくなります。その時点で未提出のものは投稿を希望されないと判断しますので、ご了承ください。

【問い合わせ先】

日本語用論学会 大会総務委員会 発表論文集（プロシードィングズ）担当 村田 和代
proceedings@pragmatics.gr.jp

*投稿に関するお問い合わせは、2023年3月24日（金）までにお願いいたします。

*Request for submitting manuscripts for the Proceedings of
the 25th Annual Conference of the Pragmatics Society of
Japan (PSJ) (Vol. 18)*

[For participants who presented papers in English]

Since 2005, the Pragmatics Society of Japan has been publishing presentations given at its Annual Conference for publication in a volume of proceedings. The following are instructions for use in preparation of manuscripts by those who have presented their work at the Conference as **lecture presentations**, in the **symposium**, in **workshops**, or **poster sessions** and are willing to submit manuscripts to the proceedings. It is not necessary to submit your manuscript if you are not considering contributing to the proceedings.

Instructions for Preparing Manuscripts

1. Writing requirements

1. Paper and length:

All manuscripts should be submitted on A4 size. Manuscripts for **lecture presentations** should be **no more than eight** pages, for the **symposium** (**applied to each presentation at the symposium you contribute to**) should be **no more than six** pages, and for **workshops** (**applied to each presentation at the workshop you contribute to**), or **poster sessions** should be **no more than four** pages in length. Please note that these length restrictions include the abstract and the reference list. There is no restriction on the number of words or characters per page.

2. Format:

a. Margins: top and bottom, 3 cm; right and left, 2.5 cm. Number of lines per page, number of characters per line, and line spacing are not restricted (however, extremely small characters should not be used).

b. The first page of the manuscript should begin with the title (**all content words should be capitalized**), the author's name (**family name CAPITALIZED**), and the author's affiliation (e-mail address optional), followed, **after two blank lines**, by the **abstract** and the main text. (see "The Image of Your Title Page" on the next page)

* In the case of co-authored papers, each author's name and affiliation should be written right-aligned under the form of "Name (Affiliation)" with one line for each author.

c. The introductory section or prefatory remarks should be numbered from 1, not 0.

d. Examples should be preceded and followed by one blank line. Each new section should

- be preceded by one blank line.
- e. No information should be included at the header or footer of each page.
 - f. If notes are included, they should be placed at the end, between the main text and the reference list.
 - g. References should follow the style sheet of *Goyoron Kenkyu (Studies in Pragmatics)* (see the homepage of PSJ https://pragmatics.gr.jp/journal/contribution_rule.html)
* English and Japanese articles are not separately listed and arranged in alphabetical order.

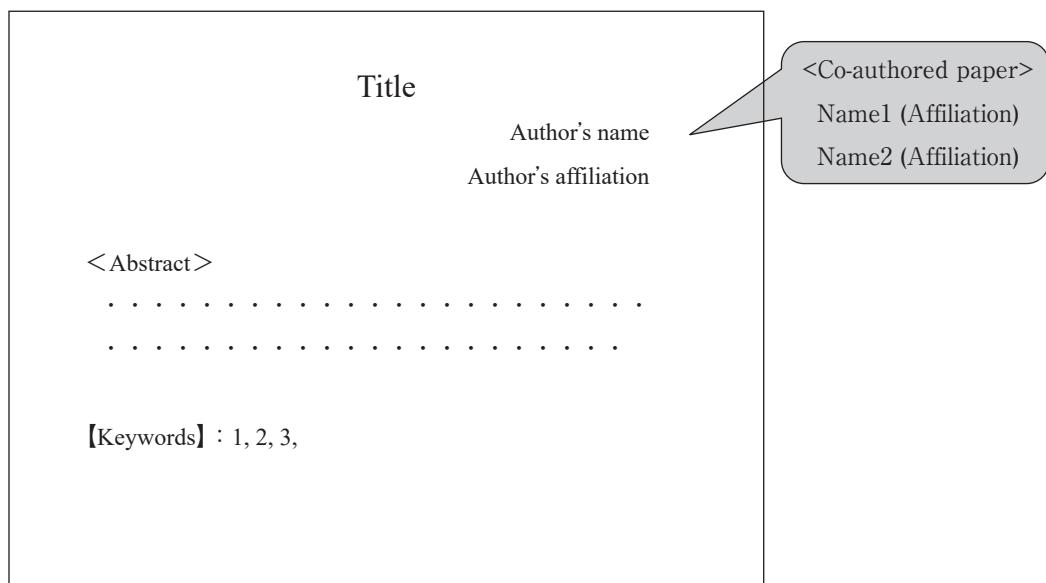
3. Abstracts:

- a. All abstracts should be written in English and should **be about 100 words in length**.
- b. The abstract should appear on the first page of the manuscript, after the title, author's name, and author's affiliation. The abstract should begin with the word '<Abstract>' in the upper left corner and the first line should not be indented.

4. Keywords:

- a. A maximum of 5 keywords should be given below the abstract, preceded by **one blank line** and '【Keywords】:'. [Refer to the figure below.]
- b. Main text should be preceded by **two blank lines**.

The Image of Your Title Page



2. Other important points

- a. Aside from necessary corrections based on comments from the audience at your presentation, manuscript contents should be faithful to the content of the presentation actually given at the Annual Meeting. Especially, you are **not allowed to change your paper title** in the proceedings from the one at your presentation.
- b. Manuscripts should be written in **English** (the same language you used at the presentation).
- c. Papers in the proceedings can be submitted to *Goyoron Kenkyu (Studies in Pragmatics [S/P])* with an appropriate revision.

3. Method of submission

- a. Your manuscript (Microsoft Word [doc /docx] or PDF) should be uploaded through “LOG IN (Mypage)”, on the conference homepage. In case you are an organizer of a workshop, you are required to collect and submit manuscripts of all the contributors.
- b. According to the instruction of submission on “Mypage”, you are asked to give information on the manuscript as well as author’s name and e-mail address.

4. Deadline of submission

Due no later than 23:59 (JST) on Friday, March 31st, 2023

*Please note that the submission page will be closed after the above deadline and you cannot submit any paper after that. The Conference Administration Committee will consider that not submitting your manuscript by the deadline is equal to you not willing to contribute to the proceedings. We appreciate your kind understanding.

*If you have any inquiries or concerns, please contact us at the following address by no later than Friday, March 24th, 2023:
proceedings@pragmatics.gr.jp (Kazuyo MURATA)

編集後記

『日本語用論学会 第25回大会発表論文集』第18号をお届けいたします。日本語用論学会では、2005年度より年次大会でのご発表内容を論文集としてとりまとめ、大会後に発行しております。今号では、シンポジウム3件、研究発表27件（日本語発表23件、英語発表7件）、合計30件のご寄稿をいただきました。第26回大会後は『日本語用論学会 第26回大会発表論文集』第19号を発行する予定でございますので、どうぞご期待ください。

*従来、巻末に掲載しておりました 日本語用論学会規約 は、紙面削減のため、割愛させていただきました。学会サイト (<http://www.pragmatics.gr.jp>) をご覧ください。

(『大会発表論文集』編集担当 大志民彩加・中馬隼人・八木橋宏勇)

日本語用論学会 第25回大会発表論文集 第18号 (2022)
(Proceedings of the 25th Conference of the Pragmatics Society of Japan)

発 行 日 2023年8月31日

代 表 者 滝浦 真人

編集・発行 日本語用論学会 事務局 (The Pragmatics Society of Japan)
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-8
大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻
秦かおり 研究室内
E-mail: secretary@pragmatics.gr.jp

印 刷 (株) 田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麁屋町東入ル677-2
TEL : 075-343-0006 FAX : 075-341-4476

PSJ